
電腦世界ディストピア

OTAM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電脳世界ディスプレイ

【Nコード】

N4930W

【作者名】

OTAM

【あらすじ】

舞台はAR技術とそれに特化した次世代ゲーム機Another Region、通称“アリー”が爆発的に普及した数年後の日本。

高校受験を無事に乗り切り、中学最後の春休みを満喫する羽原 秋一。

ある日を境に得た不思議な目を持っていようともしそれを活かせるような機会もなく、ちよつと変わった友人の起こす妙なドタバタに巻き込まれたりする事もなく、至って平凡な一日を過ごす筈だったが

⋮
○

キャラ紹介（37話時点）

・羽原 秋一「ハバラ シュウイチ」
府立九尾高校に通う高校1年生男子。

“アーリー”のARや、ネットワークを介してやり取りされる情報を視認出来る右目を持つ。

勉強とはまた別の次元で頭の回転が速く、他人の思考や行動を読むのが得意。

性格はお世辞にも良いとは言いがたく、人を食ったような言動や皮肉が目立つ。

また、かなりの女好きで自覚的に異性を口説くような台詞や行動が多い。

容姿に関する記述は少ないが多分イケメン。身長も180には届かないだろうが高め。

一言で言うところ「こいつ爆発しねーかなあ……」と言いたくなるような輩。

・中野 夏芽「ナカノ ナツメ」
府立九尾高校に通う高校1年生女子。但し、年齢は秋一達より一つ上。

名字は異なるが、後述する大須 冬彦の妹である。

ニユーロネットワークに意識を潜航させる超能力を持つ。この間、本体は動かせない。

潜航時の彼女を捕捉出来るのは秋一だけで、その姿は日本橋のマスコットキャラそのもの。

意思の強そうな目つきが一番人目を引くが、腰まで届く黒髪等その他の構成要素は深窓の令嬢と評されがち。

性格に関しては令嬢とは程遠く、至って年相応の女子といった感じ。

目や性格も含めて評するならば武家の生まれのおてんば姫といったところか。

長期間の昏睡状態から目を覚ましたばかりで現在絶賛リハビリ中。
2週間足らずで通学とかおkなの？という突っ込みは決してしてはいけない。

あと、作者も良く忘れるが一人称は「アタシ」が正解。

・北里 千里「キタザト センリ」

府立九尾高校に通う高校1年生女子。

一時期、天才少女と呼ばれていた事があり、特にアーリー関係（ソフトもハードも）に強い。

従来のコンプ्यूータや勉強に関しても人並み以上には優秀だが上はゴマンと居る程度。

非常に小柄で身長は150cmに届かない。反面、胸は世代を問わずかなり豊かな部類。

髪は色素が薄め（つまり茶髪）でツインテールにしている事が多い。秋一からは「年齢を考えろ」と評されるものの小柄なのであまり違和感はない。

服装はスカート・ズボンにはミニやホットパンツなど露出の多いものを、上はボデイラインがある程度はつきりと分かるものを好む。

かなりのオタクかつ変態であり、セクハラ発言を繰り返しては秋一から突っ込みという名の暴力を受ける。

時々大阪弁になるが、それには一応法則性らしきものがある。

・本橋 春日「モトハシ ハルヒ」

名前が某有名ラノベのヒロインと同じの正義の味方。21歳の女性。便宜上そう名乗っているだけで実態は政府機関に属するエージェンツと言ったところか。

諸事情あつて現在は九尾高校で教鞭を執っている。

デスクワークよりフィールドワーク、インドアよりアウトドアと言つた性分で特技は運動。

優れた身体能力、才能、経験則を武器に敵（悪）と定めた相手に果敢に立ち向かう。

170cmの長身、胸はかなり控えめと千里と比較すると色々対極的な容姿。

服装は趣味のコスプレの反動なのか、仕事柄なのかは不明だが比較的地味なものを好む。

が、モデル体型なのでそれでも映える。

さっぱりした性格、弱気を助け強き（かつ悪しき）を挫くという信念、そして容姿などから同性に好かれやすいタイプ。

・大須 冬彦「オオス フユヒコ」

元新天社の裏側の構成員。今はニート、プー太郎も同然。

最近日本橋のあちこちに出没し、可愛いメイドや大人のマッサージが趣味。

また、重度のシスコンで、妹絡みになると思考様式が明らかに普段と別物の何かになる。

が、基本的には融通の利く秀才タイプと言つた性格で、どこでも活躍できる人材。

目的の為ならダーティな事も躊躇いも無く行える性分でもある。

ただし、どうあがいても現在の彼はダメ人間以外の何者でもない。

・坂田 うめ「サカタ」

府立九尾高校に通う高校2年生女子。生徒会副会長。

なおかつ、新天社の末端構成員でもあり、主に監視等の任務に当たっている。

どういった経緯でそうなったのかは今のところ不明。祖母と弟の3人暮らし。天性の怪力の持ち主で、100kgに満たないものなら悠々と投げ飛ばすほど。

くせ毛のミディアムボブの黒髪と「十日物語」デカメロンと評される胸が主な特徴。

また、昆虫のような思考の読めない漆黒の瞳と評され、物事に対する反応が薄い傾向がある。

が、別に感情が希薄と言う訳ではなく、人並みには思い・感じながら生きている。

制服はかなりきっちり着こなす。私服は未登場故不明。ついでに言うと初登場時のコスプレが趣味なのかすらも不明。

・西条 九「サイジヨウ キュウ」

府立九尾高校に通う高校2年生女子。生徒会会長。

腰まで伸びる金髪、かつ緑目と強烈な構成要素を持ち、身長は160前後。

気の強そうな吊り目と妙に偉そうな態度で、普段は年齢不相応に威厳たっぷり……らしい。

が、実態はただの変態。と言うか変質者。かつ、わりとヘタレ。

加えてコテコテの関西弁を話す、メイド喫茶でバイトしているなど属性過多。

・今宮 新「イマミヤ シン」

秋一のクラスメイト。身長165cm程度のスポーツ少年（らしい）。

鶴橋さんとの一件からAR部の創部に際して名前を貸しているが基本的に幽霊部員。

・森宮 太郎「モリノミヤ タロウ」

秋一のクラスメイト。身長170cm程度で太め。但し、柔道とかやっつてそうなたさ。

・鶴橋さん「ツルハシ」

今宮 新がお近づきになろうとしていた女子。ギャルっぽいらしい。

・坂田 大「サカタ ダイ」

坂田 うめの弟。あまり礼儀はなっていないが10歳前後の素直な少年。

・ミリ子さん

九尾高校ARサバイバルシユーターズ、通称KASSのリーダー的存在。

本橋 春日よりも背が高く、何故か眼帯をしている。 面倒見が良く、人望は厚い。

用語集（1章まで）

本ページは電脳世界ディストピアの用語集です。

多少のネタばれが含まれるほか、項目の取捨選択がかなりおかしかったりします。

また、時々愚痴や与太話、誤り……というかウソ偽りも混じっておりますので真に受けてはいけません。

話半分に読みつつ、そういった所に突っ込みを入れつつ読んで頂けると幸いです。

【あ】

・愛千橋病院

“隣人Love！人間Love！”を基本理念とする総合病院。
現在はでんでんタウン、堺筋の隣の通りに面した場所に門を構えている。

ちなみに、この場所に移転してきたのは10年ほど前の事である。

・悪の秘密結社

その時代の社会で表立って出来ない事を裏で行い、利益を得ようとする集団。作中では主に新天寺社の裏の顔がコレに該当する。

創作の世界では頻繁に登場するが、現実においては公になると既に秘密でない上に、潰されてしまうので実在を証明するのは意外と困難であり、ツチノコ的な存在と言える。

- ・アプリ

アプリケーションソフトウェアの略称で、ユーザーがコンピュータ上で行いたい作業を実行する為の機能を直接的に有するソフトウェアのこと。

たとえば電卓。実物の電卓と同じ機能をユーザーが利用しようとした際に表示される電卓風のデザインであり、なおかつ電卓と同じように扱えるものがこれに該当する。

なお、電卓風のデザインを表示させるためのソフトや、電卓と同じ機能・反応・動作をコンピュータ上に実現する為の指示を与えるプログラムなどはシステムソフトウェアに該当する。

- ・安全装置

主に機械類に取り付けられる誤操作や故障による事故の発生を予防する為の構造。

たとえば、拳銃の場合はこれを解除しないと発砲出来ないようになっており、これによってふとしたはずみでトリガーが引かれて暴発するような事態を防いでいる。

- ・エクサの大台

エクサとはペタに次ぐ国際単位系の接頭辞で、Eと表記される。

エクサの次はゼタ（Z）、その次はヨタ（Y）となり、その次はまだ存在しない……はず。

（セオリー通りにいけばノーヴェかノナで、どちらにせよNが有力か？）

ちなみに、ムーアの法則に則ると2018年頃によく到達可能な単位とされている。

- ・演算能力の売買

要するにスパコンの貸出のようなもの。

アーリーの手帳機能などを利用すればスケジュールをある程度把

握、一定の地域に集まる人口を把握出来る為、それを利用して指定した日時・場所の一般回線とは別のニューロンを実験場として有償で提供している。

・大阪弁

大阪の方言。 関西弁と混同され易く、実際関西弁といった場合に大阪弁を中心に据えた方言を指す事は少なくない。 が、関西というわりには近畿方言と言った方が正確だったり、中心にある筈の大阪が発音に関しては近年標準語寄りになっていたりする。

ちなみに他の地方の出身者が十把一絡げに関西弁と言ったり、京都人を捕まえて大阪弁というと盛大にキレられるので要注意。

・大須 冬彦

新天寺社の裏側の構成員。 詳細はキャラ紹介にて。

【か】

・隠し通路

その存在を表向きには伏せられている通路。 避難用というのが一般的か。

作中では通天閣の周辺の地下に誰がいつの間についたのかも不明な通路が存在し、近くの飲食店から通天閣内へと進入できる構造になっていた。 また、その下には謎のシェルターの存在が示唆されていたが、そこへ行く手段は不明のままである。

・核兵器

核分裂・核融合によって放出される熱、爆風や放射線といった高エネルギーを破壊に用いる兵器の総称。 間違いなく人類が生み出した中で最強の兵器。

現在では包括的核実験禁止条約（CTBT）によって宇宙空間、大気圏内、水中、地下を含むあらゆる空間での核兵器の核実験による爆発、その他の核爆発が禁止されている。

但し、アーリーの仮想空間、サイバースペースがあらゆる空間に該当するか、核爆発の影響を視覚化した映像が核爆発に該当するかどうかは怪しいところ。いくら視覚化していると言っても所詮はデータでしかなく、核兵器を使用するロボットアニメをCTBTを根拠に非難するに等しいとも言える。

・過剰な8割

同世代の携帯ゲーム機に比べて若干性能で劣ると言われるアーリー。しかし、ユーザーが確認出来る情報に偽りがあり、実際にはその情報の5倍近いスペックを備えている。

このユーザーから見えないスペックの多くはユーザーに無断で新天寺社が各々のアーリーを使用する際に使用されるもので、情報の無断送受信などはこの過剰部分で行われている模様。それでもなお持て余すほどの性能を誇り、更なる余剰分もまた秘密裏にろくでもない実験の演算に利用される。

・仮想の共同体

類似語にインターネットコミュニティというものもある。が、作中ではニューロンというインターネットとは別のネットワークシステムが普及しているため、この語彙は不適當である。その為、物理的空間とは異なる形で作られた共同体を指す場合はVirtual communityという言葉の方が一般的。

ただし、作中でのこの言葉が初めて登場した時のそれは「ちよつとした国家の体を成している」ことを指して用いられている。あえて言うならば『想像の共同体』のそれに近い用法であると思われる。

・カメラ機能

最近では携帯ゲーム機にもケータイにも付いていて当たり前機能。

アーリーはこの機能はユーザーがオフにしても実は裏で動いており、周囲の風景などを自動的に記録している。

余談だが、ここに静音化などの改造を加えることは「悪用の可能性がある」と言う建前で禁止されている。

・監視用アプリ

アーリーには起動している限り自動的に作動しているカメラやGPSを利用してアーリーの所有者を監視するシステムが搭載されている。その監視・管理されている上方にアクセスする事でそれらの情報を把握することを可能にするアプリ。

勿論、一般には公開されていない代物であり、これを使用できるのは新天寺社の裏側に関与している人物のみである。なお、坂田うめが使用していたThe Watcherもこれとほぼ同じものであるが、あちらは検索機能が強化されている。

・機械に干渉

夏芽の異能に付随する能力の一つ。カメラが捉えた映像の確認、会話の盗み聞きといった知覚に関わるものの他に、簡単な電子ロック等であれば操作可能。

・北里 千里

天才少女と呼ばれる秋一の親友。詳細はキャラ紹介にて。

・奇妙なプロフィール

秋一の目と特定のアーリーで閲覧可能な可能な個人情報。視線感知機能がある模様。

その正体は新天寺社が様々な企業・施設を介して収集した情報を

整理したもので、個人差はあるが生年月日や血液型はおろか、出身校や前科・病歴、極めつけには今後のスケジュールまで把握出来てしまう。勿論、これらの情報は無断で収集されている。

・ギャップ萌え

普段強気な人がふと見せる弱さ、普段厳しい人の不意の優しさなど、そういった普段との強烈な落差にときめく事、或いはそういったものが持つ魅力それ自体を指す。

全くの余談ではあるが、ツンデレがこれに該当するか否かは意見の分かれるところ。

ジャンルとして確立しているので除外しても良いじゃないというのが個人的な意見。

・九尾高校

春から秋一達が通う高校。

・串揚げ屋”マルタ”

通天閣のほぼ真下に位置する串揚げ屋。その立地も相まって知名度は高め。

作中では何故か裏手に通天閣に通じる隠し通路があったが、新天寺社との関係は不明。

・コスプレイベント

正式名称は“日本橋ストリートフェスティバル”で、大体春分の日に行われる行事。堺筋を数時間に渡って歩行者天国として開放、更にパレードなどのイベントを執り行う。

作中の3月21日に行われたフェスタは第13回という設定で、イベント参加者を含め、その日の来街者数は主催者発表によると30万人を上回る。

なお、作中の50万という数字は一定範囲内のニューロンの端末

数とほぼイコールであるため、新世界や通天閣で行われたフトモンの大会参加者等も含んだ数字。

・ゴリラ

動物界脊索動物門哺乳綱サル目ヒト科ゴリラ属に分類される構成種の総称。

学名はゴリラゴリラゴリラ。理由あつてのこととは言え、この執拗さは噴飯もの。

小学生時代の坂田 うめのだ名。類人猿最大種故か、彼女に限らず小学生が男子より背が高く、力の強い女子につけられる事が多い。

【さ】

・坂田 うめ

新天寺社裏側の構成員。 詳細はキャラ紹介にて。

・視線感知

人間の見るという行為は外部からの情報を取り込むものであり、他の動物が見られていると認識している場合を除いて見ているだけで何かしらの作用を及ぼすことは不可能。

一般的なのはカメラを用いて何処を見ているかの情報を読み取る方法であるが、目というのは基本的に常にどこかを見ているものであるため、ただ視線がある状態と明確に何かを見ている状態を明確に区別する必要がある。

枠内に目があるか否かの判定は瞳孔特有の光の反射があるためさほど難しくはないし、見ているの判断も「一定時間注視をしたら」といった条件を付ければ可能だが、カメラとの位置関係を固定する必要があり、ユーザーかかる負担が大きい。 何より非効率。

秋一がARを見た時に視線感知について言及する事が多いのはこういった技術的な難しさに加えて、夏芽が見られていると認識出来ることに不自然さを覚えているからである。

・三方よし

売り手よし、買い手よし、世間よし。私利私欲に走らず、顧客や社会全体にとっても利益となるような商いをしましょう、というありがたい言葉。

起源は江戸時代の近江商人とされるが、この言葉自体は後世の研究者の造語らしい。

・シスコンマスター

妹が可愛過ぎて仕方ないといった様子の大須 冬彦に贈られた称号？

・殺一警百

シャーイーンパイと読む。正確な発音は知らん。

一人を惨たらしく殺して百人に脅すといった意味で日本語では一罰百戒が近い。

こんな言葉がさらっと出てくる中1というのはちょっと嫌である。

・情報の無断集積

新天寺社の裏の活動の一つ。アーリーに入力した情報に限らず、アーリーやその関連技術が利用される施設等に登録した情報まで収集しており、ある意味で本人よりも緻密にユーザーの事を把握している場合すらある。

また、アーリーの情報に偽りがあった場合には「情報に偽りあり」と言った形で記録を取り、他の登録情報も併せて分析する事で情報を偽る意図のような付随する言外の情報まで分析してユーザーの性格診断を行うなどかなり高性能である。

・初老の医師

愛千橋病院に勤務する医師の一人。あえて言うなら猿顔らしい。冬彦や夏芽とも面識がある他、新天寺社の裏側について知っているなど謎の多い人物。

・射撃補正アプリ

ARシューティングのアプリをベースに気象情報（風向、風速など）やデータベースにある個々の銃のクセをも踏まえ、アーリーの本来の演算能力を最大限に活用して銃弾の軌道を計算、そこから逆算して目標に正確に銃弾を当てるにはどこに銃を置いて引き金を引けば良いかをARで表示するアプリ。

当然ながら気象情報が無ければ風雨の影響を予測出来ず、データベースにアクセス出来なければ銃のクセを把握出来ない為に精度は下がる。

・秋一の右目

アーリーのAR表示が肉眼で見える特異な目。スマホなどのAR表示は見えない。

見える映像の優先度など一定の法則はあるが、原理は今のところ不明。今後もきつと不明。

・常駐型自動記録システム

アーリー内蔵されたユーザーで無断で常時起動しているシステム。この時に限り静音のカメラによる自動撮影や、その他の所持者が得た様々な情報を自動的に記録、保存、整理し、一般のユーザーの目に付かない場所へと流している。

・新世界

大阪府大阪市浪速区恵美須東一丁目から三丁目にある歓楽街。

ただし、最近では串カツ店などが目立ち、観光地としての印象が強い。天王寺動物園、あいりん地区、でんでんタウン。更には天王寺や難波などにも歩いて行ける立地もあつてか、道頓堀と並んで大阪の象徴的な場所として取り上げられる事が多い。

・新天寺社

アーリーを販売する謎の新興企業。圧倒的知名度に反してその実態を把握している者はいないとさえ言われており、東京に本社がある以外には支社すら存在せず、社員数も多くない。しかし、カスタマーサポートなどの動きをみるとどこかにそれに当たる施設が無くはならないという不審極まりない企業。

その情報の少なさを訝しがる声は少なくないが、現実世界で行われていた経済活動の1割を取り込んだと言われるニューヨーク市場の影響力や、もはや生活必需品に近い存在である他、これといった問題を起こさない事から強く非難される事は少ない。

・新天寺社の裏側

アーリーによる情報収集、ユーザーの同意なき実験、坂田 うめのようなエージェントなどの新天寺社の胡散臭い側面を一括した表現。

ハード・ソフトを問わずシステム面のセキュリティはそれなりに嚴重な反面、人事的な側面はかなり杜撰。

・スパコン

スーパーコンピュータの略称。演算処理速度が同時代の一般的なコンピュータより極めて高速なコンピュータのこと。

アーリーの場合、伏せられているが本来の性能が同世代のゲーム機と比して圧倒的に高く、その高い処理能力に加えて一つの作業に万単位のアーリーを使用するなどの形でスパコンもビックリの演算処理速度を確保している。

なお、作業の割り振りやデータのバックアップ、統合などの作業は随所に設置されたアーリーの基地局に置かれているパソコンが行う模様。

- ・スマホ

正しくはスマートフォン。インターネットとの親和性の高い、PC寄りの機能に比重を置かれた携帯電話のこと。

インターネットがニューロンと両立する作中ではアーリーとスマホの併用が主流らしい。

- ・スマホのAR機能

アーリーはAR技術に特化しており、またかなりの部分に独自規格が使用されているが、ARという概念自体は作中の時代よりも前から既に現実のものとして普及し始めていたものである。

当然ながらスマートフォンにもこの技術は取り入れられている。というよりも、アーリーや前世代のゲーム機に先駆けてARを導入したのはスマートフォンであり、一般の手に届く範囲で言えば本当の意味でのARの先駆的存在とも言える。

- ・世界征服

文字通り、全世界を己の支配下に置こうという目論見のこと。

征服した後の方が面倒だったり、苦労に見返りが見合わなかったりと目論む価値があるかどうかかなり怪しい野望である。

合理的な観点から離れば「漢に生まれたなら世界の二つや二つ狙わんでどうする」といった言い分も存在しなくはない。

- ・正義の味方

本橋 春日の職業。バカっぽい響きだが、これでも国家公務員。

ただし、表立ってその存在を認められている訳ではないので普段はフリーター扱い。

・ 双生児エッグマフィンセット
ワクドナルドのモーニングメニュー。バンスの間に目玉焼き、ハンバーグ、目玉焼きの順番に食材を挟んだアホみたいにお卵尽くしの一品をメインに、マフィンハッシュポテトとドリンクが付いてくる。目玉焼き二つがもたらす確かな満腹感のおかげで朝ワックの中では一番の人気メニュー。

【た】

・ ただならぬ気配を纏ったスーツ姿の大男
本橋 春日の上司。頭脳も戦闘能力も彼女を遥かに凌ぐ怪物……らしい。

・ 超推理

夏芽が入学してくる可能性を視野に入れていた秋一の思考に対する評。

作中では明言されなかったが、具体的は以下のような思考

「夏芽と冬彦が国に属する組織の監視下の置かれる事が確定している」

「春日から察するにその組織は冷徹な機関ではないだろうから人道的な扱いにはなる筈」

「今回の件に関与した自分や千里が一切管理を受けないというのはいささか不自然」

「密かに監視されている可能性があり、それなら夏芽も一括して管理するのではないか」

「大須 冬彦や千里はアーリー関係の技術もあるから対新天寺社に役立つ可能性アリ」

「特に大須 冬彦を相手にする場合、夏芽の幸福は非常に強力な交

涉カードである」

「別れ際の状況から察するに夏芽自身それを望むだろうし、組織にとつての利もある」

と、大体こんな感じである。

・超能力

現在の科学では説明しきれない超自然的な力。これを行使するものを超能力者と呼ぶ。

作中でこれに分類されるのは羽原 秋一と中野 夏芽の2名のみ。坂田 うめの身体能力も人間の常識に反する為、広く捉えれば超能力と言えるかもしれない。

・ツインテール

某ウルトラなんちゃらに登場した怪獣……ではなく、髪形の種類。長い頭髪を左右の中央或いはそれより高い位置でまとめ、垂らした髪型。本来は結う位置や長さによって微妙に呼称が変わるが、あまり気にする人はいない。

中高生のやる髪形ではないが千里は容姿が容姿なので違和感も無い、らしい。

・通天閣

大阪府大阪市浪速区にある新世界界隈の中心部に建つ展望塔。観光名所の一つ。

現在の通天閣は2代目で、塔高は100メートル程度。設計者は東京タワーと同一人物。

作中ではこの地下に核シェルターが設計されているなど、何やらきな臭い施設扱い。

・通天閣のネオン

昭和54年に設置された通天閣のてっぺんのネオン。 専用回線

で气象台と繋がっており、そこから送られてくる情報に基づいた天気予報を行う。

ネオンが白なら晴れ、オレンジなら曇り、青なら雨。ネオンの上方が白で下方がオレンジであれば晴れ時々曇り（もしくは晴れのち曇り）となり、他の組み合わせでも同様。

・ツンデレ

最近は適用範囲が広がり過ぎて意味が分からなくなってきた言葉。初めツンツン、後デレデレは解凍系。素直になれないと照れ隠しは独立したジャンル。

この2点さえ守ってくれりゃあとは何でも良いよ、というのが個人的な意見。

・デカメロン

ジョヴァンニ・ボツカッチョ著の物語。

10人の登場人物がそれぞれ10の物語を披露するという形式を採用しており、全100話からなる。

が、作中では坂田 うめの胸を指して「でかいメロンのようだ」という意味で用いられる。

・天才少女

読んで字の如し、天賦の才を持つ（そして発揮している）少女。

最近のサブカルチャーにおいては大体どこにでも居るので有難味は薄い。

作中では千里がかつてこう呼ばれていた事があるが、訳あって本人は嫌がっている。

・電磁波照射

電磁波とはエネルギーの放射現象の一種であり、空間の電場と磁場の変化によって形成された波を指す。波長によって微妙に呼称

が変わるなど、そこはかたなく出世魚チックな側面を持つが詳しくは言及しない。

人体への影響については諸説あり、波長によっては発がん性を有する者もある一方でがんの治療に使われる事もある。

覚醒を促すのは電気信号であつて、電磁波でそれを行うというのはどういう理屈やねんと悩み倒したが勢いで誤魔化すことにしたのはここだけの秘密である。

・電子マネーシステム

新天寺社、ひいてはアーリーのサービスの中でも最も利用者の多いアプリ。アーリーには所持しているだけで毎月1000円相当の電子マネーが支給され、ゲームの大会の賞金やアプリの報酬、広告収入などもニューロン専用の電子マネーで支払われる。その為、他の電子マネーと比べて敷居が非常に低く、電子マネーを購入するユーザーもかなり多い。

新天寺社自体に電子マネーを扱うノウハウがある筈もなく、基本的には新天寺社から委託を受けたカード会社が業務に携わっている。

・でんでんタウン

日本橋の、主に浪速区側に位置する電気街を指す。

電気街の例に漏れず、近年ではオタク街化が急速に進行、同時に飲食店や古着やなどの様々な専門店が軒を連ねている。

特に有名イラストレーターの手によって描かれたマスコットキャラの存在、2005年から毎年春分の日に開催される“日本橋ストリートフェスティバル”など、オタク街としての側面を強調した街おこしを行う事が多い。

・透視機能

と、言っても実際に透視出来る訳ではない。あくまでもアーリーの映像処理と複数のカメラを利用し、使用者の位置から見えない

部分の映像を撮影、あたかも視界を遮るものが透けているかのよう
にAR技術で表示しているだけである。

遮られた視界の向こうを映すカメラが無ければ何も表示されず、
別アングルのカメラで確認出来る情報と双方のカメラで見えない部
分の情報が著しく異なる場合、誤った映像が表示される事になる。

たとえば使用者の死角に置かれた円筒形の水筒を別アングルのカ
メラが捉えた場合、そのカメラの死角にその水筒の持ち主の名前が
書かれていたとする。この時、見える部分から死角の部分も円筒
形であると仮定して使用者の見る透視映像にも円筒形の水筒の映像
が反映される。しかし、名前については判断材料が一切存在しな
いため表示されない。

【な】

・中野 夏芽

ニューロンに潜航する異能を持つ少女。詳細はキャラ紹介にて。

・夏芽の本体

3月21日時点では愛千橋病院で昏睡していた夏芽の肉体。

この時に限らず、能力の使用中は本体は動かせないが、簡単に目
を覚ます事が出来る。

・ナビゲーションシステム

ここではAR及びニューロンを利用したナビゲーションの事を指
す。GPSとアプリやネットワーク内にある地図の情報よって利用
者の座標と目的地の座標を割り出し、ルートを検索する。

ここまではカーナビとなんら変わらないが、アーリーの場合、特
定のアプリにのみ対応したヘルメットやゴーグルを利用する事でバ
イクであっても目的地までの情報を走りながら確認する事が可能な

他、他ユーザーの同じアプリを介してほぼリアルタイムで渋滞・事故など交通への影響を把握し、最短ルートを変更できる。

また、自動車のフロントガラスにこれを搭載したものの、AR表示こそ非対応だがアーリーさえあれば情報のやり取りだけは可能なカーナビも存在する。

・二次元

空間の次元が2つあることというのが一般的な定義だが、専らオタク界隈の用語としては漫画やアニメそれ自体、作品の世界やキャラクターを指す。

アーリーのARはかなり三次元に近い表示をされるので、ARを指して二次元と称する場合、物理的に二次元というよりは後者のアニメキャラ的なニュアンスが強い。

・日本橋

この地名は国内で東京都中央区と大阪府中央区、五百川にかかる橋の三か所があり、それぞれ「ほんばし」「にっぽんばし」「ひもとばし」と読み、本項は大阪市のものを扱う。

オタク街としてのイメージが強いが、道頓堀などの歓楽街も含むかなり広い地域を指す。

電気街・オタク街とされる地域についてはでんでんタウンの項を参照。

・ニューヨーク

作中ではアーリーが構築する独自のネットワークの事を指す。語源は情報処理及び情報伝達に特化した神経細胞。無数のアーリーが情報を共有する様子を脳で無数のこれらが活発に情報のやり取りを行っている事に喩えたもの。

・音々（ねね）ちゃん

日本橋、でんでんタウンのマスコットキャラクター。イラストレーターにいのこのいぢ、声優に松岡 悠木を起用。年齢は16歳、身長は158cmで、妹がいるらしい。

全くの余談だが、アニメやゲームで出てくる料理をとりあえず作ってみるといふ設定には、カキ オロギをも作ってしまった身としては親しみを感じざるを得ない。

・年間千億単位の電子マネー供給

新天寺社がユーザーに渡す電子マネーの総額。普及台数が1億台を突破しているアーリー全てに毎月最低1000円と言うことは、単純計算で毎月1000億円以上を払っている計算になる。

もちろん、そこから故障したアーリーや、電源をオフにしていたアーリー、規約違反が見つかったアーリーなどが除外されるのだが、それでも膨大な金額になる。

【は】

・羽原 秋一

不思議な右目を持つ本作主人公。詳細はキャラ紹介にて。

・腹黒キャラ

千里と夏芽の秋一、春日、冬彦に対する評。

もっとも比較的権謀術数に長けている秋一と冬彦はさて置き、春日はそれを見抜けるというだけでなのでこの評価は不適當。

・額に肉

対人、対動物、対物と広く行われる古典的な悪戯の一つ。

派生として米や中と書かれる事もある。元ネタは有名な少年漫画

の作品。

・ファーストパーソン

主人公の視点でゲーム内の空間を移動する表示形式。 対になる言葉は主人公が視点の中に収まるサードパーソン（TPP）。

近年ではシューティングやアクションに多いため、FPSという語彙と共にそう言ったジャンルと混同されがちではあるが、テーブルトークRPGの雰囲気を再現しているタイプのゲームにはこの形式のものもある。

・不正改造

改造とは物事を作りなおす事であり、不正とあるようにその中でも好ましくない部類の改造を指す。何を持って不正とするかは個人の考えや状況に左右されるが、アーリーに関する不正改造は専ら新天寺社との契約に反する改造の事である。

契約についてはゲームの初回起動時にハード/ソフトを問わず様々な規約が提示され、これに同意しないとアーリーをまともに使用出来ない。不正改造に該当する改造はアーリーの安全性を損なう、情報の機密性保持に悪影響を及ぼす、新天寺社の機密を暴くのに通じるものなど。

・フトコロモンスターズ

“フトモン”の通称で親しまれ、15年以上に渡って支持され続けているゲーム。おびただしい数のモンスターを集める事を目的とし、子どもから大人までそれぞれの年齢に合わせた楽しみ方の出来る作品。

基本的なターゲットは子どもながらも、徹底的に戦術面を研究し、神の一手を目指す俗に廃人と呼ばれる人たちも存在するほどに奥と業の深いゲームでもある。

・ボーカロボット

特定の企業が開発した音声合成技術およびその応用製品、その製品に設定されたキャラクターを指す。一般にはキャラクター達の総称として用いられる事が多い。

主にニヨニヨ動画を中心に人気に火の付いた技術・キャラクターで、現在はブームこそ去ったものの強力なコンテンツとして安定した需要がある。

略称は“ボカロ”で、作中では時折ヴォーカロボットという表記揺れがあるが気にしてはいけない。

・某動画サイト

正式名称ニヨニヨ動画。作中では今年で10年目になる。

公式にアニメの配信等も行っており、生真面目な地方のオタクにはありがたい存在。

【ま】

・眉毛犬

小学校に迷い込んだ野良犬が受ける洗礼。

過去に眉毛の部分だけ剃られた犬を見た事がある。誰だ、あんな手の込んだ事した奴！

・廻音リユカ

北海道札幌市にあるクリヴトン・フューチャー・メディア株式会社製のボーカロボット。英語に対応している事や、この社としては知名度の高い声優を起用した点が特徴。

デザイン面ではスリットの深いロングスカートとピンク髪が特徴的なキャラクターであり、春日が彼女を選択肢に加えたのは「脚に自信があるから」だと思われる。

・本橋 春日

自称正義の味方のコスプレ姉ちゃん。詳細はキャラ紹介にて。

・もやし

早くはないし、美味いかどうかは人によるが、安さに関しては間違いのない家計の味方。

栽培方法の関係上、日光による殺菌が期待できないから加熱処理はきちんとしよう!!

・モナイー

フトモンと合わせてアーリーの二大巨頭と言われるゲームであり、“モヒカンイーター”が正式名称。

一介のモヒカンザコが武装し、経験を積み、研鑽を重ねて格上のモヒカンを食らって特殊能力を得る。そうやってどんどん強くなってゆくゆくは名うての拳法家達をも食らって、無法の世紀末に己が名を轟かせる……というハック&スラッシュなゲーム。

【や】

【ら】

・リハビリ

作中では目覚めた後の夏芽が受けた治療を指し、能力低下やその状態を改善し、障害者の社会的統合を達成するための手段を意味する。

絵的に非常に地味であり、なおかつカタルシスを欠くため、これが比較的頻繁に登場するスポーツ漫画等ではその過程が省略される事が多い。

1年ほど昏睡状態にあった夏芽の場合、筋肉は酷く衰えているためまともに動けるようになるのはかなりの期間のトレーニングを必要とする。

それを2、3週間で何とかしてしまったというのは色々無茶苦茶な話である。

・ローアングラー

ローアングルからの撮影には脚を長く見せる、顔を小さく見せるという効果があり、それ自体は本来立派な撮影の技法である。

が、ローアングラーと称される場合のそれは下着を収める事を目的として下から煽るような撮影を行う者を指す。

なのでそう言った撮影を行う場合は被写体の同意をきちんと得て、完成したものは必ず相手に見せ、何よりも被写体の魅力を引き出す為に行うよう心がけるべし。

・ロナルド

ワクドナルドのマスコットキャラ。レッドアフロと真っ白な顔が印象的な道化。

夜道で遭遇したら泣く、とさえ言われるほどのインパクトで専らネタ的な意味で大人気。

【わ】

・ワクドナルド

略称は“ワクド”と“ワック”の二派閥がある。たまに“略さない”という人も。

ロナルドと呼ばれるマスコットキャラを擁する、ありとあらゆる創作の世界にその名を轟かせる三千世界を制覇したと言っても過言ではない史上最大規模のハンバーガーチェーン店。この作品の世界でも例に漏れず、最大規模のハンバーガーショップとしての不動の地位を獲得している。

最近では全国どこにでもあるという利点を活かし、ゲームのレアモンスターやアイテムの配付などを行っての客引き兼ゲームの販促を行ったりもしている。特にフトモンとの付き合いは長く、カレンダーなども含めると足かけ十数年になると思われる。

・ワックとワクド

関西（近畿？）ではワクド、関東ではワック。他には略さない派などが居る。

但し、関西でも朝ワックは朝ワック。某林檎のOSと区別出来れば何でもいい節がある。

【1】

・10時のシミュレーション

秋一が目撃することになった核実験のシミュレーションのこと。

ピークタイムをここより後の時間に設定したということは当然ながらピークにはより重要度の高い実験を行う予定であったはず。

が、大須 冬彦達の暗躍によって特定エリアのアーリーが外部から隔離され、結果その実験は行われなかったことになるが。

・20ペタフロ

ペタとはテラに次ぐ国際単位系の接頭辞で、フロップスとはコンピュータの演算能力を表す指標である。

2011年年現在最高性能のスパコンとされる“京”でさえ9ペ

タフロップスに満たない。

・26の案件

本橋 春日の所属する組織で抱える案件のうち、新天寺社に関するものを指す言葉。

数字自体に意味はなく、ただこの件が舞いこんできた時に他に25個の案件を抱えていたというだけ。

【A】

・Another Region

作中では大抵“アーリー”と略される新天寺社製の携帯ゲーム機。拡張現実機能に特化しており、現実ゲームのキャラが居るかのよくな気分を味わえる。また、現実を補強して生活の利便性を高める側面も強く、ゲームをしない人でも所持している。

この世代のゲーム機としては特に高性能な訳ではないが、その利便性の高さゆえに販売数・普及率は凄まじく、市場規模もバカでかいが故に参入企業は業種を問わず多い。

・ARコード

ARマーカーと呼ばれるアプリとの併用を前提とするコード。マーカーを起動させた状態でアーリーのカメラ越しにARコードを見るとその上に何かしらの映像が表示されるという代物。

バーコードやQRコードのようにドットの太さや位置それ自体に意味があり、ドットの組み合わせによってそれらが生成される訳ではなく、あくまでもBボタンを押せばキャラがジャンプするくらいの単純さでマークに対応した映像を表示しているだけ。それ故にスマフォとアーリーのその間に互換性が無い事もしばしば。マス数

の少ないARコードの場合、他のARマーカでも何かしらの映像が表示されたりする。

新天寺社の規格に関しては「どのマーカを使えば適切な表示が行えるか」という情報が併記されており、必要に応じてニユーロンから自動的にインストール、適切なマーカを起動するため、漫然とカメラでARコードを映すだけで正しい映像が表示される。

・ARシューティング

AR技術やARならではの映像表示を活かしたシューティングゲーム。現実の舞台をゲームの戦場にシ、身体を動かして敵の背面に回り込むなど、かなり体感型のゲームになっている作品が多い。

勿論、既存の座ったまま出来るゲームも存在するが、その場合もファーストパーソン形式のものが多く、横シューなどはAR非対応の傾向にある。

・Augmented Reality

一般にはARと略される事の多い概念。日本語では拡張現実と訳されるもので、ゲームやネットワーク、アプリ内の情報をカメラ越しの現実の映像に反映させる、或いは現実の映像やその変化をゲームに影響を及ぼすといった機能がこれに該当する。

たとえばある人物をアリー越しに見た時、その人物の身長をアリーが割り出し、表示したとする。この時、肉眼では大体170cm程度と曖昧に受容される情報を、170.8cmと正確に把握する事が可能になる。このように現実をより正確に把握出来るようになるのがARの分かり易い機能の一つと言えよう。

なお、作中では細かい分類が面倒くさいという理由から現実と仮想の影響が双方向性である“複合現実”(Mixed Reality)、現実世界の情報による仮想世界の強化を指す“拡張仮想感”(Augmented Virtuality)等もARで一括して扱っている。

・ Fallout Shelter

要するに核シエルトーのこと。 何故か新世界の地下にこれに相当する施設がある。

新天寺社のAR機能で表示される 新天寺社がその情報を把握している。 公表されている施設であれば更に 新天寺社の施設とはなり得ず、厳密に言えば非公開の施設であつてもその施設を建造した組織と新天寺社に接点があるだけの可能性もあるので、 新天寺社の施設というのは早計。

・ GPS

グローバル・ポジショニング・システムの略。 米国によって運用される衛星測位システムで、受信機と併用する事でその受信機及びその使用者の現在位置が分かる。

もともと軍事目的で打ち上げられた人工衛星を利用したシステムではあるが、カーナビやスマホを筆頭に、民間でも盛んに利用されている。

・ H&K P2000

ドイツの銃器メーカーが同社のH&K USPをベースとして開発した自動拳銃。

2011年現在、日本の警察で使用されている銃の一つでもある。

・ Mjollnir 300

メーカー不明のスタンバトン。 スタンバトンとは電流の流れる警棒のようなもの。

通常、人を気絶させるような出力には設定されないのだが、これはその限りではない。

・ RUMI

大阪市に本社を置くソフト制作・開発会社であるウィンターネット社製のボーカロット。

デザインはオレンジ色の衣装をまとった緑髪の少女。南半球が眩しいアペンド版も。

同社のボカロとしては最大のヒット商品で、しっかり調声した時の性能には定評がある。

・SEREN

欧州原子核研究機構の略称。世界最大規模の素粒子研究所で、

正しくはCERN。

HTML、HTTP、WWWなど、インターネットに関わる重要技術の発祥の地でもあるが、別にインターネットを管理している訳でも何でもない……等。

・The Watcher

坂田うめが使用していたアーリーの位置や映像を検索する道具一式。

アーリーと جوجل、インカムヘッドセットの3つによって構成される。

・Yuly

大阪市に本社を置くソフト制作・開発会社であるウィンターネット社製のボーカロット。

ボーカロットを発売する事の宣伝効果を想定して歌手側から企画された製品、らしい。

デザインは露出度の高い服を着た金髪の女性。太ももや腹部の露出が特に多いためよほどスタイルに自信が無いとコスプレなど出来たものではない。

1話 西の聖地なんて言われているが半分以上は歓楽街でアウエーの空気が半端

この作品はフィクションです。実在する人物・団体・地名とは一切関係ございません。

1話 西の聖地なんて言われているが半分以上は歓楽街でアウエーの空気が半端

Another Region それが今、日本で一世を風靡している携帯ゲーム機の名称だ。

日本国内だけでほんの3年足らずの間に実売1億台を突破。発売当時はまだ無名も良いところの新興企業”新天寺社”はこの大ヒットの後押しを受けて一気に世界に名をとどろかせる一大企業へと成長を遂げた。

”アーリー”と略される事の多いこのゲーム機の最大の特徴は何と言っても拡張現実の特化している点だろう。

拡張現実。 或いは強化現実とも呼ばれ、世界的にはAugmented Reality(略式はAR)という名で知られている技術で、SF映画なんかではわりと良く見かける代物。

分かりやすい例を上げるとすれば某世界的に有名な漫画の視界に映った人物の強さを表示してくれるメガネなんかが代表的だろう。

他にも一昔前のアニメで見かけた現実の世界と重ね合わせの電脳世界を視る為のメガネなんかもこれの一種と言えるかもしれない。

前者は対象のある情報を数値化する事で現実を、だいたいこんなものだろうという推定から正確な値の把握へと強化している。

後者は現実中空想を持ち込む事で視界に広がる世界の多様性を強化している。

かたや次世代ナビゲーションシステムを筆頭に様々な場面でその恐るべき利便性を発揮し、かたやアーリーに備え付けられたカメラ越しに世界を視る事で現実の世界とゲームの世界の垣根を取り払った遊びを提供し続けている。

特に現実を強化する方面に関しては凄まじいものがあり、1000万人を超えるネット会員・新天寺社の通販サイト・自社の保有す

るサーバの貸し出しや多彩なアプリの提供といった様々なサービスの合わせ技によって、アーリー所有者が欲しがりそうな今月発売の商品を自動的にリストアップし、外出時にカメラ越しに街を見るとどの店にどの商品が置かれているか、在庫状況はどうかといった買い物に必要な情報を懇切丁寧に表示してくれる。

これは通販サイトに蓄積された個人のデータと、通販・流通・アプリの使用等、何かしらの形で利害関係を結んでいる小売店（何とその数は数十万店にも及ぶとか）の在庫情報の二つを画面上の映像に重ね合わせる事によって成立しているらしい。

理屈は何となく理解出来るが、実際にそれを初めて見た時には圧巻させられた。

更に新天寺社はこの爆発的なヒットを背景に、様々な事業に手を出し、膨大な情報とユニークなサービスを利用して多くの協力者を得て、ついには既存のインターネットとは異なる規格のアーリー専用ネットワーク、通称“ニューロン”を保有するに至った。

今や日記も手帳も家計簿も通帳も財布もメールもこれ一つ。もはやインフラと呼べる程の地位を確立、持っていないのはお年寄りと赤ん坊くらいである。

当然、このゲーム機は俺、羽原 秋一の周辺でも誰もが所持していて、誰もが生活に欠かせない必需品として肌身離さず持ち歩いていて、誰もが当たり前のようにその恩恵を享受していた。

春休みを間近に控えた3月21日、つまり春分の日。

俺は友人の北里 千里と大阪の電気街、今となってはオタク街と

しても有名な日本橋　　より正確に言えばでんでんタウンをうろついていた。

今日はコスプレイベントが開催されるらしく、通りにはイベント開始が13時であるにもかかわらず、表通りの歩道はフライングぎみに思い思いの衣装に身を包んだコスプレイヤーたちで溢れかえっている。

普段は地味な色の服ばかり好んで着るタイプの人々ばかりが行き来するこの街においてはかなり異様な光景だった。

この街のマスコットキャラのツインテールの少女　確か名前は音々（ねね）ちゃんだったか　や、現在絶賛放送中のアニメ（不思議とその大半は深夜番組である）のキャラクターののぼりが掲げられ、お祭り気分を盛り上げるのに一役買っていた。

「千里、そこにカメラ向けてみるよ」

俺の言葉を素直に聞き入れた千里はポケットからアーリーを取り出し、備え付けられたカメラをのぼりに向けて「おお」と歓声を上げる。

アーリーの画面ではのぼりに描かれたキャラがこちらに向かって手を振っている。

千里がカメラを構えたまま茶髪のツインテールとヘッドフォン、ピンクの制服と中途半端に属性過多のマスコットの側面に回り込む。さつきまで向かい合っていた彼女の横顔が画面に映っている。

流石に視線を認識して反応する程の機能は無いらしく、彼女が手を振る先にARを構えている人はいない。

「これは……もしや！」

何かに重大な事に気付いたと言わんばかりの表情を前触れに、千里は両膝と左手を地面についた、いわゆる四つん這いの姿勢になっ

た。

……何をか言わんや、である。

「おい、そのローアングラー。 通行の邪魔になるからさっさと立て」

「待て待て待て待て。 あと10秒だけ、お願い!？」

「却下。 公衆の面前での変態行為はさすがに友人として看過できないね」

首根っこを掴んで、千里を強引に立ち上がらせる。

「普段は『お前みたいなキモオタが友人とかねえよ。 身の程わきまえて死ね』とか何とか笑顔で罵詈雑言吐きまくるくせに! こんなときだけデレるなよ! チクシヨウ、ちよつとときめいたじゃないか!」

「そうかそうか。 じゃあ、そのときめきを抱えて今すぐ車道に飛び込もうな?」

「ごめん! ふざけ過ぎた、私が悪かった! だから背中を押すのは止めて!？」

「ここでそんなに速度出す奴なんて滅多にいないから死にやしないって」

「そつという問題やない!!」

背中からの圧力に必死に抵抗する千里。

両足を腰よりやや前に突き出し、いわゆるくの字になっているため、全身を浮かせるぐらいの勢いで押してやらないと車道に叩き落とすのは不可能だろう。

もつとも、本気で落とすつもりは毛頭ないのだけれど。

いい加減疲れて来たし、飽きたので千里の背中から手を離し、一歩退く。

「んのわっ!？」

支えを失った千里は車道とは反対の方向に盛大にすっ転んだ。幸い、受け身は取っているので頭部に深刻なダメージを負ったとか、そう言った様子はなさそうだ。

「ま、多少頭をどうかしたって大した問題はないだろうけどな、アホだから」

「あのなあ、流石にこれはやり過ぎやろ……あいたたた」
「大丈夫か？」

声をかけてやると手を貸すまでもなく、後頭部をさすりながらむくりと起き上がった。

無事をアピールのように、右手をひらひらと振って見せている。

「大丈夫だ、問題ない」

「そうじゃなくて、アーリーは無事か？」

転んだ拍子に千里の手から投げ出されたアーリーへと駆け寄り、軽く汚れを払ってから画面を覗き込んでみる。

電源を入れて動作チェック。液晶にも傷が無いかを簡単にチェック。

「良かった、特に何の異常も無さそうだ」

最後にもう一度汚れを払ってからポケットに滑り込ませた。

「ちょっと待て! 何で至って自然な感じで私のアーリーを懐に収めてる!？」

「違う違う。アーリーの方から俺のポケットに入って来たんだよ。」

今の持ち主があまりにも変態でボンクラでカスだからいい加減見切りをつけたいってさ」

「そんなわけあるか！ そんなわけあるかつ！ 大事な事やから2回言いました！」

「じゃあ、今の持ち主が素敵過ぎて自分じゃ釣り合わないからで良いや」

千里が素敵とか、言ってる気持ち悪いけど。

「今絶対に『こいつが素敵とかそんな事はあり得ないし、ウソだとしても言ってる虫唾が走る。後で口ゆすごう』とか考えへんかったか」

「思ってるよ。そこまでは」

「そこまでは、って何だよ……」

はたから見ると口論しているようにも見えそうだが、けれど当人たちにとっては平常運転のやり取りを繰り返しながら、ポケットから取り出したアーリーを千里に返した。

受け取った千里はアーリーをポケットにしまい込むとその場で軽く二回ほどジャンプ。ポケットから落ちてくる様子が見られない事を確認する。

短めの淡い水色のスカートと頭の両サイド、こめかみの少し後ろでまとめられたツインテールのやや色素の薄い髪が揺れる。

俺は現在中学3年生で、千里は俺と同級生。つまり、中3である。

年齢を考えるといささか幼い髪型だが、小柄かつやや童顔の千里にはよく似合っていた。

「……まあいい。それより、大会までまだ時間があるから、ワグドで時間潰そうか？」

「もちろん、お前のおごりな」

「いいよ、参加しないのについて来てもらってるしな。それくらいお安いご用さー！」

正確には参加したくても参加出来ない、だけど。

「流石、千里。超素敵、マジ美少女」

「棒読みにも程がある」

心にもないことを口にしてるからな、仕方ない。

いや、正確に言えばこの男友達と変わらないノリでいびつても差し支えない友人は丸顔で、瞳が大きく、全体的に年齢よりやや幼い顔立ちに反して体つきは年齢相応以上に女性的というアンバランスさも含めて可愛らしい女の子だと言えるだろう。

ワイシャツの上にユニオンジャックがプリントされたタイトなシャツ、更にアクセントにネクタイ。下は前述の水色のスカート、靴下はスニーカーソックスらしく機能性を優先しつつも女の子アピールしようと試みた結果と思われるピンクを基調にしたスニーカー。つまり、スカートからスニーカーに至るまでの太ももやふくらはぎは漏れなく生足。とは言え、華奢な二本の脚は見事なまでにつやつやで、日頃からしつかり手入れしている事を伺わせている。

といった具合に、オタクといえども女の子なんだなあと思える程度には見た目にも気を遣っており、まず間違いなく美少女の部類である。

(全くの余談だが、俺は意味も分からない英語の書かれたTシャツ&シャツジャケットにジーパン、スニーカーと普通過ぎて評価しようもない格好だ)

ただし、それはあくまで客観的な評価であって、付き合いがそれなりに長い俺にとっては水泳の授業の最中に「堂々と女子とくんづほぐれつ出来る出来るんだぜ！羨ましいだろ？」と笑顔で語り出

したり、「ああ、このネクタイになって自分のおっぱいに挟まれたい」などと抜かす変質的なイメージがあまりにも先行し過ぎていて性欲が全く向かない。

「そっぴや、ワクドって今は何か配信してたっけ？」

「うん、レア木の実持ちモンスターの第三弾」

最寄りのワクドナルドへ向かって歩き出した千里は隣を歩く俺の顔を見るでもなく、正面を向いたままそんな言葉を口にした。

ワクドナルドは全国的にはワックと略される事が多いようだが、関西ではワクドと略されがちな言わずと知れた世界的に有名なハンバーガーショップの事である。

そして、ワクドでの配信というのはごく一部のベストセラーゲームだけに許された特権のようなもので、それらのゲームを手にワクドナルドへ行くとワクドナルド限定ミッションを受領出来たり、限定配布のレアアイテムなどが入手出来る。

そして、千里の言うレア木の実持ちモンスターの第三弾とは爆発的に普及したアーリーのタイトルとは言えど、決して多くはない実売300万本超クラスの大ヒット作品“フトコロモンスター”の配信イベントを指す。

全五弾、2週間ごとにレア木の実持ちフトモン（フトコロモンスターズの略称である）を配信して行くこの企画のおかげで俗に廃人と呼ばれるフトコロモンスターズの熱心なプレイヤーは足しげくワクドナルドに通う羽目になったとか。

かく言う俺も少し前まではその一人に近い存在だったのだけれど。

「秋一のアーリー、まだ直らないのか？」

「直らないもなにもまだ修理にも出してねえよ」

「早くしろよ。ないと不便なんだから」

そう、俺もアーリーを持っていた。ゲーム機であるにもかかわらず、ケータイに先んじて学び舎への持ち込みを許可される程に浸透しているのだから、当然と言えば当然だろう。

けれど、数日前に雨上がりの道路を占拠していた非常識な水たまりへとうつかりダイブさせてしまっただけ以来、ウンともスンとも言わなくなっちゃった。

さっさと修理に出せば良いものを、横着かまして自室に放置し続けて、なんやかんやで今に至っている。

「朝ワックになるけど、何にする？」

「クーポン、何がある？」

「あ、また見てない。ええっと……」

思い出したようにアーリーを取り出した千里は慣れた手つきで操作し、2秒とかならずにワックのクーポンサイトへのアクセスを済ませる。

「相変わらず馬鹿みたいに早いな、その不正改造機」

「この世代の機種のカセにとろくさいのが悪いんだよ。それにモニーみたいな処理能力の差が立ち回りにダイレクトに影響するゲームの大会に参加する訳じゃないんだし」

「まあ、確かにそうだけだな……」

億単位の実売という桁外れの実績を持つアーリーだが千里の言う通り、思いのほかマシンスペックは高くない。

アーリーとほぼ同時期に発売された当時のゲーム機の中ではARの性能の高さを除いては素人目にも間違いなく低い部類だった。

もっとも、その低スペックには相応の理由があり、その理由が独自の強みに繋がっていたおかげで並いる強豪を押しつけて現行のゲーム機の頂点に立つ事が出来たのだが。

「双生児エッグマフィンセットが300円だった」

「んじゃ、それで。あと、お前のハツシユは俺が食ってやるから感謝しろ」

「どんだけ上から目線なんだよ。横暴だ」

ため息ついでに突っ込みで返す千里。突っ込みながらもクーポ
ンサイトを表示した状態のブラウザを最小化し、アーリーの電子マ
ネーシステムを立ち上げる。

「……そういや、アーリーがないと小遣いも減るんだよな」

新天寺社と協賛しているカード会社のロゴが表示された画面を
覗き込みつつ、今度は俺がため息をついた。

「だから早く修理に出せば良いって言ってるのに。私みたいに改
造している訳じゃないんだから」

「いやあ、すっかり失念してた」

「って言うか、秋一ってコレ以外に自由に使えるお金あったか？」

「一応あるぞ。月々1000円だけけど」

俺の返事を聞いて千里はもう一度盛大にため息をつく。

「どうしてそれですっかり失念する？」

「現金なんてアーリー買ってから殆ど使わなかったから2万ほど貯
蓄があつてさ。ちょうど欲しいものもなかったから全く困らな
かつたんだよ。スマホの料金は親持ちだし」

「まあ、それは私も一緒だけど」

「いや、お前の場合、ある意味俺よりひどいだろ、天才少……っ
と悪い」

「……ん、別にええよ」

新天寺社の電子マネー。

これもアーリーが爆発的に普及した要因の一つで、”ゲームを通じて稼げる”という強烈な個性を有している。

まず、アーリーを所持しているだけで毎月1000円相当の電子マネーが各々のアーリーに送られてくる。次いでアーリーを利用してネットに接続、ブログなどを更新する度に少額の電子マネーが配布される。

他にも新天寺社と提携しているネット通販で商品を買う、レビューを書くなどの形でアーリーや新天寺社及びその関連企業を利用する度に少しずつ貰える金額が増してゆく。

そして何と言っても特徴的なのがゲームメーカー故か、公式・公認の大会に参加したり、そこで実績を残したりする事でも電子マネーが賞金として贈与される。

今日、千里がこの街に来た一番の目的はコレだったりする。

と、この辺りまでは一般的なユーザーのアーリーを利用したお小遣い稼ぎである。

こういったやり方では俺も含め、せいぜい月々5000円も得られれば良いくらい。

賞金を得るのが一番見返りの大きい方法ではあるものの、その為にはいろんなゲームを購入し、なおかつ相当やりこまねばならず、それこそ新天寺社の思いつぽ。

流通している電子マネーの総額を考えるとお上に睨まれそうな気もするが、現にこうして流通しているってことはそうならない構造になっているんだろう。もっとも、それがどんな仕組みなのかまでは一介の中学生の預かり知るところではないが。

「で、千里は幾らほど蓄えてるんだよ？」

「人差し指と親指で輪を作るのはやめろ、なんかやらしいから」

と、非難がましい視線を向けつつも、つま先立ちして俺の耳下へと口を近づける。

「5000万ほど」

「……………マジかよ」

予想をはるかに上回る金額に軽くめまいを覚えた。

勿論、人並み外れた金額を稼いでいるであろうことは予想していたが。

それでも、5000万という金額はあまりにも突飛な数字だった。

「どうやったたらそんな稼ぎになるんだよ？」

「新しいアプリを開発したいから手伝ってくれってメールが時々来んだけど、そのプロジェクトに参加した報酬が大体百万単位」

「あー、それって新天寺社からの直々の依頼か？」

まあ、その依頼が無くても2000万を自力で稼いでいる計算になるんだが。

「そういうこと。 って言ってもそうしょっちゅうある訳ではないけど。 普段はアプリなんかのバグを直したり、脆弱性の指摘したりしてちよつとずつ稼いでる」

「ちよつと？」

「1日2万くらいかな？ あと、フトモンみたいな情報戦とか、読み合いがモノを言うゲームなら滅多に負けなから大会に参加すれば大体賞金貰えるし」

「1日2万をくらいとか。 将来お前と結婚する奴は色んな意味で苦勞しそうだな」

やれやれと肩をすくめつつ、千里と肩を並べてワグドのドアをくぐった。

2話 Q・メロブが開店する11時くらいまで2時間近くも某世界的に有名な

双生児エッグマフィンセット二人分を千里に持たせてワクド内の狭い階段を昇る。

祝日で、複数のイベントがあるという事もあって店内は普段以上の賑わいを見せていた。

フトモン大会参加者と思しき小学生、大きなお友達は早くも大会前の最終チェックに勤しんでいる。大会前に情報を漏らさないためか、プレイヤーの大半はARの共有機能をオフにしているようだ。

AR共有。この機能のおかげで普段はアーリー同士の無線ネットワーク。これも“ニューロン”と呼ばれる。を介して各プレイヤーのお気に入り、フトモンが他のアーリーからでも確認出来るようになり、店内は賑やかな反面、カオスなことこの上ない状況になる……。のだが、今日は店内をとこせましと走り回るフトモン達の姿がほとんど見られない。

一方のストフェスの開始を待ちきれないコスプレイヤー達は各々の衣装の最終チェックに余念がない。既に衣装に着替えているフライング気味な連中もいれば、アーリーに入力された自分のデータに衣装を重ね合わせてアレコレ確認している人もいる。

と言った具合に、店内は満席ギリギリの活況を見せていた。が、幸運にも2階で二人分の席を確保出来た。3階まで登るとなると結構面倒くさいのでありがたい。

「なんでおごった私が荷物持ち？」

「そりゃあれだ。俺がご主人様でお前が下僕だから？」

「その台詞、ちょっと興奮するな」

少し頬を赤らめる千里からセットをトレイごと受け取りつつ、席に座る。

一体、こいつの脳裏ではご主人様と下僕をどんな風に解釈されているんだか。

うっかり訊ねようものならエロゲ的なアレコレを聞かされるだけなのは分かりきっているので、あまり深くは追及しないが。

「表情がガチっぽいのがすっげー気持ち悪いな、おい。あと、今回の配付フトモンは天井に張り付いてるから、ちゃんと捕獲しとけよっ。」

「あ、本当だ。んじゃ、食べる前にさっさとゲットしとこ」

そう言いながら、千里はARを天井に向けてピコピコ操作し始めた。

我ながら今日日、ピコピコという擬音はどうなんだろうと思うがまあ、どうでも良い。

「よし、捕獲……それにしても、相変わらず妙な目だね。どういう原理なん？」

「知るかよ。気がついた頃には見えるようになってたんだから」

ARが有名になってきたのが俺が小学生の頃で、アーリーの普及が中学に入る前後くらいだから、生まれつきなのか後天的に得たものなのかも分からない。

右目を閉じてから改めて天井を見上げる。さっきまで天井を這いまわっていたクモのようなデザインの虫フトモンの姿はどこにも見当たらない。

その姿勢のまま右目を開く。すると、さっきからずっとそこにいましたと言わんばかりに可愛らしくデフォルメされたクモが機嫌良く木の実を齧っている。

右目を閉じる。クモの姿が消える。

右目を開ける。　クモが姿を現わす。
左目を閉じる。　クモは相変わらずそこにいる。

「本当に何なんだろうな、これ」
「とか言うわりにはあんまり気にしてないよな？」

「まあな。　気になるけど誰かに相談出来るようなものでもないし、
現実と仮想の区別はつくからこれといって困ることもないんだよな
あ……………」

もちろん、家族や千里のような親しい友人にはこの事は伝えてい
る。　今のところ話の内容も俺の頭も疑われた事はない。

とは言え、彼らにこの現象を説明できるはずもなく、思い付きの
実験やら経験則や助言、・分析などから、思った以上に非科学的な
ことこの上ない技能であると結論付けるのがやっとだった。

たとえばバーコードやQRコードのようにそれら情報を解読し、
そこにある指示を出力する事でカメラの映像に何かしらの像を重ね
合わせるタイプのAR。　こういったものの場合そもそもそこにコ
ードがある事に気付かなくてもその何かしらの像を認識できる。

コードを見れば認識できるのであれば、脳にコードを解読するシ
ステムが内蔵されていると考えればまあ、筋は通る。　どうしてそ
んなものがインプットされているのか、という果てしない疑問を除
けば。

それ以外の方法で出力した映像をカメラ越しの景色に重ね合わせ
るARに至っては更に理不尽極まりない。　出力する映像が外部か
ら得たものであれば、その情報は電波の形を取って飛んでくる筈で
あり、それが見えると言う事は電波が見える&解析できるのと変わ
りない……………のだが、生憎と携帯電話などの電波は受信も視認できな
い。

もしもそれが出来てしまっていたら、アーリーの比では済まない
膨大な情報の洪水の前に正気を失っていたかもしれないが。

それに有線やアーリーに差し込んだソフト（どちらも無線通信オフ状態で）など外部に余計な情報を漏らさないようにした状況でも俺の目はちゃんとARによる重ね合わせの世界を認識してくれる。ならば複数人が同時に他のゲームをやる、或いは同じゲームの別のシーンを、同じシーンをと色々試したところ、あまりにも情報量が多い場合はどれか一つ、多くても3つくらいの情報を厳選して認識するらしいという結論が出た。

情報の取捨選択、優先順位については不明のままだったが。

今、他のソフトの情報などは一切反映されず、クモの姿のみが左目に写る形になっているのもその不明の優先順位によるものだろう。

「まあ、夜中にホラーゲーをすると真剣にトイレに行けなくなりそうなのがネックだけだな。あと、ワクドでたまにロナルドが店内を徘徊してるのが見えたり。あれとゾンビの集団だけは本気で勘弁して欲しかったな」

「ロナルドとゾンビの集団は同格？」

「ああ、ゾンビからは恐怖を感じる。ロナルドからは狂気を感じる」

特にロナルドは物凄いスピードで踊りだしたりするからなあ。

某動画サイトが元ネタなのは理解できるけれど、製作者はいささか悪ふざけが過ぎる。

というか、そういうのはオフィシャルでやる事じゃないだろう、と言いたい。

「何か有効活用出来る方法があれば良いんだけどな」

「ああ、色々考えた事はあるけど。他人のやってるゲームが何かなんて分かってても特にメリットはないし、対戦なんかで優位に立てるような情報が出力される事なんてほとんどない。通販やカーナビ、欲しい物の検索機能なんかはそもそもネットに繋いでいるか、他のアプリと併用しないと意味がない。自分のアーリーがあれば

スリープ状態でポケットにしまっただけでもその機能が使えるのはメリットと言えばメリットかもな。でも、それだってアーリーが手元にある事が前提になっている時点で手が一つ空く程度のメリットしかない訳だ」

「まさしく宝の持ち腐れなのか」

「持ってて腐れるようなものを宝とは言わん」

「んー、しかるべき機関にその目を持ち込んだら……」

「この無駄機能の正体が脳にあつたら俺の脳みそホルマリン漬けにされるな」

「……ごめん」

「そんな事、いちいち気にすんな」

目に見えて落ち込む千里。肩を落とす、うなだれている彼女の表情は長い髪に隠されて良く見えないが、きつと今にも泣きそうな顔をしているだろう。

普段は多少ぞんざいに扱ってもへこたれないクセに、変なところでデリケートな奴だ。

うん、と頷きながらも立ち直る気配を見せない千里のトレイにハッシュポテトを差し出してみる。

「それやるから、早く立ち直れ」

「うん、ありがとう」

と、顔を上げた千里はまさかの半泣きだった。

これは傍から見てみると俺が泣かせたみたいに見えるんだろうか？

「お前なあ、俺があれくらいで怒る筈がないのは知ってるだろ？」

「ちやうちやう。秋一がどっかの機関に連れてかれて、手術台に縛り付けられて麻酔なしで生きたまま顔を裂かれて、頭蓋を割られて、中身を取り出されて、徐々に目が濁っていくのを想像したらな

んか悲しくなつてもーて……」

「……なんでそこまで心身共にグロ方面に緻密な想像するんだよ」

いや、想像するのは一向に構わない。

こんな目を持つている手前、他人と世界観が相容れないとか、自分以外のすべては異世界に生きているといった類の捻くれた価値感
は人並み以上に理解している。

他人が普段どんなとんでもないことを考えていようと、その事に
対して驚きはしない。

が、あえてそれを口にされるのはやっぱり良い気がしない。

ましてや「今私の脳内であなたは生きたまま脳髄を引きずりださ
れました」なんて宣告されたら、さすがにそいつとの付き合い方を
見直さざるを得ない。

もつとも、泣きそうになるほど悲しかった、なんて言葉がつく場
合は例外だが。

「……冷めるから。 涙を拭いたらよ食べ」

ハンカチ代わりにテーブルに常設されている紙のナプキンを押し
付けてやった。

「うん、ありがとう」

ナプキンを受け取った千里は、俺の顔をまじまじと眺めながら少
しだけおかしそうに笑ってみせる。

それから差し出されたハッシュポテトを別のナプキンで包んで、
一口。

ゲーマーだからというのものもあるんだろうが、手が汚れるのを気に
しているのを見るとああ、女の子なんだなあとか不意に思っ
てしま
う。

まあ、だからと言ってそういう仕草にときめいたりするかと言うとそんな事は全くないのだけれど。

「ん、何？」

などと愚にもつかない事を考えながら千里を眺めていると、見られている事に気付いた彼女は首をかしげつつ視線をハツシユポテトから俺の顔へと移す。

「ん、別に」

とだけ応えて、彼女の顔以外で適当に目についたものへと視線を逸らした。

俺の視線を追いかける千里。その先には

露出度の高い衣装と長い金髪が特徴的なボーカロイド、YUI Yの格好をした色っぽいお姉さまの太ももがあった。

「……むっほお、エロい太もも」

「自重しろ、変態」

女の子がそんな台詞を口走るんじゃないやありません、と軽く頭を張るとは言いながらも、俺の目もその色っぽい太ももにくぎ付けなのだ。

何かしらのスポーツをしているのか、平均的な女性のそれに比べるとやや太いが無駄な脂肪はなく引き締まったおみ足が、白地に黄色のラインの入ったミニスカートから覗いている。

太ももに限らず、うっすら割れている腹筋や締まりの良い二の腕と、露出の多いコスプレから覗くパンツの一つ一つが鍛えられた健康的な色気を纏っていた。

「思わずかじりつきたくなるおみ足……もふもふ」
「マフィンを齧りながら言つとただの食事が変態行為に見えてくるから不思議だ」

アリーで何かを読んでいるその女性が足を組みかえたりする度にスカートで隠された部分のその向こう側が見えそうになる。

その都度、店内の男性陣（千里と店員、悔しいが俺も含む）が思わず固唾を飲み 直後、安堵と失望の混じったため息が漏れた。しばし、店内にいる人口の3割近くがその神々しい一点を食い入るように見つめていた。

異様な、と言うか酷く禍々しくも痛々しい光景だった。

やがて女性がケータイの着信音と共に立ち上がり、トレイの上のゴミを片付けて階段を降りて行くのをこの上なく名残惜しそうに見送り、ゲリラ的に開催された美女の太もも観賞会は終了した。

「で、何だっけ？」

「何だっけて何だよ？」

「分からないから聞いているんだが」

「俺に分かる訳ないだろ」

「そっか。 じゃ、何でもいいや」

不毛過ぎてその不毛さが少し新しいやり取りだ。

そんなやり取りの最中に千里は壁にかけられた時計を横目で見やり、それからのんびりと立ち上がった。

「どうした？」

「もうすぐ時間」

「会場まで送ろうか？」

「いや、ここまで付いて来てくれただけで十分」

立ち上がるうとする俺を手で制し、二人分のトレイとゴミを片付けた千里はのんびりとした足取りで1階へと消えへ行った。

ストフェスと重なる日程で開催されたフトモンの大会の会場はまさかの通天閣。

あの辺りはお世辞にも治安が良くてお子様を安心して歩かせられる場所ではない。それだけに小柄な、そして曲がりなりにも女の子である千里を一人で活かせるのは心配だ。

とは言え、ついてこなくて良いと言っている相手に無理矢理追いかけるのもどうかと思う。女の子だからこそ触れられたくないプライベートだってあるだろうし。

とは言え見てくれだけは確かに高得点だしなあ。しかも若干口りっぱいので声をかけて来る輩は間違いなく困った性癖をお持ちに違いない。やっぱり心配だからこっさり後をつけようか……？

といった感じの思考を瞬時に展開し、自分の過保護に気付いたところで我に帰り、千里の背中をコーヒーストロウを啜えたまま見送った。

「……上から71、52、73か」

あいつ、意外とスタイル良いのな。ウエストとアンダーでそこまです数字が変わるような体系ではないだろうから、トップとの差を考えると確実にD……ん？

目の錯覚だろうか？

一瞬、千里の頭上に妙なプロフィールが浮かんだような……。

具体的に言うとな千里のスリーサイズの何かだろう。

不審に思った俺はとっさに店内を見渡す。すると

久里浜 良太 男 20歳 フリーター

宮本 佐代里 女 19歳 龍山大学

大須 冬彦 男 27歳 新天寺社

梅崎 田朗 男 23歳 ローゾン

今宮 栞 女 33歳 Zyoshin

小野 悟 男 29歳 東吉住高校教師

五十嵐 光太郎 男 16歳 フリーター

佐々木 花音 女 17歳 九尾高校

泉野 鍵 男 31歳 フリーライター

...

ざっと目についただけでもこれだけの情報が俺の視野になだれ込んできた。

表示方式はフレンドユーザーをチェックする時のそれに近い。しかし、フレンドユーザー機能はプライバシーの問題を考慮して実名や所属は表示されない。

「なんだよ、これ……?」

訝しがりながらも、動揺を表情に出さないように注意を払う。
右目に右手を添え、改めて店内を見渡す。あの奇妙なプロフィールは見当らない。

恐る恐る右目から手を離す。再び 俺の視野を膨大な情報が埋め尽くした。

薄気味悪い。ゲームの映像が見える事よりも、アニメのキャラのARを肉眼で視認できる事よりも、淡白な文字の羅列がただただ不気味だった。

他人の私生活を盗み見ているような居心地の悪さに耐えられなくなった俺はコーヒーを飲み干し、急いで階段を駆け下りて店を後にした。

が、逃げた先でも情報の洪水が僕を待ち受けていた。

人名、性別、年齢、所属。

一つのプロフィールを一定時間凝視すると更に新しい情報が公開されるらしい事にたまたま気付く。

ブログの有無、最近遊んだゲーム、大会等への参加経歴や戦歴。

アドレスやソフトのラインナップを見る限り、このプロフィールはアーリーに関連するものようだ。

もっとも、そんなものを見なくとも俺の目に映るARはまず間違はなくアーリーのそれなのだが。

更に凝視しているとまたしても情報が更新される。

経歴、病歴、前科。

親の名前、出身地…… e t c、 e t c。

これは本当にアーリーに関連するものなのか？

あまりの情報の細かさに自分の目に対する確信すらも疑わしく思えて来た。

最初の情報はまあ良い。最近ではARを学校教育に活用しようなんて話が平気で立ち上がるくらいに浸透している代物だ。これくらいの情報が求められる事だって十分あり得るだろう。

しかし、経歴や病歴、前科はおろか各人の由来なんて……。

『そのあなた!』

突然、後ろから声を掛けられたような気がして弾かれるように振り返った。

何かろくでもないものを目の当たりにしてしまった、そんな感覚に襲われていた事もあった神経質になっていたんだろう。傍から見れば挙動不審もいいところの動きに違いない。

振り返った先、戸惑う俺の瞳は一人の少女を捉えた。茶髪のツインテールとヘッドフォン、ピンクの制服と中途半端に属性過多のどこかで見たような女の子だった。

『……アタシの姿が見えるみたいね』

アニメチック、というかまんま二次元系の顔立ちは確かにこの街のマスコット音々ちゃんそのものだった。

ただ一つ、違うところがあるとすればどちらかと言うとたれ目系で常に笑顔のイメージの強い彼女にしては造形や表情が妙に凜々しい事くらいか。

直感的に、というか常識的に考えて即座に彼女はARの映像なんだと理解する。

が、視線を感知するARの技術的な難しさやアーリーを持つている訳でもないのに音声が届こえてくる事に対する不自然さに気づき、彼女がARであるという確信が持てなくなる。

そもそも、ARの映像であるならばアーリーの画面を眺めながら歩いている連中にだって見える筈で、『アタシの姿が見えるみたいね』という言葉は不自然だ。

とは言え、生憎と俺は幽霊なんて信じる性分ではない。

『あんまり使えなさそうだけど、この際仕方ないわね。あなたに頼みたい事があるの』

俺の困惑なんてお構いなしに、マスコット少女は話を続ける。

俺を値踏みするような視線を足元から頭頂部へ向かって這わせる。失礼な態度だ。生身の相手だったらこの時点で既に一発引っ叩いているだろう。

この女がARである事が忌々しい。

そんな俺の思考になど気付く気配も見せず、ふてぶてしい表情のまま、頼むという言葉の意味を辞書で引きたくなるような偉そうな口調で、彼女はこんな事を口走った。

『アタシに協力しなさい！』

半ば反射的に出た突っ込みは彼女の顔をすり抜け、形容しがたい虚しさをもたらした。

3話 『これから正義の話をしよう』というタイトルを見た時、ソフトバンクを

本橋 春日（モトハシ ハルヒ）。
職業、正義の味方。
趣味、コスプレ。

初対面の人にこんな自己紹介をすれば大体どう反応すればいいのかわからないと言った風な困った顔をされる。

付き合いの長い友人からは「なまじ才能のある中二病患者が本当の挫折を知らずに突き抜けたらこうなるってモデルケース」などと評される。

けれど、これが間違いなく私を正しく表現したプロフィールだった。

子どもの頃から、女の子向けの恋愛漫画よりも男の子たちの見るバトル漫画が好きで。

物心ついた頃から、可愛らしいマスコットキャラの活躍よりも、日曜日の戦隊ものが好きだった。

彼らに倣って幼稚園児の頃からいじめっ子相手に大立ち回りを演じていた。

小学校に入って年齢差や性差が出てくると丸腰では勝ち目のない相手が現れた。でも、私の正義漢という名の無鉄砲は挫折すらも糧に勝利の方程式を描き始める。

勝てないならもつと強くなれ。それでも勝てないならちよつと卑怯だけど武器を使い。

それでもなお勝てない相手は油断している隙を狙え。トイレに行った時を狙い目だ。

必要なら徒党を組め。裏切りを促すなどの権謀術数は大勢を相手にするには実に効果的。

男勝り、ガキ大将。 時代遅れのスケバン刑事。

行く先々でそんな肩書きを貰いながら、止まることなく突き進んだ。

そして、ある日 確かその日は鉄パイプ片手に中高生をターゲットに麻薬を売り捌いている犯罪組織の親玉を追い詰めている時だったはず ただならぬ気配を纏ったスーツ姿の大男が現れて、身構える私にこう切り出した。

「君のその素晴らしい才能を、もっと素晴らしい事の為に使ってみないか？」

低い、けれど良く通る存在感のある声だった。

胡散臭い話であるにも関わらず、男の目は真剣そのもので声色には一部の揺らぎもない。

もしもこの言葉が本心からのものでないとすれば、彼はよほどの大嘘吐きか、狂い過ぎて一種の悟りを得たかのどちらかだろう。

ひとまず彼の言葉を信じるふりをして、退路を確保しながら注意深く彼の後を追いつつ、そして、私は真正銘の正義の味方になった。

ある時は未だ足取りの掴めない連続殺人犯を独自のルートで追いつつ、詰め、捕えた。

またある時はとある暴力団の親分に関する重大なスキャンダルをネタに強請をかけて、民間人に害が及ぶ行為の一切を止めさせた。

そこはある種必要悪的な側面も備えていた為に解体するには至らなかったのが少々心残りではあったが。

時には東京でのテロの情報を得て、それを未然に防いだこともあった。

そんな正義バカの私だけれど、時には休息も必要だ。

ここ数カ月、連日休みなしに働き続けていた私は、東京を離れて関西で2週間ほどの長期休暇を過ごすことにした。

ついでに幼少のころから正義の味方大好きっ子だった私は、行動だけではなく形から入ってみる事にも怠りなかった。

たとえば幼稚園児の頃から戦隊もののフード付きのパジャマを愛用していたのを、女の子向けのアイテムには目もくれない私を見て母が嘆いていたのを、今でもよく覚えている。

それが高じてと言って良いのかは分からないけれど、正義の味方を本職とするようになってからは正義の味方でない自分を演じる為の手段としてコスプレを嗜むようになっていた。

とは言え、ある程度隠密性を求められる立場にある以上、ネットで公開という訳には行かないので日頃コスプレを他の誰かに見てもらう機会を得るのはなかなか難しい。

普段着ない服を着るだけでも楽しいと言えば楽しいのだけれど、慣れて来るとどうしても誰かに見てもらいたいという願望が首をもたげてくる。

しかし、知り合いに見られるのはやっぱりちょっと気恥ずかしい……。

と妙なところで平凡な思考を経た私は「旅の恥はかき捨て」という先人の偉大な名言（どつちかと言うと迷言か？）に従って、大阪は日本橋で開催されるコスプレイベントへと足を運ぶ事にした。

今日の為の卸した新しい衣装はYuiyuiのコスチューム。

最初は別の会社のヴォーカロボット、廻音リユカにしようかと考えていたのだけれど、こっちのキャラの会社の本社が大阪にあった事を思い出したのが決め手になった。

イベントを言い訳に少し早めに着替え、初めての衣装で街を歩く。時折、道行く人が私を見て振り返る。それがこそばゆくも心地良い。

道中でちょっとやり過ぎな感もある怪我上等のコントをしている中学生くらいのカップルの横を通り過ぎ、時間を潰す為に適当なワ

ツクに入る。

電気街、オタク街といったイメージに反して意外にこの街は飲食店の多い。探せば良い店なんて幾らでもあるのにわざわざワックでお茶を濁す自分に思わず苦笑してしまう。

アーリーを弄りながら……正確にはアーリーを弄るふりをしながら店内を見回す。

私に向けて、主に男性から熱い視線が注がれているらしい。

仕事柄、視線に対して人一倍敏感な私に限って自意識過剰と言う事はないだろう。

視線は主に私の太ももに集中しているようだ。

確認の意味も兼ねて、組んだ足を組みかえてみる。衆目は私の予想を裏切らず、その動きに確かな反応を示した。

あくまでも気取られないように表面上は平静を装うものの、内心は面白いやら嬉しいやら恥ずかしいやらで思わず叫んでしまいたいそうだ。

と、そんな昂揚感に冷や水をぶっかけるようにポケットの中のケータイが耳障りな音を奏でる。これまた内心の忌々しさを包み隠したまま液晶を眺めた。

表示されていたのは私をこの世界へと誘った、上司の名前。

それが意味するところを即座に察した私は急いで店を後にし、人通りの少ない裏通りで電話に出た。

「はい、ハルヒです。珍しいですね、オフの時に電話だなんて」

『ああ、休暇中にすまない。26の案件で、そっちで動きがありそうなんだ』

「そうですか。じゃあ、後で調べておきます」

本題となるやり取りを5秒ほどで済ませ、後は1分ほど他愛のないやり取りを交わし、電話を切った。

快晴ではあるものの、両側に建つビルの影と電線によって薄暗く

見える空を見上げてため息を一つ。

26の案件。私の所属する組織が現在抱えている厄介事の中でも特に重要なものだ。

内容は簡単に言ってしまうえば新天寺社がらみ。ここ数年で急激かつ急速に勢力を拡大し、時にはもう一つの国家とまで言われるようになった謎の新興企業。

ゲーム機を利用して瞬く間に独自のネットワークシステム“ニューロン”を築き上げ、更には短期間で通信販売・ネットバンクなど様々な業種・企業を取り込み気がつけば日本国内で使用される円の1割超がニューロンを介して、つまりいったん新天寺社独自の電子マネーに交換される形で行われるに至っている。

にもかかわらず、出来て間もないシステムは尋常でない肥大化にいともたやすく適応し、殆どトラブルを起こすことなく、その実績も含めて人々に受け入れられた。

果たしてノウハウのない新興企業にそんな事が可能なのか？ こんな前代未聞の成長、よほど優秀なブレーンが居たとしても、物理的に追いつけないのではないか？

あまりの躍進にそんな疑問を抱く人が現れるのは無理からぬことだろう。そう言った人は私達に仕事を持つてくる人達の中にもやはり存在し、調査を進めていくうちに、数多のマスコミや組織をして“謎の”と言わしめる新天寺社の死角の無さと、それ故のきな臭さが浮き彫りになった。

その死角のない新天寺社の、いつ切れるかも分からない尻尾をようやく掴めるかも知れない。それが26の案件の詳細だった。

なるほど、日頃から公私の区別はしっかりしている彼が思わず私に電話を寄こすのも無理からぬ話だった。

「さて、頑張りますか！」

気持ち仕事をモードに切り替え、意気揚々と表通りに戻って行っ

た。

私の名前は本橋 春日。

趣味はコスプレで。

そして職業は 正義の味方だ。

3話 『これから正義の話をしよっ』というタイトルを見た時、ソフト

初の秋一以外のキャラ視点。

今後もちよくちよく別キャラ視点の話があるかと思っています。

4話 用件を聞いた後で女子の無茶ぶりから逃れようとすると非難轟々だから

「色々突っ込みたいところはあるが、とりあえず名を名乗れ」

と、突っ込みの平手を見事にすかした俺が取り繕うように発した言葉がコレだった。

周囲から変な目で見られないよう、ちゃんと大通りから一本裏に入って人目に付きにくい場所に移動している当たり我ながら妙に冷静だと言わざるを得ない。

『あ、それもそうね。 アタシは中野 夏芽よ、ヨロシク』
「はあ……」

確かに名を名乗れと言ったが、本当にそのままの反応を返されるとは……。

見ず知らずの相手に突然声を掛けられた上にそいつが妙になれなれしかつた時に暗に失礼だろという注意だとか、お前に対して警戒しているぞという意思表示の為に発せられているものであって、名前を知る事がその言葉の核心ではないのだが。

が、どうやら目の前のAR少女はその事を理解していないようだ。二次元（体積が存在しない）だから多少おバカなのは仕方がないのかも知れないが、何とも面倒くさい。

『なんか今失礼なこと考えなかった？』

「モノローグでも表示されてたか？」

『そんな訳ないでしょ、ゲームじゃないんだから』

呆れた、とばかりに肩をすくめてみせた。

俺の胸中の「お前、その格好で言うなよ」という突っ込みには一

切反応しない辺り、どうやら本当にモノローグは見えていないようだ。

『で、アンタは？』

「は？」

『は？ じゃないでしょ。 アンタの名前は、って聞いているの。』

まさか人に名乗らせておいてそっちは秘密です、なんて言うんじゃないでしょうね？』

睨みつけるような挑戦的な目線で俺を指差し、さあ早く名乗れとあごをしゃくる。

そんな仕草を音々ちゃんの姿を借りてやっているの違和感が凄まじい。

「ああ、悪い悪い。 俺は羽原 秋一だ、よろしく」

と、手を差し出す。 夏芽はそれを握ろうとするものの、彼女の手は少しばかり俺の手にめり込んでしまった。

分かりきっていた事だが、握られている感触は全くなかった。 何となく、夏芽の手がすりぬけた後の手をじっと見る。

「……本当に実体がないんだな」

『実体はあるわよ。 今、ここにないだけ』

「って事は本体はどこかで昏睡状態だったりするの？」

『ご明察。 意外と鋭いわね』

鋭いも何も、漫画のお約束を思い付きで口走ってみただけだけど、本体が昏睡状態で幽体離脱して誰かに憑依して密かにリターンしてみたり、好きな人の右手になっしてみたり。

「それで、夏芽だけ？ 君は俺に何をして欲しいんだ？」
『それは……』

一旦口を開くも、何かに気付いたように言い淀む夏芽。
そうして俺の様子を伺いながら口ごもっている彼女を眺めつつ、
なるべく表情に出さないように気をつけながらも、考える。

常識的に考えれば分かる事だが、彼女はあまりにも普通じゃない。
幽体離脱だか超能力だか生き霊だか知らないが、とにかく存在自
体が超常現象である。

この点に関しては残念ながら程度の差こそあれ一種の超能力者で
ある俺がとやかく言う筋合いはないだろう。

問題はその次だ。その超能力者がわざわざ自らの超能力を駆使
して助けを求めている。

しかも、本人の話によると本体は絶賛昏睡中。

これまた漫画や映画のお約束、飛躍しすぎた妄想に過ぎないのだ
が

「君が昏倒するに至った出来事に大なり小なり関わってくる、どっ
かの超能力を研究する悪の秘密結社の陰謀を阻止してくれ……とか
言うんじゃないだろうな？」

『ほぼ正解よ』

……マジかよ。

未だに脳みそが思春期から抜けきらないようなお年頃の少年少女
や陰謀論者の毒電波と同レベルという現実の安っぱさに思わず頭を
抱えそうになった。

『と言っても、何もその秘密結社を壊滅させてくれなんて言ってる
訳じゃないわよ』

「当たり前だ」

『……そこまで当てられたんならもう隠す必要ないかも、ね?』
「そこで可愛らしく首を傾げられても同意しかねる」

隠している内容が分からないし。
まあ、可愛いのは大いに結構なのだが。

「とにかく、早く本題に入ってくれ。 でないと何の判断も出来ない」

『そうね。 アタシとのやり取りを盗み聞きするのは不可能みたいだし、いざとなれば聴かなかった事にすれば済みそうだし。 分かっただわ、あと3分だけ待ってちょうだい』

そう告げた彼女は不愉快そうに空を見上げた。 つられて早春の空へと視線を向ける。

彼女が睨むように見つめるその先には雲ひとつない青空が広がっている。

ビルと電線に遮られてはいるものの、それでも広く、澄み渡った空だ。

「なあ、一体何が起きるって言うんだよ」
『見れば分かるわ、きつと』

きつとって何だよ、いい加減だな。 そう口にしよつとした瞬間、確かに俺は思い知らされた。

まず始めに、街の景色が塗り替えられた。
見慣れたでんでんタウンの風景が一瞬にしてどこか異国の、建造物の雰囲気から察するに西欧の長い歴史を持つ街へと変貌を遂げる。
驚き、戸惑いながら様相の一変した街を見まわす俺の頭上に、巨大な影が差す。

再び見上げた空には、ちょっとした高層建造物をひっくり返した

ような、流線形の物体が浮かんで　　と言っか、こちらめがけて落ちて来ていた。

ARだと理解しつつも逃げなければと警鐘を鳴らす本能。常軌を逸した事態にショートする理性。結果、俺はぼかんと口を開けたまま落下する巨大建造物の行く末を見守り続ける羽目になった。

それから2秒ほどして、ようやく我に返って右目を瞑れば良いだけだと気付いた時には視界が真っ赤に染まっていた。

我ながら要領を得ない情景描写だとは思っが、そうとしか説明しようがないのだから仕方ない。

あまりにも鮮烈で強烈な赤、赤、赤。

現実の出来事でないにもかかわらず、その色彩だけで皮膚が熱を帯びるような錯覚を覚えるほどだ。

現実であればそれらの内のどれか一つとして認識する暇もなく消し炭になっていただろう。

そう確信出来る程の圧倒的な迫力を伴っていて、熱はなくとも、その強烈な閃光を焼き付けられた右目が痛む。

耐えきれなくなった俺は手で右目を覆い隠して、その場に膝をついた。

「なんなんだよ、これ……」

『その言葉に対する説明は何通りかあるわ。アナタがそのまま何も見なかった事にするんならARで映し出された映像と説明して終わっておくべきなんでしょうね』

「……っ」

返す言葉が思い浮かばない。

何とも言い難い気持ち悪さと、ろくでもないことを知ってしまった恐怖から嫌な汗が噴き出してくるのを問答無用に実感させられる。彼女の言う通り、このまま何も見なかった事にしてしまうのがきつと賢明なのだろう。

右目から手を離すや否や飛び込んできたARの死体の山（と言っても多くは今や影だけだが）と廃墟となった景色がその想いの正しさを証明している。

けれど

「いや、やつぱりちゃんと説明してくれ。それと君の頼みについても。最終的な判断はそれからでも遅くないだろ？」

『……そうね。それじゃあ、何から話せば良いかしら？』

「まずはさっきの映像についてだ。アレはアーリーの、ARの映像だよな？」

『その通りよ。アナタも知ってると思うけどアーリーはあつちこつちに設置された基地に加えてアーリー同士でネットワークを繋ぐ事で地下街みたいな電波の届きにくい場所でもネットワークに接続できる』

彼女の話は要するにニューロンの説明だった。

インターネットのようなものだが、丸ごと新天寺社の独自規格、つまりアメリカで誕生し、今や世界を席卷しているネットワークシステムの文脈から完全に独立している上に、電波とゲーム機を利用する事で極めて低いコストで作り上げられたネットワーク。

それが、アーリーが全く新しいインフラと呼ばれる一番の要因でもある。

もつとも、電波に依存するところが大きいが故にどうしてもアーリー間の距離が開きがちな田舎ではそのパフォーマンスを存分に発揮出来ない等の弱みはあるのだが。

『で、その機体同士のネットワークと演算処理の為に結構なメモリを消費しているから同世代の他のゲーム機に比べて性能が低い』

「ああ。それでメモリの一部を貸し出す謝礼として基本報酬の1000円が約束されているんだよな」

ちなみにこの基本報酬、いつ届くかは月の最後の10日の間と酷く曖昧だったりする。

その上、電源を切っている最中に送られてきた場合にはその報酬を受け取れない。なおかつ後払いはお断り。アーリーを最初に起動した際にそんな契約に同意させられる。

とは言え、スリープ状態であつても電源さえ入っていれば受け取れるから、大した問題にはならないのだけど。

『でも、その消費しているメモリってニューロンの構築や維持のためには明らかに多過ぎるのよ。本当にその目的だけに使えば今の二割もいらないわ』

「それはたまに聞くな」

もつとも、ソースは主にネットとかだけど。

それだけなら完全に都市伝説の部類として一笑に伏してお終いである。

ただ、千里も同じようなことを言っていたからある程度の真実は含まれているのだろうとは思っていたのだけれど。

「で、その話はさっきの映像の説明にかかって来るんだよね？」

『もちろんよ』

その一言で余計な分の使途が何となく予測できてしまった。

「まさかとは思うけど、その過剰な8割を束ねたネットワークを超強力なスパコンとして貸し出している、なんて言うんじゃないだろうな？」

『本当に鋭いわね。ちなみに、今日フトモンの大会がここで開かれるのもより高性能なスパコンを調達するためね。ストフェスと合わせてこのエリアにある数十万台のアーリーが集中しているわ。』

勿論、いざとなれば基地そのものや基地を経由して遠隔地のアーリーを動員することだって可能よ。他のアーリーを経由する分余分な要領を消費する事になるけど」

「で、どのくらいの演算能力になるんだ」

『今、この周辺にあるアーリーの合算？ それとも日本中のアーリーを総動員した場合？』

「この周辺で」

『1台当たり180で、今この辺りにあるアーリーの総数を50万と仮定して、基地のコンピュータも含めて考えると……ざっと20ペタフロ？』

「基地のコンピュータとやらもさり気なくスパコンレベルか……って、この辺一体だけで50万台もあるのかよ」

『で、日本中のアーリーの演算能力を結集すると基地も含めてエクスの大台に突入するわ』

あまりの単位に驚くよりも呆れ返り、思わずため息が漏れる。

まるでヨタ、いや与太話を聞いているようなそんな気分になってきた。

しかし、そのジャンプ漫画ばりにインフレした単位の真偽がどうあれ、その凄まじい演算能力とARで培われた映像技術をろくでもない事に転用している不屈きものがあるという事実は変わらない。

『もう気付いているでしょ？ その演算能力を誰が売って、誰が買っているのかも』

売っているのは新天寺社だ。これだけ大掛かりな仕様とあつては一部のものの暴走とは考えにくい。アーリーを発表するそのずっと昔から、こういう裏の稼業を視野に入れて事業を展開し続けていたのだろつ。

そして、買っているのは先の巨大建造物のようなもの　今まで

に実物を見た事はないが恐らくミサイルだろう。 に関する情報が必要とするような連中だ。 そんな勢力、国家を置いて他には存在しない。 さも無ければ大国を相手取って戦うテロリストか、世界を裏で牛耳る秘密結社の構成員の死の商人とか、そういった現実ではなるべくお目にかかりたくない類のろくでもない連中だろう。

ついでに言うならばあのミサイルの爆発。 あれは尋常の兵器のそれとはとてもじゃないが思えない。 全く根拠のない推論、いや妄想に近いがアレはきつと核兵器だ。

「ふざけたシミュレーションのための道具の管理を知らない内にさせられてたつて訳か」

『そうね。 で、その見返りが1000円から電子マネー』

アーリーは結構高価で、発売から数年経った今でも3万近くする。 充電にかかる電気代、新作や有料のアプリにかかるコストを考えれば、投資分を回収できる人は思いのほか少ない。

それに加えて宇宙、大気圏内、水中、地下とあらゆる空間で禁止されている核実験が未だ禁止されていない仮想空間を提供する事での多額の見返り。

それが、最低金額で考えても年間千億単位という狂気じみた電子マネー供給のからくりなのだろう。

個人の思想も信条もあつたもんじゃない。

「確かに知らない方が幸せな部類の事実だな……」

『でしょう？ 声をかけておいてこんな事言うのもなんだけど、何も見なかった事にしただって別に恨みはしないわ』

最初の態度からは想像もつかない言葉だった。

あの時は彼女も相当切羽詰まっていた、といったところだろうか。

……何にしても、俺の心はとっくに決まっているのだが。

「で、結局のところ君の望みはなんなんだ？」

『聞いて、くれるの？』

「どうするかは聞いてから決めるけどな」

俺の言葉に驚きを隠せないと言った様子を見せる夏芽。

パチパチと2度まばたきをして、今にも泣き出しそうな表情を浮かべた。

それからどこか凜々しい雰囲気を纏った顔立ちには少し似合わない柔らかな笑みを浮かべたまま、深呼吸をひとつ。

ゆっくりと、これから話す内容を吟味しているかのように口を開いた。

それはARの中に閉じ込められた少女の、日本屈指のリーディングカンパニーの裏の顔を知る少女の、あまりにもささやかな願いだつた。

『……兄さんを、止めて欲しいの』

4話 用件を聞いた後で女子の無茶ぶりから逃れようとする**と非難轟々だから**

“京”の性能やムーアの法則を踏まえると近未来が舞台の作品で2

0ペタは正直ポンコツかもしれない

5話 世界征服を目論む悪役連中は征服後は世界各地で反乱分子を生み出さない

「……はい」

『報告をお願い致します』

「10時のシミュレーションは無事完了。現時刻の周辺の演算能力は14程度。午後から開かれるフトモンの大会とストフェスに向けて徐々に人が集まってきているので、ピーク時には20を超えるものと思われます」

『そうですか。では、引き続き監視を継続して下さい』

受話器の向こうで電話の切れる音がした。

……全く、あの愛想も可愛げもない機械音声はどうにかならないものか。

もつとも、そんな下らないものをこの仕事に求めて就いた訳ではないのだけれど。

まだ少し寒い春の日本橋。

つい先ほど仮想世界でミサイルが飛んできた方角を眺めながらため息をひとつ。

ボクは新天寺社の裏側に所属する人間だ。今や世界中に爆発的な広がりを見せている奇跡の携帯ゲーム機、Another Religion。

拡張現実を意味するAugmented Realityとこじつけて、少し無理のある感じに「もう一つの世界」の名を与えられたこのマシンには文字通り二つの顔があった。

一つは全く新しい形の娯楽と便利を提供するツールとしての側面。ブログの記事、新天寺社の運営する各種SNSコミュニティや動画サイト、通販などの情報を複雑に、しかしユーザーの目にはシンプルにリンクさせ、それらの情報をアーリーに蓄積、ユーザーが各

種サイトにアクセスする度にその情報が新天寺社のサーバに送られ、パーソナルデータが更新される。

それらのサービスを日常的に利用している人であれば、新天寺社は本人よりも緻密に、正確に本人の好みを把握し、欲するであろうものを提供してくれる。

その他にも有料・無料を問わず存在する多種多様なアプリ。それらも活用して、たとえば自分用の日記や家計簿を自動でつけることだって可能。

そういった有用なアプリの中には学校や病院などの公共の機関と提携し、共同開発されたものも多数存在する。

人工衛星を所持する組織と手を組んで、AR機能を活用した最新のGPSもまたそれらの内の一つだと言えるだろう。

言うまでもないことだが、それらの情報も新天寺社は無断で集積し、利用し続けている。ステークホルダーへの誠意なんてものは微塵も持ち合わせていない。

更に悪質なものになると実は機能を立ち上げていなくとも、スリプ状態であっても一部の機能が自動でオンになって情報収集を行っているものもあり（勿論、ユーザーの目にはオフに見えるように偽装されている）、カメラ機能もその一つである。これによって無警戒にアーリーを持ち歩き、仮想世界を見るためにアーリーを開く度に自動的に周辺の風景を収集する。なんて機能もある。

当然、ユーザーがその機能を意識して使った際に集めた情報もしっかり送られてくる。

数千万の目が勝手に日本中を歩き回って膨大な風景を切り取り、基地などから割り出せる位置情報と抱き合わせて持ち主の活動をほぼ完全に把握。

同時にその土地に関する情報を更新する、というものだ。利用方法は幾つか思い当たるが、新天寺社が何を思っこんな機能を実装したのかはボクも知らない。

こうして合法・非合法や同意の有無を問わず、消費行動、学力、病歴、位置情報などの膨大なデータが集められ　そして、それらはアーリーの、ひいては新天寺社も一つの顔へと流用される。

ボクは一度たりとも会った事はないが、新天寺社を本当の意味で牛耳る連中の理想　世界征服、へと。

字面だけ見れば頭の悪いフィクションそのものでしかない。

しかし、彼らはその途方もない妄想を

”万人が新天寺社の各種サービスによる本人よりも本人の好むものを探し出し、提供してくれる環境を肯定している状況”

”万人とはアーリーユーザーの8割超と仮定し、ユーザー総数国内で1億を経て、世界全体で10億をひとまずの目標とする”

”環境を肯定しているか否かは各人のパーソナルデータやレビューを加味し、専門家に分析を行わせて判別する”

”専門家は厳密な判定を行える、新天寺社及びその関連企業に属さない第三者とする”

といった具合に、どのような状態を世界征服完了とみなすかを一言一句細かく定義しながら、実現可能な目標として見据えているらしい。

そして、少なくとも曲がりなりにも先進国の一つであり、世界有数の経済大国にニューヨークという新しいインフラを生み出すに至った。国民の自覚の有無はどうあれ、もはやこの国は国家と企業の二つの軸のせめぎ合いによって機能していると言っても過言ではない。

彼らは子供向けの特撮番組の悪役ではない。ただ支配して蹂躪したい、搾取したいなどといった軽薄な欲望を御せない程愚かでもないし、そもそもそんな利己的な目的で突き進む程幼くもない。

あくまでも大衆の幸福の為に。大衆と一緒に幸せになれるのが

自分達である為に。 自分達の愛に確実に人々が報いてくれる社会を築くために。

そんな普通に暮らしている一般人には何の問題もない、ある意味では崇高でさえある野心を胸に動いている。

新天寺社が人々の暮らしを支え、考え得る最高の幸福を。

人々は様々なサービスの恩恵を受け、その対価を支払う事で新天寺社に利益を。

利益はそのサイクルに加わらない人にも巡り巡って還元される。

三方よしを体現したかのような商人の理念に何一つとしてやましい所はない。

新天寺社は今日もユーザーに素敵な出会いを、楽しみを振りまいてゆく。

子どもたちに学ぶ機会を、より楽しく学ぶ手段を与える為の工夫を繰り返す。

世界中の全ての人を新天寺社の手によって幸せにしよう……そんな純粋な願いの為に。

もつとも、ボクにとってはそんな事はどうでも良いのだけれど。

6話 不意に視線を感じて虚空に「貴様、見ているな！」と指差したのを家族に

「兄さん、だつて?」

『そう、兄さん。兄さんは小さい頃に親を亡くした私のたった一人の家族なの』

「そうか……」

その説明と、さっきの映像をわざわざ俺に見せた理由を考えればおおよその事情は把握できた。

新天寺社の裏の顔と彼女の願い。その二つを繋ぐものがあるとすればこうだ。

寝たきりの彼女の入院費を賄うために、彼女の兄が新天寺社の裏側に所属している。

情報漏洩の許されない仕事である以上、そこに属する者にはしっかりと首輪をつけておかなければならない。

唯一の肉親が寝たきりで、莫大な金銭が必要になる。よほど関係が険悪でもない限り、これに勝る抑止力は存在しないだろう。

で、夏芽としてはたとえ自分のためでもそういう汚れ仕事をして欲しくない、と。

「……一応確認しておくけど、君の名前は中野 夏芽だよな?」

『ええ、そうよ。それがどうかしたの?』

「君と君のお兄さんの名字が違う理由は? あと、君の兄さんは新天寺社の裏側に関与している。それで間違いないね?」

その一言で、彼女の瞳が驚愕によって大きく見開かれた。

もともとが萌え萌えしい絵なので目は最初からバカでかいのだけれど。

『兄さんを知ってるの?!』
「知ってるって程のものではないけど。多分、さっきワクドで見かけた」

夏芽は俺が次の言葉を紡ぐのを固唾を飲んで見守る。
その表情はあまりにも真剣そのもので、つられて俺の表情も硬くなる。

そして、夏芽の兄と思しき人物の名を、ワクド内で見た光景を思い返しながら口にした。

「確か、大須 冬彦って」

『間違いないわ! 兄さんよっ!!』

やっぱり。

その知名度と影響力に反して比較的新しい企業である新天寺社の社員数は少なく、俺の知る限りでは大阪に、というか東京の本社以外に支社があるなんて話は聞いた事がない。

急激な拡大にサービスマンやシステムが対応している事を考えると、何とも理不尽かつ不自然な話ではあるが。

「よし、行こう。まだワクドにいるかも知れない」

『……ありがとう』

素直に礼を述べる夏芽。その態度に少し居心地の悪さを覚えた。実のところ、彼女の兄がまだワクドにいるとは思っていない。

ただ、それ以外にめぼしい場所がないからワクドが拳がっただけだ。そう考える理由は至って簡単。まだ、俺の視界に例のプロフィールが映っているから。

最初は訳が分からず困惑するばかりだったが、夏芽の話を聞いた今ならこれらが何を意味するのか、何故こんなものが見えるのかも

容易に想像がつく。

これは新天寺社の、裏側の仕事に携わる人間のみが閲覧可能な、新天寺社に関わりを持つあらゆる組織から集められた情報だ。

そして、俺の目にコレが映っているのは夏芽の兄、大須 冬彦のアーリーの情報の優先順位が高かったからだろう。

未だにプロフィールが視界に入りこんでくると言うのは即ち、大須 冬彦は俺が情報を受信できる範囲内にいる、という事だ。

もしかすると千里とのやり取りを盗み聞きされたのかもしれない。もしかすると俺と夏芽のやり取りが 仮に不気味な独り言に見えたとしても 監視されていたかもしれない。最悪の場合、俺の目の事を知って、尾行している可能性だつてある。

もしも、この目の事を知ってしまったと仮定して、大須 冬彦はどうするだろうか。

ただの与太話だと思つて聞き流すだろうか？

希望的観測ではある。 が、こんな非常識な目の存在をはいそつですかと素直に信じる奴なんて滅多にいない。 よほど俺の事を信用してくれている人は例外として。

ただ、俺はワクド内でフトモンを肉眼で探し当てているし、千里との会話もある。

そして何より、彼の妹もまた非常識な能力を有している。

もしも、夏芽が意識を失う以前からこの能力を持っていて、そのことを周囲に伝えていたとしたら。 少なくとも唯一の肉親である兄にまで黙っていたとは考えにくい。

よつて、この可能性は現実的ではあるが現状に即してはいない。

何より未だに俺の目にプロフィールが映っている事の説明として、たまたま近くにいるはあまりにも不自然だ。

ワクドで目の話を聞いて、俺に興味を持ったと考えるのがまあ、妥当だろう。 それで俺を尾行して、一体何をするつもりなのかはあまり考えたくないが。

さて、どうしたものかな？

「なあ、夏芽。君の本体はどこにある？」

『愛千橋病院だけど、それが何？』

「やっぱりこの辺にあったか。短期決着を狙うなら君の兄貴を説得するのに一番適した場所はそこだろうな、と思っただよ」

適当な信号を渡り、更に奥の通りへと進んでゆく。

愛千橋病院。 ”人間LOVE！隣人LOVE！”を基本理念として標榜する総合病院としては平均的な規模の病院。ここからなら歩いて10分とかわらずに到着する程度の距離だ。

「で、病室はどこ？」

『……分からないわ。でも、そんなの受付で聞けばいいじゃない？』

「教えてくれるならな。病室を知っている事をアピール出来れば勝手に知り合いだと思ってくれるかもしれないだろ？」

人の目を盗んでこそそこそこ病室に行くよりは後々面倒事が少ないだろう。

もつとも、病室で彼女の兄貴に騒がれたらどうにもならないけど。

「となると、あの手で行くか」

一旦表通りへと戻って信号を渡り、反対側の通りの裏通りへ。あつという間に病院に到着した俺は小走りで受付へと向かった。

「すみません、中野 夏芽の病室はどこですか？！」

「はあ、その方とはどういったご関係ですか？」

笑顔で、しかし胡散臭そうな視線を向ける若いナース。

その態度も質問も彼女の立場を考えれば至極当然のものだろう。

「俺は夏芽の弟で、大須 秋雄って言います！」

「大須……？」

ナースは首を傾げた。あの短い文章で食い違っているのだから当然と言えば当然か。

しかし、同時にあまりにも堂々と間違っているからこそ、その間違いの背景を想像してしまい詳細を尋ねにくい、といった困惑の色が徐々に強くなる。

「おや、夏芽ちゃんの知り合いかい？」

そんな彼女に助け船を出すように声をかけてきたのは初老くらいの医師。

助け船を出しているようで、患者の在不在という形で情報を漏らしてしまっているが。

この辺の情報に対する意識というのはある程度年を食った人の方が希薄だ。

という事で、ターゲットをナースから医師へと切り替える。

「はい、大須 秋雄です。兄貴の用事に無理矢理ついて来たついでに見舞いに来ました。多分、兄貴も後から来ると思います」

「ふむ……」

初老の医師は下あごに手を当てて二度ほど頷く。彼なりに俺の言葉を吟味しているのだろう。

中野 夏芽を知っている。大須姓を名乗っている。名前に季節が入っている。

だからと言って、何一つとして身内である事を証明するに足る要

素はない。

そもそも、この医師が夏芽の家族構成をどの程度知っているかも分からない。が……

「彼女なら1007号室だよ」

幸いにも俺の話の信じてくれたようだ。

医師にお辞儀をしてから早足でエレベータへと向かう。

ボタンを押し、エレベータが降りて来るまでじっと待つ。

『よくもまあ、とっさにあんなウソが飛び出るもんね』

「大したもんだろ？」

『確かに凄いけど、犯罪も良いところじゃないの？』

「必要悪と言ってくれ。っと、来た来た」

エレベータに飛乗り込み、10階のボタンを押した。

ドアが閉まる。わずかに揺れた後に、静かに上昇を始める。

「そう言えば。さつきは何か濁して誤魔化したけど、君は何歳なんだ？」

『今年で17歳。順調に進学出来ていたら4月で高校2年生、の筈だったんだけどね』

「……そっか、俺より1つ年上なんだな」

俺の目にしか映らない彼女の表情に少しだけ翳が差す。

失言だった、とは思わないがそれでも何となく申し訳ない気持ちにさせられた。

何とも居心地が悪い。

『って、アナタ中3なの？』

「そうだけど？」

『とてもそうは見えないわ』

「老け顔のつもりはないんだけどなあ……」

『見た目の事じゃなくて。見た目もちよつと大人っぽい気はするけど。状況に対する対応とか見ると20歳以上って言われても驚かないくらいの感じだったら、もつと大人だと思つてたわ。あ、流石に本当に20歳以上だとは思つてないわよ』

夏芽がそう言い終えるのが早いか、エレベータが10階に到着した。

フロアマップに目を通し、階の端にあるエレベータホールから1007号室へと歩を進める。

「そう言えば、夏芽は自分の姿つて認識できるのか？　と云うか、そもそもどうやって俺の姿や視線や声を認識しているんだ？」

リノリウムの廊下を歩きながら、そんな事を尋ねてみる。

まあ、視線を認識する機能に関しては夏芽に限らず、あのプロファイナルなんかに備わっていたものではあるのだけれど。

一方で、音声に関するあれこれは未だかつて経験した事のないものだった。

考え出すと止まらなくなりそうなのであまり深くは考えないが、こうして普通に会話しているのも実は色々と不自然だ。

『アナタに関係する要素はなんて云うか例外みたいなものだと思う。だから、理屈を求められても見えるから、聞こえるから、感じるからとしか言えないわよ。それ以外の現実の世界の情報になるとARカメラ越しにしか見えないんだけどね。だから私自身の姿は見えないわ。それも映像じゃなくてデータを分析してその内容から想像する形。　　というか、何かしていないと見える見えないすら

見えていないって感じだったわ』

と、淡々と語る夏芽。

しかし、自分の姿を知る術がないと言った時の彼女の瞳は憂いを帯びていた。

データを分析する、と言つのがどういふ事なのかは俺には分からない。何をどんな風に想像するのかなんて皆目見当もつかない。

が、彼女が俺に出会うまで誰かにその姿を認めてもらえなかった事を思えば、ARのカメラ越しに彼女自身を見る事が出来ないのは当然である。

そして、その当然によって彼女は孤独な世界へと閉じ込められていた。

ARゆえの、アニメ絵ゆえの感情の分かり易さが、彼女のその苦しみを明瞭に伝えてくれる。

「……自分の姿が見えないってのは不安じゃないのか？ そもそも、カメラ越しの世界しか見えないってのは殆ど何も見えないようなもんじゃないか」

『凄く不安に決まってるじゃない。自分でも自分がどこにいるのか分からなくなることがあったり、私の中から私って意識が少しずつ希薄になっていくような、そんな錯覚を覚えた事もあったわ』

とてもじゃないが、想像すら出来ない世界だった。

無明の闇ですらない限りなく無に近い世界で、何も見えず、何も聞こえず、自分すらもやがてその無に溶けてゆく。

想像する限りでは、それは恐怖以外の何者でもないだろう。もつとも、そうなった時には恐怖するだけの思考能力さえ残されていないのかも知れないが。

よくもまあ、そんな状況にあつて実兄の心配など出来たものだ。

そんな事を考えているうちに俺達は1007号室の前に到着した。

何も見えない状況でどうやって新天寺社の裏側に気付いたのか、そこに自分の兄が属していると知ったのか。他にもいくつか聞きたい事はあったけれど、どれも個人的な興味・関心の範囲を出ない程度の瑣末な疑問だ。

今はやるべき事をに集中しようと思余計な考えを振り払って、病室のドアを開けた。

7話 寝ている女子の放屁で夢から覚める少年たちに告ぐ、むしろそれが良いよ

「うーん……まさしく眠り姫って感じだな」

それがベッドで目を閉じたまま微動だにしない少女を見た時、真
っ先に浮かんだ感想だった。

長らく使われていない四肢は痩せ細っており、もしも今日目を覚ま
したとしてもまともに動けないだろう事は容易に想像できる。

痩せこけた少女の顔は不相応に肉が少なく、不健康もいいところ
だった。 が、それでもなお思わず見とれてしまいそうな程に美し
かった。

長く伸びた絹のように艶やかで繊細な黒髪。 手入れをしている
訳でもないのに形の整ったまゆ毛。 閉じられた瞼から伸びるまつ
毛は豊かで長い。 鼻筋は良く通っており、更に視線を下へやると
形の良い唇が微かに寝息を立てている。 どうやら呼吸器の類は使
用していないらしい。

「って、この子が本当に夏芽なのかよ？」

『どういう意味よ、それ？』

「いやだって、なあ？」

もつと男勝りで勝ち気そうな資格好をイメージをしていただけに
これには面食らった。

このかぐや姫もかくやの（と言ってもかぐや姫の実物を見た事は
ないが）少女が口を開くとこっちのAR少女みたいな感じになるの
かと思うと……とても残念だ。

じつと彼女の寝顔を眺めていると彼女のプロフィールが浮かび上
がってきた。 さすがにそれをまじまじと見るような真似はしな
かったが、少女の名前が中野 夏芽である事だけはしっかりと確認さ

せてもらった……ああ、残念だ。

出来る事なら彼女が夏芽の本体だなんていうのはただの妄想で、この子は上品に微笑んで「ごきげんよう」とかそんな感じの挨拶をする深窓のお嬢様であって欲しかった。

別に夏芽の人柄が嫌いなわけでは断じてない。が、それを彼女の中につっ込むのはどうしても違和感が拭いきれない。ギャップ萌えならぬギャップ萎え。

身勝手と言われればまさしくその通りではあるのだが、それでも夢は夢として夢のままに胸の中に留めておきたいのが人情なのだから仕方ない！

『だってなあ、なんて言われても分からないわよ。そもそも自分の顔なんてしばらく見てないんだから』

「それもそうか。まあ、アレだ。悪戯するなら今のうちかな、と思える程度には美人だ」

『ほっほう。さすがはアタシね』

でんでんタウンのイメージキャラクターの姿を借りた少女が妙に得意気な表情で頷く。

……やっぱりなんか違う。

『でも、変なことしちゃダメよ！』

「額に肉って書いてやるぜ……とかか？」

『悪戯ってそういう！?』

「そういうって、他にどんな悪戯があるってんだよ？」

『そ、それは……』

少し大きさにたじろく夏芽。

徐々に顔が赤くなっていくのが面白くも可愛らしい。

すると舌の根も乾かぬうちにこういう方向性ならあの子の中身で

も良いかもとか思ってしまった辺り、俺はわりとどうしようもない類の人種なのかも知れない。

『でも美人って言ってたわよね？ 額に肉じゃ美人である事と悪戯の間に意味のある繋がりが見いだせないわ！』

「そりゃあれだ。 まっさらな壁を見ると落書きしたくなる心境」

『アタシは壁と同レベルか！？ そしてアンタはヤンキーか！？』

夏芽はうがーっと両手を掲げて威嚇するみたいに構える。

が、相手は二次元美少女のARなので威嚇されたってちっとも怖くない。

「それが嫌なら商店街のシャッターでも良いぞ？」

『せめて生き物にしなさいよ！？』

「んじゃ、よく小学校の校庭に紛れ込んだ眉毛犬」

『……はあ、もうそれでいいわよ』

夏芽は漫画みたいな横線一本の目になり、がっくりと肩を落とすた。

ああ、そうか。 ARだからこういう感情表現も出来るんだな。

なんてどうでも良いことに思わず感心した直後、こちらに向かつて近付いて来る足音が廊下に響いた。

「……夏芽、静かに」

口元に人差し指を押し当てた格好のまま、息を潜め、ドアに張り付けて耳をすませる。

遠くから反響して聞こえていた靴音が、徐々に大きくなってゆく。

カツン、カツンとリノリウムの床を叩く音はやがて、1007号室の前で止まった。

そう言えば小説なんかで病院の床材に使われているのが大概リリウムなのは何故だろうか？

脈絡もなく湧きあがったそんなアホみたいな疑問を脳の片隅に追いやり、

「なあ、中学生相手にこそこそする必要もないだろ？」

「……」

話し合いを持ちかけてみるも、全くの無反応。

警戒されているのか、相手にされていないだけなのか。ふむ、
となると……

「あんまりつれない反応するところのお嬢さんに悪戯しちゃうぜ？」

『オイコラ、ちょっと待て』

「はあ、人質だなんて悪い子ね。そういうのはお姉さんは感心しないわよ？」

安っぽい作戦ではあるが、効果はあったようだ。

足音の主はゆっくりとドアを開けて俺の前に姿を現した。

ただ、困った事に釣りあげる相手を間違ってしまったらしい。

俺の目の前に立っていたのは、露出の多いファッションと歩くたびに揺れる金色のエクステがひときわ目を引く、そしてそんな中々に敷居の高いコスプレを完璧に着こなす引き締まったボディのセクシーなお姉さまだった。

「……えーっと、ワクドぶりっすね？」

「あれ、私の尾行に気付いていたんじゃないの？」

「いえ、全く」

直後、彼女は「あー、やっちゃったー！」と頭を抱えてうずくま

った。

もつとも、「やつちやったー！」なのは俺も同じなのだが。すっげえ真面目な感じに、ちょっと格好つけて「中学生相手にこそこそする必要もないだろ？（キリッ）」とか言っというて別人でしただってどういうオチだよ。

しかも、それに応じた相手がレイヤーのおねーちゃんって……。穴があつたら入りたい心境って、こういう事を言うんだらうなあ。いや、むしろ私は穴になりたい、そんな心境だ。

「で、何で俺を尾行していたんです？」

間抜けな失敗の恥ずかしさなど微塵も表情に出さず、そう切り出した。

レイヤーの女性もちょうど良い助け舟、とばかりに立ち上がってその話題に乗る。

アーリーを所持していた筈だが、彼女のプロフィールは表示されていない。

大須 冬彦が俺の尾行を止めたからだろうか？ それとも彼女のアーリーが特別な仕様なのだろうか？ コスプレのせいで顔の認識がうまくいかないのだろうか？

とにかく理由は分からないし、そもそもどうやってこの目が、アプリが、個人を認識しているのかさえも知らないが、彼女の情報を覗き見る事は出来ない。

「私は……君のお友達の事を訊きたかったのよ」

「友達？ 誰の事ですか？」

「彼女さんだった？」

「いよいよもって誰の事だか」

ガールフレンド、だなんて全く心当たりがない。

……とは言わないが、思い当たる節をおいそれと話すほどボケてはいない。

「はあ、面倒くさい子ね……。分かったわ、はつきり言えばいいんでしょ？」

「はい、なんででしょう？」

訊かれたところで答えたくないものには答えないだろうけど。

「あなたがワックと一緒にいた女の子は北里 千里ちゃんよね？」

「……訊きたいのはそんなことですか？」

はつきり、と言いながら明らかに迂回している女性に訝しげな視線を送る。

相変わらず警戒されている事に気付いた彼女は少し困った風な笑みを浮かべ、所謂降参のポーズをとった。

「別に彼女に悪さしようって訳じゃないのよ？」

「人から何か訊き出そうとしている人が、なおかつ悪さしようとしている人は皆そう言います」

「うっ……」

「アナタはあいつの知り合いでも何でもありませんよ？ 生まれも育ちも大阪のあいつにワックなんて略称使う知り合いがそうそうもいるとは思えないです。仮に知り合いならこんな風に嗅ぎ回っている状況自体かなり不自然。大方、昔の大衆誌の記事であいつの顔を知って、偶然見かけたからミスター心で……ってところでですか？ もしもそうだとするならそんな輩に話す事なんて微塵もありませんし、それ以外だと胡散臭くてなおさら話せません」

まくし立てるように、一気に話した。

女性はぼかんと口を半開きにして、瞼をしばたたかせている。
対する俺は口を真一文字に結んだ不機嫌そうな表情でじつと睨み
合う。

「……分かったわ。 あなたの千里ちゃんへの愛に免じて大人しく
引き下がらせてもらおうよ」

やがて、Yuiyのコスプレをした女性が折れた。

再びドアを開けて廊下へと一歩踏み出した彼女は、去り際に一言、
こんな事を言い残した。

「もしも彼女が新天寺社と変な関わりを持っているようなら引き止
めてあげなさい」

言葉通りに受け止めるならば「千里を守ってやれ」という意味に
なるのだろうか。

しかし、同時に「よほどの意思がないなら千里に関わるな」と受
け取ることも出来るし、或いは「新天寺社に気をつける」という忠
告の可能性もある。

他にもそれらの複合、俺の反応から何かしらの情報を引き出す為
のトラップなんて可能性も考えられるか。

色々なケースを想定して、どれと断ずる事も出来そうにないと判
断した俺は、

「なぜ新天寺社なのか分かりませんが、悪い付き合いなら言われ
るまでもありません」

ひとまず適当にはぐらかすことにした。

7話 寝ている女子の放屁で夢から覚める少年たちに告ぐ、むしろそれが良いよ

千里に関しては追々

それはそれとして、任 堂カンファレンスのAR クさんが可愛過ぎて生きているのが辛い……

AR技術さえあれば手乗りミ さんが現実のものになるんですよ
あと【禁則事項です】とか【放送禁止です】とか【規制対象です】
とか!!

8話 コスプレを見た際にべったん子キャラなのにたわわに実っていた時、果

「熱くなっちゃって。大人びててもまだまだ子どもね」

つい先ほど出会った名も知らない少年のことを思い出し、呟く。

かの天才少女、北里 千里の友人だとすれば、彼女と同じくらいの年頃の子もだろう。

それにしても年齢不相応に落ちついた雰囲気と態度の少年だった。断片的な情報から私が何者かを割り出そうとし、幾つかのパターンを想定した上で悪手は打たないように頭を働かせているかのよう。な言動はなかなかどうして、大したものだ。

私が彼くらいの年齢だった時にあそこまで頭を使って生きていたかどうか。

少なくとも悪党を追い詰めるためにはそれなりに頑張っていたけれど、それに手いっぱい自分の回りにいる人を気遣う余裕はなかったような気がする。

けれど、その気遣いが仇になったのもまた否めない。

確かに北里 千里は一時悪い意味で有名になり、全国的に顔を知られていた。

でも、それはもう多くの人にとってはお話の過去の話であり、大衆紙で見かけたモノクロの顔写真を覚えていられる人なんて殆どいない。

それに、プライバシー上の理由ですぐにその雑誌は回収されてしまっている。

ネットで検索でもすれば簡単に彼女の顔を確認する事は出来るが、わざわざそこまでする程彼女に関心のある人なんて早々いないだろう。

だからこそ、彼女は今日も彼と並んで平気で街を歩いていられた。

実際、私が北里 千里の事を知った（より正確には思い出した）のはあの電話の後で上司から送られてきた資料に写真付きで彼女をマークしろとあったからに過ぎない。

そこを見落としてしまったのは間違いなく彼の未熟ゆえだ。最後の口ぶりと態度を見る限りでは、彼は新天寺社の裏側を知っていた。

加えて、私の言葉によって北里 千里がそこに関わっている事を察したはず。にもかかわらず、私を利用出来ないか、その道を探ろうとしなかった。

学校という閉鎖的な空間で過ごしていたせいで、どうしても過敏にならざるを得なかった、攻撃的になるしかなかったというのはあるだろう。が、それでも私の名前や連絡先さえも訊き出そうとしなかったのは間違いなく失敗だ。

もつとも、彼に必要以上に警戒されて情報を引き出し損ねたのは私も同じ事なのだけけれど。

そんな事を考えながら病院の外に出た私の視界に一人の少女の姿が飛び込んできた。

オレンジと黄色を基調にした、控えめに見ても日常的に着用するものには向かない衣装をまとった緑髪の少女。

もちろん、ゴーグルの乗った独特の色の髪の毛は地毛ではないだろう。

このコスプレは、Yuiyと同じ会社の販売しているヴォーカロボット”RUMI”のそれと見て間違いはない。

ヘッドホンやインカムといった小道具の類までしっかりと再現されている。

顔立ちの良さも相まって、中々に完成度の高いコスプレだ。

ただ一つ、いや二つほど問題を挙げるとすれば、胸のふくらみが過剰なのがまず一点。それから、両手に持っているものが30センチメートル程度のスタンバトンとH&K P2000と

というのがもう一つ。

両手の得物をちょうどスカートの内側の太ももに巻き付けたホルスターに突っ込んでいる最中だった。

RUMIはそんなもの持っていない。

……いやいや、そういう問題じゃないか。

コスプレ少女は私を見て無表情のまま私の様子を伺っている。

何かを察した、というよりはたまたま目が合ったその流れでどういった感じの反応だ。

大通りの一本奥にあるこの病院の前は人通りが多いとは言いがたい。仮に誰かしらいたとしてもその殆どが彼女のコスプレが何なのか分からない人の方が多数であり、今日のイベントや私と彼女の格好を考えればそういうものなのだと思って軽く流されるかも知れない。

そもそも、彼女は何者なんだろうか？

銃は本物なんだろうか？

何の用があつてあんなコスプレをしているのだろうか？

色々考えてみるが、どう考えてもろくな結論には達しそうにない。そう結論付けるが早いか、一瞬早く身を翻してなるべく不審な気配を察知されないようゆっくりと歩いて駐輪場を通り抜ける。

万が一、拳銃が本物だったらどうあがいても勝ち目なんてない。

背中を向けるのもそれはそれで危険だけれど、いきなり撃つてこなかったところを見ると下手に仕掛けない限りは安易に発砲しないと思いたい。

とにかくひとまずここから離れて、それから改めて考えよう。

歩きながら、振り返って少女の様子を伺う。

私の事など気にも留めず、当然のように病院へと入って行った。

「ちよ、流石にその展開は卑怯でしょ!？」

まあ、病院の前にいたんだから病院に行くのは当然と言えば当然のだけれど。

しかし、私と無関係のところを何をしてくれたって全く問題がないのもまた事実。

それでなくても私には顔も分からない新天寺社の裏側の構成員、大須 冬彦の捕獲と天才少女こと北里 千里の保護という二つの役目があるのだ。

あんな訳の分からない相手に悠長に構っている暇なんてある筈もない。

仮にあの少女がただの狂人で無意味な虐殺が目的だったとしても、大義の為の小さな犠牲として見なかつた事にすれば良い。

私の雇い主は国家そのもの。そして、私に課せられた使命はあまりにも短期間に大きくなり過ぎた新天寺社の 今や日本の国土に重ね合わせに存在する仮想の共同体の行政府とすら呼ばれる程になった、かの企業の弱みを何としてでも見つけ出すこと。

東京と比べて新天寺社の回し者の介入が少ない今回のような状況はまたとないチャンス。

どういう経緯でこの情報を得たのかは分からないけれど、ボスが休暇中の私にいきなり電話をかけて来たのも無理からぬ話。

この機会を逃せば新天寺社のスキャンダルの証拠を押える次の機会が巡って来るのはいつになるか。

この国に二つもの国家はいらない。そんなものは騒乱の原因になるだけだ。

その任務と正義の重さを改めて確認した私は 躊躇う事なく、踵を返した。

大義の前の小さな犠牲？

その判断はきつと間違つてはいないだろう。

けれど、私が小さな犠牲を認めるかというそれはまた別問題。

100の正義と1の正義。 その二つが両立しないと決めるのは

いつだって自分だ。

だったら、私は迷うことなく101の正義を選ぶ。

たとえ、その為に1000を超える困難が伴うとしても。
それが正義の味方というものだ。

「やったるうじゃないの……！」

自らを奮い立てるように呟きながら、再び病院の自動ドアをくぐった。

9話 ソンビパニック的状况下で日本人が拳銃を手にしたところで普通は使いた

「あー、失敗した……」

あのコスプレイヤーの女性の名前を訊いておくのをすっかり忘れていた。

そもそも彼女が千里にとってどういう存在なのかの見極めすら出来ていない。

何の為に千里の周辺を探っているのか？ その一点でも色々掘り下げて尋ねる事は出来た筈なのに。

もしかしたら、千里が新天寺社の変な研究に無理矢理協力させられていて、彼女はそれを阻止するために来た可能性だってあるのだ。

…… もっとも、千里を助ける、と千里を可能なら助ける、と千里を殺してでも阻止するでは同じ動機でも状況が一変するのだけれど。その辺についてもしっかりと確認を取っておくべきだった。

「くっそ、慣れない事態で熱くなってるな」

『物凄く冷静に見えるけど？』

「必死こいてスカしてるだけだよ」

少なくとも俺自身、この状況に混乱しているし焦燥感を覚えてもいる。

夏芽の兄を止める。 それだけであつたならまあ、何とかなつた。

大須 冬彦をつかまえて、彼に新天寺社のシミュレーションや妹の件について説明してからあれこれと説得すれば何とか……とも思えた。

しかし、先の彼女とのやり取りを経て、状況は一気に複雑になつてしまった。

どうやら新天寺社を追う勢力が存在するらしい事。

その勢力が何かしらの理由で千里の周辺を嗅ぎまわっている事。新しい情報はたったの二つ。けれど、それだけのせいで俺は大須 冬彦以外に千里も探さなければならなくなってしまった。それも尾行されている可能性も考慮しながら。

加えて、個人情報を書き記したARが大須 冬彦のもので無かった事によって彼の搜索は手掛かりすらない。

それに

「だったらこの目はなんなんだよ……」

大須 冬彦のARから離れたにもかかわらず、窓の外を歩きかう人に目をやると視界には相変わらずプロフィールが溢れかえっている。

目がバージョンアップした、とでも考えるべきなのだろうか？

だとしたら、これからは眼帯でもつけて歩くようにした方が良いのかもしれない。

「俺はもう中三だっつーの」

その光景を想像して、盛大にため息をつく。

こう言う訳あって眼帯を常備している人に失礼かもしれないが、これは痛い。あまりにも痛々しくて残念なことこの上ない。

込み上げてきた何とも言えない物悲しさに背中を押されるように病室を後にした。

「悪いな、夏芽。一から探し直した」

『問題ないわよ。それくらいは最初から覚悟してたから』

「ついでに悪いけど、君の兄貴の事は後回しだ」

千里もこの事態に関与している、あるいは関与させられるかもし

れない。

そんな状況下で何処にいるかも分からない見ず知らずの男を、ついさつき会ったばかりの女の子の為に探せるほど俺は出来ちゃいない。

『どうして?』

「友人が厄介事に巻き込まれてるらしいんだ」

『そっか……それじゃ、仕方ないわね』

そう言って笑ってみせる夏芽。

けれど、表情の端々に隠しきれない不満が滲み出ている。

義理もないのに厄介事を引き受けてやったのに、何だよその表情は。そう思う一方で彼女の願いが本物である事を実感し、兄を想うその心意気には感動すら覚える。

自らの目を開く事も、言葉を発することすらかなわない体になつてなお、遂げたい想いの為に見ず知らずの他人に助けを求めて来たのだ。

彼女から見て、俺が彼女を見えると確信できる情報なんて無かつた筈なのに。

俺に出会う以前から道行く人々に何度も何度も声をかけ続けていて、たまたま俺を呼びとめる事が出来た。そう考えるのが妥当だろう。

声は届かず、誰ひとり彼女を見ようともしない。どうあがいても彼女の存在は認識されない。

自分が何者なのかさえもわからなくなりそんな孤独の中で、彼女は必死に助けを求め続けていたのだろう。

それほどの決心を持って、想像を絶するほどの苦難を経てようやく自分の声を、姿を知覚できる人に出会えたのだ。

そこまでの苦勞を経ておいて素直にこちらの事情を受け入れて引

き下がるとすれば、それこそ「その程度の願いのために俺を引きずり回すな」と憤る。少なくとも俺はそう考える。

「俺は完璧超人じゃないから確約は出来ないけど、それでも友達を探しながら、探し終わってから、出来る限りの事はするから」
『……………ありがとう』

本日何度目になるかの謝意に笑顔を添えた彼女の眩い表情。それを直視しないように少し顔を背けつつ、横目でちらちらと様子を伺う。

果たして彼女は今自分がどんな表情をしているか、自覚しているのだろうか？

なんて事を考えながら廊下を歩いていると、これまたヴォーカロボットのコスプレをした緑髪の女の子とすれ違う。

彼女の名前は『坂田 うめ』というらしい。見た感じ、年齢は俺とあまり変わらない。

なんだ、コスプレしていてもちゃんと機能するんだな。

と、名前を凝視していると次の項目が表示された。わお、デカメロン。

直後、俺の目に再び異変が起きた。

【The Watcher】

【Mjollnir 300】

【H&P:K P2000】

俺の事なんて気にも留めず、背中を向けて歩くコスプレイヤーの額のゴーグルと太ももの付近に、そんな文字が躍る。

その英数字が何を意味するのかなんてさっぱり分からない。 け

れど、視界に映ってすらいらないものの情報が反映されるというのは結構不自然な状況だ。

確かにAR機能を利用したアプリには登録されている商品がカメラ内に収まった時、その商品の名称と定価、レビューの評価を表示するものがある。

けれど見えていないものに対してはこの機能は当然効果がない。下着の情報が筒抜けになってしまい、破廉恥なことこの上ないから妥当と言えば妥当な話。

そしてこの制限は今の俺の目にも完全に適用できるものだった。通りを歩いていて時、一度たりとも女性の下着のメーカーの情報が見えた事はなかった。

見える筈のないものに関する情報が見える。つまり、彼女の持っているものが見える見えないと別にな天寺社のARの影響下にあるということ。

位置情報を把握するためのチップでも埋め込んでいけばそれ自体は別にむずかしい事じゃない。が、問題はわざわざそんな処置が施されているという事実。

そしてそんなものを隠し持っているという現実。

「なあ、夏芽。 M j o l l i n i r 300とH&a m p ; K P 2000って何か分かるか？」

『確かH&a m p ; K P 2000はドイツ製の銃だったと思うけど……いきなり何?』

もつともな質問に沈黙で応えつつ、息をひそめる。

彼女はいったい何者なのか?

どうしてこの日本で銃なんて持っているのか?

そして、何のためにここに来たのか?

湧きあがる疑問と根拠のない推論の数々。 それらをどうせ碌な

もんじゃやないと言っぞんざいな結論と共に脳の片隅へと追いやりながら、出来る限り気配を消して彼女に近づく。

幸いにも、背後まで近付いてきた俺の気配にはまだ気付いていないようだ。

……とは言っもの、ここから先どうすれば良いのかをあまり考えていなかった。

とりあえず男女の膂力差にものを言わせて強引に押し倒すのが一番だろうかとは思っが、誰かに見られた時の事を考えるとリスクが大き過ぎる。

普通に交渉というのは相手の持っているモノがモノなのであり得ない。

となると、何とかして銃を奪うのが一番妥当な判断だろう。

防犯カメラのある場所で奪い取れば、俺が銃を持ちこんだ訳ではない証拠にもなる。

もしかしたら銃でない可能性も少なからずあるが、銃であれば見えなくても位置の分かる処置の必要性はすんなりと受け入れられる。確認するだけ確認しておいて損はない。

意を決して彼女のスカートに手を突っ込んだ。　こういう事をするのは物凄く気が引けるけれど、今は仕方ない。　必死に自分に言い聞かせつつ、銃のグリップを掴む。

そして力任せにホルスターから銃身を引き抜くと同時に、思いつきり飛びさった。

ついさっきまでいた場所で少女の白いブーツのかかところが美しい軌道を描く。　振りかえりざまの後ろ回し蹴りだった。

「動くな！」

既にMjollnir 300と名付けられた警棒を構えて前傾姿勢を取っている彼女に向かって叫ぶ。

彼女の太もものホルスターに収められていたものは間違いなく拳

銃で、ずつしりとしたという程ではないものの、サイズのわりに確かな重さがおもちゃではない事を否応なく実感させてくれる。

幸いにも周辺に人はおらず、声を訊きつけてやって来る野次馬の気配もない。今のうちにやるべき事をやってしまおう。

震える右手を左手で押え、へっぴり腰で見ず知らずの女の子に向けて銃を構える。

が、彼女は緑髪を揺らして躊躇なく突っ込んで来て、微塵の躊躇いも見せずに脳天めがけて警棒を振りおろす。

とっさにもう一度後ろに飛んでから銃を構え直す。それでも少女の動きは止まらない。

今度は銃を構えた手を狙っての回し蹴り。これも後ろに飛んでよける。

続いて2度目の警棒。横薙ぎに振るわれたこれをまた後ろに飛んで逃げる。

単調な攻防の最中にふと「あ、誘導されてる」と気付いた時には俺はエレベータのすぐ前にいた。

エレベータホールは階の端に設置されている。つまり後ろは壁。

「当たり所が悪くても恨むなよ！」

背に腹は代えられない。思い切って手にした銃の引き金を引いた。

「…………あれ」

弾は発射されない。それどころか引き金さえまともに引けていなかった。

困惑の色を浮かべる俺の事なんて気にもとめず、少女は俺の目の前まで歩いて来る。

そして、銃を持つ手に優しく、状況には不似合いの女の子らしい

繊細で柔らかい左手を添え、右手を強く握り込む。

安全装置か、と気付いた瞬間には既に手遅れで、小さくていかんせん迫力に欠ける拳が迫っていた。しかし、俺の手を握る彼女の手の握力は力任せに骨を潰されそうな程に強く、その拳もまた尋常じゃない程の力で握り込まれているのは容易に想像できる。

流石に死ぬことはないだろうけど、痛そうだなあ。

そう言えばこの子、いつの間に警棒を手放したんだろう。

って言うか何なんだよ、この怪力。

拳銃つてとっさに使える武器ではないよなあ……。

などと悠長に考えつつも、身を守るために目を瞑って額を突き出す。

せめて一矢とか、ここを殴られて意識を持ってかれることはないだろうとか、そんな事を考えていた訳ではなく。

ただただ、無意識の防衛行動だった。

が、いつまで経っても痛みも衝撃もやって来ない。

恐る恐る目を開けると、どこかで見た色っぽい太もも。

視線を上へと移動させると、先ほど名前を訊き損ねた女性が不敵な笑みを浮かべて俺を見下ろしていた。

左足をしっかりと床に付けて、右足を膝を曲げて宙に浮かせた格好で緑髪の少女に向けている。

緑髪の少女はさっきまで堅く握っていた右手のこぶしを左手で押えながら、憎々しそうに女性を睨む。

「や、少年。 逃げるんなら今のうちよ」

そう言いながら彼女が指差した方向を見ると、エレベータのドアが今まさに閉まるうとしていた。

その場を彼女に預け、エレベータへと駆け込んだ俺は銃を懐にしまいつつ1階のボタンを押す。

何事もなく1階へと到着し、ドアが開くと同時に急ぎ足で出入口へ。

ちらりと後ろの様子を伺うが、俺を追ってくる様子はない。

病院を後にしたところで一旦立ち止り、荒くなった呼吸を整えた。

さて、次に俺がすべきことは何か？

色々と思うところはあるが、今はそれに専念しよう。

夏芽の兄、大須 冬彦を探すことか。 それとも千里に合流するのが先か。

大須 冬彦に関してはそもそも居場所が皆目見当もつかない上に、彼自身新天寺社に関与している人間。 考えようによっては敵の目の前にこのこやっけて行くようなものである。

一方、千里に合流した場合、新天寺社というか、さっきの緑髪の女の子はきつと千里に人質としての価値を見出すだろう。

裏で相当な悪事を働いている（とみて間違いない）企業だ。A Rを利用したナビゲートシステムに使われるGPSをいつでも私利私欲に使えるような体制を整えている可能性は十二分に考えられる。それでなくても新天寺社直々の依頼とやらをこなしているんだ。下手をすればあいつだって実は新天寺社の裏の部分にとっぷり浸かっている

「だったら、なおさらじゃないか、バカバカしい」

「それで、これからどうするの？」

「やっぱり友達の方を優先させてもらうよ」

ポケットには収まりそうになかった為にジーンズとベルトの間に挟み込み、シャツで隠す格好になっているH & a m p ; k P 2 0 0 0に触れる。

本来ならば一生手にする事なんてなかったであろう、その感触に不思議と安心感を覚える。

と同時に、そんなものに安心感を覚える状況に置かれている事を自覚して、なんともうんざりした気分させられた。

『ふうん。で、その友達は今どこにいるのよ？』

『フトモンの大会会場。通天閣だな』

『へえ、変な場所で作ってるのね』

感心した風に呟く夏芽。俺も同意見だった。

確かに通天閣の地下にはスタジオが設置されている。そこを使うというのであればまあ、分からない事はないのだけれど。

とは言えあの周辺、新世界と呼ばれる一帯はお世辞にも治安の良い場所ではなく、幼い子どもも多数参加するであろうフトモンの大

会を開くのに適しているかと言うと正直微妙なところ。

何より、フトモンのユーザー人口を考えたとき、そのスタジオはきつと小さすぎる。

もつとも、そのスペースの問題はスタジオだけでなく地上階や展望台までも含めて通天閣すべて貸し切りにすることで解消したらしいが。

しかし、これはこれでわざわざそんなことしなくても他にもっと良い場所があったんじゃないのかという疑問を残してくれる。

大阪の名所の一つをジャックしての大会、と言うのは確かにインパクト抜群ではあるのだけれど……。

「それに、もしかしたら君の兄貴にも会えるかもしれない」

『兄さんが！？ それ、本当なの！？』

「あくまで可能性があるだけだよ。 闇雲に探しまわるよりはマシって程度」

『そう……』

夏芽のアニメチックな顔の上で明らかな落胆の色とそれ以上にはやる気持ちが混ざり合い、何とも言えない表情を作り上げる。

そんな彼女の額に手を伸ばす。 が、すぐにどうせ触れられやしないことを思い出して引つ込めた。

そもそも、撫でるにしてもデコピンを食らわすにしても年上の女の子(つてのも妙な表現だが)相手にやる事ではない。

千里を相手にしている訳じゃないんだから、と言いつけさせる。

『何でもいいわ。 こんなところでばさつとしてないで急ぐわよ！』

何より、彼女にそんな安い慰めは必要ないだろう。

すぐに気を取り直して勇ましく先へと突き進んでゆく俺にしか見えない少女。

その小さい割に頼もしくもある背中を苦笑交じりに見守りながら、後を追いかけた。

浪速警察署前の信号機が青に変わるのを待ちながら、通天閣を見上げる。

「警察に助力を求めるのはやっぱり難しいよな」

とてもじゃないが、今の状況を納得してもらえるように説明する自信がない。

時刻は11時22分。大仰な名前のわりにちんまりした塔の向こうには真っ青に晴れ渡っていた。

夜ならネオンは白白と言ったところだろうか。俺の頭上だけは橙一色のような気がしてならないけれど。

そんなとりとめもない思考と一緒にため息がこぼれた。

11話 実際にスタンガンで気絶はしない。そう思っていた頃が俺にもありま

「むう……手強いなあ」

RUMIコス少女が左手に構えたスタンバトンを振り下ろす。

それをある程度余裕を持って右側、対面の少女にとっては左側へと回り込んで回避し、バトンを握る彼女の手、より正確に言えば親指めがけて鉄槌打ち。

伸ばした腕に一撃を貰った少女はわずかに体勢を崩すも、左足で病院の床を思いつき踏みしめて堪える。と、同時に体勢の整いきらない内に強引にバトンを横薙ぎに払う。

こめかみめがけて飛んできたそれをしゃがんでかわし、立ち上がりざまに彼女の横腹にケンカキックを見舞った。

体重の乗った、下から突き上げるような一撃。

突き出された鉄板入りのブーツは彼女を床から浮かせ、容赦なく吹っ飛ばした。

が、吹っ飛ばされながらも体勢を立て直し、しっかりと着地を決めてみせる。

顔を上げた彼女は相変わらず無表情。苦痛に耐えていると言った様子も、殴り合いで厚くなっている風情もない。

あまりにも無表情過ぎて爬虫類か虫とでも戦っているような変な気分になさえなつて来る。

「そんなの効かない」

「……まったく、どんな腹筋してるのよ？」

ほんの数分の攻防だけれど、それでも彼女について幾つか分かった事がある。

まず、この子はあまり戦い慣れしていない。

スタンバトンという触れるだけで効果を発揮する得物を持ちながら仕掛けてくる攻撃は 一つ残らず大振り。

拳を握った時の握り込みが典型的な素人握りで、フラットになっていない。

加えていちいち振りかぶるため、攻撃のタイミングが丸見えと来ている。

けれど、その一方で技術の無さを補って余りあるほど筋力や体力に恵まれている。

散々無駄だらけの攻撃を繰り返しているにもかかわらず、息のことも上がっていない。

何度も蹴られているにも関わらず、苦痛を一切見せずにケロッとしている。

単純に痛覚に異常があるだけという可能性も検討はした。

けれど、鉄板入りのブーツで思いつき蹴飛ばせば骨にダメージが通るはず。

そうなれば否応なく彼女の動きは鈍くなるはずなのだ。

そう思い、何度も脚の一点に執拗に蹴りを見舞ったりもした。

が、彼女はそれすらも「ちょっと痛い」の一言で片付けてしまった。

アプローチを変えて関節技に切り替えたところ、力任せに投げられてしまった。

それも、常識的に考えてあり得ないような体勢から。

確かに私は打撃系の方が得意で、関節や締め技、寝技は不得手ではある。

が、ずぶの素人に抜けられるほど下手くそなつもりもない。

というか、人間を天井の蛍光灯に叩き付けるのは素人玄人以前の問題だろう。

私だったからそこから空中で体勢を立て直し、壁を蹴って勢いを

殺しながら着地出来たが。

そう、要するに彼女は馬鹿力なのだ。

それが生まれついてのものなのか、後天的に得たものなのかは分からないけれど。

少なくとも見た目は至って普通の女の子なのに。一体、どこにそんな筋肉がついているのやら。

もしかしたら彼女はサイボーグか何かなのではないだろうか？

そんな馬鹿げた疑念さえも脳裏をよぎる。

……まあ、彼女の正体なんであれ、私のやるべき事は変わらないのだけれど。

大振りで下手くそな打撃を悠々とかわしながら少しずつ後退。

適当な窓の付近に来たところで、彼女のスタンバトンによる突きをサイドステップで回避、伸びた腕を右手で抑えつつ、左手を背中へ回して窓を開ける。

そこから流れるように彼女の腕を掴み、胴体を腰に乗せてヒョいと浮かせ

10階から投げ落とした。

少女の茫然とした表情がスローモーションで視界の外へと落ちて行く。

これは流石に即死コース一直線だろう。

いくら何でもやり過ぎたかな？

そう思いながらも階下を見下ろす。

少女は手にしたスタンバトンで7階の窓を叩き割り、それを支える事での落下の勢いを殺していた。考えて動いたというよりは体が勝手に動いたという風だ。

それでも落下を止めることは叶わない。

こちらを見上げる彼女の姿が、ばさばさと髪や裾を乱暴に揺らし

ながら遠のいてゆく。

次のアクションを起こしたのは4階。

さっきよりも少し窓に近づいていた彼女は、手を伸ばして3本の指で体を支えた。

そこでようやく彼女の落下は止まった。

もつとも、10階から落ちた人間が途中で自力で落下を阻止するなんて事は常識的にはあり得ない訳で、ようやくの4文字には我ながら違和感を覚えるが。

「……うっそお」

想像以上のとんでもなさにも思わずそんな言葉が漏れた。

下の階から患者や見舞い客、看護師達のどよめきが聞こえて来るが、少女はそんなものは一切気にも留めず、私を見上げて唇を動かした。

絶対に殺す、と。

言葉とは裏腹に相変わらず無感動な瞳に引きつった笑みと冷や汗が浮かび、悪寒が走る。

弾かれたように窓から離れ、階段を駆け降りた。

多少息を切らしながら1階に降りた私を待ち受けていたのは飛来するバカでかいソファ。

普通の人間の力ではとてもじゃないが投げ飛ばせるものじゃない。当然、女性一人で受け止められるような代物でもない。

身がかがめながら向こう側を伺うとソファの着弾点にいるであろう私を睨むRUMIコスの彼女の姿。

着弾点という言葉の頭にソファがつく事に果てしない疑問を覚えるけれど、今はそんなことはどうでも良い。

勝った気になって背を向けていない辺りはまあ評価しても良いと

は思う。

が、相手がどう応じて来るかを考えていないその様子はまあ違
なく素人のそれだ。

宙を舞うソファの下をとっさに前転で潜り抜け、少女の足元へと
転がり込むと同時に足払いをかける。

彼女は盛大に体勢を崩し、その拍子に構え直したスタンバトンが
その手からこぼれ落ちる。

半ば無意識にそれを掴み、今しがた地面に叩きつけられた彼女に
押し付けた。

「……………つが!？」

ビクンと体を仰け反らせた彼女は、その一瞬後に病院の床に崩れ
落ちた。

どんなに堅牢な肉体を持っていても電撃を浴びれば竦む。

それはあまりにも当たり前の反応だったけれど、真つ当な生物に
違いないという事実には僅かばかりの安心感を覚えた。

「しっかし、幾らなんでもコレは出力上げ過ぎじゃないの?」

床に伏す彼女から手元のスタンバトンに視線を移し、嘆くように
呟いた。

スタンガンって本来人間を気絶させられるような代物じゃ無い筈
なんだけどなあ……………。

11話 実際にスタンガンで気絶はしない。そう思っていた頃が俺にもありま
くそう、喰らいに超時間泥棒されてしまった!!
なるうは恐ろしい所だあ……

12話 二度づけ禁止とは言つものの衛生つて意味で言えば各テーブルに置き

幸いにも、特にこれと言つたトラブルに遭遇する事なく通天閣に到着した。

「いくらなんでも何事も無さ過ぎじゃねえ？」

『漫画じゃないんだから、そんなとんでもない出来事早々起きないわよ』

「君がそれを言うか？」

まあ、何事もないに越したことは無いのだが。

後ろから例のRUMIコスプレの子 確か坂田うめだったか
が追いかけてこないところを見ると、Yuiyの人の足止めは上手く行っているのだろう。

しかし、通天閣入り口で早速問題にぶち当たった。

「参つたなあ……入場規制されてる」

『狭い会場なんだし、当然と言えば当然よね』

歩き疲れたから、と浮遊という移動手段を身に付けた夏芽がしみじみと呟く。

AR便利だな、オイ。そもそもARが疲れるのかとは意地でも突つ込まない。

「強行突破は論外だよなあ」

『当然でしょ！ 下手に騒ぎを大きくしたら警察に追いかけて回されるわよ！？』

「いまなら銃刀法違反もついて来るってか……笑えねエ」

つまらない冗談はさて置き、本当にどうしたもののか。あそこに今から入場するもつともらしい口実をでっち上げるか。

「隠し通路でも探すか……」

『そんなもん、都合良くある訳ないでしょ』
「だよなあ」

万が一にもそんなものがあるうものなら、通天閣を建てた連中に「お前ら何を企んでいたんだ」と小一時間問い詰めたい。

もちろん、非常用の避難通路だとかそついつた構造であれば話は別だけれど。

そつというのはあるならあると明示されているものだろうしなあ……。

とは思いつつも、もしかしたらと通天閣の周囲をうろついてみる。

『探したってあるはずないと思うわよ』

「俺もそう思……あ、あった」

そんなバカな

脳裏でその一言が何度も反芻する。 そんなバカな。

が、俺の目には確かに地中に【passage】と書かれているのが見える。

ARでしか見えない隠し通路、か。 スマホのAR機能でも確認して見るがやっぱりこちらには表示されない。

つまり、この隠し通路は新天寺社の管轄、という事になるのだろう。

しかし、まだその輪郭を捉える事は叶わない隠し通路をじつと凝視する。

不意に【passage】の文字が消え、代わりに一本の太い管が地中に浮かび上がってきた。

「なるほど、視線を感知出来るのな」

「どういうプログラムなのかは皆目見当もつかないが。

先のプロフィールが眺め続けていると、どんどん詳細を表示するようになっていったのと同じ仕組みだろう。

管の向かう先を目だけで追いかける。

信じがたいほどにあっけなく隠し通路とその入り口が見つかった。こんなに俺の目が活躍するなんて、まるでチート能力所有者になつた気分だ。

「こつても便利だと何か変な代償とかリスクがありそうで怖いよな」

或いは新天寺社の罫か何か、といったところか。

『何、契約者気取りの寝言吐いてるのよ。それより、さっさと行くわよ』

「寝言つて言うけどなあ、自分だけ見えてる世界が違つてのはやっぱり気持ち悪いもんだぞ？」

『そんなの、アンタに限つた話じゃないでしょ？ アンタ以外は上手く隠しているだけで幽霊が見える人だっているかも知れないし、人間がガラクタに見えてガラクタが人間に見える人もいるかも知れない。死角や急所が可視化された状態で表示される人や並行世界を観測出来る人……アンタが知らないだけで意外と超能力者だらけかもしれないわよ？ それにその目が無くたってアンタとアンタより身長の高い人、高い人じゃ見えている風景だつて微妙に変わって来るんだから』

まあ、その通りだ。

その通り過ぎて新発見もありがたみもないが。

似たような台詞は両親や千里、付き合いの長い友人にも言われた。しかし、そんなありきたりな言葉を聞くと不思議と安心させられる。

仮に変なものが見えたとしても、抱える不安が人並みという事実
に安堵する。

そして何より、彼女なりに励まそうとしてくれる事が嬉しい。

「ありがとう、夏芽」

『どういたしまして、ふふっ』

少し恥ずかしそうにはほほ笑む彼女はきっと俺の言葉の意図を正確
には受け取っていない。

励ましの言葉に素直に感謝している、と思っていると考えるのが妥
当だろう。

実は「ああ、陳腐な言葉だなあ。でもその陳腐さに癒される」
なんて紙一重の侮辱みたいな理由で感謝されているとは思っていないに
違いない。

それでも、彼女が笑っていられるのなら礼を述べた甲斐があると
いうものだ。

どうせ見えるのなら、笑顔の方が良いに決まっている。

たとえば俺にしか見えなくなつて、笑顔の方が良いに決まっている。
だから今は俺にだけ見える世界を、俺の視界を信じて進む事にし
よう。

「一番近くの入り口はその串揚げ屋の裏手にあるっばい」

『って言われても私には見えないんだけど』

そういや、そうだった。

俺は通天閣の下に位置する串揚げ屋”マルタ”を指していた指を
引っ込める。

「スマホのAR機能とかカメラをオンにしたら見えるかな？」
『アーリーじゃないと無理よ』

……前言撤回。

夏芽の言葉は断じてありきたりなものではなかった。

陳腐に聞こえたのは、俺が勝手にそう受け止めていたからだ。

何も見えない、聞こえない。己の存在すら希薄になっていく…

…そんな虚ろな世界を 漂い続けていた彼女の視界はきつと俺のなにかよりもずつと特殊で、ずつと異様だったに違いない。

他人と違う世界を見ている事を確認する術すら与えられていない
孤独。

分かり合えないことすら許されない世界。

それがどんなものかなんて俺にはやっぱり想像すら出来ない。

もちろん、想像出来ないことすらも、想像出来ない程に常軌を逸したものを想像している俺の勝手な想像に過ぎないという何やら禅問答じみたものなのだが。

それでも、その想像すら出来ない世界を生きて来た彼女に身勝手に同情してしまう。

「でもさ、夏芽を見ている俺は見えるんだよな？」

『うん、何でか分からないけど間違いなくアンタの姿は見えてるわ』
「俺の声は聞こえているんだよな？」

『そうよ。 でなきゃこんな風に会話が成立したりする筈ないでしょ？』

何を今更、とでも言いたそうなその表情はどこか嬉しそうで、声も心なしに弾んでいるような気がした。

そんな彼女を横目で見守りながら、マンホールに偽装された隠し通路への入り口を開きつつ、思った。

「この目があつて良かった」と。
「この目であつて良かった」と。

13話 声優とコスプレイヤーを見る時は肉眼で見ると心眼で見ると

ボク自身が馬鹿力を自覚したのはいつ頃のことだったろうか。

物心ついた頃には相手が中学生でもパンチ一発で決着していたのは覚えている。 どういう経緯でその中学生を殴るに至ったのかは覚えていないけれど。

いくら当たった場所が悪かったとは言え、幼稚園児に一撃で沈められた彼はさぞ屈辱だったに違いない。

それでもボクが女の子だったことや、歳の近い男の子が年齢のわりに紳士だったおかげで、同世代の子達と喧嘩するような事は無く、この頃はまだ平穩に過ごしていた。 もしかしたら、自覚がなかっただけで周囲からは恐れられていたのかも知れないけれど。

小学校に上がってからは持ち前の怪力に更に磨きがかかり、球技のような複雑なルールの無い単純な競技であれば先生も含めて負けなしだった。

一応、自分の力が人並外れているのをそれなりに自覚して、抑えていたつもりではあったのだけれど。

小学生となるとクラスにいるのは幼稚園の頃からの顔見知りばかりではなくなっていて、よその幼稚園出身の子、特に男子の中にはボクの知っている男の子達とは全く異なったパーソナリティの持ち主も少なからずいた。

今にして思えば彼らのようなわんぱく坊主の方がむしろ平均的な小学生男子のような気もするけれど、当時のボクはそんな風に思えるほど大人ではなかったし、何よりなまじ平和な環境で過ごしていた事もあって……要するに煽り耐性がなかった。

小学生の貧困なボキヤブラリーで付けられたあだ名は「ゴリラ」と陳腐なことこの上ないものだったのだけれど、何度も言うように煽り耐性皆無の当時のボクはそう呼ばれる事が我慢できず、男子の

一人を全力で引つ叩いた。

普通ならば殴られたこと取っ組み合いになるか、男子が調子に乗って更に囃し立ててくる程度だろう。でも、当時のボクは既に人並み外れた筋力とそれに負けないだけの肉体を持ち合わせていて、そんな体から繰り出される全力の一撃の凄まじさは想像を絶するほどのものだった。

その男子は顎の蝶番が潰れた拳句、盛大に教卓に叩きつけられて手足を数か所骨折。

流石にそんな酷い怪我を負わせてしまっっては子ども同士のケンカで済む筈もなく、やっぱり色々と揉めに揉めたようだ。

まだ幼かった私はその件についての顛末は教えてもらっていないので、詳しい事は何一つ分からないのだけれど。

ただ、しばらくもやしが食卓に並ぶ頻度が目に見えて増えたのだけははつきりと覚えている。つまりはそういう事なのだろう。何はともあれ、その日以来、ボクは人から避けられるようになり、ボク自身も人を避けるようになった。

誰かを傷付けないように、誰にも傷付けられないように。

学校では腫れものに触るような態度を疎んじて寝たふりをして過ごして、授業が終われば一目散に帰宅。体育は他人との接触のある競技は出来る限り見学。

小学校時代はボクにとつて、未だに黒歴史以外の何者でもない。

そんな退屈な日々には転機が訪れたのは中学生になってすぐのことだった。

-
-
-
-

「……んにゅ？」

妙に重い瞼を押し上げると白い清潔感のある天井が視界に飛び込んできた。首だけ捻って周囲を見渡す。どうやら病院の天井らしい。

意識がはつきりしてくると、自分がどうしてこんなところで寝転がっているのかをようやく思い出す。

妙なコスプレイヤーに足払いをかけられて、不覚にも気絶してしまっただようだ。

何やら走馬灯よろしくの夢を視ていたような気がする。

むくりと起き上がったボクを病院の関係者が遠巻きに見つめていた。

けれど、彼らの事なんてどうでも良い。視界に映っても映らなくても、意識するに値しない。

彼らに気を回すくらいなら、今ボクの身動きを封じている足と手に巻き付けられたガムテープをどうにかする方が優先だ。

そんな事よりも今は追わなければならぬ相手がいる。

Yulyのコスプレをした女。

それからボクより少し年下の男の子。

……どっちも本当はターゲットではないけれど。

大須 冬彦とかいう新天寺社の社員の監視とその妹の身柄の確保。それがボクに与えられていた本来の任務だった。

何故、新天寺社の社員を新天寺社の裏側に属するボクが監視しなければならぬのか。

何故、眠ったままの少女の身柄を押さえなければならぬのか。

よく分からない事の多い任務だったけれど、そんなのは今回が初めてじゃない。

だから、今まで通りただ言われるがままに任務をこなせば良い……
…答だった。

けれど、あの二人に邪魔された。特に女の方は必要とあればボクを殺すことを躊躇しないといった様子だった。

流石のボクもあのまま10階から落ちていればただでは済まなかっただろう。

ふつつつと怒りが込み上げてくる。

許さない。許せない。

絶対に許してやるもんか。

男の子の方は後回しで良い。とにかく、あの女だけは絶対に…

…！

思い出ただけでも憤りで全身が強張り、熱を帯びる。

手近なものをぶち壊したい衝動に駆られる。

でも、ぐっところえた。この衝動はあの女のためにとっておく。

深呼吸して怒りを鎮めながら、まず手をどの程度動かせるのか確認する。幸いテーピングされているのは手首だけで、指は問題なく動かせるようだ。

手首を捻って何とかガムテープの端をつまみ、少しずつ剥がしてみたり、破いてみたりと色々試してみる。

すると思っただより簡単にガムテープは緩み、後は力任せに引き千切った。

腕さえ自由になっってしまったえば足のテープを剥がすのに苦勞する事なんて何一つない。

さっさと引っぺがして立ち上がったボクは、額のゴーグルを下ろしてからインカムを口元に近づける。

「検索。 範囲、でんでんタウンを中心に半径2キロ。 Y u l y のコスプレをした女」

ボクの声に応じるように、ゴーグル越しの景色に無数の映像が映

し出される。

そのいずれも先の検索の条件に該当するものばかり。
あの女の他にもYuiyのコスプレをしている人がいるらしい。
もういつそ全員潰してしまおうか？
いや、やっぱり全部あの女にぶつけよう。

「身長、推定170センチ程度。 胸、ない」

更に検索条件を絞り込む。

身長の高さのおかげか、胸の平たさのおかげか、当該画像は3枚
まで絞り込まれた。

「目標、捕捉。 追跡。 ナビゲート起動」

最後に残った一枚の画像。

そこには確かにあの女の姿があった。

画像が保存された時刻を確認。

ボクがあの女に叩き落とされた数分後に撮影されたらしい。

撮影したのはアーリーの常駐型自動記録システム。

一般には決して明かされていないアーリーの機能の一つ。

電源を入れると同時に自動的に立ち上がり、位置情報を送信しな
がら一定間隔で自動的に撮影を繰り返す。

それに何の意味や価値があるのかなんてボクは知らない。

けれど、そんな事はどうでも良い。

ゴーグル越しの景色に示された一本の赤い糸。

あの女とボクを結ぶ糸。

これでどうあがいてももうボクからは逃げられない。

そう思うと、不思議と熱くなっていた心が鎮まり、安らかに呷ぐ
のを実感する。

焦る事はない。 あっちの攻撃は殆ど効果が無くて、ボクは一撃

でも当てればそれで済むのだから。

その上、ボクの方が間違いなく彼女の動きを把握できる立場にあるのだから。

一度や二度追い払われる事があつたとしても、最後に勝つのがどつちかなんて決まっている。

半ば運命づけられた再び相まみえる瞬間を心待ちに、デート前のように入念に衣服の汚れやほつれを確認する。

それから、鼻歌交じりの軽い足取りで愛千橋病院を後にした。

14話 友人の知り合いの知り合いが自分の尊敬する人の恩人なんて事もあるか

薄暗い通路をスマホのライトで照らしながらゆっくりと進んでゆく。

「ねえ、こっつて結局何の為に作られた場所なの？」

「多分、核戦争が起きた時にでも大丈夫なシェルターへの通路か何か。通路を見つけた

時の表示を考えると、まず間違いなく新天寺社の施設だよ」

「前半のえらく物騒な部分の根拠は？」

「下の方を見つめてたらFallout Shelterって表示があった。夏芽なら侵入して中の情報を収集できるんじゃないか？」

遠回しに「情報を集めて来てくれ」と言ったのを察した夏芽は一瞬にして俺の視界から姿を消す。

5秒経過。しかし、薄暗い場所で一人と言うのは何とも心細い。

10秒経過。何とも、というか物凄く心細い。

15秒経過。夏芽、遅いなあ。何かあったんじゃないだろうか？

自分自身の身の周りへの恐怖と夏芽への心配が混ざり合い、何とも複雑な気持ちになる。

で、30秒後。夏芽がこれまた唐突に姿を現した。

「どうだった？」

「うん、確かに奥に何かあるのは間違いないと思うわ。でも、詳細は分からなかった」

「解析できるような機械は置いてなかったか？」

もしも、このシェルターが夏芽と出会ってすぐに見せられたあの桁外れの破壊を想定して作られていたとすれば、この設備はインフラが完全に死んでいる状況を前提に準備されていることだって考えられる。

だとすれば、夏芽が外の景色を見る時にやっていたようなデータを解析してどこどこでできるようなコンピュータの類は一切置いていない可能性だってある訳だ。

『多分、この下に置かれている機械は外部のネットワークから独立してるんだと思う』

「そうか、夏芽自身はネットワークか俺の目がない場所には行けないのか」

『そういう事。それに、アンタの目があったとしてもアーリーネットワークから隔離された場所だとアタシはそこにいられないと思うわ』

結構不便なのよ、と夏芽は短くため息をついた。

見下ろし、床の向こうを凝視すれば Firewall Shellter という語は相変わらずそこにある。

つまり、間違いなくそこに新天寺社に関する何かがあるはずなのだが。

「まあ良い。それより、先を急ごう」

『そうね。兄さんとアンタの友達が待ってるわ!』

「待ってるかどうかは知らんけどな」

『そういう事言わないの。少なくともアンタの友達は確実に待ってるんだから』

いや、そもそも事態を把握してないだろ。

もしかしたら渦中にある可能性もあるけど、それでも俺が首を突

っ込んでいる事は知る由もない筈である。
もしも、何かしらそれを知る術を持っていたとしたらちよつと怖い。

『で、アンタの友達ってどんな奴なの？ 見た目は？ 性格は？』

「んー、童顔のわりにイイ体してる変態？」

『うーん、ガタイが良いのに童顔で変態なの？ なんか嫌だわ、それ』

「いや、そいつ女子だから」

イイ体の意味を取り違えたのだろう。

きつと身長190センチのガチムチボディを誇るベビーフェイスの露出狂とかそんな感じのものを想像してのか、顔をしかめる夏芽の間違いを指摘する。

しかめているというか、ニヤついていたようにも見えるのはきつと気のせいだろう。

指摘した瞬間、彼女の三次元ではあり得ない大きな目が眩しい程に輝いた。

……うっかり忘れていた。 女の子にこういう話を振ると食いつくんだよなあ。

『もしかして、彼女？』

「アホか。 そんな良いものじゃねーよ、あいつは」

『へえ、でもちよつとくらい気があたりはするんでしょ？』

「友達だっつってんだらうが」

そしてとんでもないスピードで恋バナへと舵を切ろうとする。
ええい、これだからスイーツ（笑）は！？

『ぶうん。 でも、男と女の間』

「友情は成立しないってか。 あいつは心にイチモツ生えてるから問題ねえよ」

『な、ナニ言ってるのよ、アンタ……』

顔を真っ赤にして真っ直ぐ俺の方に伸ばした両手を振る夏芽。

ARだからやや誇張表現されている部分もあるだろう、そりゃもう見事に真っ赤である。

どうやら、この年上の少女はそう言った話に対して免疫があまり無いらしい。

『でも、その子はアンタのことどう思ってるかなんて分からないわよね?』

「んー、普通に異性として好かれてるんじゃないか?」

『しれつと言う台詞じゃないわよね、それ? どれだけ自信満々のよ』

そう言われてもなあ。 あっちが胸張って「秋一が好きです!

でも、二次元の方がもーっと好きです!」と言ってくるんだから仕方ない。

「冗談かもしれないけど。

余談だがかつては俺も千里に気があった時期もあったが、仲良くなると同時に変態が暴露されてそういう感情は消し飛んだ。

あれはあれで面白い奴だから、今でも友人として仲良くやってるけど。 あくまでも友人として、だ。

「ま、何はともあれ大事な人って事に間違いはない」

『分かったわよ、そういう事にしといてあげる。 だから、お互い大事な人のために頑張りましょう』

夏芽は胸元で拳を固め、意気込んだ。

「言われるまでもない」

スマホのライトを改めて進行方向に向け、俺と夏芽は再び歩き出す。

『で、一応確認しておくけど、本当に恋人じゃないのよね？』
「しつこいぞ」

その短いやり取りの間の数歩で、行き止まりに突き当たる。上方へライトをかざすと出口らしきものが見つかった。

「ふう、やっと到着か」
『で、どこに出るの？』

などと言いつつ、先んじて壁をすり抜けて階上へと顔を出した夏芽は辺りを見回す。

パンツが見えている件については知らぬが仏であり、なおかつ彼女自身のパンツではなくあくまでもでんタウンのマスコットキアラのそれである事などを考慮してあえて言及しない。

ついでに言うとなんな仕草をしているが、彼女にはアーリーなしに外部を認識する能力がないのだからこの動作には何の意味がない。対する俺は備え付けのはしごを登ったその先のマンホールを押し上げ、周囲に人目がないかを慎重に確認しながら地上へと這い上がった。

もっとも、どんなに気を使ったところで見えないものは見えないし、開けたドアが死角になって確認しようもない範囲がかなり存在するので、俺の動作にもあまり意味はない。

こういう秘密通路を抜けると出入り口で意味もなく他者の目を気にしてしまうという、子どもの頃に誰でも一度は経験したと勝手に

信じてやまない人間の悲しい性による習慣的な行動でといったところだろう。

……それ以前に、マンホールの向こうも真っ暗で夏芽以外（不思議と暗闇でも普通に見える）は全く何も見えないのだが。

「多分、通天閣の地下のホールだと思うんだけど……って、夏芽が手近なアーリーのカメラから覗いた方が簡単に確認出来るんじゃないか？」

『あ、言われてみればそれもそうね』

言い終えるが早いか、忽然と姿を消す夏芽。

さっきの事を踏まえると、数十秒は戻ってこないだろう。

その間に、こっちはこっちで出来るだけ情報を収集しておこうか。まず何を差し置いても気になるのが人の気配の有無。

ただ確認を取るだけなら大声を上げれば済むのだが、今は人目について得する事が無い状況である。

誰かに見つかるのは可能な限り避けて通りたい。

入口で入場規制が行われていた以上、見つければ確実につまみ出されるだろう。

大会参加者ですと言い張るうにも、そもそもこの大会の参加者が参加証を配布されていた時点でアウトだし、応援ですで誤魔化すのも参加者以外入場禁止だったらやっぱりダメ。

となると、適当な物陰に隠れて聞き耳を立てるのが無難か。

辺りを見回す。見事なまでに真っ暗で、本当に何も見えない。

息をひそめて、耳を澄ませる。風の流れや物音も光と同様に皆無に等しい。

「これならライトを点けても問題なさそうだな」

ドアを押し上げる前にポケットに直しておいたスマホを改めて取

り出し、ライト機能を起動させた。

天井。 何の特徴もない、強いて言うならば特徴が無いのが一番の特徴と言った風情の天井だ。

床。 これまた何の特徴もない。 天井と同様に無個性が最大の個性と言った印象である。

壁。 こうしてライトを点けた状態で見てみると、広い空間には無数の棚が並べられていて、かなりの数の物資が陳列されている。 どうやら、ここは倉庫か何かのかのようだ。 足元をライトで照らしつつ、棚へと近寄って物資を確認。

「ん、非常食……か、これ？」

それが何なのかを明確に記す文字列は見当らない。

目を凝らしてみるもののARによる管理がされている訳でもないらしく、やっぱり何も見えない。

開けてしまおうか、なんて邪念が一瞬だけ脳裏をよぎる。

一方で、万が一にも危ない謎の白い粉だったりしたらどうするんだよ、という懸念がブレーキをかけてくれた。

……どうせ中身を確認したところで俺になにが出来る訳でもないんだ。

触らぬ神に祟りなし。 この方針で行くのが一番だろう。

という訳で、物資から視線を外して改めて壁を確認して回る。

………出口、どこだよ？

『ねえ、秋一ツ！？』

「何だよ、帰って来るなり大声出して？」

大声、と言っても大声としては聞こえていないのだが。

あくまでも漫画のギザギザの吹き出しのような大声を出している表現として認識しているだけだ。

『い、いいいいつ、いたのよ!?!』

「誰が?」

『兄さんに決まってるでしょ!?! それに北里 千里も!?!』

「いや、ある程度見込みがあるから探しに来たん、だけど……?」

つて、ちよつと待て。 今、何て言った?

「夏芽、千里を知ってるのか?」

『そりゃあ知ってるわよ。 彼女のクラッキングを阻止したのは兄さんなんだもの』

「……マジかよ」

思いがけない繋がりにも、頭を抱えた。

あいつを知ってる人がいること自体はさほど驚くようなものでもないが。

『あの女、一体何のために兄さんに近づこうとしてるのかしら?』

2年前の報復とかだったら逆恨みも良い所だわ!』

「いや、千里はそんな事しねーよ」

『そんなの分からないわよ。 前科者だからってどうこう言いつつもりはないけど、あの子に対して好意的な感情なんて持てっこないわ。』

あの子のせいで兄さんがどれだけ大変だったか…… ってアンタ、

あの子と知り合いなの?』

「さっきから探し回ってる友人が千里だよ」

それを聞くや否や、夏芽は怪訝そうな目で俺を見つめる。

『もしかして、アンタもクラッキングとか……?』

「してねえし、しねえよ」

そんな高度な真似、俺のような凡人にはしたくても出来ません。と言うか、考えてみりゃ夏芽だって散々ハッキングまがいの事してないか？

まあ、こっちはやむにやまれぬ事情があつての事だけどさ。

「……まあ、なんだ。反省はしてるんだし、ここは俺の顔を立てるつもりであんまり表だってあいつの過去を掘り返すような事は言わないで欲しいんだが」

『うう、アンタにそれを言われると弱いわね』

と、少し不満げな表情で俺の様子を伺いつつため息を一つ。

『まあ良いわ。今、アンタとこんなところで揉めても仕方ないもの。せつかく兄さんの居場所が分かったんだし』

「そうだな、さっさとここから出て千里に会わないと」

ライトで壁を照らし、出口を探す。

出口自体は思った以上にあっけなく見つかった。が……

「……鍵がかかっている」

当然と言えば当然か。ここがどういう施設であっても、鍵をかけない理由は特にない。

二度三度、ドアノブを回そうと手首を返しつつ、押し引きを繰り返すが開く気配はない。

手元をライトで照らしてみる。

「あ、これ電子ロックなのか。それなら……夏芽、ここにある機械に干渉できない？」

『新天寺社製のものなら出来るかも知れないけど』

と、また姿を消し、今度はものの数秒で帰って来た。

『うん、行けたわ。思ったより簡単な仕組みだった』

「そっか。ありがとう、スーパーハカー」

『誰がハカーよ』

むくれる夏芽を尻目に改めてドアノブを回す。何の抵抗もなく回った。

ドアを少しだけ押し開けて、外に人がいないのを確認した俺はその部屋を後にした。

14話 友人の知り合いの知り合いが自分の尊敬する人の恩人なんて事もあるか

【余談】

タイトルに関して

あまり深くは考えず、本文の一部分に関係のある要素を抽出してお
ります

なのであまり深くは考えず流して頂けると幸い

15話 残飯と言うとゴミみたいなイメージになるのに残り湯という言葉には

天才少女。

そんな名誉なようで貰った本人は煙たいばかりの二つ名で呼ばれていたのは2年前。

当時の私、北里 千里は天才とは名ばかりの、救いようのない痴れ者だった。

数ヶ月前に両親にアーリーを買ってもらって以来、表沙汰になれば逮捕されても文句は言えないようなこと繰り返していた。

一応、アーリーの機能・性能に関する不審な点を説明するだとか、悪用されている可能性があるからとかそんなご大層な建前は掲げていたけれど。

何を言ったところで不正アクセス、情報の盗み出し、クラッキング……などの行為が方に背く行為である事に何ら変わりはない。

それらの行為の標的は専ら新天寺社に関連するもので、当時から既に新興企業とは思えない程に堅牢なセキュリティだと有名だった。それこそ、通販で少し商品を卸しているだけの末端中の末端でさえも新天寺社独自の技術を提供し、保護するほどの徹底ぶり。

それでも末端の防衛機能が本社に匹敵するなんて事はあり得る筈もないし、中にはシステム管理を怠る者や、単純にソフト/ハードを問わず機械関係に疎い人だっている。

そういった粗を見つけ出し、情報を覗き見る。更にはそれらの情報がどこに転送されているかといった点についても確認し、次なる標的を定める。

それと並行して徐々に厳しくなる守りをかいくぐる為にアーリーに求めるスペックがどんどん高くなっていき、その要求を満たすだけの性能を発揮させるべく自らアーリーに改造を施した(それも初回起動時の同意事項によって禁止されている改造ばかり)。

その過程で私はアーリーの機能の不審な点を幾つも発見してしま
った。アーリーの無線を利用した独自のネットワーク、それを維
持し、情報を送受信する為のシステムが食っているメモリが不自然
に大きいなんていうのがその代表例。

気がつけば私はアーリーに秘められた謎に魅入られていた。

同時に自分がどこまで行けるのかを試してみたいという欲求に支
配されていた。

はつきり言つて、ゲーム感覚だった。

そんな若気の至りの暴走は、ものの見事に不正アクセスを見破ら
れた上に逆探知され、おまけに個人情報と思いつき晒された事で
終わりを迎えた。

幾ら相手がクラッカーとは言え、個人情報を漏えいさせた新天寺
社は大なり小なり非難される事になった。けれど、それ以上に大
衆の関心は齡12歳にして新天寺社のセキュリティの幾つかを破っ
てみせた私へと向けられた。

秋一に言わせれば「新天寺社が上手く向けさせたんだろ。未成
年だからって許されると思うなよって殺一警百だ」とのことだけ
ど、過程はどうあれ私は間違つた事をしていて、それが公になった。
その日から、私を取り巻く環境は一変した。

初めに、あまり話す事のなかつたクラスメイトは私を犯罪者と蔑
むようになった。仲の良かった友人たちと徐々に疎遠になってい
った。それまで大人しい優等生として私を見ていた先生たちの態
度も変わった。

影響は学校だけに留まらなかった。

今まで私の事を可愛がつてくれていた近所のおじさんやおばさん。

私とは別の中学に通っている小学生時代の同級生。

そして、両親も。

当然の報いと言えばその通りなのだけれど、私は居場所を失つた。
そんな私をゴシップ誌の記者だとか、下世話な話を好む人達が更

に追いかけて回した。

酷い時には自宅の前や学校の敷地内にまで押しかけて来る始末。

そんな、どこにも逃げ場のない私を救ってくれたのが秋一だった。ある日、無断で学校の敷地内に入ってきたカメラマンとりポーターが

「悪いことをしている自覚はなかったの？」とか、

「アナタのせいで何かしらの被害に遭った人がいるのは分かっているの？」とか、

そんな風に私に詰め寄ってきた。

普通は無許可での立ち入りなんて認められる筈がないし、取材なんてもつてのほか。

でも、私を庇い立てする事に抵抗があった先生たちは無視を決め込んでいた。生徒たちは学年を問わず遠巻きからその様子を見守っていた。

カメラマンが私の進路を塞ぐように立ちただかり、後ろからリポーターが質問・取材と言うよりは罵倒に近い言葉を浴びせる。

進む事も退く事も、反論する事も出来ずに私はただ俯いていた。やがて無数の視線と糾弾に耐えかねた私が「もう放っておいて」と叫びそうになった瞬間、頭上からバケツの水をひっくり返したような雨が突然に降り注いだ。

と言うよりも、それは文字通りひっくり返されたバケツの水そのもので、バケツをひっくり返したのは他ならぬ秋一だった。

「あー、悪い悪い。でも不可抗力だから許してくれ」

なんて言いながら悪びれる様子もなく彼は2階から降りて来て、私とりポーターたちの目の前へとやってきた。

二人の矛先は私から彼の方へと向けられた。

このビデオカメラは水に弱いのにどうしてくれるんだ、と憤る力

メラマンを前に秋一はひるむ様子も恐れる気配も見せない。
そして、あまりにも平然とした、そして毅然とした態度で

「そんなもん幾らでも弁償しますよ。 100万くらいですか？
それだけでわざわざ不法侵入の証拠を犯人から提供してくれるんなら安いもんだ。 こんな無作法な取材をやらかすところを見るとあんたらワイドショーの芸能レポーターとかその辺だよな？ 最近はその手の番組は先細りも良い所なのに、下手に問題を起こして大丈夫か？」

と、彼らをいとも簡単にあしらってしまった。

すくすく帰る彼らを見送った秋一は人目もはばからず、呆れるほど堂々と濡れ鼠の私の手を引いて学校を後にした。 まだ昼休みの最中で、2時間ほど授業が残っていた。

それから数分後、私は秋一の家でお風呂を借りていた。
更には服を借り、何故か夕飯まで頂いて、彼の母親と同じベッドで寝るに至った。

どうしてそんな流れになったのか私にも分からない。

ただ、家にも休む暇もなかった私にとって事情を知った上で何も詮索せず、

「千里ちゃんはお漬物いる？」とか、

「秋一が女の子を家に連れてくるなんてね、うふふ」とか、

どこまでも呑気な秋一のお母さんの優しさがひたすら嬉しかった。その日を契機に私の日常は少しずつ平穏を取り戻すようになっていった。

表向きには。

秋一の家にお世話になった日から数カ月が経ったある日のこと。

改造されまくっているのは相変わらずながらも、用途はがらりと変わって、純粹にゲーム機としての役目を全うするようになっていた私のアーリーに一通のメールが届いた。

見た事のないアドレス、ユーザー名だった。恐る恐るメールを開く。

真っ先に目に飛び込んできたのは”新天寺社”の4文字。

思わず息を飲んだ。嫌な汗が噴き出し、気分が悪くなるのを堪えながら恐る恐る本文を読み進める。

まずは何の変哲もない自己紹介。メールの送り主は大須 冬彦というらしい。

新天寺社のセキュリティ関係の業務に携わっているそうだ。名前を見る限り、まず間違いなく男の人だろう。

業務の内容を考えれば私の事を把握していても何らおかしくはない。

読み進めて行くと彼はさっそく本題を切り出していた。

色々と持って回った表現をしているけれど、要するに手を貸せということだった。

外国だと腕の立つハッカーは企業に雇われる事があるという。

この話はつまり、そういうことなんだろう。

たとえばアプリのバグやシステム上の欠陥を指摘し、可能ならば改善方法も添えてメールで送る。その為ならばオープンでないものでもソースに触れる権利を与える。

報酬もきちんと用意されていた。

時と場合と契約内容によっては月数十万の収入を得られる程の好待遇。

新天寺社、ひいてはアーリーはこれまでのプログラムの系譜から完全に独立した独自の技術・規格を採用している。

たとえば私のような子どもであっても、技術を持っているなら野放しにはしたくないのだ。

そして、価値あるものには相応の見返りを。報酬は確かに魅力的だけれど、あの頃の事を思うと素直に飛び付く気にはなれない。

秋一に相談しようか？

彼は私とは違う方向に頭の回転が速い。

多少事情を伏せてでも相談すれば1から3、4の事を察して、7を想像して、10くらいを仮定した上でくつかの解と意見を授けてくれるだろう。

けれど それはつまり、私の事情に秋一を巻き込むのと一緒に訳で。

ふと、添付ファイルの存在に気付く。ウイルスの可能性を懸念しながら、恐る恐る開いてみる。

秋一と秋一のお母さんと私が仲良くファミレスで食事をしている画像だった。

ウイルスだったらどれだけ良かったか。

その日から、私は新天寺社の狗になった。

大須 冬彦に指示されるがままに色んなソースに手を加えた。時には新天寺社直々の依頼を受け、それもこなしていった。

中には違法すれすれ、というか倫理的には完全にアウトのものも少なからずあり、そういう仕事をこなす度に秋一を裏切っているような気がして胸が痛んだ。

けれど、秋一に話す訳にはいかなかった。何度か良心の呵責に耐えかねて秋一に相談しようかと悩んだ事もあった。

でも、あの添付ファイルが暗に意味している事を想像すると、相談なんて出来る訳がなかった。

あの時、秋一はまだ赤の他人だった私を守ってくれた。だったら、今度は私が秋一を守らなければ。

洞察力・直観力・想像力と三拍子揃って妙に鋭い秋一に気取られないようにするのはきつと大変だろう。

今から距離を置いた所で、そこから何かを嗅ぎつけてみせるに違いない。

でも、だからこそやるしかない。

秋一の前では笑顔のままに、彼の厚意に背き続けよう。

そう決意した筈なのに、今、私の目の前でついさっき初めて会ったばかりの、メールでは何度もやり取りを繰り返した男性、大須冬彦にその秋一がドロップキックを見舞っていた。

16話 突っ込みにおいて重要なのは相手との距離感。どぎつい突っ込みを見舞

「いつつう……いきなり何なんだ、君は!？」

「お前が大須 冬彦で間違いないよな？」

蹴り飛ばされた恨みを込めて、床に尻を着いたまま俺を睨む大須
冬彦を仁王立ちで見下ろす。

すぐ傍で千里が何か言いたそうに口をパクパクさせているが、今
は取り合っている場合じゃない。

とにもかくにも、大須 冬彦と威圧するように向かい合う。

「……ずいぶんな挨拶だな、羽原 秋一」

「やっぱり俺のことも知ってたか。 さっきのワクドでのやり取り
を聞いてか? それとも

お前のアーリーのふざけた特殊機能でか？」

と言いながらも、どれも不正解であろうというのは概ね理解して
いる。

名前を知っていることにこれと言った反応を示さなかったのを見
た大須 冬彦は少しの間、うろんげな目つきで俺を睨む。

が、やがて視線を千里の方へと逸らしたままゆっくりと立ち上が
った。

「話したのか？」

「ち、ちやいます。 私は何も!？」

「それは千里を俺や母さんを知っているぜって脅してた事か？」

相変わらず自分でもふてぶてしいと思わざるを得ない態度を貫く
俺。

千里は「何で知ってるん？」とでも言いたそうな驚愕の眼差しを俺を見た。

対する大須 冬彦はやっぱりか、といった様子で俺と千里を交互に見比べている。

俺のすぐ傍で夏芽が、

『兄さんがそんなことする訳ないでしょ！？』

と憤っているが、今は相手をして仕方がない。

「別に千里が話した訳じゃない。ただ、俺も別経路でアーリーの裏側を見る羽目になって、アンタを探していたらたまたま千里が一緒にいたってだけの話さ」

「ほう、それだけの情報で君は僕と彼女の関係を理解したと言っのかい？」

「大体、な。新天寺社絡みの悩みがあれば千里は俺に相談しない筈はないんだよ」

けれど、何かしらの強制力を伴う口止めをされているのだとすれば話は別だ。

で、友達の少ない千里に対して効力のありそうなものと言えば家族が俺くらいである。

……何故だか言っつて悲しくなってくる話だが。

「まあ、その件についてはさっきのドロップキックで許してやるとしてだ。ここからが本題なんだ。大須 冬彦、なんで俺がお前の名前を知っていると思う？」

「そんなもの分かる訳がないだろう」

幾つかの可能性は頭にあるが、どれも仮説の域を出ないと付け加

える大須 冬彦。

まあ、こいつが持っているであろう情報からならそんなもんだらう。千里が俺についてペラペラ喋るとも考えにくいし。

「なあ、夏芽。お前のその能力のこと、お前の兄さんは知ってるのか？」

『ええ……ええ、知っているわよ』

「……夏芽を知っているのか？ いや、ダイブ中の夏芽が視えるのか？」

一言で何かしら察したらしい大須 冬彦は俺の視線を頼りに夏芽のいる、しかし俺以外にとってはなにもないに違いない一点を見つめる。

そして、そこを見つめたまま暫く黙り込む。

『ねえ、秋一。兄さんはどうなってるの？』

「千里、お前のアーリーを大須 冬彦に向けてくれないか？」

「え、あ、うんっ」

慌てながらも、慣れた手つきでアーリーを取り出す千里。

それを言われるままに大須 冬彦へと向けた。

意図を察した夏芽はすぐに姿を消した。彼女の兄は未だ虚空を凝視している。

当然だが、今は俺の目にも何も映らない。

「で、千里？」

「何？」

「そいつに何か妙なことはされなかったか？」

「何かっていうと、秋一に危害を加えられるのが嫌なら俺のアレを啜」

大須 冬彦はこれでもかと言わんばかりに盛大にむせた。

「すとおおおおおおっぶ!!!」

「えゝろんっ!？」

思わず千里の頭を引っ叩いた。

引っ叩きついでに大須 冬彦を視線で射殺さんばかりに睨みつける。

視線の意味を察して、ちぎれんばかりに首を横に振っている。

その反応にウソ偽りはなさそうだ。

『ちよっと、今物凄い勢いでカメラが揺れたんだけど、何があったの?』

「いや、そのアホに教育的指導をしていただけだ」

『いきなり画面が揺れると結構気持ち悪いんだからちよっとは考えなさいよ』

「あー、はいはい。 そいつはわるうござんしたねえ」

むすうと頬を膨らませる夏芽。 現実の人間では到底不可能なほど膨らんでいる。

つくづく面白いな、A R。

悪戯心で頬をぶにぶにとつついてみる。 が、所詮はA R。 触れることは出来ずスカスカとほほにめり込んでしまう。

「おい、人の妹にべたべた触るなよ?!」

「そいつはもう手遅れだな。 愛千橋ですやすや眠ってる可愛らしいお顔に……」

「ぶっかけた、のか……?」

「んなわけあるかああああ!」

「んごあつ!？」

思わず固めた拳を振り抜いてしまった。かわすどころか反応すら間に合わなかった大須 冬彦はまたしても盛大にすっ転ぶ。

どうやら俺には何かのはずみで突っ込みがてらに手が出る悪癖があるらしい。

幾ら気に入くない相手だからって初対面の年上相手でも遠慮なしは流石に不味いよなあ……まあ、発言が大概アレだったから致し方ない面もあるのだが。

「くっそ、デスクワーカーを気軽に何度も殴るなよ……」

頬を押えたまま、のろのろと起き上がる。

「それで、君はわざわざ僕を殴る為だけにここまで彼女を追いかけて来たのかい？」

「俺はな。殴ったらすすきりした。でも、本当にアンタに用があるのは夏芽の方だ」

夏芽の方を指差すと大須 冬彦もつられてそっちを見た。

今はカメラ越しに外の様子を覗いている訳じゃないから、夏芽の視線は少し彼からずれているがひとまず二人は向かい合っている。

「ほら、夏芽」

「うん。兄さん、聞こえていないかも知れないけどさ……ホントはさ、ちよつとだけ嬉しかったんだよね。兄さんが私のために、っていうか入院費のために悪いこととしてでもお金を稼いでくれるのが……。でも、やっぱりああ言うのは気が引けるよ。別に誰かを傷つけた訳じゃないけど、それでも大量破壊兵器のシミュレーションとか、アーリー所持者を不正に監視するだとか、そんなお金

の稼ぎ方して欲しくない』

ゆっくりと、慎重に、言葉を選びながら話す夏芽。

割と思いついた事をぼんぼん口にするイメージの彼女としては少し意外な態度のように思える。　が、考えてもみれば相手は自分のために良心をかなぐり捨てた実兄。　方法が間違っていたとしても、その意思を安易に否定することは出来ないのだろう。

そして、だからこそ彼女は大須　冬彦を止めたいのだ。　その気持ち嬉しいからこそ。

けれど、彼女の言葉はきつと彼には届いていない。

きつと今までも何度も喉を枯らして叫んだことだろう。

それでも彼女の言葉は結局、大須　冬彦の鼓膜を、心を震わせるには至らなかった。

見えない、聞こえない、触れられない。

その辛さはやっぱり俺には想像すら出来ないもので。

だからこそ、出来る限り一言一句違う事なく彼女の言葉を伝えた。俺が夏芽の口調で喋るのはいささか違和感を覚えるけれど、それでも彼女の言葉をそのまま伝えた。

『だからお願い。　私のことは良いから、もうこんな仕事は辞めて欲しい』

一呼吸置いてから、きつぱりと告げた。

そして、全てを聞き終えた夏芽の兄、大須　冬彦は

「……言われなくてもそのつもりさ。　今日で僕は新天寺社から抜けるつもりだった」

いともあっさりとそれを受け入れた。

「伝言役引き受けておいてなんだが、アテはあるのかよ？」

「アテ、というの？」

「まず昏睡状態の夏芽の入院費とか、次の仕事とかだよ」

どんな世界でも、基本的には人間は正しく生きていきたいものだと思う。

何故それが出来ないかと言えば、要するに世のしがらみゆえだ。

たとえば勤めている会社の内部の腐敗。

摘発したくても、社内での人間関係や雇用の喪失を恐れてそれが出来ない。

その間に犯罪の片棒を担がされて、自ら職を辞することすらも出来なくなってしまう

……なんて事はゴマンとある話。

「次の仕事なんて考える必要もないさ。 塀の向こうは衣食住が保障されている」

「税金なんだと思ってるんだよ……いや、そんな事より、夏芽はどうするつもりなんだよ？」

その問いを発した俺に向かって、大須 冬彦は会心の笑みを浮かべ、答えた。

「問題ないさ。 どうせ今日、目を覚ますことになるんだから」

自信に満ち溢れたその態度から、俺は一つの仮説をひねり出す。

「……ってことは、千里を呼びつけたのはその為か？」

「察しが良いね。 彼女は僕なんかよりもずっと優秀だし、年の頃も近いからね」

「……？」

納得し合っている俺と大須 冬彦の隣で千里が首を傾げる。
頭は相当良い筈なんだけど、昔から不思議とこっという面には鈍い。

「でも、どうやって目を覚まさせるんだよ？」

「そりゃあ勿論、脳にアクセスするに決まってるじゃないか」

「は？」

何を言っているんだ、こいつは。

「何を言っているんだ、こいつは」

「そう言いたくなるのが分かるが、話は最後まで聞け」

咳払いをしてから、大須 冬彦は改めて口を開く。

「夏芽の才能については結構昔から知られていたから、データはそれなりに充実しているんでね。能力の使用中は本体の意識が無くなる事も把握している。ただ、本当なら自力で覚醒出来る筈なのに、それが出来なくなつたみたいでな……」

「過去に覚醒時に採取した脳波、でいいのか？ のパターンを分析してそれに似た電気信号を流してやれば覚醒するかも知れない……なんて言うんじゃないだろうな？」

「察しが良過ぎる。君はエスパーか？」

「まあ、エスパーみたいなものではあるけどな」

肉眼では見えない筈のARが見えるし。

しかし、生きた人間の脳に都合良く電気信号を送り込む事なんて出来るのだろうか？

脳と言えばまだまだ機能の解明されていない部分が多い上に、ものすごくデリケートな器官なのに。

とは言え、大須 冬彦は夏芽の実兄であり、仮にも千里相手に知恵比べで勝った男。

何の勝算もなしに、ただヤケになっているだけとは思えない。

「で、その覚醒のための手術だか実験だかは愛千橋でやるのか？」

「ああ。既に話も通してある」

さも当然のように言うが、その為に水面下でどれだけの苦勞を重ねて来たのやら。

下手をすれば夏芽の命に関わるような行為だ。そう易々と協力を得られるものではないだろう。

病院全体の許可なのか、物好きな医者一人を丸め込んだのかは定かでないが。

そこまで考えて、ふとひとつの疑問が脳裏をよぎった。

「……なあ、夏芽の能力使用時のデータってのは誰が何のために収集していたんだ？」

「新天寺社……より正確に言えばその前身に当たる組織だよ」

「だとしたら、新天寺社は今回のアンタの計画については関与していないのか？」

「当然だろう。失敗したら貴重なサンプルが失われかねないんだから」

という事は大須 冬彦は新天寺社に盾ついているも同然ってことか。

腑に落ちなかった幾つかの点について合点が行った。

「だとしたら、アンタの計画はきつと新天寺社にバレてるから急いだ方がいいかもしれないぞ」

「……そう思う理由は？」

「ちょっと前に愛千橋の10階で新天寺社の回し者っぽい女に襲われた」

俺の言葉を聞いた大須 冬彦は「そうか」とだけ答え、エレベーターの方へと歩きだす。

歩きながら、ちらりと俺達の方を見て顎をしゃくってみせた。

ついてこい、ということだろう。

俺と千里は一旦顔を見合わせてから、どちらともなく彼の後を追う。

「巻き込まないために隠し続けてきたのに、どうして首を突っ込んでくるかな？」

呆れた風な、非難がましいような、しかしどこか嬉しそうな表情で俺をねめつける千里。

その視線から目を逸らさず、じっと千里の顔を見つめ返す。

「不可抗力みたいなもんだ、仕方ないだろ？」

「はあ、こつちの気も知らんと。正義感かただのお人好しかは知らんけど、考えなしに突っ走るのはええ加減にしいや。ホンマに

アホやねんから、アホーアホー、ドアホー」

「酷い言い草だな、オイ。それに後先云々をお前に言われたくないぞ？」

お返しとばかりにため息をつきつつ、冷めた目を向けてやった。

一瞬、怯む気配を見せるがそれでもじっと俺を睨み続けている。

「……まあ、なんだ。何かあったら今度からは素直に相談しろよ。

お前が一人で抱え込んだって解決出来ない事の方が多いんだから

「わ
……うん」

ようやく俺の気持ちを察してくれたのか、視線を床に落とし、うなだれる。

おおかた、結果的に心配させてしまった事に落ち込んでいるんだろうが。

何も言わず、肩を落としたまま大須 冬彦の後を追う千里。

「でも、気持ちはありがたく受け取っておく」

沈黙に耐えきれなくなった……という訳ではないが、そんな言葉が口について出た。

ついでに千里との距離をつめて、頭をなでる。

「子ども扱いせんといて」

「子ども扱いされたくないんならつまんねえ事で落ち込むなよ」

「……どうせなら頭よりもお尻をなでて欲、じいっ!？」

言い終えるよりも早く、千里の脳天めがけて鉄槌打ちが落ちた。千里はたまらず頭を押さえて屈み込む。まったく、少し優しくするとすぐこれだ。

「黙れ、変態」

『アンタ達……どんな会話してるのよ?』

俺の声しか聞き取れない夏芽が横で呆れ返っている。

「どんなも何も、なんて事のない友人同士のおふざけだよ」

『……ふーん』

本当に？ とでも言いたそうな疑わしげな目を向けて来る。
が、今は彼女に構っている時ではない。
うずくまって頭をさする千里に手を差し伸べる。

「ほら、早く行くぞ」

「……うんっ」

千里は本日最高記録の笑みを浮かべて、俺の手を取った。

調子に乗って腕を絡めて来た上に当ててんのよとばかりに胸を押しつけて来たので、とりあえずもう一発殴っておいた。

「仲睦まじいのは結構だが、早くしろよ」

エレベーターの前で、呆れ果てた様子で俺達を眺める大須 冬彦。
その表情は不思議とARでアニメ絵の夏芽のそれとそっくりだった。
た。

17話 一度でいいからあの歩道の屋根の上に登ってみたいと思う人は結構いる

「なんで逃げてても逃げててもすぐに見つかるのよ!？」

かれこれ3度目になる追走から逃れながら、思わずそんな悲鳴を上げた。

1度目は通りの電機屋に飾ってあった洗濯機に頭から叩き込んで這い出そうともがいている間に逃走。

パンツ丸見えで下半身だけがばたと暴れる姿を見た時は正直済まないと思った。

2度目は消火器で目をくらし、怯んでいる隙にとんずら。巻き添えを食ったうどん屋の店主には後できちんと謝っておこう。

そして、これで3度目。

どう言つトリックで私を見つけ出しているのか、はっきりとは分からない。

いや、正確に言えば幾つかの推論はあるし、額のゴーグルにタネがあると見て間違いないとは思っている。

けれど、迂闊にそれを潰すことで絶対に逃がすまいと意固地になった彼女が何をしてくるか。それを想像すると下手な手は打つべきでない、と私の警戒心が告げている。

あくまでも私に意識を向けさせて、私だけを追いかけさせる。

奇天烈な才能は恐ろしいが、それ以外は小娘と言って差し支えない彼女を相手にする上で、この選択肢は決して間違っていないはずだ。

とは言え……散々でんでんタウンを駆け回っていい加減疲れた。

対するRUMIコスの彼女は怒りで疲れが飛んでいるのか、たんにそうという体質なのか、散々走り回っているにも関わらず微塵も疲労の色を見せない。

「で……っりゃあああ!!」

それどころか、相変わらずの馬鹿力で近くに止めてあったスクーターをぶん投げた。

「ちょ、ええ!?!」

時速100キロ近い速度で飛んできたそれをとっさに身を伏せてかわす。

スクーターは私の数メートルの後ろの信号待ちのトラックの側面に直撃した。

眉に皺を寄せた強面の運転手がドアから顔を出し、胡散臭そうに私達の様子を伺っている。

憤り半分、呆れ半分、それと少しの怖いもの見たさといった感じの表情だ。

「ごめんなさい!あとで弁償するから!!」

必要経費として認められたら。

運転手に向かって叫びながらも背を向けて車道を全力疾走。自動車はこっちの事情なんてお構いなしに走っている車道を走るのははつきり言って危険極まりない。とは言え、歩道を通ると見境なしの彼女が一般人を撒きこむ可能性がかなり高い。ついでに言うところ流石に車にはねられれば動けなくなるだろう、という思惑もあったりなかったり。

「うーん、どうかして無力化出来ないものかしら」

このまま追いかけて続いていると私の方が先に参ってしまう

可能性がある。

無駄だらけの身のこなしと過剰とも言えるパワーを思えば先にガス欠を起こすのは間違いなく彼女なのだけれど、一方で彼女は追う側であり私は追われる側であるのもまた事実。

彼女は彼女の好きなタイミングでインターバルを挟める。

飲みたい時に水分を補給し、必要とあれば食事だつて取れる。

些細なようでも、積み重なっていくとどこかで私と彼女の持久力の差を覆されかねない。

……と言うか、正直に言うところとお手洗いにいきたい。

「あんまり女の子相手に荒っぽい事はしたくないんだけど……」

だからこそ、病院で気絶させた時は手足を縛っておくだけに留めておいたのだけれど。10階から叩き落としたのは不可抗力なのでノーカウントで。

こつこつ執拗に追いかけて回されるようでは致し方ない。即座に踵を返して歩道へ飛び込むと、すぐ近くにあった肉巻きおにぎりの屋台？から包丁を一本拝借。

バイトと思しき女の子の罵声を聞き流しつつ、改めて車道に戻る。既に目の前にまで迫っていた少女は自動車のドアを掲げている。いつぞや深夜アニメで見たような構図だ。

まあ、私はそんなものに正面から突っ込むほどもうろくしていないのだけれど。

跳躍、頂点に達すると同時に歩道の屋根を支える柱を蹴ってもう一度跳躍。

彼女の掲げるドアを軽々と飛び越え、着地すると同時に彼女めがけて特攻する。

振り返ろうとする彼女の首筋めがけて、病院で奪い取ったつきりのスタンバトンをかざした。

「うぐ……」

竦み、手にしたドアを落とす。

が、今度は気絶することなく、萎縮する筋肉を無理矢理動かして腕を振り回した。

子どもが駄々をこねて暴れているような、攻撃というにはあまりにも稚拙な動作だ。けれど、電撃を浴びながらではそれすらも即座に出来るものではない。

もっとも、そんな雑な攻撃、油断していたとしても視界に収まっている限りかわせない私ではないのだけれど。

「……電池切れかしら？ 病院では気絶したのに」

「ボクにおんなじ攻撃は2度通じない」

「アンタは聖闘士か!？」

「?」

あ、首を傾げられた。そうか、今の子には通じないのか……。

と言つても、私だつてよく覚えていない、というかそもそもリアルトタイム世代じゃない。

……そんな事はどうでも良くて。今は彼女をあしらう事だけを考えよう。

スタンバトンを構えてもう一度距離を詰める。通じないと言つても流石に喰らえば痛いし、竦みもする電撃を警戒して、彼女は半歩飛び退く。

攻撃を受けようと構えている両手に向かってバトンを振ると、電撃を警戒して両手を引っ込めた。

そこにすかさずもう一方の手の包丁を突き出す。

狙うは彼女の顔面。より具体的に言つならば眼球。

「ッシャー!」

「ッ!？」

私の狙いに気付くよりも早く、彼女の手は眼球を庇うべく動く。顔を守るといふ動作は半ば無自覚に行われる動作であり、それ故に早い。

切っ先が届くよりも先に、その双眸は腕によって隠された。代わりに、彼女の腕に包丁が深々と

「うそお……」

突き刺さらなかった。

刃は筋肉を覆う厚さ数ミリの皮膚を貫いただけに留まり、彼女の堅牢な筋肉を傷つけるには至らなかった。

申し訳程度に、傷口から赤い雫が垂れている。

自分でも何を言っているのか理解出来ないけれど、それは間違いなく現実の光景。

もうやだ、この筋肉お化け。

思わずそんな嘆きを脳内に反響させながらも、しっかりスタンバトンを添える。

「ぐう……?」

と、毎度の短いうめき声。ただし、効果はいま一つ。

ふらつく彼女に背中を向けて、一連の乱闘を見物していたギャラリィの中を全速力で駆け抜けた。

物陰の隠れて一息吐きながら、思う。

あー、くそ。あの子から拳銃ひったくっておけば良かった……。

彼の持っていたH&K P2000は特別な銃でも何でも無い。

が、そもそも、武器として見た時、銃に特別でないものなんて一つも存在しない。

火薬の力を借りて鉛玉を飛ばすだけの単純極まりない構造。けれども、その単純な武器を手にした人間はあらゆる獣を、彼の爪や牙の射程の外側から一方的に穿ち、貫き、絶命させる。丸腰では犬や猫の相手さえも危ういというのに。

彼女の重量から予想される筋肉の質と量でも銃弾が通らないというのはあり得ないだろう。

足に一発お見舞いしてやれば、それでも暴れるようなら四肢を片っ端から潰していけばいずれは無力化出来るだろう。 もっとも、そこまでやると命の保証はしかねるけれど。

一応、警察から拝借するのも手ではある。 が、私や私の属する組織のことは警察の末端には知らされていないし、仮に知っているも悠長に説明している時間があるかどうか。 かと行って警察相手に強盗まがいのことをするのも気が引ける。

「はあ……さて、どうしたもんかしらね」

と、首を捻ってたところで妙案が浮かんでくれる気配は微塵もなかった。

18話 世界観が現実に近いと警察の存在が凄まじくめばちこ

再び愛千橋病院。

看護士の女性の話によると、コスプレした女性二人によるちよつと常識はずれな乱闘があったらしく、病院内は色めき立っていた。

が、その割には警察の気配がしない。

聞くところによるとRUMIコスの子は10階から叩き落とされたらしいが、それだけ派手に暴れて誰も警察を呼ぼうとしないというのは少々不自然だ。

「……本当に新天寺社の息のかかった施設なんだな、ここは」

「いや、正確に言えば息のかかった人間が何人かいる、医療関係の機材やカルテの管理なんかでそれなりに利害関係がある程度だ。

警察がいないのはどっちかって言うと余所の判断だろうな。どんな力が働いて動けないのかは知らないがな」

頭の中は妹のことではいっぱいらしい。

その受け答えからは警察に対する無関心が透けて見えた。

俺としては変なタイミングでやってこられてもそれはそれで具合が悪いから、もう少し気にとめておいた方が良さと思うのだが。

「なあ、秋一。ここって脳の手術を出来るような大それた設備があるような病院だっけ？」

なし崩しに通天閣からここまで手をつないだままだった、そして今も手を握っている真つ最中の千里がそんな疑問を口にする。

が、病院の設備のことなんて俺に分かる筈もない。

「……どうなんだよ？」

「問題ない。脳の手術と言ってもただの電磁波照射だ」
「ただの、ねえ」

だとすれば、わざわざ千里の力を借りようとした理由が説明出来ない。

あと、それは手術とは言わない気がする。

なら何というのかと訊かれても答えられないので、いちいちつく程の事でもないだろうが。

大須 冬彦は間違いなく夏芽の兄で、夏芽のことを誰よりも想っていた。

その事実だけあれば十分だ。何の意味もなく、何の勝算もなく、ただ自棄になつて肉親の命を危機に晒すような真似はしないだろう。
大須 冬彦がエレベーターのボタンを押す。

ちょうど1階に止まっていたエレベーターのドアが静かに開いた。患者や看護師たちの騒ぎを尻目に俺達4人 と言つても一人は俺にしか見えないのだけれど はエレベーターに乗り込み、10階を目指す。

ドアが閉まり、静かに昇り始める。

「……今から、夏芽の手術の詳細を伝えたい」

ゆっくりと上昇を続けるエレベーターの中で、大須 冬彦が静かに口を開いた。

「夏芽の手術に使う機材は出力、照射位置の調整等にARネットワークを利用して行っている。で、通常はそこまで多量の演算能力は必要ないんだが、何せ夏芽が眠ったままになつている原因は通常の人間の脳の機能としてはあり得ないもの。だからいざとなつたら中止する事も視野に入れて、いろんなケースに対応できるようにしておきたい」

「ああ、だからストフェスにフトモンの大会を重ねてまで演算能力を確保したのか」

少しでも妹の安全を確保するため。

動機としては納得すべきなのか突っ込むべきなのか微妙な線だ。

そもそも、大須 冬彦のような役目を担う、どちらかと言えば組織の暗部の人間にどの程度の権限があるのかも定かでないし。

「そういうことだ。 ネットワークの無断利用になる以上、それに勘付かれた時に外部から干渉を受けないように演算をこの一帯のエリア内で完結させたい」

「それじゃ、私はエリア外部からのアクセスを出来ない状態にすればおk?」

「いや、それは僕がやっておく。 君はエリア内のセキュリティの無効化を頼む。 ……あと、羽原 秋一。 君はそうだな、夏芽と一緒に病室の前で見張りでもやってもらおうか」

「まあ、そんなところだよなあ」

俺は千里のようにネットワークに侵入して云々なんて大層なことは出来ない。

かと言って何か特別な事が出来るかと言えば特にそんな事もなし。それに、いて損は無役どころには違いない。

「もちろん、ただ漫然と見張りを押し付けた訳じゃない。 君の目なら……」

一旦言葉を切った大須 冬彦は、懐から取り出したアーリーを弄って何かしらのアプリを起動させた。

瞬間、俺の目にこの病院の間取り図と思しき映像が浮かび上がる。フロアマップだけであれば特に驚くべきものでもない。 が、問

題は複数の丸印がフロア内を歩き来しているのが表示されている点だろう。

「青は病院の関係者、赤は患者、部外者は黄、新天寺社の関係者は緑で表示されている」

「へえ、便利だな。もしかして病院内のカメラか？」

「正解。もちろん、データのネットワークへの送信もこういう形での利用も病院には無断で行われている。だから、こんな事も出来る」

もう一度、大須 冬彦が端末を操作する。

1階のエントランス付近を見下ろす画像に切り替わった。

「なるほど、確かに見張りにはうつつつけみたいだな」

「時間があればもっと有効なアプリを用意してやる事も出来るんだが」

「いや、これだけで十分」

大須 冬彦のアーリーを受け取り、ポケットにねじ込んだ。

「操作方法は分かるか？」

「いざとなったら夏芽に頼むから大丈夫」

『なんか良く分からないけど頼まれた！』

本当に何も分かってなさそうに得意気にふんぞり返る夏芽。

その様子が少しおかしくて、思わず嘖き出しそうになってしまう。

「ああ、頼りにしてるぞ、夏芽」

「おいこら、僕に見えないからって妹に変なことするんじゃないぞ?!」

「しねえからちょっと落ち着け、シスコンマスター」

声を荒げる大須 冬彦を苦い笑みを浮かべつつなだめる。

「酷いわ、私というものがありながら妄想女に浮気するなんて……！」

「変なタイミングで便乗してふざけるんじゃないよ!？」

いい加減付き合っのが面倒になった俺は二人の頭を軽く引っぱたいた。

その直後、10階に到着したエレベーターのドアが開き、俺達を待ち構えていた協力者と思しき人物が頬をひきつらせる。

「ふむ、なにやら愉快なことになっているようだね」

その人物の正体は先ほど俺に夏芽の病室を教えてくれた初老の医師だった。

その言動や態度を見て、脈絡もなく思った。カエル顔じゃないのが惜しいな、と。

簡単な挨拶のあと、初老の医師の立ち会いのもと、夏芽を覚醒させるための手術が始まった。

千里は専用のアーリーを構えて、大須 冬彦はもう一つ持っていたらしいアーリーを手にネットワークへと干渉すべく作業を開始。医師は電磁波を照射する装置にあれこれとデータを入力している。俺はと言えば、先にも述べた通り、やることがないので病室の外の椅子に腰かけて右目に映る風景を眺めていた。

「なあ、夏芽？」

「ん、なに？」

「君は目を覚ましたらどうするんだ？」

預かり物のアーリーを操作しながらそんな事を尋ねてみる。

我ながら漠然としていて答えづらい質問だとは思うが、別に答えを求めている訳ではないからさしたる問題ではない。

そういつた意図をきちんと汲み取ってくれた夏芽は下あごに人差し指を当てたまま、視線を虚空に彷徨わせて考え込むような仕草を見せる。

『よく分からない。そもそも自分が昏睡状態にあるとか言われてもピンと来ないし、目を覚ました後のアタシを取り巻く環境がどんなものかもよく分からないもの』

「……そりゃそうだよな」

夏芽にだって昔は友達くらいいただろうし、好きな異性もいたかもしれない。

けれど、彼女は正確な期間は知らないが、それなりに長い間眠り

続けていたんだ。

夏芽の周りにいた人達はきつと夏芽とは異なった時間を歩んでいる。

その中に舞い戻る事が不可能だとは思わないけれど、思う以上の困難が伴うのは間違いない。

『まあ、体は物凄くなまってそうだから、リハビリから始めないとね』

と、夏芽は屈託のない笑みを浮かべてみせた。

その笑顔からは目を覚ました後の不安とか、そう言ったものはほとんど感じられない。

「ああ、そうだな」

『そういうアンタは？』

「俺か？ そりゃあ、夏芽みたいな特殊な境遇にはいながら、普通に進学としか言いようがないなあ……」

『ふーん。 高校、どこ行くの？』

「九尾高。 千里も一緒だ」

『へえ……それってもしかして、秋一が「千里は俺がいないとダメだからなあ、ついて行ってやるよ」とか言って同じ高校を志望した、みたいなの？』

「いや、俺は学力相応のところを受けただけだよ。 わざわざランクを落としてまでついて来たのは千里のほう」

俺はもつと良い高校に通えるんだから、と反対したのだが。

千里はそれを「秋一のいないところではじめられて不登校になったら意味ない」と突っぱね、九尾高校を受験した。

そして、さも当然のようにトップの成績を収めて合格を決めやがった。

『そつかあ。私も高校通い直そうかな、一年から』
「…………不安じゃないのか？」

独り言のように呟いた彼女の表情はあまりにも楽しそうで、思わずそんな事を尋ねてしまう。

『んー、不安がないって言えばウソになるけどさ、兄さんが私のために尽力してくれていたのがそれ以上に嬉しかった、かな？』

少し恥ずかしそうにはにかむ夏芽。

その表情のまま、「それに……………」と言葉を続ける。

『新しい友達も出来たしね』

「えっ？」

『えっ？』

思わず間抜け面になってしまったであろう俺に釣られて、夏芽が鳩が豆鉄砲でも食らったような表情になる。

『えーっと、やっぱり厄介事に巻きこんだの…………怒ってる？』

「…………冗談だよ」

彼女は恐る恐ると言った様子で俺の表情を伺っている。

『本当かしら？ 危ない目に遭ったりもしたから意外と根に持っているんじゃない？』

「そこは前もつての忠告があったから文句は言わねえよ。 と言っか、むしろ感謝したいくらいだ」

『感謝？ 何に？』

「さあ、何だろうな」

千里が俺のために頑張っていたのを知れたから、とはこっ恥ずかしくて言えなかった。

『何よお、友達に隠し事するつもり？』

「友達でも言えない事はあるんだよ」

俺の言葉に対して『むう……』と頬を膨らませて抗議する。

AR特有の誇張ゆえのフグ科の生き物かハムスターのような膨らみ加減が少し面白い。

「分かったよ。可愛いふくれっ面に免じて教えてやる。一回しか言わないから心して聞けよ！」

夏芽はすぐに真面目な顔に戻って、俺の目をじっとのぞき込むように凝視する。

内心、「うわあ、コレ滅茶苦茶照れる」と思いつつも、それを表に出さないよう軽く深呼吸し、

「今回の件に巻き込まれたおかげで夏芽と友達になれた。だから、むしろ巻き込んでくれた事に感謝してる」

と、彼女の目を見つめ返して言ってやった。

最初に思った事とは違うが、別にウソは言っていない。

確かに今日会ったばかりで、友達だと胸を張って答えるには付き合いが短すぎる。

けれど、今日夏芽に出会った事で彼女と言う存在を知り、彼女のことをもっと知りたい、その為にも友達になりたいと思ったのは紛れもない事実だ。

彼女が俺と同じ不思議な才能を持っているから。
そして、彼女が身内の悪事に心を痛められる優しい女の子だから。

『……そんな恥ずかしいこと堂々と言わないでよっ!?!』

「言えつつつたのはお前だろ!?!」

『そ、そりゃあ、確かにそうだけど……!?!』

顔を赤くして、両手の人差し指同士をくっつけては離しを繰り返しながらふにやふにやと何やら呟いている。

ARだから顔の赤さが半端じゃない。冗談みたいに真っ赤に茹っっている。

見ているこっちまで何故か恥ずかしくなってくる……。

「まあ、その……なんだ。元に戻ってもヨロシク」

『あ、うん。こちらこそヨロシク』

我ながら初々しくて気持ち悪いことこの上ない。

何とも言い難い微妙な沈黙が流れる。間が持たなくなった俺は居心地が悪い訳ではないが、気恥しい静寂を取り繕うようにアーリーの画面へと視線を戻した。

もっとも今起動しているアプリはAR機能を使用しているから、見張りをする上で必要なものは画面を見なくても目視できるのだが、そこを指摘されないよう、あくまでアプリの機能を試していますといった風を装う。

ワイド・ズーム、映すカメラの変更。フロアマップの表示、階数の切り替え。

アレコレ試している内に、思った以上にこのアプリが多機能である事を理解する。

「これ……透視機能や他のアーリーのカメラも閲覧出来るんだな」

その事に気付いた俺が真っ先に覗き見たのは千里のアーリーのカメラ。

そこには間違いなく例の医師と大須 冬彦の姿が映しだされていた。

ちなみに、透視機能と言うのは他のカメラの映像を引っ張って来て、今俺のいる位置から”もしも壁がなかったらこう見えていたであろう”という景色を推定し、カメラ越しに見ると壁や床が透けているかのように表示される機能である。

つまり、この機能をオンにした状態で今は閉ざされている夏芽の病室を見ると……室内とベッドと医療機器、そして相変わらず床に伏したままの彼女の身体がドア越しにでも確認出来た。 医師や大須 冬彦、千里の姿が見えないのはカメラが彼らの姿を殆どとらえていないからだろう。

視覚的なインパクトは絶大だが、カメラ越しの映像が見えるならあまり必要ない機能だ。

「なあ、夏芽。 こいつの情報解析をしたら……あれ？」

振り返ると、今日一日中ずっと俺の傍らに浮いていたAR少女の姿が消えていた。

突然の出来事で一瞬うろたえる。 が、すぐに彼女を目覚めさせるための手術をしているのだから消えるのはむしろ当然だと察し、冷静さを取り戻した。

そろそろ手術が終わる頃だろう。

何となくそう考えつつアーリーを弄り、病院の外のアーリーのカメラの映像を眺める。

「……あ」

映し出された映像に見知った顔が二つ。

一方はRUMIコスの子で、もう一方はYuilyのコスプレをした女性。

彼女に助けられたのが何時間か前になる。今の今までずっと戦い続けていたのだろうか。

恐るべきバイタリティと言いたいところだが、双方アーリー越しに見てもはつきりと分かる程に疲労の色が浮かんでいた。

それでもなお二人の動きは人間の常識を越える程に鋭く、激しく、荒々しい。

とてもじゃないが、俺なんか首を突っ込む余地なんてないだろう。

そんな事を考えながら常軌を逸した死闘を見守っていると、徐々に両者の力関係と立ち回りが見えてきた。

RUMIコスの子は身体能力が漫画やアニメのキャラクターみたいに高く、その並外れた筋力故の強度のおかげで生身から繰り出される攻撃であればたとえ包丁で斬られたとしてもかすり傷で済んでしまつらしい。

対するYuilyコスの彼女は豊富な戦闘経験で化け物じみた少女と限りなく互角に渡り合っている。より正確に言えば一回一回の攻防は常時Yuilyコスの女性有利で、大局的に見ればRUMIコスの彼女の粘り勝ちといったところだろう。

要するに決定打を与えられないのだからいつか負けると言うだけの話である。

言い換えれば、決定打を与え得る手段があれば勝敗はきつと逆転する。

そして俺なんか考え付くことは戦い慣れているYuilyの格好をした彼女も当然把握していて、なるべく殺さない範囲で、相手を無力化する手段を探っているように見えた。

……その手段の一つが俺の懐にあるものという予想はまず間違つてはいないだろう。

「この見張りという役割を放棄することは多少気がかりではあったが、本来大須 冬彦にとって俺はない頭だった訳で。ならば、俺一人いなくなったところでさしたる問題にはならない筈。」

「命の恩人を見捨てるわけにはいかないよなあ……」

ベルトとジーンズの間突っ込む形で携行していた銃の感触を衣服越しに確かめてから、ゆっくりと立ち上がった。

ゆっくりと重い瞼を開く。病室の清潔な反面、無機質で味気のない天井が視界を覆う。

「……眩しい」

「なつめ！」

酷く温度差のある声が二つ。

一つは長いにも程がある眠りからようやく目を覚ました私が発したものだ。

もう一つは私の為に邪な野望の狗になりながらも、飼い主気取りの野心家を欺いた兄さんの声だった。

飛んできたかのような勢いで私の傍に駆け寄ってきた兄さんがわたしを抱きしめる。

「良かった……良かった……！」

声が少し上ずっている。わずかに嗚咽が混じっている。
それだけでも兄さんがどれだけこの日を心待ちにしていたのか手に取るように理解出来る。

「兄さん……」

思うように動かない体を、初めて扱う電化製品を操作するように注意深く動かし、兄さんの腰に手を回した。

たったそれだけの動作で、なまりきった体は既に悲鳴を上げる。思うように動かないのは体だけじゃない。目覚めたばかりの脳は今の今まで肉体から抜け出して活動を続けていた筈なのに思うように働いてくれない。

……何か、大事なことがあったような？

けれど、喉元まで出かかったそれを思うように言葉に出来ない。それでも何か手掛かりになりそうなものを探して視線をさまよわせる。

抱き合う私たち兄妹を一人の女の子が感情の読み取れない目で見守っていた。

北里 千里。 2年前、私が意識を失う少し前に新天寺社の関連会社にハッキングを仕掛けた女の子だ。 技術的には高い水準にあったものの、次のターゲットを決める手順にお粗末な法則性があった為に兄さんをリーダーとしたチームにハッキングを阻止された。そして、その技術力が買われて兄さんに手を貸すことになった……秋一の親友。

「秋一は……？」

「秋一なら外に……あれ、居ない？」

私の言葉に応えるように病室のドアを開け、外の様子を伺う北里

千里。 秋一の不在を確認して首を傾げる。

そんな何気ない仕草のひとつひとつが彼女の小柄さと相まっていちいち愛らしい。

なるほど、秋一がシスコンに兄貴みたいに過保護になるのも無理からぬ話だ。

……思い出した。 秋一がいない、その理由を二人に伝えなくちゃいけないんだ。

「お願い、秋一を助けて」

長らく喋っていなかった私の声帯は半ば声の出し方を忘れていた。それでも何とか力を振り絞って言葉をひねり出す。

秋一がアーリーを利用して外の景色を眺めていた事を。 その際に秋一が見たものの一部始終を。

秋一が何を見ていたのか気になって、彼の手にしていたアーリーに潜り込んでいた私が見たものを。

出来る限り手短に、かつ正確に伝える。

それつすらも怪しい有様で、どれだけ伝わったのか疑問の残る所だけだ。

「なるほど。 君の言う二人はきつと病院で暴れていたコスプレイヤーだろうね。 冬彦くん、君のアーリーから監視カメラにアクセスしてくれないか？」

と、私の意を真つ先に汲んでくれたのは初老のお医者さん。

「あ、はい。 どの映像を何時間遡れば？」

「10階エレベータホール前で、2時間くらいかな」

指示されるままにアーリーを操作する兄さん。 あっという間に

お目当ての映像を見つけ出すと、それを全員に見えるように向きを変えて差し出した。

ヴォーカロボットRUMIのコスプレをした女の子のスカートから拳銃を抜き取った秋一が、その女の子に襲われていた。そもそも本気で戦う意思のなかった彼は徐々に追い詰められ、エレベータホールで対に逃げ場を失う。

絶体絶命の危機に陥った彼を救ったのはこれまたコスプレをした女性だった。

エレベータへと秋一を逃がした彼女は鮮やかな身のこなしで対峙した少女の攻撃をかわし、やがて窓から彼女を投げ落とした。

けれど、さっき私が見たRUMIコスプレの彼女は即死も良いところの状況を切り抜け、平然としていた。

「……秋一じゃあどうしようもないと思われ」

「と言うよりも、真つ当な人間の割って入る余地がない、と言った感じだね」

北里 千里とお医者さんの意見は私と同じだった。

こんなとんでもない戦いに介入できる人間なんて滅多にいない。

ましてやごく普通の中学生ではたとえ銃を持っていたとしても当てることすらままならないだろう。

けれど

「いや、案外行けるんじゃないかな？」

ただ一人、兄さんだけは私達と異なる結論に達していた。

19話 透視とか遠隔視って相当緻密にコントロール出来ないと精神衛生上非常

何気に初めての一話内での視点変更。

チヨイと悩みましたが、丸々1話取るほどのものでもないのだから
いつ形に落ち着きました。

20話 某ゲーム機の顔シューティングは地味にハマるから油断ならない

戦うコスプレイヤー二人の居場所を見つけるのはさほど難しいことではなかった。

何せ大須 冬彦のアーリーの機能に加えて、アレだけ派手に暴れているのだ。自然と周囲の関心・注目を引き、二人のいる方へと人の流れが生まれる。

ましてや今は大通りの歩道の屋根の上という目立つにも程のある場所で元気に跳ね回っているのだ。

噂を、伝聞を辿って行けば、むしろ二人を避けて通る事の方が難しいくらいではなかるうか。

しかし、問題はここから先。 どうやってYuiyuiの彼女の援護に入るか？

まずあの二人の戦闘能力は凡人の介入を許せるような代物じゃない。

一方の俺は戦闘能力なんて単語を使う奴は「そういうお年頃」と一笑されるような実に平和な世界で生きて来た至って平凡な中学生である。

もちろん普通に首を突っ込んだところでワンパンチ即K.O.なのは間違いない。

下手をすれば助けたい方の足を引っ張ってしまう可能性さえある。

そこで登場するのが懐の拳銃……なのだが。

これはこれで今まで一度たりとも撃った事のないものをいきなり動く標的に向けて撃つことへの凄まじい不安が付き纏う。

有効射程とか流れ弾とか、何に対してどう気を使えばもさっぱり分らない。

自分で撃つのを放棄して彼女に渡すのも手かもしれない。

とは言うものの、これはこれで俺自身が戦いに介入する時と同じようなリスクが伴う。

うっかりRUMIコスの子の手に渡ってしまったりしたら目も当てられない。

などと考えている間も二人は衆目のことなど気にも留めず、延々と戦い続けている。

後悔する前に考える前にかくやれ、といった類の少年漫画の主人公的なスタンスははつきり言って俺の性に合わない。基本的に小市民であり、凡人である。

と言うか、こんな状況下に置かれて即座に動ける方がおかしい。動かざるを得ない状況であればとっさに体が動く事もあるかもしれないが、今のところ戦況はこう着状態。

ここで拙速を尊ぶとばかりに突っ込んでいけるほど俺の肝は座っていない。

それに……見ず知らずの相手で、かなり物騒な性格をしているとはいえ若い女の子に銃を向ける事にもどうしても抵抗を覚えてしま

う。

「さて、どうしたもんかなあ……」
『アンタねえ、プランもなしに一人で飛び出してどうするのよ?!』
「うおっ!?!」

考え込んでいる俺のすぐ隣に怒声とともに現れたのは紛れもなく
ついさっき消えた筈の AR少女 夏芽だった。

「お前、何してんの?」

『何してんのじゃないわよ! アンタが考えなしに出て行っちゃうから、兄さんの知恵を貸してあげようと思ってここに来たのよ!』

「大須 冬彦の? ってか、知恵って何の? っていうか、そもそ

「も何でお前はその姿？」

「つつい質問攻めにしてしまう。それも、どの質問も少し考えれば勝手に事故解決できるような単純極まりないものばかり。」

『アンタなら一から説明しなくても大体想像ついてるでしょ？』

「ああ、まあな」

夏芽がARなのは超能力で改めてネットワークに侵入しているから。」

大須 冬彦の知恵とやらは、それが具体的に何を指すのかまでは分からない。

「が、策もなしに出て行った俺の目的をアーリーの機能を駆使して調べ上げ、これから遭遇するであろう問題を予想した……ってところだろう。」

「で、知恵ってどんなものなんだよ？」

『ちよつと待って。その前に状況を確認しておきたいんだけど、良いかしら？』

彼女の真剣な眼差しを正面から受け止めつつ、首を縦に振る。

『秋一はあそこで戦ってる人……と言っても今の私には見えないんだけど、のYuiyの格好の人を助けたい。でも、あの戦いについて行く方法がないから手をこまねいている』

「ああ、その通りだよ」

素直に認めてしまうのは少し腹立たしいけれど。

『で、唯一介入する手段があるとすれば懐の拳銃くらい。でも、

それを渡すチャンスがあるかどうかも怪しい』

「そういうことだ。 仮にあの人が緑の方を首尾よく撒いたとして、その隙について接触できるかっていうと難しいだろうしな……」

別に運動が苦手って訳ではない。 苦手どころか、さらっと人並み以上の記録を叩き出して体育会系の部活に所属してる連中から「その才能、うちの部で開花させないか？ ついでに北里もマネージャーとしてだな……」と誘われる程度には動ける部類だ。

ただ、今しがた人だかりの向こうで大暴れしているあの二人は異常過ぎる。

俺の知る限り人間は、それも見た目は華奢な女の子はスクーターをかついでぶん投げるなんて芸当は出来ないし、そもそも何で屋根の上にスクーターがあるのか教えて欲しい。 同様に、とっさに飛んできたスクーターの上に着地して二段ジャンプするような超反応はスタントマンだって出来やしない。

「殆ど漫画の世界だぞ、あれ？」

『そうね。 でも、一瞬たりとも介入の余地がないって訳じゃないでしょ？ たとえば投げ技が決まった直後とか』

確かにその通りだが。

だからと言って投げ飛ばされたRUMIコスの子が起き上がるまでの間に群衆をかいくぐって射撃が当たる距離まで近づけるとも思えない。

Yuiyの人に至っては投げた直後には逃げるだろうからこちらもちちらで間に合いそうにない。

大体、何度も言うがあの二人に近づくと云う行為自体、半ば自殺行為だ。

片や軽く弾かれただけでも致命傷になりそうな怪力少女。

片や後ろに立った瞬間、ねじ伏せられそんな現代のくのいち。

出来る事なら近づかずに済ませたい。

『だったら、近づかずに事を済ませちゃえばいいのよ!』

「出来るもんならそうしたいよ」

『だーかーらー、出来るようにしちゃえば無問題でしょ。 あなたが
の目を使って』

その一言でようやく合点が行った。

「あつ、ARシューティングか」

『そういう事。 そのアーリーにはもう入ってるから、後は兄さんと北里 千里が対人用に改造してくれるわ。 あなたの持つ銃はもともと新天寺社のものだから、クセなんかも計算に入れて、無風状態なら30メートル先まで正確に狙えるように出来るって。 あなたが下手打たなければだけど』

ARシューティング。 細かいジャンルは色々とあるだろうけれど、AR技術によってカメラ越しの風景上に描写された標的を撃ち落とす、典型的なファーストパーソン（一人称視点）のシューティングゲームだ。

と言っても、ARを用いたそれはプレイヤー本人が動かねばならないため、あまり無茶な動きや特殊なシステムを採用しづらく、大概のゲームは似たり寄つたりの内容になりがち。

しかし、弾の軌道、ターゲットのサイズや動きなんかで微妙にゲームバランスを調整している。

そして、確かに実在の人間を標的にした対戦型ARサバイバルゲームなんてのもあった筈。

そう言ったゲームの中でも特に狙撃の疑似体験に重きを置くゲームであれば、少し設定を弄って調整を加えれば実銃でも使える……かも知れない。

そんな事を考えながら二人の戦いを見守っていると、不意にスマホが震えた。

「なんだ、千里か？」

『いえあ！ 秋一の可愛いメス犬、千里ちゃんだお！』

……うわあ、通話切てえ。

が、恐らくARシユーティング絡みの話の可能性が高いため、切る訳にも行かない。

「で、何の用だよ？」

『今から改造したのを送るから、受け取る準備しといて』

「ああ、分かった」

空いている左手で大須 冬彦のアーリーを取り出す。新着メールを受信。

最上段にあるメールの添付ファイルを開き、ダウンロード。

数秒後、またしても俺の右目の景色が様変わりした。

「視線を感知する機能は健在か」

二つの目の焦点が合った所にいる対象を自動的にロックオンし、バーチャルの拳銃が映し出される。

更にその対象の体の部位へと意識を向けると、拳銃の位置が微妙に動いた。

そこに当てたいならバーチャルの拳銃のある空間に本物の銃を重ねるってことだろう。

視界の隅に意識を向ける。

何やら意味ありげなスペルと数字がズラリ。

確証はないがそれらの意味するところは銃の構造的な理由による

軌道のずれ、弾丸にかかる引力の影響、風向き・風の強さ…… e t
c。

要するに弾丸の軌道を計算するのに必要な情報である。

「あんまり長時間は構えていられないな」

懐に手を突っ込み、安全装置を外してから H & a m p ; K P 2
000 のグリップを握る。

通りを挟んで並行する二つの歩道の、二人が屋根の上で暴れている方の反対側。そこで彼女たちを見上げる野次馬から少し遠ざかった場所に陣取り、二人を凝視。

相変わらず二人の攻防は人間の常識を越えた速度と密度を誇っていて、いくら右目による補正があってもとても狙うべき場所を狙えそうにない。

が、それでも懐に手を突っこんだまま、じっとその超人的な動きを見守る。

そして

今だッ！

決定的なチャンス。それは坂田うめと言うらしい少女が Y u i
Y o s o の彼女の襟を掴もうと手を伸ばした瞬間に、そして彼女が飛び退きながらその手に警棒を押し当てた瞬間に訪れた。

その警棒はただの警棒ではなかったらしく、坂田うめの身体がわずかに仰け反り、硬直する。その一瞬を捉えて拳銃を構え、引き金を引いた。

狙うは、俺の視線の向かう先は坂田うめの白いフリルのついたオレンジのミニスカートから伸びる健康的な太もも。

思った以上に大きく、けれど少し間抜けな銃声が辺りに響く。

それとほぼ同時に弾丸が肉を穿ち、赤いものが溢れだした。

20話 某ゲーム機の顔シューティングは地味にハマるから油断ならない（後書

夏芽の一人称の表記ゆれに気付いた今日この頃。

彼女の一人称は「アタシ」が正解です。

本体の容姿は私わたくしでも良い感じの設定なのに「アタシ」です。

21話 素直になれない幼馴染と解凍系ヒロインをツンデレの定義の範疇に収め

何の前触れもなく乾いた音が響いた直後、RUMIコスの少女が太ももから血を噴いて倒れた。

倒れた、と言っても意識を失った訳ではなく、あくまでも尻もちをついて、傷口を押えて呻いているだけだが。

「大丈夫ですか？」

「……君は？」

何食わぬ顔で、とまで言わないが思った以上に落ち着き払った態度で私の下へと駆け寄ってきたのは病院で会ったあの少年。

手には別れ際に手にしていた拳銃が握られている。

彼が駆け寄ってきた進路へと視線をやると野次馬がわずかながら確かに道を開けているのが分かった。

彼が発砲し、彼の手に持っているものに気付いた群衆が無自覚に道を開けた、と言ったところだろうか。

「早く降りて来て下さい。騒ぎ出す前に場所を移したいんで」

「そうね。どこか、お謎えの向きの場所は……」

「俺に心当たりがあります」

何とも手際の良い少年だ。

上司が私のために寄こしてくれた補佐役か何かじゃないかとさえ思えてくる。

それに、彼はどのくらいの距離から発砲したんだろうか？

ちょうど私が飛び降りて着地する分のスペースだけ確保した上で、屋根のすぐ下に陣取る彼がそこに駆け寄って来る時の速度と、銃声が響いてから今に至るまでの時間。

それらを踏まえると2、30メートル程の距離から撃つたという結論に至る。

そんなバカな。

「……余計な考察は後回しでお願いします」

「ああ、済まない」

私の表情や目の動きで何かを察したらしい。

本当に鋭い。本部に戻ったらスカウトする方向で上に向け合いたいくらいだ。

よろよると立ち上がる緑髪の少女を横目で伺いながら、屋根の上から飛び降りる。

膝を上手く曲げて衝撃を逃がし、何事もなかったかのように着地。

「さて、その心当たりとやらに案内してもらいましょうか？」

「と言ってもアナタも知ってる場所だと思えますけどね」

と、薄く笑みを浮かべる少年。

そんな表情を作りながら、彼は何故か羽織っていたシャツジャケットを脱ぐ。

それから、脱ぎたてのそれを屋根の上の少女めがけて放り投げた。

「止血しておかないと下手すると命の関わるぞ？」

「……」

少女は忌々しげに彼を睨みつけている。

対する少年は拳銃を手に持ったまま、彼女のもう一本の脚を見据えていた。

余計な動きを見せればもう一発見舞うぞ、という言外の忠告。

「……」

私と彼。二人を相手にあの怪我では勝ち目がない。

その事を察した彼女は渋々と言った様子で太ももに彼のシャツジヤケットを巻き始める。そんな彼女に背中を向けて、私は彼の心当たりとやらを指指して歩き出した。

「…という訳で、貴方の身柄を拘束させてもらうけど、良いかしら？」

「いや、どういう訳か分からないんだが。漫画じゃないんだから、かくかくしかじかのなざつくばらんな説明で片付けようとするのはどうかと」

愛千橋病院に到着した私と少年 道中の紹介によると羽原 秋一というらしい は何事もなく1007号室に到着。

そこで帰りを待っていたのは大須 冬彦。 ちょうど彼にも、と言うか本来は彼に用があつた私は、彼の隣の椅子に腰かけた。

「……要するに大須 冬彦に良いように使われたって事だろ？」

「本当に君の勘の良さは気持ちが悪いね、羽原 秋一」
「どういたしまして」

にやりと笑みを浮かべる大須 冬彦。 対する羽原くんはやれやれと肩をすくめている。

その仕草の意図を図りかねた私は、少しそのやり取りの意味を考える。

まず、良いように使われたのは誰か？
ここにいるメンツの誰かだろう。

私と大須 冬彦のやり取りの後にあの会話が入ったって事は……
私か。

「もしかして、私達に情報を流していたのって……？」

「正解。 もっとも、君の上の人達はおおよその事情を察した上であえて乗っかっていたんじゃないかと思うけどね」

「十中八九そうだろうなあ……」

軽くため息を吐きつつ、羽原くんは窓の外へと視線を向けた。

確かに私の知る上の人達とやらはそう簡単に御せるような素直な連中じゃない。

情報源の信頼度くらいはきっちりチェックして、もしもガセだった時の対策くらいは既に講じていてもおかしくはない。 その程度の狡猾さは持ち合わせているだろう。

「でも、それならどうして千里ちゃんを保護しろ、なんて言ったのかしら？」

「多分ですけど、千里の利用価値を見抜いていたってことでしょう。あと、千里を人質に取れば自動的に夏芽も人質に出来る。 それ

に意識不明のまま何カ月も経ってる少女を保護しろなんて言うよりは千里の方が保護するだけの合理的理由をでっち上げ易かった」

「確かにねえ。 あんまり胡散臭いと私が素直に動かないかもしれないものねえ……」

思わず、口の端がつり上がってしまう。

その表情の意図を察した大須 冬彦と羽原くんもそれぞれのやり方で同意を示した。

意図、と言うのは要するに「やってくれたな」という奴である。

「あの三人、なんか怖い」

「全員、腹黒キャラだから仕方ない」

そんな私達を遠巻き（と言っても狭い室内なので物理的には近いのだけ）から、大須 冬彦の妹さん 中野 夏芽というらしいと北里 千里が少しだけ引いた態度で見守っている。

確かに三人揃って曰くありげな態度を取っているこの状況には妙な迫力があつた。

「で、結局、どういうことなん？」

「何はともあれ、結果オーライってことさ」

羽原くんがいと挑戦的なのに屈託のない奇妙な笑みを浮かべた。年齢不相応の食えない態度と、肝心なところで単純になれる彼の人柄を的確に表したような表情だ。

直後、真面目な表情に戻った彼は再び口を開く。

「まあ、結果的に一番まずいのは多分俺なんだろうけど」

確かにその通りだ。

大須 冬彦はそもそも表立って行動していない。それに、今回の件で妹ともども私の属する組織の監視下に置かれることになる。

北里 千里も似たようなもの。

翻つて言えば、私達に新天寺社の手から守ってもらえるということでもある。

私はある程度組織に守ってもらえるし、コスプレのおかげで顔が多少は割れにくくなっている筈だ。新天寺社が任務に失敗したものをどう扱うかなんて知らないけれど、その点に関してはRUMI コスの彼女も同様だろう。

けれど、羽原くんは発砲した直後の姿を多くの野次馬に目撃されている。

きちんと確認した訳ではないだろうけれど、ケータイやアーリーのカメラで彼の姿を撮影した人だっているかも知れない。その写真がブログに上げられるかもしれない。

「とりあえず、もみ消せるだけのものはもみ消してもらえよう掛け合っておくわ」

「お願いします」

「もみ消しに失敗したら秋一の高校でのあだ名が早撃ちマックになるんか……胸熱」

「よおし！ ちょっと、頭を冷やそうか！」

流れるような動作で北里 千里の小ぶりな頭にアイアンクローをかける羽原くん。

きっと本人は自覚していないのだろうけれど、凄く楽しそうだ。

この子はきつと天性のDSに違いない。

一方の彼女もこめかみを激しく攻め立てられて、「あひい、らめえ！」と悲鳴を上げながらも心なしか嬉しそうにしている。

なるほど、仲も相性もかなり良いようだ。いささか理解に苦しむ関係ではあるけれど。

「あ、そうだ。ねえ、秋一」

「ん、なんだ？」

控えめな調子で彼の名を呼んだのは夏芽さん。

「大声出すだけでも疲れちゃうから、出来れば近くに来てくれないかな？」

「ああ、分かった」

ようやくアイアンクローを解いた羽原くんは言われるままに彼女

のすぐ傍の椅子に腰かけ、耳を寄せた。

目を覚ましたばかりの夏芽さんは相当筋力が衰えているのか、上体を起こすのも辛そうだった。

それを察した彼は更に彼女の口許に耳を近づける。

直後、夏芽さんはゆっくりと体を起こし、彼の頬に形の良い唇を重ねた。

「……えーと？」

「か、感謝のしるし、みたいなものよっ……！」

言い終えるや否や、耳まで真っ赤にしてそっぽ向く。

それまで茫然と見守っていた大須 冬彦が絶叫し、北里 千里が奇声を上げる。

もつとも、その奇声の内容は嫉妬云々ではなく、「ツンデレk t k r . . . ! !」という何ともアレな代物なのだけれど。

今にも羽原くんに襲いかかりそうな大須 冬彦を羽交い絞めにし、私は病室から一旦退避。 空気を讀んだ初老の医師や北里 千里も私達と一緒に部屋の外へ。

「二人つきりにしちゃって良いの？」

「大丈夫だ、問題ない」

彼女は随分と自信に満ちた様子で小柄なわりに大きな胸を張る。

「自分、3Pとか大好物なんで」

この場にはいない羽原くんに代わって、彼女の額にチョップをお見舞いした。

22話 最近凄い事に気付いた。高等学校にいる女子の大半は女子高生なんだぜ

あの慌ただしい1日からおよそ2週間が過ぎた春のある日。
俺と千里は肩を並べて通学路を歩いていて。

「……やっぱ時々俺に気付く奴がいるな」

「まー、仕方ないな。流石にSERENにまで圧力はかけられないだろうし、そもそもかけたところで意味がない」

「分かつちやいるが……はあ」

思わず盛大にため息を吐く。

Yuiykosの女性改め、本橋 春日さんは事後処理まで手を抜かずによってくれた。

おかげで新天寺社が誇るニューロンネットワーク上に俺を撮った写真が上げられる事は殆どなかった。

が、問題はニューロンでない方のネットワーク、つまりインターネット。

そもそも何処に圧力をかければ規制できるという類のものですらなく、未だにニューロン以上に母集団の大きなそれは流石に彼女や彼女の所属する組織の手に余る代物だったらしい。

テレビやラジオ、新聞といったマスメディアに俺や本橋さん達の情報が出る事は無かったものの、インターネットというか、専ら某巨大掲示板で何度も俺や本橋さんの画像を見かける羽目になった。

「そのうち飽きられるから我慢するしかないと思われ」

「それも分かつてる。 けどな……」

珍しくアーリーではなく、ケータイを弄くり回しながら歩いている千里の手から、ピンク色のそれを引っ手繰り、待ち受け画像を突

きつける。

「すぐ横を歩いている奴がこんなことしながら言っても説得力がねえよ」

「良いじゃないか、中タイケメンに映ってるんだから」
「そういう問題じゃない!!」

坂田うめを撃ち、添えていた左手を下ろした直後の横顔を捉えた会心の一枚。

確かに、少々手前味噌ではあるが、その画像に写っている俺は驚くほど格好良い。

正直、最初にこれを見た時には「フォトシヨ乙」と言いたくなかった程だ。

……もつとも、それがこの画像の拡散に拍車をかける一因にもなったのだが。

「何でわざわざ俺の画像なんて待ち受けにしているんだよ？」

「そりゃあ、秋一が頼んでも撮らせてくれないからだろ」

「いや、そもそも、何で俺なんか待ち受けにしたいんだよ？」

「そりゃあ、バイブ機能で」

言い終えるよりも早く、即座に引っ叩いてやった。

高校生になつてもツインテールの髪が毎度の如く激しく揺れる。

「……まだ変な事は言っていないだろ？」

「まだ、ってことは言おうとしたんだな？」

「言葉のあや！ そんな意図はない！」

「じゃあ、最後まで言ってみる。妙な事を口走ったら二度と口を聞いてやらんからな」

なるべく爽やかな笑顔で続きを促してやる。
が、千里は次の句を発する気配を見せず、齒がみするばかり。

「で、続きは？」

「変な事を言おうとしてました、ごめんなさい！」

そして素直に自分の非を認め、土下座した。

「いや、そこまで喜んで良いから」

「秋一に相手してもらえなかったら寂しくて死ぬ」

「それは分かったから。無視とかしないから、早く立て」

カバンを置いてから、ツインテールを両手でがしつと掴んで千里の頭を持ち上げる。

いささか不自然な格好で頭を上げ、じつと俺の顔を凝視。 うむ、これはこれで何ともけったいな光景だ。

それでも入学初日に女子を道端で土下座させた男なんて不名誉極まりない称号を頂くよりはずっとましだろう。

「立つから手を離してくれ」

「土下座も土下寝も最敬礼もするなよ？」

「分かった分かった、分かったから」

首を縦に振る千里の目をじつと見つめ、他意がないのを確かめる。
……何かしたら本気で怒る事を察したらしくその表情にウソ偽りは無さそうだ。

もっとも、こいつの場合、俺の想像のはるか斜め上に行く方法でまた何かろくでもない事をやらかしそうな気はせんでもないのだが。たとえばそう、仰向けになって犬猫の類のやり方で服従の意思を示すとか、四つん這いになって尻を向けて来るとか……！

「まあ良い。俺の言った言わないはともかく俺が変なこととみなした時点で無視決め込めば良いだけか……」

そう聞えよがしに呟きつつ、手を離してやった。

ずっと背伸びするような格好になっていた千里はふうと一息ついてから、乱れた髪を手櫛で整える。

淡い色の、手入れの行き届いた髪を撫でる姿は中々どうして様になっっている。

俺達と同じように九尾高へと向かう新生たちの視線や、漏れ聞こえる会話の内容を聞く限り、この認識はそれなりに客観的なものとみて間違いない。

「そろそろ行くぞ」

「うん」

……と言った感じの概ねいつも通りのやり取りからおよそ1時間後。

俺は1年4組の教室窓際の机に突っ伏し、ただひたすらに打ちひしがれていた。

「そんなに落ち込んで、どうしたん？」

そんな俺の顔を覗き込んでいるのは毎度おなじみ北里 千里。

いくら低身長とは言え流石に座っている俺よりは高い位置にある

頭を腰を曲げて同じくらいの高さまで持つて来ている。

高校生と言えどそれでもクラス内でも屈指のサイズを誇る二つの丘を際立てるようなポージング故か、制服の冬服の厚いブレザーの上からでも確かな存在感を見せている。

普段なら「お前のじゃなければ心おきなく褒め称えるところだったんだけどな」などと生意気な言葉を吐きつつ、チラ見するところなのだが今はかりはそんな余裕もない。

何故なら

「落ち込んでるのはお前のせいだよ、アホんだらあ!?!」

「うおう、いきなりDVいくくない」

「何がDVか!?!」

担任の女性教師が何やら用事で席を外し、現在教室内では各所で新しいクラスメイトとのちよつとした交流が繰り広げられていた。そのあらゆる会話がメールアドレスの交換が、俺の叫びによって問答無用に中断される。

代わりに、クラスメイトほぼ全員が俺を遠巻きに眺めながら何やら内緒話を始めた。

「何なんだよ、あの自己紹介は!?!」

「え、自己紹介だけど?」

「どこがだよ!?!」

もう一度叫びながら、力強く机を叩き付ける。

それと同時に勢い良く立ち上がり、まくし立てるように続ける。

「あのなあ、まず第一に俺とお前は至って普通の友人知人だ! 分かるか? 分かるよな!?! それをお前はよりにもよって……流石の俺でもあれは引くぞ!?!」

「えー」

「えー、じゃありません！ さつき自分が言った事をもう一遍復唱して見る！」

「えっと……私の名前は北里 千里です。」

おなチユー出身の羽原 秋一が大好きです。

大好き過ぎて片時も離れたくないが為だけにここを受験した位大好きで、同じクラスになったのも新入生代表の言葉でとんでもない台詞を吐いてやる、もしも他の子に任せようとしたらその時はその時で対応の対処をするぞって校長以下を脅して無理を押しとおしたからです。

要するにそれくらい秋一が大好きって事で、きっと秋一が死ねって言えばそれで本当に秋一が喜ぶなら本当に死

あ、でも秋一はそんな事はきつと言わないって確信してるから、そういう優しい秋一だから愛しい……

だけど、一片の慈悲も見せないドSで鬼畜な秋一に好き勝手に弄ばれて滅茶苦茶にされるのも一つの夢なのは否定できないのが実は悩みどころです。

とは言え、今でも突っ込みなんかは暴力的なところがあるから、その夢は半分くらいかなっているような気もしないんだけど、でもでもやっぱりなんて言うか人格も人権も人情も人間性も尊厳もすべて踏みにじるような圧倒的な支配が欲しいって言うか……。

けど、そう思うようになってる時点でとっくに調教済な感がないでもないって言うかぁ……。

と言う訳で、私の事は秋一のメスブタって呼んでください」

このアマ、本気で声色まで再現しながら復唱しやがった。

しかも普段なら絶対にしないような口調や仕草のおまけをつけた上で、だ！

流石に我慢しかねた俺は半ば無意識にアイアンクローをしかけながら吼えた。

「……秋一は殆ど無反応なのね？ それとも驚き過ぎて声も出ないとか？」

「はあ？ 自意識過剰だ、バカ」

「んなっ……ばっ！？」

ため息交じりに、松葉杖で身体を支えて立っている夏芽にジト目を送ってやった。

「断片的な情報と推論、妄想の複合でしかないけどな。この程度は想像の範疇」

「どんな超推理よ、それ」

「まあ、そんな事はどうでも良いや」

すると「どうでも良いって何よ」と夏芽はむくれる。ARの時のようにむやみやたらに膨れてはいないが間違いなくあの夏芽のそれを想起させる表情だ。

そんな彼女の前にアイアンクロ を解いた手を差し出し

「これからヨロシクな」

「……うん！」

しっかりと握手を交わした。

この際、クラスメイト達の「ああ、あの美人さんはあの鬼畜野郎の愛人かあ……」という何とも言い難い難い視線に関しては無視を決め込む事にした。

22話 最近凄い事に気付いた。高等学校にいる女子の大半は女子高生なんだが

と言う訳で、ようやく1部完……なのかな？

これからはARネタで好き勝手に書き散らかしていく予定。

お暇な方、物好きな方、もつしばしお付き合い頂けると幸いです。

23話 他愛のないメールって送る方と返信する方の思考時間の格差が酷いって

色々あって盛大に高校デビューに失敗した日から数日が経ったある日。

連れション（女子の場合、こう言って良いのかは疑問だが）に行った千里と夏芽を待ちながら、二人の生徒のやり取りを眺めていた。一人は身長165cm程度のやや低めの、まだ春なのに日に焼けたような肌のスポーツ少年風。

もう一人は身長は170ちょっとといった程度のやや太めの男子。と言っても決して肥満と言う訳ではなく、どこことなくがっしりした印象もある。

彼らの口ぶりや態度を見るに二人は中学時代からの友人のようだ。ちなみに、非常に悲しい事だが俺は友人どころかまともな話し相手すら一人として見つかっていない。どうにも千里のあの自己紹介のせいでとんでもない奴と認識されているらしく、（特に女子からは）露骨に敬遠されている。

更に不運な事に九尾高校に進学した同じ中学出身の生徒は俺を除いて全員女子で、接点のある奴は千里以外には一人もいない。

「なあ、このメールどう返せば良いと思うよ？」

「いやまずメールを見せてくれ」

「ほらよ」

ケータイを受け取った男子生徒（太い方）はさっと液晶に視線を滑らせ、内容を音読。

「……………」昨日ケーキ食べた！ めっちゃうま〜』か。なるほどな

あ……………」

「な？ だからどうした、としか思えないだろ？」

「うーん、確かに……」

男子二人が雁首揃えて難しい顔で液晶とにらめっこしている。その光景は傍から見ていると何となく間抜けだ。

「そうだな、とりあえずそうか良かったな内容的な内容で行けば良いんじゃないか？」

「いや、何かそれすげえ興味なさそうで感じ悪くないか？」

「それもそうか……そうだよなあ……」

二人揃って頭を抱える。動作が見事にシンクロしているのが妙に笑いを誘う。

とは言え、メールの相手に真剣に返信しようとしている、真剣に協力しようとしているその姿勢は評価しても良い。

俺だったら、もしも千里からそんなメールが送られてこようものなら

『それで、ここからどうやって変態談義に持って行くんだ？』

でお終いだろう。まあ、千里以外の相手だと多少はまともな返信をするだろうが。

何かこういうと俺は千里の事が嫌いなように聞こえるな。 実際

は……まあ、今語る事ではない。

改めて二人の男子に意識を向ける。

相変わらず、何と応えて良いのか分からず悩み続けていた。

「仕方ないな……」

のっそりと立ち上がって、二人の傍へと歩み寄る。

「こういうやり取りは基本的に5W1Hをきちんと拾う事が重要だと思っぞ」

「おわ、ハバラ・テラス」

と、あからさまに仰け反ってみせたのは小柄な方の男子生徒。ちよつと待て、ハバラ・テラスってのは俺のあだ名か？

言いたい事は分かるが、かの家畜人からの引用とか高校生がやるこつちやないだろ……。

それにあれか、千里はヤーか？ 一日即墮ちコースなのか？止めてくれよ。

「そのあだ名をつけたポケナスについては追及しないが、俺の話は聞いとけ」

「話つて、5W1Hのことか？」

「ああ、そうだよ。まず、そのメールの内容に不足している情報を整理してみる」

言われるがままに二人は「ああでもないこうでもない」と話し合いつつながら、メールの内容を検証して行く。

そうして2分ほど経過したところで、二人はメールに欠けているものを一通りリストアップし終えた。

- 1．ケーキを食べた時間
- 2．ケーキを食べた店
- 3．一緒に食へに行った相手（一人の可能性もある）

「まあ、こんなところか」

他にも食べたケーキの種類とか、ケーキを食べに行った理由とかも掘り下げられるが。

特に意外に重要なのが食へに行った理由だろう。実は誕生日だったと告げるのが恥ずかしかったなんて可能性もあるからな。

もちろん、あからさまに「何で食べに行っただ？」「なんて聞き方をしようものなら、相手がどう返せば良いのか分なくなってしまうだけだ。

その日の相手の様子を思い返しながら「何か良い事あった？」と「何か嫌な事でもあったか？」を使い分けつつ、相手の自慢か愚痴を引き出してやるのが無難だろう。

「で、ここからどうすれば良いんだ？」

「とりあえず質問しろ……って、そっぴやメールの相手は誰だ？」

「隣の席の鶴橋さんだよ」

「ああ、あのギャルっぽい子が」

ふむ……。

「と言う事はこのメールは事実を送っているというよりは一種のキヤラ付けと見るべきかな。つまり、女の子アピールしてる訳だ。

良かったな、脈ありだぞ」

「マジかよ」

「良かったじゃないか」

二人は仲良くハイタッチをして喜びを分かち合う。

仲が良さそうなのは大いに結構なのだが……

「そういう事をやる前に早く文面を考える。相手はタイピングがめちゃくちゃ速かったり、15分以内返信がマナーだと思ってる可能性があるからな」

「で、そのはつきりしない情報とやらのどれを使えば良いんだよ？」

「それは自分で考える。とりあえず、自分が話を広げやすいと思つたものにしてみ？」

「広げやすいものかあ……うーん」

「マジで予想通りのメールが来た……」

「ああ、こんな感じで全て見透かされて思うままに操られて家畜人になって行っただらうな、北里さん……」

「いや、あいつの言ってる事は殆どデタラメだから」

俺と言葉を交わしながらも小柄男子はいそいそと文章を打つ。

「そっぴや、羽原さんは北里さんや中野さんとメールしたりするんですか？」

「さんはいらねえよ。あと同級生相手に丁寧語は止めれ」

「いや、恐れ多いんで……」

何ゆえ名前もまだ覚えていないクラスメイトに畏れられにやならんのか。

そして、今気付いたんだがこの二人の名前知らないな、俺。

「よし、こんなもんでどうですか？」

「ん、どれ……『まあ、鶴橋は細すぎるくらいだから、むしろもうちょっと太つても良いくらい思うけど。ところで、今度一緒にその店に食べに行こうぜい？』か。堅いがまあ、良いんじゃない？」

いささかがつつき過ぎな感はあるが、あっちから店の名前を覚えてくれた時点でこういう流れになる事は想定している可能性は十二分にある。

このくらいの攻めの姿勢を取ってもさほど問題ない……かもしれ
ない。

ふむふむ、どうやら鶴橋さんのギャルっぽさはかなり計算されている節があるな。

「とりあえず、これで行ってみ？」

言われるがままに男子Aはメールを送信。
返事が返ってくるのを待つ間に、改めて二人に尋ねる。

「そう言えば君ら名前は？」

「自己紹介聞いてなかったのかよ？」

「千里のせいでぶっ飛んだわ、そんなもん」

「ああ、納得……」

どうやら理解してもらえたらしく、二人揃って首を縦に振ってくれた。

それから太め男子の方が「じゃ、改めて」と仕切り直す。

「俺は森宮もりのみや 太郎たろう。で、こいつが今宮いまみや 新しん」

太い方が森宮 太郎、背の低い方が今宮 新か。

「よし、覚えた。俺は羽原 秋一だ、ヨロシク」

まあ、言わんでも覚えられているとは思うが。主に誰かさんのせいで。

俺の挨拶に二人が揃って「ああ、はい、こちらこそよろしくおねがいします」と何だか腹立たしいよりも悲しくなってくる程に丁寧
に返事されたところで、再びケータイが震えた。

小柄スポーツマン風男子改め、新がケータイを操作し、メールを
開く。

そして、満面の笑みを浮かべてガッツポーズをした。

「よっしゃあ！ デート……って程のもんじゃないけど、約束取り
付けた！」

「おお、良かったじゃないか」
「ふむ、どれ……?」

小躍りする新の手の中のケータイの液晶を覗く。

『おっけー、それじゃ明日にでも寄り道しよー。あ、あらたんの
おごりね』

さて、そのロッソなんちゃらという店のケーキの値段はどれくらいなんだろう……。

「あ、羽原さん?」

「いや、だからさん付けは止めるっての。っで、なんだ?」

「お礼を言おうと思っただけですけど……」

「お礼って、んな大げさな。あとさん付けは止めると」

今にも土下座しそうな勢いで身を乗り出す新に掌を向けて制止をかける。

が、デートの約束を取り付けたのがよっぽど嬉しかったらしく、
新は自重しない。

「じゃあ、師匠と呼ばせてもらいます!」

「……殴って良いか?」

「あー、そいつ言い出すと止まらないんで諦めてください、師匠」

あ、こいつ便乗しやがった。

キングオブ地味ネームのクセにふてえ野郎だ。

「今なんかすげえ失礼なこと考えませんでした?」

「気のせいだ、諦めろ。 怨むならご両親を恨め」

「言ってる事が支離滅裂!」

背後にがび〜んとかそんな感じの古典的なオノマトペを背負って
いそうな表情で突っ込む森宮 太郎。 あの中途半端なポケをきつ
ちり拾ってこれだけの反応を返せるあたり、なかなかの突っ込み役
のようだ。

一方、相変わらず浮かれポンチになっている新は俺達のやり取り
などまるで意に介さず、ケータイを抱きしめてくるくる回っている。
はつきり言ってキモい。

「で、新。 おごりって書いてたけど、お前の小遣いどれくらいあ
るんだよ?」

「とりあえず5000円っすね。あとはアーリーの副収入が20
00円ちよっと」

「アーリーの……ねえ」

今時、小学生だってそれくらいの事はやっている。その事は十
分に理解している。

が、春休みのあの日知った事実を思うと嫌でも顔をしかめてしま
いそうになる。

「あ、師匠はアーリー持ってますよね? 北里さん、なんかすごい
っすぞですし」

「いや、俺は少し前に壊してそれからまだ修理してないから……」

言い淀みながらも、ポケットからスマホを取り出す。

「つつ訳で電話番号とメアド教えてくれ」

「うーい。 赤外線って何か信用出来ないんで紙に書いたので良い
すか?」

「ああ、別に何でもいいよ」

新はノートの切れ端に意外と綺麗な字でアドレスと電話番号を書き始めた。

その間に、特に妙なこだわりの無い太郎と赤外線で互いの情報を交換。

念のため、メールを送ってから電話をかけて確認を済ませる。

「よし、問題なさそうだな」

「師匠！ 書き終わりました！」

「そうか、んじゃ……」

ささつと必要な情報を打ち込み、確認のために新からメールを送る。

無事メールが届いたのを確認して、今度は電話を。

1回目のコールが教室内に響き渡った瞬間、勢い良くドアが開き、むやみやたらと良い笑顔の千里とやや呆れ顔の夏芽が戻ってきた。

豪快な物音につられて3人揃って彼女たちの方へと振り向く。

そして、千里は開口一番、デジャヴってレベルじゃねーぞと言いたくなるような台詞を口走った。

「秋ー！ 部活を作ろう！」

23話 他愛のないメールって送る方と返信する方の思考時間の格差が酷いって

ビックリするほどAR関係ねえ！

秋一のキャラ紹介エピソードとしてもすっげえ微妙だし、新キャラ冴えない男二人だし、誰得だよコレ？

千里って千早と（字面的に）見間違えるよな、天才HENTAI少女だとかそんな事を考えながらのんびり書いた結果がこのザマだよ！？

24話 ポブって聞くとゴツイ野郎しか思い浮かばない諸君！ ポブ おかっぱ

「で、何部を創設するんだよ？」

「秋一に首輪で繋がれる部！」

笑顔のまま俺達の方にやってきた千里めがけて俺の拳が唸る。

渾身の右フックが容赦なく彼女の下あごを打ち抜いた。

が、千里は崩れ落ちそうになるのを机に手をついて踏みとどまり、即座に立ち上がる。

「へへっ、良いパンチじゃねーか……でも、それじゃオイラは倒せねーよ」

「変なキャラ作ってないで、話を進める。もう一発殴るぞ？」

「お。さつき夏芽と話してて思いついた事んだけど、放課後に半ば私物化出来る部室があると楽しいと思わないか？」

「今さらつとろくでもない本音が漏れ出たな、おい」

部室は有限なんだから、くだらない事に使うんじゃないありません。

とは言え……

「本当に私物化して、無為に時間を過ごすだけじゃないのなら手伝つてやらん事もない」

「だってさ。良かったわね、千里ちゃん」

「むう……そうは言ってもなあ、秋一は注文が多いから……」

俺の注文が多いんじゃないやなくて、お前に突っ込みどころが多過ぎるだけだろう。

と、言ったところで千里には馬耳東風も良いところなのだろうが。

「で、どんな部活にするんだ？」

「えっと、超能力者とか……」

「宇宙人や未来人や異世界人なんか探すS S団は却下な。それから友達作りに励む隣 部、生徒の悩みを解決する奉 部、世界の支配構造を打ち砕く未来 ジェット研究所もナシだ。せめて本を食う女子高生に三題噺を延々と書き続けると見せかけて事件を解決する文芸部や、基本的にお茶会ばかりでも学園祭の時には主役になれる軽音部程度には活動すること、良いな？」

「うつつ、私は校内で秋一といちゃいちゃ出来る場所が欲しかっただけなのに」

がくりと崩れ落ちた千里は膝と両手を床について打ちひしがれる。学校をなんだと思っているんだ、こいつは。そもそも超能力者はここに二人いるし。

しかし、千里の能力で何かしらの部活となると……

「アーリー部とか、AR部とか？」

「……物凄く気乗りしないわね、どっちも」

苦虫を噛み潰したような表情で夏芽がため息をついた。

思い付きで言っただけのもの、正直気が進まないのは俺も一緒だ。

あの日知ってしまったアーリーの、新天寺社のろくでもない裏の顔を思えば、とてもじゃないがアーリーを持ち歩く事さえ躊躇われる。要するにあれは発信機と盗聴器を抱き合わせたような代物なんだから。

個人的な考えとしては、地下に潜って新天寺社と抗争を繰り広げる訳でもないのならあってもなくてもさしたる影響はないと思うが、新天寺社を追う立場にあった本橋さんがワクドでアーリーを弄っていたのもそういう判断によるものだろう。

まあ、余計な情報を送らないように改造されていたって可能性もあるが、それならそれで千里に頼めばそれくらいの事は何とかしてくれそうだし。

「どうする、千里？」

「んー、私はどっちでも良いけど……」

考える振りをしながら、俺と夏芽の様子を伺う千里。

一応、こいつなりに気を遣っているんだろう。

個人的には何も知らない一般人の前で妙な含みのある話する事が気がなるのだが。

「俺はどっちでも良いかな。」

特に入りたい部活がある訳でもない

し」

「……良いの？」

夏芽が不安そうに俺と千里の表情を伺っている。

彼女に至っては俺達は殆ど何も聞かされていない新天寺社の前進とやらとも接点がある。俺達以上に色々と思うところもあるだろう。

「別に構わないけど。ただ、創部となると色々手続きがあるだろうから、何をするにしてもそれを調べてからだな」

「おkおk！ 面倒くさい事は全部任せた！！」

「……お前なあ」

いや、確かに調べものとか手続きとか、そういう地味な作業は得意だけども。

面倒くさいから押し付けたとあからさまに言われるとなんか腹が立つ。

「まあ良い。それより出すもん出したんならよ帰るぞ」

「ちよ、出すとか言わないでよ」

「それはスカセごほお!？」

「そつち系のネタ振りでは断じてないからしょうもない事を口走るな」

実に自然な動きで千里の下あごに裏拳を叩き込みつつ、荷物をまとめたカバンを担ぐ。

それから、完全に置いてけぼりになっていた新と太郎の方を振り返り「じゃ、また明日」と軽く会釈した。

「ああ、また何かあったら相談頼みます、師匠！」

「右に同じく。困った時にはたのんます、先生！」

「俺は先生でも師匠でもねーよ」

二人に手を振りながら教室のドアをくぐる。俺の後ろを顎をさする千里と松葉杖をついた夏芽がゆっくりと追いかけてくる。

「師匠だって」

「おかげ様でな」

「形はどうあれ、友達が出来て良かったじゃない」

整った双眸で俺の顔を覗きながら、しれっとそんな事を言ってくる夏芽。

歩調を合わせてはいるもののそれでも慣れない動きで俺の横を歩く彼女は俺達より一つ年上。その上、俺や千里の知り合いだ。

考えてもみれば俺なんかよりずっと不利なスタートラインに立っていると言っても過言ではないんじゃないかなかるうか？千里と同列に自分を置くのは何か嫌だが。

「もう少しゆつくり歩いた方が良いか？」

「ううん、大丈夫。それより、どこ向かってるの？ 北門とも南門とも違う方角なんだけど……」

「生徒会室だよ」

「どうして？」

「生徒手帳に創部の手続きは生徒会でつて書いてたから」

正確に言えば、いくつか条件を満たした上で生徒会に届けを提出、そこでの審議を経て職員会議に回され、最終的な結論が下されるといふ流れらしいが。

果たしてこれは面倒くさい仕事を体よく押し付けているだけなのか、それとも生徒の自主性の尊重と教師の責任のバランスを取ろうとした結果なのか。

一見すると手間が増えているだけのようにも見えるが、実際のところはどうなっているのだろうか？

「さつきは知らない風な態度だったか？」

「ありや、他人ひとの目があつたからだよ」

まあ、アーリーの話をし始めたのは俺なんだけどさ。

さすがに夏芽があそこまで露骨な反応を返してくれるとは考えてなかった。

……ただの他ハード信者だと思ってくれていると信じておこう。

「確か、この階段を上ってすぐだった筈」

「校内の施設の場所全部覚えてるの？」

「まさか。ただ、千里がこういう事を言い出しそつだなと思ったから、たまたまだよ」

「それ、たまたまとは言わないと思うわよ？」

「もつとも。」

「うーん、愛^{ラブ}だな！」

「寝ぼけた事を抜かすな……つと、階段大丈夫か？」

「うん、このくらいなら問題ないわよ。なんならお姫様だつこでもしてくれる？」

「しようか？」

「……えっ!？」

自分で言い出したにもかかわらず、意表を突かれたとばかりに驚く夏芽。

その拍子に杖を落として体勢を崩して転倒……

「おっと」

……する前に何とか抱き止めた。

「大丈夫かよ？」

「う、うん」

「おっと突然の立ちくらみがー！」

俺と俺に抱きかかえられる夏芽のすぐ傍で千里が突然ヘッドスライディング。

かなり勢いがついてた所から察するに鼻の頭くらいはすりむいていそうだが、無視。

「で、大丈夫か？」

「う、うん……それより、近い」

「ああ、悪い」

松葉杖を拾って夏芽に手渡し、ちゃんと立てそうなのを確認してから離れる。

心なしか顔を赤らめて「ありがとう」と呟く。

その横、というか寧ろ下で千里が何やら喚いているがこれまた無視。

せめてもの情けと首根っこを掴んで起き上がらせてやる。顔を覗きこむと心なしか鼻を赤らめて「何この格差」と呟いた。

そんな二人を引き連れて階段を上り、上級生の色々な感情の混じった視線を浴びながら生徒会室へ到着。

気を取り直した千里が、夏芽が「心の準備するからちょっと待って」というのも聞かずに意気揚々とドアを開け放った。

「たのもー!」

「さすがにその挨拶はねえよ、バカ」

「えっと、失礼しまーす」

「……どうぞ」

静かな、しかし澄んだ良く通る声で返事したのは一人の少女。

夏芽と同じように松葉杖についているにも関わらず、背筋を伸ばして立ったままファイリングされた資料に目を通してている。

首から垂れ下がる藍色のネクタイの色を見る限り、2年生だろう。遊びのない着こなしはまさに生徒会、といった雰囲気醸し出していた。

しかし、女性特有のふくらみが同年代の女子に比べて圧倒的な存在感を放っているため、そのお堅い着こなしが何故か物凄く不謹慎に見えてしまう。

ネクタイが不自然な軌道を描いてその丸みをいつそう強調するのが実にけしからん。

まあ、本当にけしからんのは千里のそれと変わらない俺の思考様

式なのだろうか……。

しかし、そんな思春期丸出しの思考は彼女の瞳を見るや否や一瞬にして消し飛んだ。

俺達を横目で見つめるその双眸はいささか感情が欠如したような印象を与える。

喻えるならば、そう……昆虫や爬虫類を彷彿とさせる漆黒。

そして、その吸いこまれそうな黒に見覚えがあった。

すこしくセ毛のミディアムボブの髪越しに俺達の様子を伺う彼女は確か

「……げ、坂田うめ」

「……あ」

「……ん？」

冬服の肩口に安全ピンで留められた腕章には副会長の3文字が躍っていた。

25話 関西弁は文章にすると案外無個性だから何かと扱いに困る

「……創部には部員5名と顧問が必要。部員には1名以上の上級生がいること」

「上級生ってのは2年か3年だよな？ あと、顧問は校内の教員限定？」

俺の質問に対して、坂田うめは言葉で返さずにこくりと首を縦に振って答える。

「で、何だこの状況？」

「……創部手続きの説明？」

大げさに首をひねってみせる俺と目線を合わせるように、彼女は首を傾げた。

思わず突っ込みそうになったが、千里と夏芽の手前、ぐっとこらえて何とか取り繕う。

「で、その上級生ってのは誰でも良いのか？ たとえば生徒会の役員でも？」

「……問題ない」

ぼそぼそと蚊の鳴くような声量なのに何故か聞き取り易い声で答える坂田うめ。

もそもそとしか動かない口元はなんだか草を食むげっ歯類のようだ。

「ふうむ……そっぴや夏芽。 帰りは電車、バス？ それとも歩き？」

「今日は兄さんが迎えに来てくれる」
「仕事辞めてまさかのニート状態かよ……」

何故か知らないが物悲しさで胸がいつぱいになった。

家族のために奔走したお兄ちゃんの末路としてはあんまりにもあんまりじゃなかるうか。その内、妹も家で日長一日ごろごろしている兄の事を疎んじるようになって、顔を合わせれば「働けニート」とつばを吐かれるようになるに違いない。

ああ、なんて気の毒な奴だろう……。

なんて考えはおくびにも出さず、真剣な表情のまま話を続ける。

「なら都合が良い。夏芽と千里は先に帰ってくれ。千里も大須さんに送ってもらえ」

「なして？」

「他にも色々と聞きたい事があるからだよ。この調子だとあと2時間はかかりそうだ」

「ふうん」

首を傾げる千里と胡散臭そうに俺と坂田つめを交互に見比べる夏芽。

「分かった。でも、後で変な噂を聞いたら……分かってるわよね？」

「噂って、そんな無茶な。まあ、善処はするよ」

その返事に一応納得してくれた夏芽は席を立ち、ゆっくりと生徒会室を後にした。

彼女を追いかけられるように千里も立ち上がり、一度不安そうに俺の方を見てから小走りで生徒会室から出て行った。

ひとり残った俺は席に座ったまま二人を見送り、それから改めて

坂田つめと向き合う。

「何でアンタがこんな所にいるんだよ？」

「……副生徒会長だから」

「それは知ってるし、入学式の生徒会挨拶の時に副会長は事故で入院中だって話をしていたのも思い出した。俺が言いたいのはそのんな事じゃなくて、警察にしょっ引かれなかったのかとか、新天寺社はアンタをどう扱っているんだとか、そういうのだよ」

一息で聞きたい事を一通り語り終え、軽く深呼吸する。

坂田つめは俺の質問に対する答えを探している最中らしく、机の上で組まれた彼女の手をぼーんと眺めている。

「……あの後、何とか人目のない所に隠れたから」

「で、新天寺社の方は？」

「……」

顔を伏せて、だんまりを決め込んだ。　どうやら話したくないらしい。

ただ、今も彼女がこうして学校に通っている事を考えると、少なくとも新天寺社は彼女を見捨ててはいないだろう。　もしも、彼女を使い捨てにしていれば学校に対して入院中だと連絡が入る事はないだろうし、銃創をこさえた女の子がそこの病院に行こうものならまず間違いなく警察に連絡が入る。

病院か、警察かは分からないが、そのどちらかに新天寺社の影響力が働いたと考えても差し支えないだろう。　ついでに言うとう極めて高い確率で新天寺社が何かしらのアプローチを仕掛けたのは病院の方だろう。　警察はリスクが大き過ぎる。

「まあ良いや。　それよりも怪我の方は大丈夫か？」

「……え？」

「だから、足の怪我はどんな感じなんだって訊いたんだよ？　っその怪我の張本人が言うのもどうかとは思うけどな」

「ほっほう、そいつは聞き捨てならんなあ！」

何の前触れもなく、明後日の方角から無駄に威勢の良い声が出た。振り返ると一人の女子生徒が腕を組み、仁王立ちで偉そうにふんぞり返っていた。

身長は160あるかないかと言ったところだろうか。決して高い訳ではないが腰まで伸びるブロンドの長髪が強烈に目を引き、圧倒的な存在感を放っている。

瞳の色は緑色。顔立ちはまず間違いなく平均的な日本人のそれではあるが、妙にでかい態度に相応しく凛々しい眼差しが印象的。

夏芽の吊り目が意志の強そうな目だとすれば、彼女のそれは気が強そうな目でも形容すべきだろう。

そして、この少女の肩口にもまた生徒会の腕章が取り付けられていた。

「……あ、会長」

「おっはー、マイルスイートおっぱいちゅわ〜ん！」

「すげえ頭の悪そうな挨拶だな、オイ。　っていうか、ただのセクハラじゃねーか」

しかも「おっはー」で！　「おっはー」って……！！

「ヤ　ちゃんかよ！」

「そっち！？　普通、ママの方ちゃうん！？」

「こちとら流行語大賞取った時はまだ子宮ひはん中だよ！」

そんな捨て台詞を残して全力疾走で立ち去って行った。
しかし、お母ちゃんとは。残念さゝ割増だな……。
彼女を茫然と見送った後、坂田うめと顔を見合わせ、同時にため息を吐く。

「生徒会長が廊下を走っていいの？」

「……分かんない」

その一言を最後に、生徒会室に静寂が訪れる。
しばらくして、その妙な沈黙を破ったのは俺の方だった。

「あー、何か色々訊く雰囲気じゃなくなったし、帰るわ」

「……あ、待って」

出入り口へ向かって一步を踏み出そうとした所を、左手の袖をつまんで止められた。

たったそれだけで、俺の前進はものの見事に止められた。流石はスクーターを平然と振り回す怪力少女。

「何？」

内心かなりびくびくしながらも、それを隠してただ呼びとめられたから振り返っただけですと言わんばかりの態度で尋ねる。

が、直後に坂田うめが放った一言の前では動揺を隠すことが出来なかった。

「……えっと、私の家に、来て」

何か知らん間にフラグが立っていたようだ。

26話 ひとから借りたものを汚したり壊した時の焦燥感
特に某国民的

よく分からん成り行きで坂田うめの自宅にお邪魔する事になった。学校から歩いて20分。電車通学なのでここから駅まで30分以上かかるのだと思うと帰りの事を考えるだけでも億劫だ。

これと言つて見るべきものない道のりの先にあつたのはこれまで至つて平凡な一軒家。

強いて特徴らしきものを挙げるとすれば、やや古くさい点くらいだろうか。

「これでお父さんもお母さんも今夜は帰つて来ないの的な台詞があれば役満だな」

「……何で知つてるの?」

「マジかよ……」

流石の俺も思わずつばを飲み込まずにはいられなかった。

いかんいかんとは思いつつも、彼女の制服越しの肢体を意識してしまう。

……もつとも、彼女と俺の立場を考えると俺が今夜は家に帰れないの、むしろ一生帰れないになる可能性も少なからずあるのだが。

「……でも、おばあちゃんと弟はいる」

「まあ、そりゃそうだよな」

「……両親、は顔も知らない」

こんな不憫な子をつかまえて下品な想像する奴は殴つてやりたいね、まったく。

「で、何で俺はここに招待される羽目になつたんだ?」

「……服を、返そうと思って」

そう言えば止血用にシャツジャケットを貸したな。

しかし、そんな用事なら明日にでも学校に持って来てくれりゃそれで済んだのに。

やっぱり罨なんだろうか、なんて事を考えながら絵に描いたような昭和の日本家屋の引き戸を眺めていると、何の前触れもなく、それがガラガラと音を立てて開いた。

そこから飛び出して来たのは武装した爺ついおっさんでも、黒服サングラスのそっち系のお方でもなく、小学4年程度と思しき少年。さっき言っていた彼女の弟だろう。

「おかえり、ねーちゃん！ そいつ誰？」

「口の利き方のなつてねえクソガキだな」

警戒していると言った様子は特にない。

ただ見慣れない相手に相応の関心を向けていると言った程度の反応だ。

ついでに言つと異性を連れて来た事に特別な意味を見出すほどマセてはいないようだ。

「で、誰？」

「お前の姉ちゃんの学校の後輩だよ」

「名を名乗れ！」

「人に名前を尋ねる時は、つてお約束の反論させてもらつて良いか？」

興味津々と言った様子で俺を指差しつつ見上げる坂田（弟）。

その適当に切つて適当に伸びて来ましたと言つた感じの髪を頂く頭をぼんぼんと2、3度叩いてやる。

俺の手をもう一方の手で払いながら、俺の反論に威勢良く答えた。

「坂田 大！」

「そうかそうか、俺は大須 冬彦だ」

とっさの偽名。特に意味はない。

ぐっと堅く握手を交わし、男同士の友情を育む。

しばらくすると大の方から手を解き、坂田 うめに「友達と遊んで来る！」と言い残して走り去って行った。

「弟の握力は人並みなんだな」

「……血は、繋がってないから」

「でも、可愛い弟だ」

「……うん」

こくりと首を縦に振る彼女の表情は変化に乏しいなりに薄く微笑んでいた。

その表情を見てみると、決して悪い子じゃないんだろうなあなんて馬鹿げた事を考えてしまう。一度は殺されかけた身の上で言うのはどうかと思っけれど。

しかし、俺の横を通り過ぎて引き戸を開ける彼女は普通の女の子にしか見えない。

まあ、日常を壊しかねない非日常なんてのは大体普段は平凡の仮面を被って全裸待機しているものなのかも知れないが。

「……入って」

「ああ、お邪魔します」

「お帰りなさい、うめちゃん。……あら、彼氏？」

今度はおばあちゃんが現れた。おばあちゃん、と言っても年齢

は50を超えているかどうかも怪しい風貌で、地味な色調の長袖のシャツとジーンズ・エプロンを身にまとう彼女は坂田うめの母親だと言っても誰も疑いはしないだろう。

「あ、はじめまして、お母さん。うめ先輩の後輩の大須です」

色々思うところがあるのはさて置き、とりあえず会釈と自己紹介。まんざらでもなさそうな笑顔で俺の挨拶にあらあらと言わんばかりに手を振る仕草（実際にする人は初めて見た）をしてみせる祖母さん。

“お母さん”の一言が効いたのかどうかは定かではないけれど、初対面としては好感触の反応だろう。

「あらま、年下？……ん？」

言いながら、彼女は首を傾げる。

この反応はおおむね想像の範囲内だが、こつもすぐに気付くとは思わなかった。

坂田うめは2年生。という事は彼女の後輩は当然ながら1年生で、今は四月の頭である。では、俺と彼女はいつ知り合ったのか、という話になる。

「はっはっは、先輩に一目惚れされました」

「あらまあ……」

祖母さん、すっげえ楽しそう。一方の坂田うめ、改めうめ先輩すっげえ恥ずかしそうに俯いている。

祖母とはそれ以上会話を交わさずに靴を脱ぎ、祖母の横をすり抜けたところでこつちに振り返ってぼそぼそと口を動かす。

「……こつち来て」

「はいはい、お邪魔します」

靴を脱ぎ、適当に揃えてから彼女の後を追いかける。

後方から「おばさんはちよつと2時間ほど買い物に行つてくるわ」という独り言が聞こえてくる。それが意味する所についてはあまり深く考えない事にしよう。

「それじゃ、行ってきまーす！」

「……いつてらっしゃい」

取るものも取りあえずといった様子で財布も持たずに、というかエプロンも外さずに祖母さんは出て行った。いくらなんでも色々先走り過ぎだろ。

怒涛の如く彼女が去っていった後には、何とも対処に困る沈黙が残された。

流石に祖母さんが残して行った爆弾に火をつける勇氣はない。彼女に向かつて「えつと、コンドームある？」なんて言えるほど俺は阿呆でも勇敢でもない。

この人に突っ込みで殴られたら痛いじゃ済まなさそうだし。

「……ここが私の部屋だから、入って」

「お、お邪魔します……」

「……お茶、淹れて来るから、くつろいでて」

「ありがとうございます」

と、言われても初めて入った女の子の部屋でくつろぐような豪胆は当然持ち合わせちゃいない。

千里の部屋なら何の躊躇もなくPCを立ち上げてベッドに寝転が

ってやれるんだがなあ。

それどころか本人がいなくても勝手に上がってくつろげる自信がある。

……まあ、自慢げに語るような事ではないのだが。

そんな馬鹿げた事を考えつつ、床に胡坐をかいて腕を組んだまま先輩の部屋を見回す。

ああ、うん。普通だ。これ以上に形容しようがないくらい普通だ。

これまた強いて特徴を挙げるならば女の子らしいものが殆ど無く、カーテン・学習机・タンス・ちゃぶ台に至るまでが落ちついた色彩で統一されている点だろうか。ちなみにベッドはない。

引き出しを開ければ寝るときに布団を敷くのは他の部屋で寝ているのがはつきりするが、そこまでして知りたい情報ではないのでもちろんそんな事はしない。

通学カバンは学習机の上に置かれたっばなしになっている以外に家具以外の彼女の持ち物と思いきものは殆ど見当らず、部屋の主の手柄を伺わせるようなものは一切なさそうだ。

つまり、適当に間を繋ぐのに使えそうな話題は殆ど無い、ということだ。

「……………」

「うおわ、おかえりなさい」

「……………」

俺のあまり意味のない挨拶に律儀に応じながら、先輩はお茶とお茶受けの載ったお盆をちゃぶ台の上に置く。

緑茶に羊羹か。見た目はかなり若いのに趣味の方はまさしくおばあちゃんって感じなんだな。もしかしたら先輩や大くんの趣味なのかも知れないが。

「えーっと、とりあえず服返して下さい」
「……うん」

すつと立ち上がった彼女はタンスの一番上の棚を開けると先日貸したシャツジャケットを取り出した。

汚れはきちんと落としてくれていたらしく、血の跡なんかは無さそうだった。

「……これ、ありがとう」
「どういたしまして」

うん、清々しいほど会話が続かない。

受け取ったジャケットをカバンに突っ込み、出された緑茶に口をつける。

程良い苦みが舌を通り過ぎる。なるほど、これは甘いお茶受けに合いそうだった。

「って、呑気に茶しばいでいる場合じゃねえ！ もういつそのこと単刀直入に聞くけど、何でわざわざ家にまで招待したんだ？ 何かしら企んでるって気配もないみたいだし」

「……それは」

「それは？」

「……分からない」

はい、会話終了。本人すら無自覚の感情をわざわざ掘り起こす気にはなれないしな！

もっとも、少なくとも発砲した件で恨まれちゃいならしい事だけははっきりしたと見て良いのだろうか？

色々あって彼女との距離感、付き合い方というのはいささか推し量りかねる所ではあるが、何はどうかあれ嫌われて嬉しいと思えるほど

ど歪んじやいない。それだけにその事実には少しだけ安堵を覚えた。

「そうか……」

取り繕うようにそう眩き、羊羹を一口頬張る。

控えめの甘さが好みの逸品だった。祖母さんはなかなか良い味覚^{センス}してる。

咀嚼しながら理由は自分でも分からないが家に誘ったその理由を考え、不意に一つの可能性についてぶち当たったが、いくらなんでも無理があるだろうと言葉にすることなく羊羹と一緒に飲み込むことにした。

27話 新任教師というのは新任というところが強調されるので教師としての

私の名前は本橋 春日。

趣味はコスプレ。 但し、今日は仕事なので至って普通のパンツスーツ姿。 髪もセミロングというにはやや長い申し訳程度の茶髪をうなじの辺りで適当に束ねている。

職業は正義の味方。 というとアホっぽいがいけれども一応は国家公務員だ。

「……という訳で羊羹食って帰ってきました」

「あのねえ、いくらなんでも無謀過ぎるんじゃないかしら？」

一見すると至って平凡な一軒家から出て来た羽原くん。

そのあまりにもあっけらかんとした彼の態度に頭を抱えた。

「彼女がどういう相手か分かってるでしょ？」

「分かっていますよ。 だから本橋さんに連絡が入るように仕向けたんです」

「えーっと、それはつまり……夏芽さんや北里さんがアナタの言動を不審に思って大須さんに報告、大須さんが何かしらの予測に基づいて私に連絡を入れて来ると判断したの？」

「ええ。 ちなみに本橋さんが大阪に転勤している可能性は3月21日の時点で予想済みです。 俺や千里の身に何かあった時、顔を知っていてなおかつ女性ってのは本人や家族を警戒させないって意味で大きいですからね」

最近の高校生って怖い。 彼が異常なだけなのかも知れないけれど。

「で、何か収穫はあった？」

「確証はありませんが彼女の弟と祖母は一般人。　　というか、戦った本橋さんが一番よく理解しているとは思いますが、坂田うめ自身もちゃんとした訓練を受けているってイメージではなさそうです。捕まえても何も出てこないかと」

「あんな末端、無理に捕まえたりなんかしないわよ。　　それで何か出てくるならもっと簡単に事が進んでるわ」

彼女と同様に、先日的事件で私達に接触を図ってきた大須　冬彦。新天寺社のセキュリティ業務に携わっていた彼でさえも重要な事は殆ど何も知らされていなかったのだから。

彼と彼の妹の中野　夏芽を匿う代わりに得た情報の大半は新天寺社の上層部どころか彼の直属の上司にも同僚にも部下にも結び付かなかった。

「まったく、しんどいのに割に合わない仕事ばかりで嫌になるわ」
「転職します？　　たとえば……先生とか」

「ガラじゃない。　　それに私はまだ21歳よ」
「うそお!？」

あからさまに、というか少々わざとらしく驚いてみせる羽原くん。この年の頃の子には化粧した女性の年齢なんて分からないものだろうけど、この反応は流石に少し傷つくなあ……。

「いくつだと思ってたのかしら？」

「正直に言うとアラサーの可能性すらあると思ってました」

「……泣いて良い？」

「いやあ、本橋さん大人っぽいんで……」

そう言われて悪い気はしないが、それでもやっぱりアラサーはな

あ……。

「……まあ良いわ。それより、あんまり危ない事はしないでね？」
「分かってます。千里や夏芽を巻き込みかねないですし」
「それに、あなた自身の身にも何があるか分からないんだから」

そう言つと羽原くんはキツネにつままれたような表情を浮かべた。
どうやら、自分の事はあまり意識していなかったらしい。
それから下あごに親指でかきつつ、何やら考えごとを始める。

「確かに俺に何かがあると悲しむ人もいるか」
「そういう話じゃないんだけどね……」
「本橋さんが心配してくれているのは分かってますよ」

と、にっこりと屈託のない笑顔を浮かべる。
うーん、本当にやり辛いわ、この子。

「……流石に今のはあざと過ぎるわよ？」
「ありゃ、ばれましたか」

いくらなんでも今の流れはあからさま過ぎた。

「どうせ照れた私に向かつて“やっぱりそうでしたか。優しいんですね”とか言つつもりだったんでしょ？」

「正解。ここで立ち話つてのもなんですから、続きは歩きながら」と、道路の向こう側を指差しながら私の返事も聞かずに歩き出した。

振り返りもしないのはいささか不自然だ。やっぱり思惑をあっさり見抜かれたのが悔しくて、それを悟られないようにしている、

と言ったところか。

それにしても、この子は私に気でもあるのかしら？ 仮にそうだとしたら、あの二人に恨まれそうだ。

「新天寺社との駆け引きは今のところどうなってるんです？」

「あまり詳しい事は話せないけれど、大した進展はないわ」

結局、あのRUMIコスの少女 表札を見た限りだと坂田うめと言っらしい を捕まえ損ね、肝心の大須さんも新天寺社への交渉材料になるような決定的な情報を持っていなかった為に案件26は思うように進展しなかった。

いや、やっぱり後ろ暗い何かがある。 あの日の出来事はそれだけでもそう確信するには十分過ぎる情報だった。 けれど、今やこの国の経済に、流通に企業としては破格の影響を持つ相手に仕掛けるだけの正義を示せる証拠がない。

「アレだけ散々な目に遭ったのに何の成果もなしとは……」

「散々な目にも何も勝手に首を突っ込んで、殆ど一人で自己解決かつ自己完結しただけじゃない」

「まあ、確かにその通りですけど」

羽原くんは相変わらず私に背を向けたまま頬をかく。

そういう反応は年相応な感じがして少しだけ好感が持てた。

ああ、この子はあくまでも普通の高校生なんだなと改めて認識させられる。

「……なんにせよ、貴方達の安全は私達が保障するから、もうあの時の事は忘れて平和な青春を送りなさい」

「言われなくてもそのつもりです……っと、妙な気配も無さそうですし、見送りはここままで大丈夫です」

「駅まで結構歩くわよ?」

「子どもじゃないんですから。それに本橋さんと並んで歩くのは……何と言っか」

相変わらず私には背中を向けたまま、さつきとは反対側の頬をか
く。

「もしかして、恥ずかしいとか?」

「いや、そういう訳ではないんですけど……とにかく、ここまで送
っていたければ十分ですから」

「はいはい、分かったわよ。それじゃ、さよなら」

「さようなら、本橋先生」

そう言い残して、手を振りながら羽原くんは去っていった。

彼の姿が見えなくなったのを確認してから、スマホを取り出して
登録してある番号を選択。

『どうした?』

「いえ、ちよつと報告したい事がありました……」

電話の向こうの上司に、さつき羽原くんから得た情報を伝える。

『なるほど、世間と言うのは狭いものだな』

「どうぞ致します? 必要とあれば連行しますが……」

『いや、その必要はない。代わりに春日、お前学校の先生になれ』
「は?」

何を言っているんだ、このおっさんは?

『おい、上司は敬え』

「電話越しで心を読むのはやめてください、プライバシーの侵害です」

『はあ……それよりもさっきの話だが、これは命令だ』

「教員免許なんて持ってませんよ？」

『お前だつてあのコスプレの子が末端の末端で大した情報なんて持つていないのは理解しているだろう？ なら、わざわざその事を連絡してきた理由は何だ？ 俺の推論だが、大方あの日関わった子たちへの義理立てだろう、違うか？』

ものの見事に凶星を突かれた。

直情的な性格ゆえに読まれ易いのは自覚しているが、それでもあまり良い気はしない。

『で、だ。 コスプレの子と例の少年、羽原くんだったか、を同時に見張るのなら最適の職は何だ？』

「大事な事なでもう一度言いますけど、教員免許なんて持ってませんよ？」

『そんなものいくらでも用意してやるから安心しろ』

一方的に、力強く言い切った彼はこれまた一方的に通話を切った。即座に掛け直してみたものの、電源を切っているらしく繋がる気配はない。

「……何なのよ、このふざけた展開は？」

気がつけば朱に染まりつつある閑静な住宅地の、広いと言い難い通り。

そこで私は一人頭を抱えて盛大に慨嘆した。

私の名前は本橋 春日。

趣味はコスプレ。 但し、今日は仕事なので至って普通のパン
ツースーツ姿。 髪もセミロングというにはやや長い申し訳程度の茶
髪をうなじの辺りで適当に束ねている。

職業は……高校教師。 九尾高は公立高校だから地方公務員とい
うことになるのだろうか。

28話 一人暮らしをしてみると飯を作って待っていてくれる人のありがたみが

「ただいま」

「あら、おかえり、秋一」

えらく呑気な声で出迎えられ、リビングへと歩を進める。

リビングの中央に置かれた背の低いテーブルの前の座り込む影が一つ。

いや、よく見てみると二つの影が重なり合うような格好になっているらしい。

ひとつは母さん。俺を産んだのが19歳なので今だ34歳とかなり若い。見てくれは実年齢に輪をかけて若い。のほほんとした雰囲気のまま、客観的に見れば美人さん……だと思っ

で、もう一つの影は親父、だったら二つの影が重なり合っているの意味が歳の離れた弟か妹の可能性を示唆するものになるので非常に気まずい。が、幸いにもその影は父親でもなければ、他の男でもなく、俺の良く見知った顔だった。

「なんだ。千里、来てたのか？」

「……んっ」

と、何だかうめ先輩みたいな微妙な反応を返ってきた。

こちらを見る制服姿の彼女の頬は紅潮しており、小さな唇から洩れる吐息は少し荒い。

実際に見た事はないが、何となく事後と言われれば納得してしま

いそうだ。

「……で、何やってんだよ？」

「もちろん、千里ちゃんのおっぱいを揉みしだしてるのよ」

「ちょっと何を言っているのか分からないんだけど」

事後ではなく真っ最中だった。

と言うか、男の目があるんだから流石にその手を止めて欲しい。片や自分の母親、もう一方はただの変態だとは分かっている。目のやり場に困る。

「と言うかだ、何のために千里の乳を揉み倒しているんだよ？」

「決まってるでしょ。大きく育てる為よ！」

「そこで突拍子もなくキリツとした表情になられても困るわ」

しかも口調はおっとりしたまま。それだけに表情との格差が酷い。

そして何より、口走った台詞の内容があまりにも酷い。

もう一つおまけに後ろから組み付かれている千里の表情が……まあ、そのアレだ。

「秋一も触ってみる？ 凄く柔らかいわよ？」

「で、今日の夕飯は何？」

「千里ちゃんでも食べてれば良いじゃない？」

「バカな事言っていないで早く食おうぜ」

「全く、面白みのない子ね。千里ちゃんはアナタの為にこうして花嫁修業してるのに」

本当に何を言っているんだ、この母上は。

これが一緒に夕飯を作っている最中だっけ言うんなら確かにその通りだろう。

しかし、現状はただ大輪の百合が咲き爛れているだけじゃねーか。その事に特に不満はないのだが、これが自分の母親とそれなりに付き合いの長い友人、かつ曲がりなりにも一番親しい異性だと思っ

と不安にならざるを得ない。

「運んどくから、それまでに千里は着衣の乱れとそこに脱ぎ捨ててあるブラをつけ直せ」

目にやらしい光景を避けるべく、キッチンへと退避。

まだ作り立てといった感じの輝く衣に包まれたトンカツが千切りキャベツに行儀良く腰かけていた。

冷蔵庫から豆腐を引っ張り出して、笹を敷いたお皿へとエスコート。

百合のように白く、乙女のように柔らかい肌を生まれたての小鹿みたいふるふる震わせて誘ってやがる。

「後は醤油とソースがあれば完璧、と。 おおっ、しば漬発見」

鼻歌など口ずさみつつ、小皿にしば漬を投入。 続いてお椀にご飯をよそう。

俺が多め、母さんが並、千里が少なめ。 今日も元気な銀シャリだ。

ちなみにその日の気温や湿度まで加味した完璧な飯盒炊爨は母さんの得意とするところ。 と言うよりも、一番の得意料理と言っても過言ではない。 その腕前たるや炊飯器無くても完璧に仕上げる事が出来る程だ。

もっとも、現代社会において役に立つ事なんて限りなく無いに等しいのだけれど。

「あとは汁ものを……いや、メインがトンカツなのに豚汁は無いだろ……」

ついでに、組み合わせとか色彩とか、そういうところに頓着しな

い。

多少栄養バランスや見た目が悪いのは構わないが、こういっのは勘弁して欲しい。

「二人とも席に着いたかー？」

「おうともよ！」

「おーともよー」

まず、二人の分を載せたお盆を手にリビングへと引き返す。

言われたとおりに服を着直した千里と母さんは綺麗に片づけられたテーブルの前で正座していた。

「先に食べてていいから」

「おk」

「おk」

「母さん、変態がうつるからそういう口真似は止めなさい」

まあ、千里を変態にしたのは母さんという疑惑も無きにしも非ずだが。

頂きます、と手を合わせる二人を横目で眺めながら再びキッチンへ行き、片手に自分の分の乗ったお盆を、もう一方の手でコップとお茶の入ったヤカン、醤油を持ってリターン。

空いている場所に腰をおろし、二人に倣って手を合わせる。

「いただきます」

箸を手に取り、まずはキャベツに手を伸ばす。

瑞々しくシャリシャリとした食感が口の中で斉唱を奏でる。

「それで、秋一。結局、副会長とは何の話をしてたん？」

「創部の話の続きだよ。ほれ、上級生の心当たりなんてないだろ？だから副会長に協力してもらおうかと思って拝み倒してた」

「……で、本当のところは？」
「残念だが、お前の期待するような素敵な展開は何一つとしてねえよ」

「高校生離れたモンスターサイズだつて話よね、その副会長さん。そんなものを前にして何もいないなんて……我が子ながら情けないわ」

「アンタは息子に何を求めているんだよ」

行儀悪いとは思いつつも箸でビシツと母さんを指す。

母さんは俺の言葉なんて気にも留めず、冷奴を箸で割いている。

「お母さんはいつでも遅しく育つて欲しいと思っているわよ？」

「遅しさの方向性に問題があり過ぎるわ、阿呆」

「で、本当にそれだけ？」

俺と母さんのやり取りを遮るように千里が尋ねる。

……なんか妙にしつこいな、こいつ。

「そんな事を訊く為にわざわざうちまで来たのか？」

「え、えーと、それは……アパートでキノコが繁殖してもうて……」
「お前は何を言っているんだ」

申し訳程度に突っ込んでからご飯に口を付ける。

弾力、粘度、柔らかさが奇跡とも言えるバランスで共存した素晴らしい歯ごたえだ。

咀嚼した白米を飲み込み、お茶を一口。

「あと、顧問も確保出来るかも知れない」

「ほう、誰？」

「多分、お前も知ってる人だよ」

千里がそんな事は聞いて無いという顔を向けて来るが取り合わずにトンカツを一切れ箸でつまんだ。

「今週中には分かるだろうから、見てのお楽しみで良いだろ？」

「念の為に言っておくが、巨乳美女以外は認めないお！」

「……そうか」

あえて何も言わず、目を逸らした。

29話 アダルトビデオのタイトルが超ベタベタか人類には早すぎたの両極に推

「と言う訳で、本日より本校に赴任する事になった本橋 春日先生だ」

夕飯を食べ終えた後、3人でテレビでも眺めながら時間を潰し、9時頃に千里を家まで送って、翌日の準備を全て終えてから少し早めに就寝。翌朝、支度を終えた所にちょうど迎えに来た千里と並んで学校へ。

今日のデートに浮かれる新や太郎と駄弁っていたところに、学年主任がやって来て担任が産休に入るので臨時に他の人が来る事になったといういくらなんでも唐突過ぎて無理のある説明を始め、冒頭に至る。

流石にその説明はどうなんだろう。昨日まで普通に通勤していた女性教諭が突然産休とか、翌日には代理が来ているとか不自然にも程があるだろう……。

「おお、すっげえ美人」

「スタイルやべえ」

「お姉さまって呼びたいわ……」

が、そんな事をうだうだ考えているのは俺だけらしく、クラスメイトは概ね好意的な反応を示している。産休に入った先生ともまだ殆ど付き合いが無い訳だから、こんなものと言えばこんなものなのだろう。

特に男子にしてみれば若くて綺麗な先生であればウェルカムだろう。

女子にも好評なのは少々意外なところではあるが。

一応、緊張しているのかともすれば仏頂面にも見えてしまいそう

なくらいの真顔だったが、それはそれで独特の魅力がある。

「はじめまして、本橋 春日と申します。代理とは言えこうして一つのクラスを担当するのは初めてなので至らない所もあるかとは思いますが、宜しくお願い致します」

と丁寧な自己紹介。その後、一礼。

こうして見ると本橋さんは物凄く姿勢が良い。すっ、と美しい動作で顔を上げた彼女は薄く笑みを浮かべた。

「私、本橋先生になら抱かれても良い……」

千里が訳の分からない事を呟いている。

確かに心臓を掴まれたかのような錯覚を覚える笑顔ではあったが、その反応はどうかと思う。

「……っは！ 見とれてた」

「夏芽、君もか……」

いや、よくよく教室内を見回してみると、夏芽と千里以外の女子も骨抜きにされていた。

男子の方が比較的冷静。この人は特性：お姉さまでも所持しているのだろうか？

まあ、確かに昨日と同様に割と地味めのパンツルックかつ、あのスタイル。『新任女教師 放課後の個人授業』なんてタイトルがビックリするほど似合いそうにない風貌だからこうなるのもある意味必然なのかもしれないが。

「それじゃ、そろそろホームルームを始めるわよ」

ほどほどに盛り上がる男子と惚ける女子が織りなす異様な雰囲気
を、彼女は一言で一蹴。

まるで夢から覚めたかのように我に返る女子と静まり返る男子。
学年主任が去った後もホームルームはつつがなく進行し、そして
何事も無く終えた。

「それでは一同、きちんと一時間目の準備をしておくように」

クラス名簿と書類を手に取り、教壇から降りた彼女は教室を後に
した。

それを追いかけるように教室から飛び出す俺と千里。 夏芽はあ
の体なので自分の席に腰かけたまま。

特に急ぐ気配も無く廊下を歩いていた彼女に追いついたところで、
声をかける。

「本橋さん！」

「あら、羽原さんと千里ちゃん」

「お久しぶりです。 相変わらず踏まれたいおみ足ですね！」

「千里ちゃんは相変わらずキモいわね」

大概な台詞を口走っているが、男前な笑顔を浮かべているので本
気でキモいと思っている訳ではなさそうだ。

「来るなら来るって言うてくれれば良かったのに」

「突然のことだったから。 誰かさんはこうなる事を予測してたみ
たいけど」

「いやー、冗談で言っただけなのに、不思議な事もあるもんだなー」
「白々しい……」

横目かつ半目で俺をねめつける本橋さん、いやあえて本橋先生と

呼ばせて頂こう。

「で、何の用かしら？」

「創部したいんで顧問になってください」

「創部ねえ……何部？」

「A R 部」

「正気？」

目をはつきりと開いて、今度は訝しげな眼差しを向ける。

まあ、この反応が自然かつ妥当かつ当然ではあるが。

「……断っても無駄みたいね」

「千里が私物化出来る部屋が欲しいって不純極まりない動機で言いだしたことなんで別に無理なら無理なら諦めるとは思いますけど」

「アナタ達は学校を何だと思っているのよ？」

その突っ込みもごもつとも。

「そもそも、創部には部員が5人必要だった筈だけど？」

「それなら大丈夫です」

「……でしょうね」

本橋さんは俺の顔を見ながら盛大にため息をついた。

それが意図するところは気にしないでおこう。

「それで、上級生のつてはあるの？」

「うめ先輩にお願いする予定です」

「……あの子とはあまり顔を合わせたくないんだけど？」

「生徒会役員なんでいざれどこかで顔合わせする機会が来ると思いますが。変に周囲に人がいる時よりも事情を知っている人だけの

時に済ませておいた方が良いかと。その為のセッティングなら喜んで引き受けますけど、どうします?」

にんまりと笑顔を浮かべてそう尋ねると、彼女は頭を抱えて答えた。

「何だか嵌められた気分だわ……」

30話 学校で食べるおやつ味の、学校で飲む「コーヒ」のど越し、学校です

放課後。

本橋さんを案内する役目を千里と夏芽に任せ、鶴橋さんと並んで教室を後にする新を見送りつつ生徒会室へ。

生徒会室のドアを開ける。さすがにまだ誰もいないようだ。

「と言うか、開けっ放しとは不用心な……」

「アンタみたいな無作法モン、今までこの学校にはおらへんかったからなあ」

ドアをくぐった俺の背後から、今時珍しいくらいコテコテの関西弁が飛んできた。

声の主が誰かなんて振り返るまでも無い。

「確か生徒会長さんでしたっけ？」

「なんやねん。その、壇上の姿を拝見しただけの新生だから先輩の顔なんてわかりませ〜ん、みたいな態度は！？ アンタが3歩歩いて忘れたとしても、ウチは百遍生まれ変わっても忘れへんからなあ」

「はいはい。で、生徒会室に何の用ですか？」

「何でアンタのホームみたいな態度やねん！ おかしいやろ！？」

最初、腕を組んだままうるんげな目つきでこちらを見ていた生徒会長だったが、今はむくれた表情で、俺をビシッと指差して、もう一方の手で壁をぺちぺち叩いている。

手の動きに合わせて頭も小刻みに動き、その度に思わず金色の絹とでも形容したくなる華やかな金髪が宙を踊る。

その動作に何の意味があるのかはよく分からないが、よく分から

ないからこそ分かる事もある。

「会長って何か可愛いですね」
「なっ!?!」

会長の顔からボツとつ火が噴いた。

「そっやって照れるところがまた可愛い」
「う、ウチは可愛くなんかあらへんわっ!?! それにアンタに褒められて照れたりなんかするわけないっちゅーねん!?!」

「ツンデレ?」
「どこが?!」

「えっ、褒められて嬉しくないってのは建前で本当は腰を抜かしそうなくらい嬉しいんでしよう?」

「んな訳あるか!?! んな訳あるかあ!?! 大切な事なので2回言いましたああ!?!」

「ツンデレは皆そう言うんだよ」

今度は一步退きつつ仰け反り、胸元辺りにかざした両手を怪しげに動かす会長。

多分、困惑やら何やらが反映されているのだろうが、本気で意味が分からない動作だ。

しかし、一つだけ確かな事がある。

「会長、実は動きが大げさで感情豊かな自分可愛いとか思ってるでしよ?」

「思ってたへんわ!?!」

「計算づくのあざとさで男を誑かす女狐は皆そう言うんだよ」

「づうづうづうづう……!?!」

申し訳程度に首を傾けて俺の言葉に肯定の意思を示してくれた。
後はいきなり本橋さんと対面した時の為の心の準備をそれとなく
させれば準備は万端。

「えーっと、正直言うとうめ先輩とはそりが合わないかなとは思っ
んですけど、俺にとっては命の恩人なんで俺の顔を立てると思って
適当に合わせて下さい」

「……うん」

またしてもわずかに頭を動かしての首肯。

「多分、もう5分くらいしたら来る筈なんで」

「……分かった」

ぼそりと答えたうめ先輩はカバンを部屋の中心を囲んで正方形に
なるように置かれた長テーブルの一片に置き、書棚の対面の壁に置
かれている電気ケトル・紅茶パック・粉コーヒー・砂糖・紙コップ
の前へ。まだ足が本調子ではないらしく、歩く時の姿勢や動きは
ぎこちない。

それら一式が置かれているテーブルには『きゅーちゃんの放課後
ティーセット（はあと）』と丸っこく、なおかつアホっぽい字で書
かれた張り紙がセロハンテープで取り付けられている。

きゅーちゃん……どこかで聞いた名前だな。あれは確か入学式
の……

「考えんでもここまで生徒会室を堂々と私物化する奴なんて一人し
かないか」

脳裏にヘタレ系関西風味金髪美少女の姿を思い描きながら、一人
勝手に得心した。

そついやあの人の名前は“西条 九”だったっけか。
得心していると紙コップを二つ持ったうめ先輩がカバンを置いた
席に腰掛け、自分の前に紅茶の入ったコップを、そのすぐ隣の席に
ブラックコーヒーの注がれたコップを置き、伏し目がちにこっちを
見ながら手招き。

「あ、それ、俺の分ですか？」

「……うん」

「言ってくれば俺が淹れたのに」

「……いいの。ボクが淹れたかっただけだから」

なんか気を遣わせちゃったみたいだな。

「そついや、今日は松葉杖は持ってないんですね？」

「……うん。 必要ない、から」

さっきのあの歩き方で必要ないとは思えないが。

まあ、彼女が必要ないと言うのならそれ以上突っ込む必要も無い
か。

「ん、ボク？」

「……あ、私が淹れたかっただけだから」

「いや、わざわざ言い直さなくて良いですから」

無口、デカメロン、怪力、ボクっ娘のグランドスラムとは恐れ入
る。

なんて考えているとつい口をついて出そうになった「いや、ボク
っ娘、凄く良いと思いますよ。文化だ、ロマンだ、萌えだ」とい
う妄言をコーヒーで胃袋に流し込んだ。

「……」

紙コップに口を付ける俺の横顔をじーっと眺めるうめ先輩。
距離が近い上になまじ感情の乏しい双眸もあってか、圧迫感が尋
常じゃない。

「なんですか？」

「……苦くない？」

「ええ、ちょうど良い塩梅です」

「……苦いの、平気なんだ？」

なるほど。何も訊かずにブラックを淹れた事を気にしていたら
しい。

「はい、平気です。あと、なかなか美味しいですよ」

「……よかった」

俺の返事を聞いて安心したうめ先輩は薄く微笑む。

「こそっ……じーっ、秋一のうわきものー」

「手が早いつてレベルじゃないわね……」

思わずその笑顔に見惚れそうになった俺を、入り口から顔を半分
だけ出して生徒会室の様子を伺っている二人 言うまでもなく千
里と夏芽 が我に返らせた。

「よお、二人とも」

「私たちは空気です。だから早くギシアンしてくれよお」

「おのれはいきなり何を抜かすか」

距離があるが、とりあえず手の甲で軽く相手を叩くオーソドックスな突っ込みの素振り。

それを合図に千里は生徒会室に上がり込んできて、当然のようにうめ先輩の対面の席にカバンを2つ置いて、腰かけた。

夏芽もやや遠慮がちに生徒会室に足を踏み入れ、千里の隣に腰を下ろした。

松葉杖を長テーブルとイスにかけ、千里が持って来たカバンの一方を自分の方へ引き寄せる。

二人が着席したところで本橋さんが登場。

お互い何を言うでもなく、静かに視線を交錯させる。

うめ先輩について良く理解していない夏芽と千里は二人の反応にはこれと言った関心が無いらしく、しきりに俺と先輩の顔を見比べたり、自分と先輩の胸を比較したりと忙しなく視線をさまよわせている。

ついでに言うとうめ先輩はうめ先輩の胸を見て驚愕し、千里の胸を見て戦慄し、自分の胸に手を当てて絶望していた。その後、本橋さんの方を見てほっこりとした笑顔を浮かべていたがそれについては見なかった事にしよう。

と言う訳で、別段暑くもない部屋で俺一人が嫌な汗をかきつつ、状況を見守っていた。

「……はじめまして」

「はじめまして。今日からこの学校で教鞭を執ることになる本橋

春日よ、よろしく」

「……はい、こちらこそ」

どうやらうめ先輩は彼女が先日自分を10階から叩き落としてくれたコスプレイヤーだとは気付いていないらしい。

まあ、確かにあの派手なコスプレと今の地味な服装とじゃ中々結びつかんよなあ……。

「と言う訳で、本橋先生が顧問でお願いします」

「……うん。でも、まだ3人だけ」

「と言う訳で、うめ先輩。入部して下さい」

「……え？」

「え？」

「えっ」

俺と本橋さん以外の3人が絶句した。

うめ先輩は予想外の発言にただ純粹に驚いたと言った感じの少々間の抜けた声で。

夏芽と千里は……少々不満げな表情を浮かべていた。

31話 金髪は劣性遺伝だとか、軍人なのに隻眼つて色々不味くないとか野暮な

「はっはっは！ 羽原 秋一、敗れたり!!」

驚きの後に訪れた妙な沈黙を引き裂いた威勢の良い声の主はどこから舞い戻つて来た生徒会長、もとい西条 九。

物凄く得意気な表情を浮かべてふんぞり返り、やや顎を突き出し、左の頬に右手の甲をひつつけた典型的な女王様のポーズ（？）で俺を睨んでいる。多分、彼女なりに見下ろそうとしているのだろうが、いかんせん身長差があるのでかの有名なプロレスラーの真似でもやろうとしているかのように見えなくもない。

「出たな、面白会長」

「面白とか言うな!? くつくつく、なあ、羽原くん? 部員は4人しかおらへん気がするんやけど?」

「ああ、それなら大丈夫。一人は今ここにいないだけだから」

カバンから昨日の内に先輩から預かっておいた創部手続きに必要な書類を取り出す。

横長のマスが20個ほどずらりと並んだわら半紙。その一番上の欄に間違いなく今ここにいない男子生徒の、今宮 新という名前が書き込まれている。

「ほっほう、流石はウチの宿敵ともやね。そう言うところの根回しは抜かりない……でもなあ、ウチのうめちゃんがアンタなんかに手を貸すはずあらへんやる!」

相変わらず女王様のポーズに加えて手近な椅子に右足を乗せ、もう一つの意味でも女王様のポーズをとった生徒会長の双眸と口が弓

なりに歪む。 実に厭らしくて酷い表情だ。

でも、正直こういう女、^{ひと}大好物です。

得意気な会長から視線を外し、うめ先輩を見る。

ちようど彼女も俺の方を振り向いており、見事に目が合った。

「……………えっと」

「先輩！ お願いします！」

先輩の言葉を遮りつつ、テーブルの上に置かれていた彼女の手を両手で包み込むように握り、俺と彼女のちようど中間辺りの、胸の高さまで持つてくる。

抵抗されればその弾みで入り口まで放り投げられそうなものではあるが、幸いにもそんな事はなかった。

その一方で、俺が先輩の手を撮った瞬間に生徒会長は女王様のポーズを止めて両手を堅く握って身を乗り出し、夏芽と千里も思わずといった様子で椅子から少し腰を浮かせた。

本橋さんは腕を組んで生徒会室の壁にもたれかかったまま「この子、結構なクズだわ」とでも言わんばかりの若干非難がましいジト目を向けている。

「ふ、ふんっ、そんな安っぽい手口で……………」

「俺、先輩と一緒に部活がしたいんです」

「……………うん、良いよ」

うめ先輩は俺のお願いに快く応じてくれた。

「ね、ねねね……………寝取られたあああああああああ！？」

「学校でなんつう雄叫びを上げるんだ、この負け犬会長は」

「く、くう、くくくっ……………しゃーない。こうなったら奥の手や……………」

……………」

頭を抱えての慟哭から、即座に立ち直った会長は邪悪な、しかしかなり悔しそうな表情で嗤う。笑うではなく嗤うが正解。

「なあ、羽原くん……知つとるか？ この学校には部室棟があつてなあ、最大50の部にそれぞれの専用の部室が用意されてるんや」「だつてさ、良かったな千里」

「まあまあ、話は最後まで聞けい。で、その代わり放課後に部活の為に教室を開放するのは美術室とか、音楽室なんかを除いて基本的にできひん訳よ。そういう部屋を使う部活も部室はあくまでも部室棟やしな」

「つまり、部活として正式に認可するには部室が不可欠だが空きがない……と？」

話の流れから言いたい事を察して先回り。

「そう言うこつちや」

「……一つだけ、空きがあつたはず」

「実はほんの数分前に埋まってもうてん。せやから最後の一室はもう彼らのもんやねん！」

生徒会長がぱつと腕を広げて廊下の方を指差す。

すると、その合図を待っていたかのように10人以上の男女がずらりと現れた。

「「私たちは！」」

「「九尾高！」」

「「拡張現実型！」」

「「サバイバル！」」

「「シューターズ！」」

「通称、KASSだ!!」
カッス

きちんと数えてみると総数13名。その内3人が2年生で、残りの10人は全員1年生のようだ。2人だけ俺と同じクラスの生徒の顔もある。が、名前は覚えていない。

「家で野球でも見てろよ」

「な」民じゃねえから!？」

良い突っ込みだ。サバゲーなんてやめて漫才でも始めればいい。と言うか、よくもまあこんな中途半端なネタを拾えたもんだ。彼らに背中を向け、両手に腰を当てた生徒会長は改めて盛大にふんぞり返る。

「ここにはおらんけど、顧問の先生もちゃんとおるで」

「そうか……じゃあ勝負しようか」

「はあ? 何を訳の分からん事を……」

「一つ目、今のままで廃部になりそうな部活は無いか? 二つ目、いざとなれば過疎部を乗っ取るって手もある。廃部寸前の部活なんかなら存続の為の妥協案として受け入れてくれるだろうな。唯一の部員が押しの弱そうな女の子だったりしたら勝ったも同然。で、三つ目。これが会長にとっては一番重要だと思っただが、俺らの申請している部の活動はそもそも部室なんか無くても問題ない。ARさえあれば誰かの家に集まったって良い訳だ……たとえばそう、羊羹で食べながら、な」

「!?!?」

生徒会長の眼がくわっと大きく見開かれ、それから悔しそうに歯ぎしりをしながら俺を睨みつける。なまじ美人なだけに結構な迫力だ。

「この、外道があ……」

「で、唯一の部室をかけて、正々堂々勝負をしたいんですが……どうします？ 勝負の内容はARサバゲー、双方顧問を含めた部員全員で。なんなら会長がそっちに加わってくれても結構ですよ？」

握った拳をわなわなと震わせる会長。

その後ろでKASSのメンバーの大半もぎらぎらした闘志を剥き出しにしている。

今ここにいない新を除けば男は俺だけで、しかも二人は病み上がり。そんな輩に自分達の土俵で勝負してやるなんて言われれば腹も立つのは当然だろう。

「ルール次第やな」

「全滅、とか言うところちが不利にも程があるから、ひとり1ポイントで制限時間内により多くのポイントを取ったチームが勝ち、でどうか？」

「時間内に全滅した場合は？」

「あくまでポイント」

「アホ抜かせ。そっちが6点取ったら詰みやないか」

勢いで安請け合いしてくれるかと思っただが。

どうやら、自分に何のメリットもない交渉に乗るほど迂闊ではないようだ。

ついでに言うと思っていた以上に切り替えが早い。

「それなら俺だけ10ポイントで。これならこっちが全滅しても15ポイント、そっちが全滅しても15ポイントで公平だろ？」

「と言う事やけど、どない？」

「別に構わない……と言いたい所だけど、場所とルール次第じゃ君

が逃げに徹するだけで圧倒的にそっちが有利になる可能性があるから、ある程度はルールで縛らせてもらってもいいかな？」

問いに答えたのはKASS2年生組唯一の女子生徒。

細身で本橋さん以上に背の高い、ポニーテールがトレードマークの凛々しい人だ。

女性軍人という肩書きが似合いそうな、ものすごくサバゲ部部員っぽい。

何故か眼帯を装着しているが、どういう意図によるものなのかよく分からないのであえて突っ込まない。

「こっちは素人だし、詳細はそっちに任せるよ」

「……いいのか？ 私たちに有利なルールになるかも知れないぞ？」

「別に構いませんよ。あんまり無茶するようなら生意気な小学生の遊び相手をするだけですから」

羊羹に続いて、この台詞にも会長が反応した。

やっぱり、この人もうめ先輩の家に招待されたことがあるんだな。

「分かった。 どうせなら双方が楽しめるルールを設定させてもらうよ、勝ち負けは別としてね」

そう言い終えた彼女（名札をつけていない為、名前が分からないので仮にミリ子さんとする）はにっと不敵に笑ってみせた。

ヤダ、この女性、格好良い……。

会長はそのやり取りを、彼女を鬱陶しそうに横目で眺めている。

「んじゃ、部室争奪戦はARサバゲ、詳細はこっちで決めさせてもらってええな？」

「ゲームの開催日だけはここで宣言してください。 先延ばしにす

るのは構わないけど、前倒しはなしで」

「……開催日は今日からちようど3日後が目安。それでええか？」
「まあ、妥当な線かな」

ミリ子さんとの会話に割って入ってきた彼女は俺の同意を得るが早いか、金色の髪を翻して生徒会室から去って行った。

うめ先輩はちよつとだけ名残惜しそうに会長がさつきまでいたその場所を眺めている。

「あんなにあつち有利の条件を呑んで良かったの？」

「あつち有利？ まあ、本橋先生がそう思っんなら勝ったも同然ですよ」

一部始終を壁にもたれかかったまま見守っていた本橋さんの問いに、笑顔でそう答えた。

32話 セーラー服と云々というタイトルをつけようと意気揚々としていた所に

ARサバイバルゲーム。

ARシューティングから発展した、文字通りAR技術を利用したサバイバルゲームを指す。

再現度はものによってマチマチで、アーリー本体だけで成立する子ども向けのものから、専用のゴーグル、モデルガン型コントローラーを利用しての本格的な野戦を再現するものまで多種多様な層に向けたソフト、アプリが販売されている。

中にはARによって街の中に仮想のエネミー（人間に限らず、ロボットや怪物も可）を表示し、それらと交戦する事でシングルプレイを可能にするゲームや、銃ではなく魔法の杖などを武器にしたファンタジー風サバゲーなるものを可能にするものも存在するらしい。また、フラッグ戦から殲滅戦、バトルロイヤルに至るまでの多彩なルール、ヒット判定の自動申告の有無、ゾンビが出来る環境の設定、情報の共有度合い……サバイバルゲームをする上で必要になる情報の管理をアーリーに任せる事も、あるいはあえてアナログな方法を選ぶ事も可能。

それが私達が魅了されてやまないARサバイバルシューティングという競技の概要だ。

土曜日。一昔前は休日だったが今では4時間程度の授業が行われている。

開戦は授業が終了し、生徒達が部活に、或いは家路にと各々の午後を満喫し始めるであろう1300。

彼我戦力差はゆうに3倍以上。こちらはそれなりに経験がある上にある程度連携も取れた13人と、少なくとも邪魔にはならない程度に動ける若い男性教師。この学校に赴任して来て4年になる為、校内の構造はきっちり把握しており、地の利を活かした戦いを

出来る人だ。

そして、生徒会長。 実力に関しては何とも言い難いが、決して足手まといになる人ではない。 いや、今回のゲームに当たったの方針・戦術を纏めたのは実質彼女であり、既に十分過ぎるほどに役割を果たしていると言っても過言ではない。

彼女の立てた戦術はこうだ。

・松葉杖の子（中野 夏芽と言うらしい）はルールで殺す。

今回使用するアプリには待ち伏せや逃げに徹するプレイングを禁止するルールがデフォルトで設定されている。 これを利用して機動力のない彼女が待ち伏せや奇襲で戦果を挙げるのを阻止。

個人的にはそういうのも一つの戦い方だと考えているので気は進まなかったが、KASSの活動を学校に認めてもらおう為だ。 仕方のないものと思ひ妥協した。

・基本的に3人一組で行動する。

これは要するに連携を取り易さに加えて、1年生が校舎の構造を把握していないであろう事から、単独行動を赦すと妙な奇襲を喰らう可能性がある為、それを避けるために3人の2年生と顧問、生徒会長をナビゲーターに付けるといったものだった。

これに関しては何らおかしな所も、納得のいかない点も無いのですんなりと纏まった。

班の編成に関しては各自の適性や能力を判断した上で、私が行った。

・報告や連絡はまめに行う。

当たり前と言えば当たり前の話なのだが、それ以上に会長の資質を十全に活かすという意味合いが強い。

どうやら彼女は校内の構造を完璧に把握しているらしく、事前の予行演習ではあらゆる場所で襲撃を受け一人が倒されたという想定

の下で他の舞台にフォーローに向かう際の指示、奇襲がありそうな場所を瞬時に判断し、端的に指摘するという芸当を披露してみせた。

武器の取り回しは器用な素人といった程度だったが、これなら十分役に立つ。

・使用する武器は拳銃のみとする。

これはゲームに使用する分の道具を調達する上でのコストの問題によるところが大きかったのだが、同時に遠距離からの狙撃なんかを封じる事で戦術の幅を狭め、数の有利を活かしやすい環境をこしらえるのにも一役買っている。

また、手榴弾やトラップなどのARを利用して再現される特殊武器の使用も禁止という事になっているので、高度な戦術を封印する効果もある。

ちなみに、当然だが打撃攻撃や投げ技なんかも一切禁止だ。

・羽原 秋一はなるべく最後に狙う。

確かに10ポイントという極端な点数は魅力ではある。しかし、その提案を行ったのが彼自身である以上、必ず何かしらの策を用意していると見て間違いないらしい。

私も会長の認識には同意した。あからさまにこちらのプライドに泥をかけて勝負へと持ち込めようとする態度やらを見る限り、曲者なのはまず間違いない。

そして何よりも、この戦術に同意した一番の理由は会長に見せられた一枚の写真だった。

拳銃を構え、遠方を静かに見据える横顔。

信じがたい話だが、彼は今ちょっとした噂になっている3月の事件の関係者で、目撃者の証言によると30メートル程の遠方からの拳銃による射撃を成功させたらしい。

その事件に関しては不明な所が多く、というか有名なわりに警察が全くと言って良いほど動いていない、ニュースにもならなかった

という不審極まりないもの。

果たしてそんな訳のわからない情報を信じて良いものか悩むところではあるが、彼が妙な切り札を隠し持っていていそうな相手である事は間違いない。

他をなるべく早めに潰して、最後に数で押し潰せ。それが会長の指示だった。

最初は何もかもが怖いほどに上手く行った。

松葉杖の一年生は開戦4分で発見され、即座に撃たれてゲームから離脱。ツインテールの小柄な女の子も一人として道連れにする事も出来ずに戦線離脱。

もう一人の男子はもともとあまり乗り気でなかったこともあってか、こっちの1年一人と相討ちになり、ゲームを終えた。

この間、わずか13分。広大な校舎を舞台にした戦いにしてはあまりにも早い展開だった。

「やっぱり素人集団っすね、ぬる過ぎる」

「油断するな。少なくとも坂田副会長はかなり手強い」

「そうなんすか？」

「ああ、彼女は帰宅部だがその身体能力はあらゆる面において各部のエースに匹敵する」

「へー、そりやすげえや」

口ではそう言っているものの、とても言葉通りの態度には見えな

い。
まあ、身体能力があれば勝てるというものでもない以上、その反応は致し方ないところなのだろうが。何より、彼女は入学式の際に「怪我で来られない」と言われていたんだ。

本来ならば中野 夏芽同様にルールで封殺されてもおかしくないはずなのだから。

しかし、今のところ彼女を討ち取ったという情報は無い。

同様に、こちらのメンバーが他に撃たれたという報告もなく、双方の戦力はA R部が残り3名、こちらが14名のまま10分近くが経過している。

「それに私の前で相手を侮る発言は止めてくれ。 礼儀に反するよ
うな態度は嫌いだ」

「あ、はい、すみません……」

その言葉でようやく彼は自分の態度を改めた。

もつとも、それは対戦者に対する無礼を自覚したと言うよりは、私に叱られるのが嫌と言ったところだろうが。

こつこつ意識を根本的に改めるのは難しいものだ。 いずれ分かってくれると信じて何度も注意するしかないだろう。

そんな事を考えていた刹那。

廊下の窓から突然顔を出した坂田つめに発砲された。 いや、違う。 正しくは上の階から落ちて来て、窓枠に捕まった彼女に撃たれた。

信じがたい事に彼女は片手で拳銃を構えたまま、自身の落下エネルギーを片手でやすやすと支え、あまつさえ足場も無い場所で腕力だけで廊下へと自身の身体を戻してみせた。

そして、着地と同時に動揺する1年生2人を撃った。

10秒、いや5秒にも満たない間に私の率いるチームは全滅。

その容赦ない現実を、ゴグルに映し出されたYOU LOSEの文字がこれでもかと突きつけてくれる。

「運動神経が良いとは聞いていたけど、ここまでとは思わなかった」
「……うん」

今の彼女の出で立ちにはゴグル越しにはゴグル&インカムへ

ツドセット、迷彩服とデザートイーグルという出で立ちをしている。しかし、ゴーグルを外すとゴーグルとインカムはそのままだが、九尾高の制服で腰に巻いたホルダーにアーリーぶら下げ、をなにやらおもちゃのような銃の形をした白い何かを握っているようにしか見えない。

全くの余談だが、相手の服装の見え方に関しては統一しなくてもゲームとして成立するので、人によって見え方が異なっていたりする。

参加者全員が装着しているゴーグルにはアーリーのARを表示する機能があり、これによって服装、武器はおろか戦場までも思うがままに再現できる。

もっとも、戦場に関してはフリーのアプリの処理能力では辛いものがある他、学校という起伏に富んだ地形に妙な景色を重ね合わせるの危険という理由でオフになっているが。

「……撃たれた人は、生徒会室」

「分かっているさ。……敵の私が言うのもなんだが、健闘を祈るよ」

ゴーグルを外し、銃をアーリーの取りつけられたホルダーに引っかけ、インカムセットを外した私は、生徒会室へ向けて歩き出した。後輩たちを納得行かないと言った風な表情のまま私の後を追いかけて来る。

「あんなのアリなんすか？」

「ルール上無しとは明記されていないな」

「むー、だとしてもやっぱり納得行かないですよ、俺！」

確かにそう言いたくなる気持ちは分からなくもない。

あまりにも手応えのない展開。そこから人間の常識を越えた奇

襲。

それらに翻弄されて結局は何も出来ない内にやられてしまったのだから。

これではただ校内を散歩しただけといっても過言ではない。

「それでも、撃たれた事に変わりない。 仲間に何の連絡を取る事も出来ずに、な」

「「はぁ……………」」

ようやく諦めた1年二人が深いため息を漏らした。

「帰りに何かおごってやるから、それで気を取り直してくれ」

「「先輩ッ！ ごちになりますっ！！」」

……………全く、現金な後輩たちだ。

そんな二人の様子に、思わずため息の混じった苦笑がこぼれた。

33話 サブカルにありがちな絶大な権力を誇る生徒会。あれって絶対に会長の

「おっ、おつかれさーん」

生徒会室へとやってきた相手チームの2年生女子 私たちの間
ではミリ子さんと呼ばれている に手を振る。

ミリ子さんはイケメンなスマイルを浮かべつつ、「やあ」と私の
挨拶に応じてくれた。

一方、彼女の後ろを歩く1年生二人は私に対して妙な警戒心を抱
いているように見える。

「坂田副会長にしてやられたよ。まさか、あそこまでの人だった
とは……」

「うん、凄いやな。スクーターを片手で振り回したり」

「は？ 今、何と言った？」

「いや、だからスクーターを片手で振り回したり」

「はっはっは、そんな人間がいる訳……ないよな？」

ミリ子さんは片頬を微妙に引きつらせ、私から目を逸らした。

「と、ところで……中野さんはどうしたんだ？」

「ああ、不貞寝してるだけなんで気にしなくておk」

「そうか」

ミリ子さんは他の二人の分も椅子を引っ張り出してから着席する。
こづいつのも失礼かも知れなけれど、意外と気の利く人らしい。

「確かにこのルールのせいで何も出来ずに退場では不貞寝したくも
なるだろうな」

「ルールのせいでは、か。でも、このルールはそつちで決めた事だよな?」

若干非難交じりの口調でそう尋ねたのは今宮 新くん。

相手のルールをいかに逆手に取るかと言う方向に全力を傾ける秋一のようなタイプでもない限り、誰でもそう考えるだろう。

それくらい彼の言い分は至極もつともなものだ。

その事実はいり子さんやKASSの1年生達も認識しているらしく、やや気まずそうに彼の様子を横目で伺っている。

「全くだ。 部室や部費、学校の公認……そんなものに目が眩んでしまった」

誰に言うでもなく、いり子さんはそんな言葉を口にした。

でも、私はその言い分がちょっと気に入らない。 そう思う理由はきつと……

「会長にたぶらかされました、みたいな言い方だからだな」
「……ぐつ音も出ないな」

まあ、気持ちは分からなくも無いんだけど。

彼女たちのARサバゲにかける情熱は間違いなく本物だろうし。

部室をかけて争っている私達の動機が「私物化出来るスペースが学校内にあるとか素敵やん」なんてアホみたいなものだと知ったら烈火の如く怒り出すんじゃないだろうか?

そういう意味では私も偉そうに人に説教を出来る立場じゃない気はしなくもない。

「……まあ、そんな嫌味を今更言っても仕方ないんだが。 と言う訳で、いり子さん宛てに秋一からの伝言があるんだけど、聞いてみ

る？」

脳裏をよぎる自他に対する突っ込みを意識の片隅に追いやりつつ、本題を切り出す。

「伝言？ それも私宛てに？」

「うんむ、どうするよ？」

「せっかくだ、聞かせてもらおうか」

ミリ子さんは両手を膝の上において、姿勢を正した。

「えーっと、『実はこの勝負までに部室棟を回って色々交渉してみただが、文芸部が3年生の部員一人だけ、つまり同好会としての存続すら不可能。その3年生と話をしてみたところ、彼女は部の存在にはさほど頓着していない様子だった。おそらく、本さえ読めれば特に文句はないってところだろう』ってのがまず一つ」

「つまり、勝とうが負けようが部室は確保出来る、と言うことか」

「そゆこと」

「と言うことは、この勝負の結果なんて関係なくどちらも創部出来るんだな」

彼女は安堵のため息と笑みをこぼす。

ただ競技としてやるのとは違う、勝利とは別の報酬が用意された戦い。

普段、あまり経験する事のないであろうその状況に、彼女なりにプレッシャーを感じていたみたいだ。

「それがそうでもないんだな。ほれ、これ見てみ？」

ミリ子さんにあるメールを見せる。メールの日付は昨日の20

時03分。

送り主は生徒会長。メールのタイトルは『せっかくだから』と
なっている。

タイトルを見た瞬間に秋一はコンバットなんちゃらとか言ってい
たが私には意味不明。

「……この内容は」

ミリ子さんに見せたメールの内容は、生徒会長と秋一のやり取り
の内容を読み上げる

「明日、ついに生徒会長と愉快的仲間達によるスーパーぼこぼこ
タイムが始まる訳やけど、ただ部室をかけてくじやつまらんし、先生
らを説得して回ったウチの手に合わん。

そこでや、勝ったらアンタらは今後創部も乗っ取りもせえへんっ
て言うのはどうやる？

まあ、口約束なんて意味あらへんから、生徒会で庶務として働い
てもらおう。

KASSの皆は部室と部活を得られる。

ウチは労働力と愛^{ラヴ}。

アンタらはウチの指導のもとで健全に成長できる。

何て素敵な三方一両得やるなあ！ 負けたあんたらの将来まで考
えたってんねんから。

もうあれやな、アンタらはウチらの事を女神と崇め奉るべきやな
！」

と言っても、ミリ子さんはそれを読んでいるのだから音読する必
要はないのだけれど。

「どじょよっ」

「まず、文面が全体的にウザい。それに、私たちの知らないところどころでこんな話を勝手に進めていたとは……」

「で、こっちが秋一の返信」

「きゃー、流石は雌神様！ ちょーやさしい！

……で、そうなると当然こっちが勝った場合も相応の報酬を期待して良いんだよな？

事前のリサーチによると明らかに廃部になりそうな部が一つ。

雌神様が何をしなければどっちの部も創部を認められる状況になる訳だ。

そこで、だ。こっちが勝った暁には、KASSと俺達、双方の部活を認める事。

もしもその部が廃部を回避した場合はKASSに部室を譲り、俺達の活動を生徒会で行う。

最後に会長は俺達の部に入部すること。多分、うめ先輩も喜ぶ。双方の部活を認めるのが嫌なら、適当な部を乗っ取る。

会長が入部を拒否するなら庶務云々はお断り。等価交換ってことでこんなもんだろ」

これまた音読。 ミリ子さんは以下略。

「と、こんな感じ」

「部室を私達に譲っても良いのか？」

「会長に嫌がらせすることに目的がシフトしてしまったと思われ」「いい性格をしているな……」

ミリ子さんは呆れた風に苦笑みを浮かべた。

「で、こっからが本題。私はアーリーのプログラミングが得意なんだけど、その技術を活かして私のアーリーの中に入ってるアプリ

にちよつとした細工をしておいた」

「細工？」

「うんむ。で、その細工っていうのはインカム関係のものなんだが、私が被弾した後でKASS2年生組のアーリーが一定範囲以内に近付いて来る事を条件にして、両軍の被弾していないメンバーに向けて私のインカムが拾った音声を送信されるってものなんだ。

ちなみに、アーリーの識別はIDでやってる」

「随分器用な真似が出来るんだな。しかし、2年生と言うことは……」

「そゆこと。ここでのやり取りは全部発信されていました」

にっ与会心の笑みを浮かべてみせた。

頭の中では思惑がうまく行った時の秋一のそれをイメージしていたりする。

「と言う塩梅で、勝つても負けても部は公認される訳だが、このまま情性でKASSのプライドを踏み躪った会長に味方するん？」

「会長に吼え面をかかせる最善の選択肢は会長を撃つてから全員が自殺だろうな。しかし、それは一度始まってしまったゲームに対して失礼だ」

「と言う訳で、秋一からの伝言その2」

私の超改造アーリーを長テーブルの上に置き、予め録音しておいた音声を再生する。

『アンタ達が人数の利を活かす為に3人くらいのチーム単位で動くことは予想済み。小賢しくても会長は素人だ。そんな奴の戦術に身を委ねて敗れるのがアンタらのプライドってやつなのか？』

「……好き勝手言ってくれる。こっちもこんな変則戦の経験はないんだぞ？」

「で、どうするん？」

「そんなもの、決まっているだろう」

ミリ子さんはお返しとばかりに会心の笑顔で、威勢良く叫んだ。

「身の程知らずの生意気な一年坊主に私たちの本気を見せてやれ！！」

その号令からわずか170秒後。

KASSの1年生二人と副会長が生徒会室へとやってきた。

34話 おしっこをがまんし過ぎると膀胱炎になる事があるぞ！

健康と矜持を

少し前のインカムへの応答から察するに、現在のKASSの戦力は残り8名。生徒会長を含めれば9名だが、連携から外された素人を頭数に加える必要はないだろう。

対する本橋先生のチームの戦力は彼女と1年の男子生徒の残り2名。数の上では圧倒的に優勢だが、この勝負はフラッグを取れば勝ちという訳ではない。

制限時間が来るまでに相手チームを殲滅するか、得点で相手に勝つか。

こちらの得点は現在4点で、あちらの得点は現在6点。見掛け上の優位に惑わされそうになるが実際のところはこっちが2点負けている。

そしてこのだっ広い校舎。時間はまだまだたつぷりと残されているが、あまり悠長に事を構えていると逃げに徹されて厄介なことになるだろう。

8人全員で分散してしらみ潰しに探して行くか？

……いくらなんでもこれは無い。待ち伏せや不意討ちに遭った時に何も出来ない。

一旦、集合して索敵の得意なメンバーと射撃の上手いメンバーのセルを編成し直すか？

仕切り直し、と言う意味も兼ねて恐らくこれが妥当だろう。

「よし、一度集合して編成・作戦を練り直そう」

『集合場所はどうします、先生？』

「2階の廊下突き当たりの教室。2年6組の教室で落ち合おう」
『了解』

最後の了解の返答は5つ。2年生の声が1つに、1年生の声が

4つ。

生徒会長の返事は当然ながら聞こえなかった。

僕のチームは数分前に副会長と交戦して僕一人になってしまっている。

つまり、この短時間で既に2名やられた計算になる訳か……。

「彼女たちは本当に素人なのか……なっ!？」

状況を分析して思わず独りごちった瞬間、ゴーストにYOU L O S Eの文字が映し出された。

とつさに辺りを見回す。 が、人の影なんて敵も味方も何処にも見当たらない。

ふと、作戦会議の段階で聞いた会長の話を思い出して、廊下の窓へと駆け寄る。

そこには教室棟の向かい、美術室などの科目別の教室が並ぶ棟の1階上で例の1年生男子が僕に背を向けていた。

どうやら彼はあの距離、あの角度から僕を発砲してみせたらしい。一体どんな訓練を積みあげたほどの腕前になると言うのか。一体どんな観察眼を持っていればあそこから僕を捕捉できると言うのか。

あまりにも不条理な展開。 しかし、今はそれにどうこう言うても仕方がない。

「まったく、KASSS初代メンバーとして後輩たちに顔向けできないな」

誰に言うでもなくそう呟いてから、生徒会室へと足を向けた。

「ふうん、どう見てもチートやな」

ウチ、西条 九は普段は生徒立ち入り禁止の警備室から防犯カメラの映像を眺めながら呟いた。

文字通りの意味でも、ものの喩えという意味でもチート。

それが、あの1年坊主を中心としたチームについて語る上で最も適した言葉だろう。

まず、ウチの可愛いうめちゃん。あの子の身体能力は正真正銘、一部の隙も無くチート以外の何者でもない。

それに何と言ってもあの二つの神々しいお山。特に夏場の水辺でのその反則加減と来たら……おっと、思い出しただけでヨダレが続いて新任の女教師。KASSの連中がウチに反旗を翻して二人組で行動し始めた後、予め預かっておいた警備室の鍵を手この部屋にやってきた私が目の当たりにしたあの動き。

特別大げさな動きをしていた訳ではない。が、身をかめて完璧に気配を殺し、KASSのメンバーが近付いてきた瞬間に躍り出て瞬時に2発。うめちゃんとはまた違った意味でとんでもなかった。

それに羽原 秋一も拳銃で数十メートル離れた相手への狙撃を平然と決めてしまった。

しかし、何よりも問題なのは……

上の階からの急降下（これはリアルタイムで見た訳ではないが）、待ち伏せ、拳銃での狙撃。どれもある程度相手の動きを把握しておかなければ成立しない戦術であるということだろう。

狙撃と待ち伏せの二つはまだ運が良ければ有り得るかも知れない。

が、急降下に関してはよほどのアホでなければ意味も無く、何の確信も無く出来るものではない。　　と言うよりも、普通の人間にはそもそも真似出来ない芸当。

北里　千里の前科なんかも踏まえて考えれば、全員の位置を把握出来るようなチートを準備していても何らおかしくはない。

確証はないが、このままではまともにKASSが勝つとも私の力で勝てるとも思えない。

あわよくば一人くらい道連れにしてくれればもうけものか。

「どうせやられるんやったら、カメラの前でやられてや……」

警備室の一角にアーリーを置き、そこから数メートル離れた対角に腰を下ろす。

どんなシステムで位置を把握しているのかは漠然と想像出来る程度だ。

が、長時間の待ち伏せ禁止ルールがある以上、サバゲーアプリに参加者の位置を把握する手段が内包されているのは間違いない。

よって、室内のどこにいるかを把握した状態で突入する場合、視線は否応なくその居る筈の場所に向けられる。

その隙を穿てば勝算はある。

もちろん、離れ過ぎてゴーグルや銃が機能しないなんて状況には陥らない範囲で。

いざという時の為の手段として、その距離は既に把握している。

ついでに言う待ち伏せ時間超過になるまでのリミットも、移動したと見做される距離もきっちり押えている。

このままでは得点で負けるから、いずれは動かざるを得ないだろう。

しかし、そのいずれは今ではない。

今は精々KASSの健闘を祈りながら、相手の行動を戦術を読み切るのが先決。

「……おっ」

そう言い聞かせながら腕時計を確認した直後、戦局が動いた。

新任教師をターゲットにした2チームの挟撃。3人のチームが的確に逃げ道を潰しながら、彼女を誘導し、もう一方のチームが上手く回り込んだらしい。

インカムで密に連絡を取りながらの、連携の取れたチームならではの立ち回り。

もつとも、どんなやり取りがあつたかなんてとつくの前にインカムを外してたウチには知る由もないことだけど。

流石の彼女も逃げ道のない通路で5人に挟まれてはどうしようもなかつた。

それでも曲がり角から躍り出て来た3人チームの一人を即座に撃ち、続いて同時に飛び出した2人の一方を仕留めつつ、跳躍。更に壁を蹴って天井付近でバック転を決め、そんな体勢での曲撃ちで2人組の一方を撃破。

一撃で決着がつくこの状況で、着地する寸前を狙われて被弾するまでの一瞬の攻防で、3人を道連れにしたのけた。

いや、彼女の成果はそれだけではなかつた。

見ればゴーグルを外しているKASSのメンバーは5人中4人。

しかし、彼女が最後の1人の生徒に銃口を向けたようには見えなかつた。

「あ、味方の流れ弾か」

向かい合う格好で相手を挟んで撃てば、当然そういつた事態も起こり得る。

そして、新任教師がゴーグルを外した直後、KASS最後の1人ががっくりとうなだれた。

慌てて別の場所のカメラが捉えた映像に目を向けると、羽原 秋一が銃を構えている。

またしても別の棟からの狙撃だった。

「……っち、使えん奴らやな」

思わず毒づいてはみたものの、考えようによっては好都合かも知れない。

見方によっては、ウチの手で羽原 秋一を仕留める舞台が完成したも同然なだから。

あいつが再び動き出してカメラの視野の外へ出ていったのを確認してから、対決に備えて一旦アーリーを移動させ、待ち伏せカウントをリセット。

アーリーから改めて距離を取って警備室唯一の入り口に銃口を向けたまま、防犯カメラの映像をちらりと伺う。

その足取りは間違いなく、何の迷いも無く警備室を目指している。何かしらの方法でこちらの位置を把握しているという推測は間違いなかったようだ。

それから、羽原 秋一が警備室に一番近い階段に近づいてきたところでもう一度アーリーを移動させてカウントをリセット。その作業を終えて適当な所にポジショニングした時にはあいつは階段を下り終えていた。

「くくくっ、あいつの吼え面が楽しみやなあ……」

当然のように迷うことなく警備室へと歩いて来る。いつでも発砲できるように銃は構えたままだ。

下手に飛び出して行ったところでドアを開けるひと手間のせいでアドバンテージは取れそうにない。

これならあっちが仕掛けて来るのを待った方が賢明だろう。

こちらの位置を把握出来るのなら時間切れまで逃げ回るのも有効な選択肢。　　が、ここまで歩いて来ているのを見るとその意思はな
いらしい。

当然だ。　　何せタイムリミットは午後5時50分。　　最終下校時
間に合わせて設定されているのだから。

あと4時間近くもの暇を潰そうなんて選択肢は避けて通りたくな
るのが人情。

だからこそ、ウチはあいつがドアを開けるその瞬間を息をひそめ
て待つだけで良い。

もう一度、防犯カメラの映像を見る。　　羽原　秋一はもうドアの
すぐ近くまで迫っていた。

「さ、かかってきいゃ」

銃を構え直し、ドアを睨む。　　学校の設備ではあるもののこの部
屋のドアは引き戸ではなく、レバー式ドアノブの開き戸になってい
る。

部屋の外に誰かいたら危ないので入る時は押して、出るときは引
いて開ける形になる。

ドアノブが下りた瞬間、あいつはウチに撃たれて蜂の巣。

その瞬間を脳裏に浮かべつつ、じっと目を凝らしてその一点へと
意識を集中させた。

「……………」

が、いつになってもあいつは部屋に踏み込んで来ない。

不審に思い、横目で防犯カメラの映像を見やると、羽原　秋一は
ドアノブにビニール紐を引っかけ、その向かいの、全開になった廊
下の窓の枠にそれを括りつけていた。

「……あ」

先述の通り、この部屋のドアは開き戸で、部屋から出るときは引いて開ける形になっている。

では、彼がやっているようにドアノブと窓枠を括り、間を紐で繋いだらどうなるか？

ましてや、その紐がピンと張っていたらどうなるのか？

見たところ、ビニール紐は力任せに引っ張ってちぎれる程度の量ではなさそうだ。

「アカン、出られへんようになってまう!？」

その結論に至った時には時すでに遅し。

作業を終えた羽原 秋一は防犯カメラの方へと振り向いて、満面の笑みを浮かべた。

「そっぴや会長、知ってます？ 人間は1日に平均7回くらい自然

の欲求を満たすらしいですよ。 睡眠時間を6時間と仮定して、16時間で7回。 まあ、寝起きと寝る前に1回ずつ済ませるとして16時間で5回っつーと3時間12分に1回つてところですかね？」

「んなつ、それって……!？」

「って昨日図書室で借りた本に書いてました。 せつかくなんで今のうちに返すついでに残り4時間余りで読めそうな本を見繕ってますんで、せいぜい頑張ってください」

「ちょ、ちょっと待ってやあああああああ!?!？」

ウチの絶叫に応じるように羽原 秋一はさっきの満面の笑みを上回るような極上のスマイルを浮かべ、カメラに向かってサムズアップした。

35話 入浴前と入浴後、どっちも良いのは当然だが現実にはどちらかを選ばね

生徒会長との対決が終わってから3時間後、ただいまの時刻は午後10時。

お風呂から上がったロリ系美少女、千里ちゃんはミリ子さんに電話をかけていた。

「はろー、お風呂上がりの千里ちゃんだよ。つやつやのエロエロだよ」

「君は何を言っているんだ？」

ミリ子さんが苦笑しているのが受話器越しでも伝わってくる。

口調は学校で話していた時と変わらないけれど、雰囲気は少し柔らかい感じた。

学校の先輩と電話で話すなんていうのは初めての経験なので少し緊張する。

「んで、何が訊きたいん？」

「今日の勝負に向けての君たちの戦術を教えて欲しい」

「それなら秋ーに直接訊けばいいのに」

「そうなんだが……何と言うかな、彼は少し苦手だね……」

と、はぐらかすような調子で答えるミリ子さん。

苦手というのは要するに「怖い」とでも置き換えるべき単語だと思われる。

……まあ、あんなものを見せつけられた後では怖がるのも当然か。

「確かにアレは私でもちよい引いたから仕方ないわな」

「ちよいどころの話じゃないだろう、あれは……」

あれ、についてはかれこれ3時間半前に遡る。

秋一の夕チの悪い策略にハマった会長がゲーム終了の時刻を40分も過ぎた午後6時半。

念には念をと見回りの先生に見とがめられるまで粘った秋一が警備室のドアの開けたその瞬間の事。

既に勝敗は決したからと私達も警備室へと押し掛けて、中の様子を覗き込むと……会長は部屋の隅で泣き崩れていた。

「うーん、なんちゅーか……見事なパンゲアの地図だったかと」

「下着を脱いでいたのは理性的な判断なのか、気が触れていたのか……どっちだろうな」

しみじみと、二人して妙にずれた感想を漏らした。

私もミリ子さんも会長に対しては元々あまり良い感情を持ち合わせていない。

一方の秋一に対しては私は言うまでも無く、ミリ子さんも6時頃までは「大した奴だ」と概ね好評だった。

しかし、流石に女の子として人として、これは見過ごせないようだ。

「あーでも、約束を破らせないためって意図はあったと思われ」

「だからと言ってあの姿をアーリーで撮ろうとしていたのは許される行為ではないな」

「ですよねー」

まあ、秋一はあそこまでやればにミリ子さんが副会長か本橋さんが、誰かしらが止めに入ると読んだ上で行動していたのだろっけだ。そして、結果から言えばその場にいた女性陣全員が会長を助けに入った。

本橋先生とミリ子さんは男性陣を追い払い、夏芽ちゃんは秋一からアーリーを取り上げ、副会長が会長を慰めて、私が何か床を拭けそうなものを取りに行った。

その後、床の掃除が終わって、会長が落ちつくまでの間、秋一は夏芽ちゃんと本橋さんから延々と説教を食らっていた。どうせ馬耳東風だろうとは思っけど。

「っと、話が逸れたな。確か……」

「私達、というか秋一が立てた作戦について？」

「そう、それだ」

そう言われても作戦を立てたのは殆ど秋一だから、私に聞かれても良く分からない。

私がやったことと言えば秋一の目を活かした戦術、有体に言ってしまうえば完全なインチキの為のアプリを幾つか準備したくらいだ。

もっとも、そもそも秋一が今日の勝負で使っていたアーリー自体が大須さんのもので、先日作った射撃アプリと元々内蔵されていた監視用のアプリがそのまま残っており、それにちよっと手を加えただけなのだけれど。

なんて事をバカ正直に話して良いものだろうか……。

「知っている限りになるけど、それでもおk？」

「ああ、構わないさ。断片的な情報でも全体を想像する助けになるからな」

「んじゃ、まずは秋一が一番警戒していた戦術について」

その一言で受話器の向こうのミリ子さんの雰囲気が変わるのが手に取るように分かった。

サバゲーマニアと言うよりは本当に軍人っぽいなー、この人。

「1点だけ取って全員で籠城」

「……身も蓋も無いな」

「それを避けるためとにかく籠城出来そうな部屋を徹底的に調べ上げて、上の方の階とかについては先生と副会長が何とかする方向性で纏めて、下の階に窓の無い部屋とかがないか探して回ったらそれに該当するのが警備室だけだった」

で、最初は何か毒的なものを準備しておこうかって話をしていたけれど、いくらなんでもそれは不味いと言ったら、他の手立てを考えると言ってそれっきり。

「なるほど、と言うことはトイレに行けないようにすると言うのはそれによって恐怖感を煽る為の作戦だったとか？」

「可能性はあるかと。あと、K A S S が勝った時に暫く閉じ込めて惨事になるのを待ってからそんな事態を招いた会長への脅迫材料にするくらいの腹積もりはあったかも」

「ほんつとつにろくでもない男だな……」

曲がりなりにも私のためというのが事の発端だけに何とか弁護したいところなのだが、残念ながら秋一を弁護するのに適した言葉が思いつかない。

「で、次に考えたのがこつちがどうやって相手に勝つかで……」

「ん、どうかしたか？」

「なんでもない」

さて、ここについてどう説明したものかなあ。

相手がまともに勝負を仕掛けてきた場合の戦術に関してはどうしても秋一の目とそれを前提にしたインチキについて言及せざるを得ない。

その部分を省いて副会長と本橋さんの実力で稼げるだけ稼いで、後は秋一が逃げに徹するつもりだったなんて説明をして納得してくれるだろうか？

ミリ子さんは秋一の人間性はさて置いて、戦術眼は必要以上に高く評価している。

実際、秋一に負けたようなものだし、私たちのやっていた反則も良いところの準備を知らなければそんな評価になるのは妥当な結果ではあるのだが……。

何もかも話して良いのならば、籠城には既に説明した方法で対処し、真つ当に勝負するケースならば副会長と本橋さん、あと秋一の位置把握と狙撃の三つで対処しきれずは手はずだった。

更に会長だけが籠城して指揮を執るケースだとこちらの動きもある程度読まれてしまうので、会長の指揮を受け付けない状況を作る。

で、その方法はこの戦術の提案者が会長だった場合は彼女の今までの行動や言動・態度から権力（と言うほど大層なものでもないが）で強引に指揮権を奪うだろうから彼女らの実益を約束した上でプライドをくすぐって対立させる。仮に戦術の発案がミリ子さんや他のKASSメンバーだったならば何かしらの方法で会長を警備室から引きずり出す予定だったらしい。

で、実際の試合展開は会長が籠って指揮という状況で始まり、秋一の作戦で真つ当に試合する展開へと移行、最後には制限時間の長さを頼みに籠城の構えを取る会長に最初の戦術を使うって形で考えたものを全て消費する格好になった。

とこんな説明をすればミリ子さんは自分の部屋では鳩が豆鉄砲を食らったような表情で納得するしかないのだろうけれど。

「そうか、分からないなら無理に説明しろとは言わないよ」

「うんー、申し訳ない」

長々と説明してまた別のところで突っ込まれるとどこかでぼろが

出そうなので、はぐらかすことにした。

「気にする事はない。　なら私達に会長を裏切らせたのは計算通りなのか？」

「そうだお。　ちなみに生徒会室で聞かせたあの音声は幾つかの戦術・状況を予め想定して、それぞれに適した台詞を用意しておいたのをその場で私が適当に組み合わせたもの」

「地震が起きると書かれた紙をいつもポケットにしまっているのと同じ類のペテンか」

「そゆこと。　あと、会長がメールを見せられる場合に備えて上手く本音を隠した交渉メールを送ってきた場合のために会長のイメーヂを悪くするようなメールの準備もしつかりしていたり」

「……彼はどこでそんな情報戦を覚えたんだ？」

呆れや驚きよりも、恐れを通り越してある種の畏敬の念すら感じられる声だ。

「それ以外だと、数で勝るチームがその数を活かす上で採用し得る戦術やルールも大体予測してたし、戦場が学校だと確定した時点で上級生と新入生の3人一組になるとは確信してたっばい。　で、後はそうでなかった時の保険もアレコレ考えてたみたいだけど、その辺は本人に聞かないと」

「では、最初にポイント制の勝負を持ちかけて来たのは？」

「なんか旗の取り合いが一般的らしいって知識はあったみたい。　んで、そのノウハウを活かされると辛いつていうのと、総員突撃されたらどうしようもないからって言う理由でそのルールだけは避けなかったって。　あと、3日後って宣言させたのは準備期間を確保するためだとか」

ついでにシステムやルールの穴、たとえばアーリーから参加者が

どれだけ離れても大丈夫なのかなんてのをチェックする為の期間でもあつたらしいが。

本当にこういう隙間を突くような胡散臭いものへの嗅覚は人並み外れている。

……と、ここまで聞き終えたミリ子さんからのリアクションがない。

何を言えば良いのか分からないといったところだろうか。

「……なるほどな。 私たちじゃ勝てない訳だ」

暫くして感嘆と共に漏れたその言葉が、少しこそばゆかった。

36話 実際に出るとメールやブログとキャラが違い過ぎてて対処に困る事がま

「で、会長は君らに何て言ってた？」

「意地悪してゴメンな、って言ってたわよ」

「……ふむ、そうか」

別れ際、俺に対しては怒りと恐怖と憎しみと絶望と媚びが混然一体となったような曰く形容しがたい視線を向けていたのだけれど。

どうやら、彼女は坊主憎けりや袈裟までというような性分ではならしい。憎い当人に対してはかなり悪辣な態度を取るようだが、しかし、その点に関しては今回の件で綺麗さっぱり水に流すことにしよう。

「さっきも言ったけど、いくらなんでもあれはやり過ぎよ？」

少なからず怒気を含んだ夏芽の声が受話器越しに耳に突き刺さる。

もっとも、彼女に言われなくともアレがやり過ぎである事は重々承知しているし、やり過ぎだからこそ誰かが必ず止めるとも信じていた。

その一番の候補は本橋さんだった。職業は正義の味方を自称する彼女ならああいう事態でも冷静に対応出来るだけの胆力を持ち合わせているだろうし、俺を叱り飛ばせるだけの常識も持ち合わせているだろう。的確に男子を追い払ってから女性陣に指示を飛ばし、会長を慰めてみせるに違いない。

結果的には本橋さん一人に求めていた役割をあの場にいた女子全員が受け持ってくれる形になったが、これは俺にとっては嬉しい誤算ですらあった。

ましてやその結果が千里や夏芽に対する態度の軟化であるならばなおの事、である。

「ねえ、聞いてるの？」

「……………ん、ああ、聞いてるよ」

「本当かしら？ まあいいわ。とにかく、明日会長に会ったらちやんと謝る事、良い？」

「分かったよ。ただ、彼女が顔も見たくないと言いだす可能性もあると思うけど？」

「顔の見えない距離から謝りなさい」

はいよ、と心のこもっていない返事をよこしつつ、考える。

果たして会長は明日学校に来るだろうか？

何せあんな事があつた後だ。とてもじゃないがKASSのメンバーや俺達と顔を合わせられないと数日家に引きこもる可能性だつてないと言い切れない。

下手をすればそのまま登校拒否なんて可能性すらも無きにしも非ずだろう。俺のやった事はそれくらい酷い事なのだ。

そうなつたら俺は完全に悪役だよなあ……………。いや、元から完全に悪役だろうがと言われれば一切否定しようがないのだが。

「……………そうだな、これから同じ部員としてやって行くんだから妙なわだかまりは早めに解消しておいた方が良くもな」

「分かれば宜しい……………って、え？」

「勝負の前にそういう約束してたんだよ。あっちも勝つたら庶務として生徒会でこき使われろつってたし、お互い様だよ」

「……………あっそ」

呆れてものも言えないといった調子の投げやりな言葉が返ってくる。

確かにこの交渉を知っているのは千里だけだし、この話をミリ子さんにした時には寝ていたから知らないのは当然か。正しくはま

ともに対決せざるを得なくなった時に備えてインカムの音声を盗聴する為にネットワークに潜ってもらっていた、だが。

「言っとくけど、この要求最初にしたのはあっちだからな？」
「ふーん」

何この絶対零度のリアクション。

流石の俺もこのあんまりな反応にはちょっと傷ついた。

「それで、アンタは何を思って会長さんを部に引き入れようとしたのよ？」

「負け犬の吼え面を毎日拝めると思うと学校が楽しくなるだろ？」

「このどクズ！ 外道！ 異常性癖！」

「おおい、いくらなんでもそこまで言うか？」

冷めた態度から一転して苛烈な罵倒の嵐とか、何かに目覚めそう
だ。

「……で、本当は何のためにそんな要求したのよ？」

「相手の要求に合わせた要求を考えてたら自然とこうなった」

「要するに深い意味はないってことね……」

仮にあったとしても説明する必要はないってのが正解だけどな。

「とにかく！ 明日にはきちんと謝っておく事、分かった？」

「ああ、分かったよ。 んじゃ、また明日」

「うん、おやすみ」

と、電話を切った直後に重大な問題に気付いてしまった。

……明日は日曜日だ。

「まあ、明後日に回せば良いだけの話か……」

誰に言うでもなく呟きながら、改めてスマホを通話機能を起動させる。

電話番号はつめ先輩から予め聞きだしておいた……

「はい、西条です」

「どうも、羽原っす」

「ひいっ!?!」

軽い調子で名乗った瞬間に切られた。

それも怯えきった声のオプション付きで。

こうなってしまったのは最後の手段。これまたつめ先輩から聞きだしておいたメールアドレスに読まざるを得ないような文言を送りつけるしかあるまい!

……あれ、これって余計に会長を追い詰めてないか?

「ま、いつか」

と言う訳で、メールを送信。

タイトルは『読まねばばらす by 秋一』で、内容は普通の謝罪文。

ついでにこっちの電話番号も記載しておく。さっき掛けたのが履歴に残っているとは思うが、恐怖から逃れたい一心で履歴を消してしまっている可能性が無きにも非ず。

後は俺の名前を見た瞬間に立てなくなるレベルのトラウマを負っていない事を祈る。

「……アーリーの修理依頼の書類でも書くか」

“サバゲー”のワードを追加。
表示された検索結果の中から、KASSSのメンバーのブログを
見、当然のように閲覧。

久しぶりにKASSS全員集合

と言っても、色々あつて物凄い変速ルールのゲームだったけど。

でもでも、サバゲーである事に違いはないよね？

それにインカムの使用や学校を舞台にした屋内戦なんて変速な
らでわ！

きつと面白いゲームになるはずだー！

ただ、相手の方が数が少ない上に素人っぽいのがなあ……。。

誰だつて最初は素人なんだし、素人だからってバカにする訳じ
やないけど。

でも何だかなあ……

なんて思っていた時期が私にもありました。

結果はまさかの負け。それも全滅。

いやあ、相手チームの子たちはむちゃくちゃ強かったよお。

想像もつかない場所からの奇襲（私はこれにやられた！）

5人がかりで追い詰めたら4人を巻き添えにする超絶スキル！

30メートルも離れた場所から拳銃で狙撃する男の子！

（しかも、この子が孔明もビックリの軍師さん）

その上、みんな可愛くて格好良い！

って、これはサバゲー関係ないか……

とにかく、ゲームには負けちゃったけど面白い勝負だった！

下級生組も揃ったし、これからはこういうゲームが沢山出来ると良いな！

当たり前といえば当たり前だが、会長の件については特に触れられていない。

一人二人軽率な馬鹿が書いていてもおかしくないとは思ってたんだが、ミリ子さん辺りがしっかり緘口令を出してくれているのかもしれない。

確たることはもう少しチェックしてからでないと言えないところだが。

リンクを漁り、KASSメンバーのものと思しきページのバナーを長押しし、別のウィンドウでそれらのページを開く。

さすがにゲーム終了から時間が経っていないということもあってか、あるいは特殊な状況だった上に負け試合だったからなのか、今回のゲームを扱っている記事は少ない。

……と、一通りチェックし終えてある事実気づく。

「想像もつかない場所からの奇襲でやられた人って言うところ……」

ついでにこの文章で男、というのはあまりないだろう。

同じKASSのメンバーもこれを見ているのだから、ネカマというのも違和感がある。

ということとはつまり……

「ミリ子さん、ブログだとキャラが違い」

過去の記事を読み進めていくと、最初はメンバーに内緒でのブログ更新だったのがそのうち気づかれ、しかしいまさら伽羅を変えるわけにもいかずこのまま押し通す格好になったというありがちな経緯が手に取るように理解できた。

しかも、最初の頃は絵文字・顔文字もバンバン使用していたようだ。

メンバーにばれた辺りから目に見えて顔文字の頻度が下がり、今に至るつてところか。

確かに、このテンションは文末にいちいち顔文字が幻視できる類のもの。何と言うか……妙なところで可愛い人だな。

そんな調子で彼女のブログを遡っていると、気づけばすでに日が変わっていた。

ちなみに、この日、会長からの折り返しの電話はかかって来なかった。俺の名前を見た瞬間に本当に泡を吹いて倒れたのかもしれない。

翌日、日曜日の午前12時半。
ゲイ

- Booksでの古ラノベの発掘作業を平和に済ませた俺は、返すのを忘れたアーリーを片手にでんでんタウンをぶらついていた。と言つてもカードゲームをする訳でもなく、同人誌に手を伸ばす事も無く、ゲームなんかは大体新天寺社の通販やダウンロード販売・近所の古物市場で事足りてしまう俺にとってはこれと言つて目ぼしい場所はないのだけれど。

特に衣装に気を使うおしゃれさんになつたつもりも無いので、難波や天王寺に足を伸ばしたところであまり意味がない。

とは言え、電車で来た時には賃金が、自転車で来た時には体力的に、- Booksにだけ寄つて帰るといふのは勿体無い気がしてならない。

「……しゃーない、そこら辺で何か食つて帰るか」

という面白みも何もない結論に至つた。

アーリーのブラウザを立ち上げる。 野外なのでブラウザAR表示機能はOFF。

上下に並んだ2つの画面の下方にARキーボードを表示。 と言つても、本来はゴーグルなり何なりをかけていないと本来は見えない、操作も出来ないくはないが恐ろしく不便の二重苦なのだが。

俺の場合は右目のおかげで問題なく使用出来る。 まあ、使えなくてもスクリーンに表示されたものを押せば同じ効果は得られるのだが。

メリットと言えはせいぜい近未来感が溢れていて格好良いのと、画面に触らなくて済む事くらいか。

検索機能によって表示された周辺、徒歩10分以内の飲食店は2

0を超えていた。

それを一旦画面の端に追いやって、別ウインドウで更に絞り込みをかける。

こんな狭い画面じゃなくてGoogleを利用してのAR表示か、店舗検索専用のアプリが使えるのもっと簡単に店を選択できるのだが、生憎と大須 冬彦が業務用に使っていたこのアーリーにそんなものは入っていない。

これが自前のアーリーであれば良く行く店順だとか、まだ行った事のない店だとか、混雑していない店だとかそんな検索まで可能な上に、「日曜日の昼食で外食する場合は長時間居座る事が多いので、利用者の滞在時間が長い店舗を表示」なんて超検索までやってのけてくれる。

もつとも、そんな検索が可能な理由を、過剰なまでの情報量を利用しているその組織の裏側を知ってしまった今ではその機能を気軽に使いこなせる自信はないが。

例えばミリ子さんのブログ一つとってもあのブログの内容、更新するのに用いたアーリーのIDや使用履歴を照らし合わせ、ニユーロンネットワークを介して集積された他のアーリーの情報を重ねていけば新天寺社の関係者であるうめ先輩が、新天寺社の裏を知りながらそこから抜けた大須 冬彦（俺のアーリーではないのでデータ上はそうなるはずだ）の二人が何故か一緒に変速ルールのARサバゲーを行った事が分かる訳か。

それどころか仮にKASSの誰かが千里に一目惚れし、あいつとの接点を持つ為にオタク趣味に走りだしたとすれば、それすらも両者の様々な購買情報を介して推測出来てしまうのだろう。そんなこと解析しても新天寺社には何の得も無いだろうが。

……なんて小難しい事を考えていると俺の腹の虫が力強く雄叫びを上げた。

「そうだな……追加ワードで、てんいんがかわいい、と」

打ち込むや否や、一件のメイド喫茶がでかかと表示された。

これが検索ビジネスだかロビー活動だかの成果なのか、はたまた本当に可愛いメイドさんがあるのかは定かではないが、清々しいほどのイチオシっぷりである。

何と言うか、女で釣って裏切り者の大須 冬彦をおびき出そうとしているんじゃないかとさえ思えてくるが、いくらなんでもアレが学校でサバゲーやってるなんて異常行動を見て「よし見つけたおびき出そう」などと意気揚々とトラップを張っていたら何か嫌だ。

ついでに言うとおいつが女に知られると思われている事に対しても色々突っ込んでやりたい。 奴を釣れるとしたらそれはメイド喫茶ではなく妹喫茶だろうが、と。

何はともあれ行き先は決まった。

その店 P・maid というらしい サイトをチェックしてみると、何やらここには去年のメイド・オブ・ザイヤーで“メイド・オブ・メイド in 日本橋”の称号を獲得した日本橋一、否、関西一のメイドなる女性がいるそうなの。

これはもう行くしかあるまい！

心の中で思いつきり叫びつつ、アーリーの画面を参考に P・maid を目指した。

マロンブックスからならほぼ直線に近い場所。 徒歩5分もかからないだろうか。

言ってしまうえばメイド喫茶のターゲットになりそう（という偏見を持たれがちな）連中がたむろするであろうエリアの、主だった店舗からさほど歩くことなく行ける場所にその店があった。

外装は瀟洒な造りのこじんまりとした、申し訳程度にお屋敷風ではあるが普通の喫茶店だ。

店先に置かれた植木の緑が爽やかで、暖かい日であればやたらと黒服率の高い人々が行き交うのを眺めながら、風情のなさにここならではの風情を感じながらコーヒを飲むのも悪くないかもしれない。

なんて事を考えながら店内を眺めていると一人の店員（メイドと言ふべきか）が俺に気付いて笑顔で会釈をしてくれた。なるほど、店外にまで意識を向けられる上にあの対応が出来るとは、なかなか良く出来た店じゃないか。

この手の店は多少割高になるのだが、あの笑顔に免じてここで昼食にしよう。

ドアに手をかけて店内へと一歩踏み入れる。

「おかえりなさいませ、ご主人様」

接客中のメイドを除いた全員が一斉にこちらを向いて笑顔でお辞儀をした。多少角度が甘いメイドもいるが逆に深すぎるメイドはおらず、全員がしつかりとへその下辺りで手を組んだ格好になっている。

笑顔は薄く笑みを浮かべていると表現するのが妥当な程度の、あまりわざとらしさを感じさせない、それでいて笑顔を作っている方もさほど苦にならない程度のもの。

そしてたった一言の定型句の挨拶ではあつたが、少し低めに抑えた声は彼女たちの女性を強調し過ぎず、3歩引いて主人の影を踏まずとも言えそうな恭しさを、ともすればよそよそしくも感じられるものだった。

胸元の大きなリボン、飲食店勤務でそれはないだろうと言いたくなる髪、エプロンと言う割には何かをこぼすと胸元が汚れそうなデザインのエプロン辺りは流石に本業じゃないから仕方ないとして、

膝丈よりもやや長いくらいのスカートなどあまりあざとさを感じさせない衣装。

それらを総合して見るに現実のメイドに近い志向の接客を良しとしている店のようだ。

どついうメイド喫茶が主流なのか、流行なのかなんて知らないが個人的にはこういう店の方が好きだ。

「おかえりなさいませ、ご主人様。 こちらのお席へどうぞ」

俺の傍まで来て改めてお辞儀をしたのは、関西風の訛りで話す金髪碧眼のメイドさん。

そちらに視線を向けると両手をおへその辺りで組んだ基本姿勢で、こちらに微笑を向けていた。

身長は160あるかないかと言ったところだろうか。 決して高い訳ではないが腰まで伸びるブロンドの長髪が強烈に目を引き、圧倒的な存在感を放っている。

瞳の色は緑色。 顔立ちはまず間違いなく平均的な日本人のそれではあるが、桃色のフレームの眼鏡の奥から覗く凛々しい眼差しが印象的。

夏芽の吊り目が意志の強そうな目だとすれば、彼女のそれは気が強そうな目とでも形容すべきだろう。

メイドとしては若干不向きな印象も無くはないが、それを整った顔立ちと来たお客様（いや、ご主人様か）には絶対に満足して帰って（これも出かけてと言うべきだろうか）もらおうという心構えから出る偽りのない笑顔が補って余りある。

そして、この少女の肩口には小さなリボンがあしらわれていた。 ちようちょ結びのリボンの尾の一方にはHouse Keeperと書かれている。

確か「メイド長」に相当する職を指す言葉であり、要するに彼女がこの店のナンバー1メイドということだろう。

実は店長だとか、本当にメイド長的な業務をこなすだとか、彼女だけ社員だとかそう言った立場的なものを示すものではないと思われる。

そして、もう一方の尾にはM a i d o f m a i dの文字が。これに関してはさつき調べた通りの意味と見て間違いないだろう。なるほど、彼女がこの街で一番のメイドさんなのか。

「ご主人様、こちらのお席へどうぞ」

と、促されるままに席の方を振り向く。

ついでに店内の様子を伺うと、昼飯時と言う事もあって店内の席は殆ど埋まっていた。

時期が時期だけに大げさな戦利品を持ち歩いているようなご主人様はいないが、一人残らずそこそこのものが入るサイズのカバンを持ち歩いている。

かく言う俺もその後多分にもれず、ラノベが10冊ほど入ったカバンを肩にかけていた。

そして、その客の中に一人見知った顔を発見した。

そいつはまだ三寒四温のこの季節に、そして今日は三寒の方に該当する日にも関わらず、メイド喫茶で汗水たらして 麻婆豆腐と格闘していた。

その男の名は大須 冬彦。 言わずと知れた夏芽の兄貴である。

彼が現在水道水ほんまかという真名の従者を引き連れてかつ込んでいる料理は何度見ても間違いなく赤と白のコントラストが眩しい 麻婆豆腐。

なんでメイド喫茶でそんなおしゃれと程遠いものを出すんだよ、ネタにしても古いだろ、今あそこ絡みのネタを投入するなら魔女夜まじよにしておけよ等と心の中で突っ込んだところで大須 冬彦のスプーンが掬い取るのは 麻婆豆腐。

わざわざメイド喫茶まで来てメイドさんのオプションサービスの

介入の余地のないものを平らげるそいつに辟易し、「ああ、アホかと　馬鹿かと。（中略）元よりメイド喫茶というのは、もつと萌え萌えとしているべきなんだから　！」などとナレーションしてみたところで店内を匂いによって支配しているのは　麻婆豆腐だった。

「ん、ははら　ひゅうひひやはいか」
「食べながら喋るな、汚らしい」

忠告を受けた大須　冬彦は冷たい水で口の中の麻婆豆腐を流し込み、改めて俺に声をかける。

「羽原　秋一じゃないか」
「あ、知り合いがいるんで相席で」
「はい、かしこまりました」

メイドさんは丁寧に挨拶をして、次のご主人様の接客に移った。物凄くどうでも良い事だが、即座に他の客と言う流れはプチ寝取られ気分を味わえるな。

「こんなところで何してるんだい、君は？」
「昼飯食いに来ただけだよ。　そう言うアンタは？」
「僕も同じだよ。　夜通しで遊んだ帰りで、食べ終わったら家に帰って寝る」

「つーと、道頓堀辺り？」
「……ああ、そうか。　君はまだ日本橋の全てを知って良い年齢じゃないんだっつな」

そんな事を抜かしつつ、にやりと笑ってみせた。
ニート・シスコン・遊び人とは……夏芽が心底気の毒だ。

と言うか、実は女に釣られるような奴だったのかよ。

「……食べるかい？」

「いらん。それより、何でわざわざこの店なんだよ？」

「そりゃあ、この街のナンバーワンメイドがいると聞いてはね」

「ふーん……で、どうなんだ？ アンタの目から見て」

「余裕の合格点。但し、夏芽には及ばない」

あれだけ個性あふれるの美少女メイドつかまえて妹の方が萌えろと断言するか……。

「その調子だと、夜の遊びつてのも夏芽には及ばないで苦労しそうだな……」

「そうでもないさ。最近だと、いた猫のみさとちゃんが凄く良い。艶やかな黒髪ロングと意思の強そうな眼差しが実に魅惑的で……」

その特徴と完全に一致する人に心当たりがある件について。

「シスコンもそこまで行くとさすがに引くわ」

「ちなみに、君だとロリ巨乳のようこちゃん辺りは気に入るんじゃないか？」

その身体的特徴もビックリするほど誰かを彷彿とさせるくれる。

……なんともまあ、予想外にアレな奴だったようだ。今後、もしも機会があれば夏芽の愚痴にはちゃんと付き合ってやろう。

「注文しないようだけど……食べるかい？」

くだらない事を考えながら大須 冬彦の手もとの水を眺めている

と、またしても麻婆豆腐を勧められた。

当然、丁重に断りつつ、メニューを手に取り、目を通す。

値段は殆どが1000円以内、大人のお子様セットなる目の前で麻婆豆腐を食っているニートとの会話のすりこみのせいで凄まじくきわどい響きにしか聞こえない代物とP - maidコースなるコースメニューが1000円を越えて来るが、セットのドリンクやデザートを単品で頼んだ時の価格を踏まえると良心的な価格のように思える。

「お勧めはP - maidコースだ」

「お勧めが即座に出てくるってどんだけ通ってるんだよ。アンタ、大阪に来てまだ半月程しか経ってない筈だよな？」

本当にもう救いようがないな、これは……。

もつとも、それで困るのは夏芽であって、俺に直接の被害がある訳ではないが。

それに、夏芽が本気で嫌がるなら流石に態度を改めるだろうから、俺が今ここでとやかく言う必要もあるまい。

と言う事で、ここは素直に大須 冬彦のお勧めP - maidコースを頼む事にしよう。

メニューを置いて、テーブルに置かれていたベルを手取る。どうやらメイドさんを呼ぶときはこれを鳴らすらしい。

「はい、本日のランチはお決まりになりましたか、ご主人様」

やって来たのは先ほどの金髪メガネのメイドさんで、俺の注文を取る際に目の高さを合わせようとわざわざ中腰になる。

そのタイミングで隣の席に座っていた男性が席を立ち、運悪く彼女のお尻にぶつかった。

とっさに漏れた「うおっ」という一言や体勢を崩して居たところ

から察するに何かしらの他意や下心があった訳ではないと見て間違いなさそうだ。

ご主人様にぶつかった金髪メイドは当然前のめりに倒れる格好になり、それはつまり俺めがけて突っ込んで来るということになる。

とっさの事ではあったものの、座ったまま彼女の細い腰を支えるような感じで彼女を抱き止める。結果、座っている俺の膝上に彼女のお腹が乗っかるような状況になってしまう。

「も、申し訳ございません……!?!」

「あ、いや、大丈夫です」

そんな何とも俺にとっては美味しい、しかし彼女や彼女のファンにとつては不味い体勢のまま、俺の顔を見ながら本当に申し訳なさそうに詫びる金髪メイドさん。

ぶつかったはずみで眼鏡が外れてしまったらしく、俺を見る目は若干焦点が不安定な印象を受ける。

と、彼女の顔を見つめていると、もっと重要な事実気付いてしまった。

「……もしかして、いやもしかせんでも会長？」

「え?」

相変わらず俺の顔を見ながらも手で眼鏡を探す会長。

普段はコンタクトをしているんだろうか、なんて事を考えながらピンクフレームのそれを手渡してあげると、「ありがとございませ、ご主人様」と謝意を述べつつ眼鏡をかけ……

「……あ、ああ」

「どうも、昨日ぶり」

「は、羽原 秋——iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!?!?」

俺の質問に絶叫で答えてくれた。

38話 粉っぽいパン、肉、千切りキャベツ、ソースという組み合わせのケバブ

「お疲れ様でしたー」

「お疲れ様、きゅーちゃん。また、週末に会いましょう」

「はい！ 昨日のお休みの分も頑張らせてもらいます！」

私服（眼鏡着用）に着替えたウチは裏口からP-maidを後にした。

が、数歩進んだところで私の歩みは止まってしまった。

「どうも、メイド会長……じゃなかった、生徒会長」

「どんな言い間違いやねん！ それにアンタいつもは会長としか言わんやろ?!」

「そうだったか？ まあ、そんな事はどうでも良いや」

などと抜かしつつ、それは脇に置いといてとジェスチャーをしてみせる影が一つ。

そいつの正体はあえて言うまでも無く、羽原 秋一だった。

服装は小ざつぱり纏めており、表情は軽薄そうな笑顔でだけれど、なまじ高い身長と真つ直ぐ伸びた背筋、そして軽薄さの後ろに見える隠れする確信めいた自信のせいで、特別目立った特徴がある訳でもないにも関わらず、人目を引くには十分過ぎるほどの確かな存在感を備えている。

お前のような高校1年生がいてたまるか、と叫びたくなるほどの貫禄だ。

怯むと付け込まれそうなので精いっぱい去勢だけは張って対抗する。

「……おちよくりに来たんとちゃうんなら何なんよ？」

「昨日はすみませんでした！　ありゃ流石にやり過ぎた」
「え？　えっ？」

何を言われるかと身構えたところにまさかの謝罪。
あまりに予想外のその行動にぽかんと口を開けたまま固まってしまった。

少しして、羽原　秋一が頭を上げ、何事も無かったかのように話を再開する。

「昨日の内に電話で謝るつもりだったんだけどな」

「さよけ……それにしても、えらい簡単に頭を下げるんやね？」

「必要だと思えばな。　当たり前的事だろ？」

よくもまあ、しれっと言ってくれる。

「……何でアンタに突っかかっとなんかよう分からなくなってきた」

「突っかかっとなんか言っよりも、何か侮られているから先輩の怖いところを見せてやるう的な軽い気持ちで手を出して火傷したってだけの話でしょう？」

「アンタ、ホンマに悪いことした思ってるんか？」

思わず半眼で睨みつける。　けれど、こいつはその程度の視線なんてそよ風のようにこの季節なら寧ろ心地よいと言わんばかりに受け流してしまう。

そして、こっちの気も知らずに、いやこいつの場合知った上であえて平然とウチを真っ正面から見据えてみせる。

何か言っつもりだろうかと、黙って見つめ返してみるものの一方向に口を開く気配がない。

徐々に見つめ合っているのが気恥ずかしくなって、顔を背けてし

まった。

「少なくとも大人げなかったとは思ってます」

アカン、コイツやっぱり滅茶苦茶腹立つ。

何が鬱陶しいって、わざわざこっちが目を背けたタイミングで口を開く所なんか特に胸くそ悪い！ しかも言うに事欠いて、先輩の私に大人気なかつたって！ もう前提として自分が上って認識やないか！？

一瞬でも、ちょっとでも、少しは殊勝な所もあるやないかと思つた数秒前の自分を引つ叩いたりしたい。

「まあ、そんな事はどうでも良い」

「いやいやいやいやいや、良くないやろ！？」

「ところで会長？ 次の選挙には立候補するんですか？」

問答無用にこっちの追及をぶつた切つて、そんな質問をぶつけて来た。

「……………ああ、そう言うことかあ」

何の意図があつてそんな質問をしたのか、少し考えて答えを見つげ出した。

こいつは生徒会を部室にするという約束をウチと交わした事を懸念しているらしい。

確かにウチが生徒会長で無くなってしまったら、あの約束を履行しようがない。

「正直な話、いっぺんやってみたいってだけの動機やったからなあ……………他に候補者がおらんようならともかく、そうやないんなら辞め

るつもりや」

「なるほど……」

下あごに指を当てて、何やら考えるような仕草をしている。やっぱり、こいつが気にしてたんは部室の事で、謝ったりしたんも会長を続けるように説得する為の布石ってところか……。

「それなら好都合だな」

「……え？」

が、羽原 秋一の発言は私の予想に反するものだった。

「だって、生徒会長を一度は経験している金髪美少女と高校に入って一カ月しか経っていない小僧じゃあまりにも不利でしょう？ 無名の候補者くらいならさほど問題はないけど、現会長を相手取ってとなると話は別だ」

なにやら持って回った言い方をしているが、要するに

「部室なんて俺が生徒会長になればそれで済む話だろ？ いざとなれば役員を部員で固めても良い」

そう言うことだ。

さも当然のように言っているが、実際に立候補者がいないなんて事は滅多にない。

それに1年生の立候補と言うのは先輩方から「何となく生意気」という無意味な反発を受ける事もある。

実際、ウチが出馬した年度後期の生徒会長選でウチに投票したんは学年を問わず男子、それともう卒業するからあんまり関係のない3年、同学年の1年で、2年生からの得票は目に見えて少なかった。

ましてやまだ右も左も分からない新人早々とあつてはそこに「流石にない」という現実的な意見が思いつきり反映されてしまい、下手をすれば勝負にすらならないだろう。

もつとも……

「アンタやつたらなつてまいそうなんがなあ……」

「なつてまいそう？　なるに決まつてる、が正解」

多少冗談交じりな雰囲気でも口走った台詞だが、コイツの場合は冗談にならない。

公衆の面前に新人生にあるまじき風格を漂わせて颯爽と現れて、身振り、口調、呼吸、間、リズム、放たれる言葉の一つ一つに至るまで計算しつくされた人心掌握の手腕を持って聞くもの全てを熱狂させてしまいかねない。

流石にそこまでは過大評価だと思いたいところだが、よほどの対立候補が出馬してくれない限り、当たり前のように勝利をかつさらつてしまつたろう。

ついでに言つと、こいつが生徒会長を目指すと仮定した時……

「……公約はどうするん？」

「んなもん適当にでつち上げりゃ良いだけだろ？」

にやり、と。　羽原　秋一は怖気がするほどに邪悪な笑みを浮かべた。

あかん！　コイツに生徒会長なんかさせたら九尾高校が廃校になつてまう！？

それこそ二足歩行の禁止とか、不純異性交遊の奨励とか、裸エプロンの制服化とか、そんな人間の尊厳や理性の美德を根底から覆し、嘲笑するようなとんでもない公約を掲げ、それでも何故か当選して、マニフェストを実現してしまふ。

もちろん、現実にそんな負のオーラ溢れる公約が認められるわけがないのだけれど、それでも私の本能が告げる。

コイツにだけは、生徒会長なんかやらせたらアカン、と。

「やっぱり気が変わった。　ウチ、今回の選挙にも出るわ」

なんて言って昨日の件で脅されへんやろつか、って不安はあるにはあった。

けど、幸いにもそんな気配はなく、「そっすか」の一言で片づいた。

「昨日のお詫びってことで、何か食べに行きませんか？」

で、代わりに飛び出して来たのがこの一言。

「あなた、さつきP - Maidコース食べたところやん」

「つつてももう2時間前。　それに綺麗な子と食べる食事は常に別腹」

あまりにも平然とそんな事を口走るが、どうにも軽い男は信用できへん。

ましてやコイツの場合、軽さに腹黒さがミックスされて何と云うか禍々しい。

こんな奴に捕まってしまったうめちゃん（とオマケ程度に先日を取り巻きの女の子達）の先行きが不安で不安で仕方ない。

「まあ、軽くなら付き合ってたつてもええよ」

「んじゃ、何か買ってパークスの屋上で食べるか」

「何かって……ホンマに思い付きで誘ったんやな」

「そりゃあ、こんなところで遭遇するとは思ってなかったからなあ」

「ごもつとも。ウチも昨日の今日で再会するとは思ってなかったし、思いたくなかった。」

何て懊悩している間にも羽原 秋一はアーリーを操作して色々調べている。

手元を見てみるとARキーボードを裸眼で使いこなしているらしい。

「時間的にケーキとか良いか？」

「うん、ウチは別に何でも構わんよ。シティに寄ってつてもええし、いつそのことそこでトルコケbab買ってつても」

「ふむ……そういやあそこ今年で開店10年じゃなかったっけ？」

「それは知らん」

ちゅーか、10年前ってアンタまだ幼稚園児とちやうん？

「まあまあ、細かい事は気にすんなって」

「勝手に人の心を読むな」

「つつーわけで、ちよつとあの外にぶら下げてる肉が見える位置に立つといってくれ」

それだけ言つて、ウチの返事を聞く暇も無くトルコ料理店カラスクへと駆けて行った。

あいつの様子を見守っていると、店のオーナーと思しきトルコ人の男性が姿を現して、何やら呑気に雑談を始めた。

二人はそれなりに仲が良いらしく、楽しそうに談笑している。

合間合間にウチの方を見たり、指さしたりするのがちよつとだけ気になる。

少しの間、そんな調子でヨロシクやっていたが、出来あがったケbabを受け取ると会話もそこに切り上げてウチの傍へと戻って

来た。

「ただいま。 ソースはヨーグルトだけど大丈夫だよな？」

「おかえり、とは言わんからな。 で、飲みもん何にする？」

「コーヒー」

「ブラック？ しつぷいなあ、アンタ」

「なんならレモンティーって言った方が良かったか？」

ウチの視線を受け流し、底意地の悪い笑みを浮かべつつケバブを差し出す羽原 秋一。

それを缶コーヒーと交換で受け取ってから、肩を並べてパークスを目指して歩く。

建物の中には入らず、少し遠回りしてパークスの屋上、もといパークスガーデンを目指す。

「……って、パークスって若向けとちゃうやん」

「その中でもガーデンと言えば、おじいちゃんおばあちゃんの溜まり場だな。 まあ、その分、落ち着いて話すにはうってつけの場所だけ」

「確かにそうかも知れんな。 アンタはウチと歩いているところを見られたら困る人がぎよーさんおりそうやし」

お返しとばかりに意地悪な笑顔をお見舞いしてやった。

「ああ、そうだな。 アンタも知ってたみたいだしな」

「はあ？」

が、返って来たのは少々予想外の返答。

意味が分からず、顔をしかめるウチに向けて羽原 秋一は指鉄砲を向けた。

缶コーヒーを口に啜えたままなので、流石に効果音の再現はない。その動作で、ようやく合点が行った。

「……そう言う意味で言うたんとちゃうんやけどな」
「でも、実際不都合だろ？ 本当はここに来るべきじゃないかも知れないくらいなんだ」

そう思うんやったら何で来てん、とは流石に言えなかった。

「で、会長はなんで知っていたんですか？」

「ん、何が？」

「俺の類まれなる射撃の腕前についてですよ」

「ネットで見たのと実はその日もバイトやったから。直接見たわけやないけど、お客さんからその話を何度か聞いたし、画像も見せてもらった」

「なるほど、確かに一応話は通るかな」

ひとまずは納得したという感じで頷くと、ケバブを一口齧った。

「藪蛇はゴメンやから、追及したりはせえへんけどな」

「でも、それをゲームのためにわざわざ広める辺り、流石の根性の悪さだよな」

「やかましい。アンタにだけは言われとうない」

「仰る通りで」

これまた頷きながら缶コーヒーに口を付ける。

「……で、千里の事に関しては喋っちゃいけないよな？」

「喋ってへんよ。おっぱいは皆友達や」

「変な標語だな、オイ。だが嫌いじゃない」

何だかんだと喋りながら歩いている内に、パークスに到着。ガーデンの屋上目指して登山を開始した。まあ、登山と言っても2階から9階まで階段で上る程度の高さでしかないけれど。

「……しっかし、あんまり人はおらんね」

「まあ、緑地目当てにわざわざここまで来る奴は少ないからな」

「せやね。普通は中のお店か、でんでんタウンか、もっと別のところに行くからなあ」

いくら緑の少ない大阪と言っても然るべき場所に行けばそれなり
のものはある。

何もわざわざここでなければならぬ理由なんてあるはずもない。

「で、そんな人気のない場所にウチを誘って何をする気なん？」

「何もしねえよ。純粹に親睦を深めようかと思っただけだよ」

アホか、とでも言いたげ冷めた目でウチを見るその態度に偽りは
なさそう。

買い物に付き合おうかと言えるほど親しい訳でもなく、かと言っ
てでんでんタウンを歩くのはさっき言っていた理由で気が引けると
いったところか。

もつとも、自分ひとりであればどんな目で見られても気にするつ
もりはないらしいから、ウチまで衆目にさらされるのは避けようと
した、と。

「つても意外と気が利くとか優しいとか、そんな風には思ったらへ
んからな」

「千里なら関西弁金髪ツンデレメイド会長k t k rって言いそうな
台詞だな、それ」

「うち、めっちゃ属性多いな……」

「あと、生徒会選挙について色々聞いておこうかな、と」

なるほど、それが本音か。親睦を云々も全く嘘ってわけでは
はなさそうやけれど。

「色々と言われても選管の経験はないし、大したことは教えられへ
んよ？」

「別に良い、どうせ勝つから。何ならまた勝負でもするか？ 今
度は賭けは一切無しで」

「……よっしゃ！ 今度こそ正々堂々うちの溢れる人望とカリスマ
で負かしたる！」

再戦の約束の後、ウチは秋一に生徒会選挙についてのあれこれを
教え、特に話すことも質問も無くなったところで解散した。

38話 粉っばいパン、肉、千切りキャベツ、ソースという組み合わせのケバブ

微妙に立地や名称を変えています、あのトルコ料理店はお勧めの店の一つ

戦利品を眺めるのに向く店ではありませんが、日本橋に来たら是非一度お試しあれ

39話 生徒会に限らず学校の生徒の自治組織程度でもこころ変わられると

先日のサバゲーから半月ほど経過した5月上旬のある日。

「……なんでやねん」

そんな呟きを繰り返しつつボクの横でわなわな震えているのは中学時代からの親友、西条 九。通称きゅーちゃん。

五月頭の選挙、その開票結果によって生徒会役員に任命される事となった生徒が壇上に並んでいる。

ボクは二度目の副会長で、きゅーちゃんも引き続きの会長。他に立候補者を押しよけての当選で、当然ながら彼女自身の望んだ結果……の筈なのだけれど。

でも、上辺だけを笑顔で取り繕っている彼女の呟きを聞けば少なからず怒気が含まれていると察知できる。

……その理由はさっぱり理解出来ないが。

「次期生徒会会計、中野 夏芽さん」

選挙管理委員の女子生徒に呼ばれた1年生の女の子は松葉杖を突いて演壇の前に立つ。年齢は私やきゅーちゃんと同じらしいけど、少し緊張した表情が初々しい。

ぺこりとお辞儀すると同時に歓声が湧き上がる。主に男子から。簡単な挨拶から始まり、無難な所信表明を経て無事平穩に演説を終えた。

「では、次期生徒会書記、羽原 秋一さん」

その名前が呼ばれた瞬間、きゅーちゃんが苛立たしそうな表情を

浮かべる。

一瞬の事だったので殆どの人は気付かなかった。ただろっけれど、ボクは見逃さなかった。

一方の彼は余裕綽々の笑みを浮かべ、堂々とした足取りで聴衆の視線の前へと躍り出る。

こちらは初々しさとは程遠く、下手をすれば校長より演壇に立つ姿が板についているかもしれない。

ただ、不思議と中学時代に生徒会長経験があったという可能性よりも、前世が詐欺師か何かだったに違いないというナンセンスなオカルトが先立つから不思議だ。

「どうも、厳正なる選挙の結果、生徒会書記に任命された羽原 秋一です」

この手の場でするものとしては少し軽薄な印象の挨拶。

思わず、きゅーちゃんと顔を見合わせてしまう。が、そこは流石と言うべきか、次の一言で先代生徒会の抱える問題点として組織の風通しの悪さを指摘。更には先代、つまり上級生の非難から入る事で場の空気を一気に緊張させた。

ボクときゅーちゃんの視線は今3年生の先代書記に向けられる。今期は受験勉強に集中する為に出馬を取りやめたものの、1年後期から1年半に渡って生徒会に所属し、思い付きで会長になったきゅーちゃんとそれに引きずられて副会長になったボクをいつもフォローしてくれた優しい人だ。

もっとも、彼にとってはその人は見ず知らずの他人も同然。ボクやきゅーちゃんの至らない所をフォローする為になるべく外部の音を遮断する方針で立ち回っていた事実なんて、ただの隠ぺいしか見えないのかも知れない。

「彼の記した議事録も、一般生徒向けの資料も、残っていた記録は

すべて目を通させてもらいました。そして、認識を改めざるを得ないという結論に達した。なるほど、これは必要悪だ、と」

生徒会の中心が1年生の女子二人。

一方は真面目だが大人しめで自己主張が弱く、もう一方は妙に我が強く、良くも悪くも仕切りたがりな節がある。

全生徒に向けての、これから生徒会で上司と仰ぐ相手に対する評。そして、彼は続ける。前者に無責任な立場からの要求を聞かせると無駄な心労を抱え込む事になるだろうし、後者に関しては場合によっては殴り込みに行きかねない、と。

外部に彼女たちの仕事ぶりを公開したとしても、お飾りの副会長と会長にしか見えない……かも知れない。

「だからこそ、先代は余計な情報を遮断し、一通りの業務をそつなくこなせるようになるまで彼女らを守り続けて来たのでしょうか。推論ですが、先代会計も1年以上を通して会計を受け持って来た人物。役員が半年で変わる事で生じる面倒も混乱も見て来たに違ありません」

見ればこれまた3年で受験勉強のために続投を辞めた先代会計、おさげに眼鏡と今時珍しいくらい古き良き優等生然とした女生徒がうんうんと首を縦に振っていた。どうやら、ボク達の知らないところで二人はそんな事を画策していたらしい。

気付けなかったボク達が間抜けなのか、それとも資料だけで看破してしまった彼が凄いのか。

どちらかなんて分からないし、興味も無い。けれど、先輩たちの心遣いは素直に嬉しかった。

そんな事を思っ少し感動している間にも羽原くんの演説は佳境を迎える。

「先代たちがヒールを引き受けてでも撒いた種。これを大輪の花へと育てる事こそ俺の天命である、という心構えで生徒会の活動に臨み、必ずや開かれた、全生徒のための生徒会を作り上げると約束しましょう」

その一言で演説が終わり、沈黙が訪れる。

上手く表現出来ない静寂の後、割れんばかりの喝采が訪れた。

彼自身に、演説に対する評価は非常に高く、

「頑張れよ、新入生!!」

「でも会長と副会長には手を出すなよ!!」

「最高の生徒会を期待してるぞ!!」

などなど、上級生から飛び交う叱咤激励は軒並み絶賛。そして、1年生からは

「流石は鬼畜王！貫禄が違う!!」

「学校でハーレム構築とか流石は師匠!!」

「よっ、次期生徒会長!!」

「もげろっ!!」

褒めているのかけなしているのかよく分からない声が巻き起こっていた。

ただ、この場にいた全員が彼の演説に何かしら心を動かされたのはまず間違いない。

風通しの良い生徒会の実現のための具体的な方針を打ち出した訳ではない。けれど、誰もが彼なら何かやってくれると信じていた。

多少、あまりにも出来過ぎることに不信感を覚えているような反応を示す人もいるにはいるし、その気持ちは分からなくはないけれど。

何はともあれ、鳴りやまない喝采を前に思わず隣のきゅーちゃんに尋ねてしまった。

「……ボク、この後に所信表明するの？」

きゅーちゃんは視線を逸らしつつ、答えた。

「まあ、がんばり……」

先ほどまでの原因不明の怒りは既に引っ込み、引きつった笑みを浮かべていた。

……早速会長の面目を叩き潰しにかかる辺り、流石だなあ……ともはや関心するしかなかった。

結論を言えば、もともと口数のそんなに多くないボクに彼のそれを上回るような所信表明なんて出来る筈も無く、きゅーちゃんも可能な限り頑張つて、普段ならば十分過ぎるほどのものを披露したけれど、相手が悪かった。

何はともあれ、こんな感じで新年度前期の生徒会が産声を上げた。

40話 生徒会室は他の生徒の出入りが少ないから茶室にされる事がたまにある

「で、書記ってどういうことなの?!」

「そりゃ勿論、敬愛する先輩を補佐したい一心で立候補させて頂いた次第でございます」

「アンタなあ……約束とちゃうやないか!? なんで書記に立候補やねん!」

生徒会室にて。 秋一と会長が何やらそんなやり取りを繰り返している。

断片的な情報を纏めて整理すると、二人は生徒会長の座をかけて勝負していたらしい。

そんなもので勝負すること自体どうかしていると思うのだけど、二人はそんな事は一切気にしちやいならしい。 生徒会をなんだと思っっているんだか……。

「……会計の、えつと中野さんは何飲む?」

「あ、ありがとうございます。 ミルクティーあります?」

「……うん」

私の返事を聞くなり副会長は慣れた手つきでミルクティー（と言ってもインスタントだが）を淹れ、適当なお茶請けを紙皿に盛りつける。

どうしてそんなものが生徒会室に当たり前のように置かれているのかという突っ込みはそれらの設置されたテーブルに張り付けられている『きゅーちゃんの云々』と書かれた紙が雄弁過ぎるほどに語ってくれているのではや気にしない。

しかも、その一点を除けば至極普通の空間かと言えばそんな事はなく、千里ちゃんが当たり前のように椅子に腰かけてアーリーを弄

つていたり、祝賀と称して押し掛けて来たKASSの面子が数名部屋の隅でヤンキー座りしていたりと混沌としている。

そんな空間でただ一人、アタシだけが場に馴染めないでいた。まあ、この場合、唯一の常識人がアタシとって事なのだろうから、そう思えば悪くない気もするのだけれど。

「でも、流石に終始突っ込みは疲れるわ……」

「安心しろ。突っ込み役は私も引き受けてやる」

そんな頼もしい台詞と共に生徒会室に入って来たのはミリ子さん。本名もちゃんと聞いたのだけれど、何となくミリさんで定着してしまっただけでもはやミリさんとしか認識できない。本名の方は日本人がリングを見た時に「リングは英語でApple」と認識するような、異郷の言語に近いものを感じてしまう。

「そうは言ってもミリさんも結構こゆいですけどね」

「む、私のどこが濃いというのだ？」

「えっと、相応の事情があったらごめんなさい。眼帯とか……」

「ふっ、君には分からん事情があるのだよ」

などと供述しながらふあさつと前髪をかき上げた。

まあ、この人もお年頃だから仕方ないと言えば仕方ないか。女の子なのにサバゲーに現をぬかしている時点で大なり小なり特殊な女子だろう。

とは言え、その一点を除けば確かに間違いなく常識的な人である。今も遊びに来たKASSのメンバーを連れ戻しに来ていたらしく、部屋の隅に固まっていた彼らの前に立ちはだかつてあれこれと叱り飛ばしている。

やがてミリさんに尻を叩かれながら、KASSメンバーは生徒会室を後にした。

多少静かになった室内を秋一と会長の騒がしいやり取りが埋め尽くす。

「あの日、一緒にケバブ食べながらした約束は何やってん……」

「そりゃあれですよ。俺自身が生徒会長になるのはなろうと思えばいくらでも出来るけど、権力と責任を背負って人の上に立つのは好きじゃないから、その辺は無能な先輩に押し付けて、俺は裏から美味しいところだけ頂こうかと」

「清々しいほどのゲスっぷりやな……呆れてものも言えんわ」

秋一の身も蓋もあつたものじゃない告白に氣勢をそがれた会長ががっくりと頂垂れる。

そして、秋一は本当にいちいちろくでもない。初めて会ったときはこんな奴だとは思わなかったのに。もともと、それでも根っからの悪人じゃないのは間違いない……等。

「そんな事より一緒にケバブってどういうこと？」

「……ケバブって、何？」

二人のやり取りの内容をしっかりと拾って話に割り込んで行く千里ちゃん。

アタシの隣でお茶を啜っている副会長は、割とどうでも良い部分に反応して首を傾げている。

「ケバブってのは中東とその周辺の肉料理のことですよ。ちなみに俺と会長が食べたのは肉とサラダをパンに挟んで食べる形式の奴です」

「カラスクか。あそこ美味しいよな、全体的に割高だけど」

「会長指差して」そっぴや今年で10周年だって？ おめでとう店主。ところで、あそこにいる金髪のカワイコちゃんと付き合っ

今日でちょうど1年なんだ。祝福してくれよ」ついたら半額になった」

「あそこで値切ったんかい!? しかも今日日カワイコちゃんて!?!」

突っ込む所はそこじゃないし、アタシ達が聞きたいのは料理の話ではない。

この二人に任せておくと永遠に核心まで辿りつけそうにない。そう判断したアタシは横から割り込む格好で質問を投げる。

「いつの間にデートするような間柄になったのよ? 弱みでも握って脅したの?」

「お前は俺をなんだと思っているんだよ……」

「性格破綻者」

一蹴してやると秋一は「ですよー」と同意しつつ肩を落とした。対する会長は「でっ、デートちゃうわ!?!」と顔を真っ赤にして叫んでいる。

激しく揺れる頭につられて金の絹髪が波打つ。一瞬、本当に一瞬だけ秋一が彼女の事を苛めなくなる理由が分かった。この人は何と言うか面白可愛い。

「で、二人でケバブを云々ってのはどういう事なのよ?」

「……っは!」

改めて問い直すと、今度は千里ちゃんの双眸が驚愕で見開かれる。

「先日のアレで強烈な精神的ダメージを負った会長の心に付け込んで、あれは特殊性癖の恋人のおねだりに答えただけだから恥じる事はないと思うように仕向けて、こましただなんて!?! きっと会長

のレモンティーを飲みたいと言ったらその日の夜には……くそっ、なんて時代だ!？」

「時代よりもお前の脳みその方がどうかしてる!！」

「ピンク色に汚れたその脳みそ濯いでこいやあ!！」

「ひでぶっ!？」

長テーブル4つで作られた正方形。それを会長は右側から、秋一は左側から迂回して千里ちゃんに容赦ない、本当に容赦ない突っ込みを浴びせた。

座っていた椅子をひっくり返して吹っ飛んだ彼女は、盛大に壁に打ち付けられる。

あんまりやっているとそろそろ脳が潰れて死ぬ、と言いたいところだけど今回は黙認。

恋人扱いくらいはからかいの範囲だけど、いきなり薄い本の中でもマニアックな部類の妄想を實在の人でやるものじゃない。

「まったく、君たちはメンバーが増えても変わらないのね」

馬鹿げたやり取りの直後に生徒会室にやって来たのは本橋先生。

秋一の目で見れば頭上にヒヨコを飛ばしてそんな感じに目を回している千里ちゃんを無視して、適当な席に腰掛けた。

「もしかして、生徒会の顧問ですか？」

「ええ、AR部と兼任ということになるんでしょうね」

「うち、生徒会顧問が最後の皆やったのに……」

会長が舌打ちしながらそんな事を呟いた。

と言っても、生徒会室を部屋にされる事は半ば諦めていたらしく、本気で悔しがっているようには見えない。

「さて、今日明日中に部活関係の手続きを一通り済ませるわよ?」

全員、改めて席に着いたところで本橋先生の言葉に各々短く返事をし、彼女の持って来た資料を受け取る。

こんな感じで生徒会兼AR部の初めての活動が幕を開けた。

41話 漫画におけるナンセンスなちょっとエッチなハプニングって頑張れば理

「それじゃ、初部活と行きますか！」
「おー」

午後の授業を終え、ホームルームも済んだ午後3時半。

カバンを振り回しつつ元気良く教室を飛び出した千里の後を、ようやく松葉杖から解放された夏芽と一緒に追いかける。

目指すは我がAR部の部室、もとい生徒会室。

「千里、生徒会室は逃げないぞ？」

「若さと青春のひとつときは幸運の女神もビックリの速さで駆け抜けて行くのさ！」

「それなら、せっかくだから俺は夏芽と談笑しながらのんびり歩く、そんな青春の1ページを選ばせ」

その言葉を聞くや否や、千里は両足を揃えて思いっきり踏ん張った。

「が、あいつの華奢な脚でおいそれと動きを止められる筈もなく、前方につんのめる。」

それから盛大にすっ転んだ。 顔面から。

「うわっ、痛そ」

「大丈夫だろ、エアバック2つ積んでるし」

「その冗談はちょっと引くわよ？」

ため息とともに眠たそうな目で俺を見る夏芽。

見ようによつては色っぽくもあるが、それを言つと殴られそうだ。彼女に歩幅を合わせて歩きながら、千里をじっと見つめる。そ

してはたと気付いた。

「千里、パンツ見えてるぞ」

「ぬわたっ!？」

飛び起きる千里。

立ち上がるや否やスカートを押えて姿勢を正した。

「えーっと、見た？」

「見た見た。 その下着はお前にはまだ早いと思っぞ」

「超冷静ッッ!？」

まあ、今更お前の下着で動揺する道理もないからな。

それにこんなムードもへったくれもない形で見えたって嬉しくない。

そして何より……

「お前、わざとだろ？」

「……ばればれ？」

「ばればれ。 痴女萌えの趣味はないからその時点で減点100だな。 どうせやるんなら廊下でぶつかったら顔面に馬乗りくらいの芸を見せてみる」

「無茶言っな」

まず、男子と女子がぶつかった場合、必然的に女子の方が当たり負けする。

と言うことは女子の方が後ろに倒れる格好になる訳だが、男の方だって人間に激突したんだから反作用で前方につんのめるのを阻止される。

と言うことは、現実的に考えると転んだ女子を男子が見下ろすか、

双方尻もちが正解。

ただし、女子が急いでいて、なおかつ男の体重が軽めの場合は逆もあり得る。

これによつぽど急いでいたというシチュエーションを加えれば、ぶつかつてなお倒れ込むという偶然が現実のものとなる可能性はあるだろう。

しかし、しかしだ。それでもなお顔面馬乗りにはまだまだ届かない。

足りない分を補うには寧ろ女子はその場で踏みとどまり、男子が体勢を立て直そうととつさに女子の手を掴んで引つ張る。男子はその場で、引つ張られた女子は3歩ほど進んでから転倒と言つ流れが一番現実的だろうか？

それでも人間転んだ時には手をつこうとするものだから、目の前に極楽浄土が広がる事はあり得ても、鼻っ柱にカナンの地が軟着陸つてのは難しいだろう。

「と思うんだが、夏芽はどう思う？」

「それを真面目くさつた顔で考えているアナタに疑問を覚えるわ。つていつか、カナンは流石に比喻表現としてどうかと思う」

乳と蜜の流れる場所だからなあ………というか、宗教者に怒られそうな喩えだ。

「で、アンタらはいつまで廊下でおもろいやり取りしてんねん？」

「お、メイド会長とうめ先輩。　こんちわ」

「………こんにちは、秋一くん」

「名前………やと………？」

面と向かつて挨拶を交わす俺とうめ先輩を見ながら、会長が重々しく咳く。

どうやらメイドばれよりもうめ先輩の方が重要らしい。
考えてみればメイドやつてる事を隠しているかどうか微妙な線
だしな、性格的に。

それから憤然とこっちに歩み寄ると胸倉を掴んで、叫んだ。

「うめちゃんは絶対に渡さへんからなあ!!」

「じゃあ、会長で我慢します」

「きしよ! 虫唾が走るわ!」

相変わらず胸倉を掴んだまま吼える会長。

いい加減煩わしいので、右手を両手で包み込むように掴んで左方
向へと捻る。

単純極まりない動作だが、これだけで手首が極まり、更に引つ張
つてやると右腕全体を抑える事が出来る。右腕が伸びきっている
以上、まず左腕で俺をどうにかする事は不可能。あるとすれば蹴
りくらいなのだが、それも俺がきちんと太ももで押えている上に脚
の動きには十分注意を払っているの、蹴りでも食らわせようとし
た瞬間に足払いを掛けるくらいは可能。

「痛い痛い痛い!?! ちょ、やめえ!?! ギブギブギブ!?!」

あっさりギブアップした会長を素直に解放。

何がどうなる訳でもないが、ぶんぶん腕を振って己の身の無事
を確認している。

それから、涙目になってうめ先輩に泣きついた。

「うあゝー、後輩にいぢめられだー」

「……よしよし」

会長は何だかんだ言ってメイドオブメイドの名を得るほどの金髪

美少女である。

そんな彼女がうめ先輩の豊かな双丘へといざなわれる、その光景。これを眼福と言わず何と言おうか。

御馳走様でした、とばかりに二人に向かって手を合わせ拝んでおいた。

ついでに全くどうでも良い事だが、視界の隅で千里が夏芽のスカートの中を覗こうと彼女に襲いかかっていたりする。

どういう経緯でそんな展開になったかは知る由もないし、特に知りたいとも思わない。

「さて、バカやってないで行くか」

先輩と同級生による百合展開を尻目に生徒会室へと急ぐ。

「ちょっと、秋一！ 助けてよお！？」

「なあ……………スケベしようや……………絶対気持ちええから……………」

「ゴメン、それなんか生理的に無理！？」

後方から聞こえるバカバカしいやり取りを聞きながら、平和だなあ……………と物思いにふけた。

4 2話 教師と生徒の禁断の愛！つて20年後に生徒側が30半ばの時に先生側

生徒会室に足を踏み入れると、そこには先客が居た。

「本橋センセイじゃないですか」

「はあ、わざとらしく先生を強調しない」

ため息混じりに返す彼女は腕を組んだ格好で壁に背を預けて立っていた。

その姿はなかなかどうして、ただ者じゃなさそうな雰囲気を漂わせていて格好良い。

「つて、ホームルームの後、俺達より後に教室出ましたよね？」

「君達がコントをやってる間に追い越させてもらっただけよ」

「そうですか……」

やれやれと言わんばかりに掌を天井に掲げてみせる本橋先生。

長身やすらりと長い手足のおかげでこういうスカした態度も様になる人だ。

適当なテーブルにカバンを置いて、そんな彼女の傍へと歩いて行く。

「ところで、本橋さんはどう思います？」

「何が？」

「あくまで推論ですが会長は新天寺社の関係者の可能性があります」

何を訳の分からぬ事を、とばかりに怪訝な表情を浮かべた。

「根拠はあるの？」

「確証はありません。ただ、たまたま日本橋にいたとかで3月21日の件がある程度知ってたみたいです。あと、千里の事も」
「なるほど、ね」

今度は下あごに人差し指を当てて考え込み始めた。

確かに考え過ぎと言われればそれまでだろう。しかし、偶然の一言で片付けるにはあまりにも出来過ぎている。それもまた事実なのだ。

それに、先日全てが終わってから本橋さんの話を聞いたところ、今回の件に絡んで資料が送られてきたから千里の事を思い出しただけだと言っていた。そして夏芽が千里の事を覚えていたのは自分の兄貴が直接関わっていたから。

2年も3年も前の事件なんてそんなもの。確かに千里の年齢や新天寺社の急成長なんかも相まって結構な関心事にはなったけれど、それでも誰が死んだわけでもなく、漏えいした情報は彼女自身のものも多少と言った程度。

あの頃の千里をずっと見て来た俺にとっては結構な大事に思えるが、世間的には他に事件が無い暇な時期にチョット騒いで他に何か大きな関心事が出来たらハイおしまいってところだろう。

もしかしたら頭の片隅に千里の事が記憶に残っていた可能性があつて、ちよつと気になったから調べてみたら過去の記事がヒットしただけかも知れない。が、おぼろげであつたとしても千里の事を覚えている人間が、あの日街中で大立ち回りしていた少女の親友でしたなんて状況に作為的なものを感じずにいられるほど俺は悠長ではない。

もっとも、それを言ってしまうえばあの場に特異な目を持つ俺が居合わせた事だつて出来過ぎた話ではあるのだが。

「それに俺の射撃や本橋さんの身のこなし、うめ先輩の身体能力……そのどれについても会長からアレコレ聞かれていないってのも気

にかかるところかと」

「……気を付けておくだけの価値はあるかもね」

少なくともKASSのメンバーからは何度か勧誘された上に、あの射撃をどこで身に付けたのかと散々尋ねられた。俺が彼らの立場にあっても、当然そうしただろう。

心当たりは本橋さんにもあるらしく、うーんと考え込んだまま何やら呟いている。

その表情は真剣そのもので、端正な顔立ちと悩ましげな表情の奥には正義の味方としての本性のようなものが見え隠れしている。

その瞳に少なからず恐怖を覚えてしまうのは俺が煩惱に溢れた俗物だからだろうか。

「おおーつと！！？ 女教師と生徒の禁断の愛きたこれー！？！」

そんな無意味な思考は、それに輪を掛けて無意味な絶叫にかき消された。

振り返ると千里と夏芽、うめ先輩と会長がやや遠巻きから俺達二人を見守っている。

夏芽は期待と不安が入り混じったような表情で俺と本橋先生を見比べていたかと思えば、自分の胸に視線をやり、それから小さくガツポーズ。

大声の主である千里はただひたすらに「エロゲ展開wktk」などと意味不明な供述を繰り返しながら目を爛々と輝かせて俺達を見守っている。

うめ先輩は今一つ状況を飲み込めていないのか、首を傾げている。ああ、可愛いなあ。

その横では会長が「もう少しで弱みになりそうなもんが見れたのに」っと悔しそうな表情で舌打ち。

「おい、訳の分からん誤解をするなよ。腹いせに後で苛められるのは会長なんだからな！」

「ちよい待ちイ!!!」

「ああ、苛め抜かれた会長が会長としての責任感から登校拒否する事も出来ず、追い詰められておかしくなっていく様が今から楽しみだなあ」

「鬼畜や！鬼畜がおるツ!？」

軽く涙目の会長が俺を指差しつつ叫ぶ。

傍から見るとどんな表情しているんだろうな、俺などと思いつつ、そんな彼女に笑顔で応じた。

「俺は鬼畜、会長は家畜。おーけー？」

「おーけーちゃうわ、ボケえ!？」

「いーなー、私も秋一に家畜呼ばわりされて首輪とか付けられたい……」

「くおら、そこのちっこいの!？ 突っ込みが追い付かんからボケ倒すなあっ!？」

ひとしきり突っ込み終えたところで会長はがっくりと肩を落としました。

それがきつかけになって、俺達のヤマもオチも意味もないやり取りは終了、会長を除く3人は何事もなかったかのように生徒会室へ。

「んじゃ、バカやってないでとっとと部活を始めるか」

「今しがた家畜になりたいとか言ってた子がそれを言う……?？」

本っ当に何事もなかったかのように事を進める千里に思わず突っ込む夏芽。

呆れた時の表情は生身になっても何故かAR然としたデフォルメ

を感じるから不思議だ。

二人は一つの長テーブルに仲良くパイプ椅子を並べて着席し、その対面に俺と本橋先生が座る。会長とうめ先輩もこれまた二人仲良く入り口から一番遠い所に位置する長テーブル、つまり上座に陣取った。

「えっと、音頭は会長にパス！」

「いきなり振られても困るんやけど……まあええわ、5分だけ待って！」

言うが早いか、会長は勢い良く立ち上がると『きゅーちゃんの放課後ティーセット（はあと）』へと向かい、テキパキと飲み物を用意し始めた。

流石はメイドオブメイドと言うべきか、その所作は手慣れたもので、あつという間に自分用と思しきレモンティー、うめ先輩のための緑茶、俺のブラックコーヒーを作り終え、お茶請けのクッキーを紙皿に盛り付ける。

「んで、千里ちゃんと夏芽ちゃんと本橋先生はなにがええのん？」

「私もブラックコーヒーで」

「アタシはミルクティーでお願いします」

「私は会長のレモンティー！」

「千里ちゃん、あとで1時間耐久おっぱい揉みな」

にやり、と意味ありげな笑みを浮かべつつも手際良く追加注文を片付けて行く。

何処に何が置いてるかも完璧に把握しているらしく、時々こつちの様子を伺いながらの作業にもかかわらず、砂糖はスプーン一杯だの、胃がもたれるから薄めで良いだのそんな注文にもすっかり対応。そんな彼女の様子をAR部女子一同は感心しきった風に見守って

いる。

「……なあなあ、秋一？」

「ん、なんだよ？」

「AR部初活動記念ってことで昨日のうちにこんなん作ってみたんだけど、どうよ？」

言いながら千里がアーリーの、自作のアプリを起動させると、生徒会室にいる女子全員の衣装がメイド服に変わった。

但し、P・Maidのコスチュームのような家事をするのに向いていそうな服ではなく、ミニスカートで、肩を露出させた、胸の谷間がしっかり拝める、そんなメイド服だった。

と言う事はつまり、自作のアプリを得意気に披露している千里自身も卑猥な服に身を包んで、矮躯に似合わない大きなそれを惜しげもなく見せつけている訳だ。

「ふっふっふ、どうよ？」

「……下劣なのは肌に合わんってことが良く分かった」

ファッション系のARアプリ。

様々な体型に対応したARを予め用意して置き、カメラで撮影した被写体のスタイルに最も近いものを重ね合わせる。

その後、適当な衣服を選択すると選択されたスタイルに合った衣服が更に重ねられる。

身も蓋もない事を言ってしまうえば映像でしかないのだな、なかなかリアリティのある代物だ。

ちなみに、体型は仮に近いものが無くても部分的に似たものを寄せ集めて新しく作って対応可能。

もつとも、俺の目を通して見るとどんなに精度の高いの映像であってもARと現実の区別がきっちりついてしまったため、どうして

も冷めた反応にならざるを得ないのだが。

と言つよりも……

「仮に生乳だとして、今更千里のものに反応すると思うか？」

まあ、シチュエーション次第ではあるんだが。

そう言った千里から目を背けた俺の視線の先にあるもの。

うめ先輩のたわわに実った大地の恵み。その意味を察した千里はアーリーのカメラを彼女に向け、凝視し　そして呟いた。

「これは……完敗と言わざるを得ない」

安易な露出は下品？　あからさまなお色気は萎える？　映像だと分かる和白ける？

そんな風に思っていた己の視野の狭さを、ただただ痛感させられた！

端々にレースのあしらわれた漆黒のメイド服　と言つのは何か憚られるものがあるので「ご奉仕服」という造語を遣わせてもらおう　から覗く雪景色の北半球。

悪く言えば感情に乏しい彼女の、言い換えれば感情すらも知らない程の無垢に通じる瞳と表情。そのあどけなさど否応なく汚らわしい視線を集める呪われし魔乳の対照はお互いがお互いの魅力を高め合いながら未知の天地へと昇り詰めて行く。

なるほど、確かにそれは偽物の映像なのだろう。しかし、その偽物は本物に沿って再現された映像に過ぎないのだ！　もしかしたら制服によって真の力を抑え込まれているかもしれないし、理屈抜きにやって来る偽物だという確信……このフィルターが外された時、どれほどの破壊力を持って俺の衝動を撃ち抜いて来るのか。想像するだけで恐ろしい。

その圧倒的な存在感に打ちのめされた今だからこそ、あえてもう

一度言おう！

安易な露出は下品？ あからさまなお色気は萎える？ 映像だと分かる和白ける？

そんなものはホンモノを知らない阿呆の戯言である、と！！

「千里、良くやった」

新たな地平を切り開いてくれた親友を抱きしめ、頭を撫で回してやる。

千里は俺の胸の中で嫌がる様子も見せず、されるがまま。

ただ、少しばかり釈然としないといった風に「うーんむ……」と唸っていた。

43話 一人暮らしの女性の部屋。夢のある言葉だが概して現実残酷である

「はい、春日ですが……」

『随分と疲れきった声だな。本業のための体力は残しておけよ？』
「言われなくとも、分かっています」

市内に借りたアパートの一室で、スマホをわずかに離して盛大にため息を吐いた。

漏れた吐息は必要最小限の家具しかない殺風景な部屋へと霧散する。

こんな面倒な仕事を押しつけておいて、飄々としている上司の態度に憤りを通り越していつそうの疲労感を覚えてしまう。

確かに疲れてはいる。しかし、それは副業がハードだとか、そんな理由ではない。

あまりにも成果も結果も出ない状況に、事態が進展しているという実感すら得られない、ただひたすら脇道に逸れ続けているような徒労が彼女を苛立たせていた。

「ところで、そろそろ本当のところを教えて頂けませんか？」

『……そうだな。ちょうど良い頃合いかもしれないな』

私の質問に応じるように電話の向こうの声が凜々しいものに変わった。

つられてソファに腰掛けた私の背筋がピンと伸びる。上司への敬意だとか、仕事の話だからとか、そんな殊勝な事を思っただけではない。電話越しの声だけで、彼の本気に圧倒されて身体が自然にそんな反応を示したのだ。

果たして、羽原くん達の監視と身の安全の保障という表向きの使命の裏に隠された真の目的は何なのか？

緊張と期待と、僅かばかりの不安が重なり合ってケータイを握る手にも自然と力が入る。

『羽原くんだったか、彼が見たという地下のシェルターについてどう思う?』

「……質問に質問で返さないで下さい」

『本題に入る為の前振りだから問題ない。で、どう思う?』

「正直、信じられませんね。通天閣自体は随分古くからあるものですし、通天閣観光が新天寺社と結託していない限りは……」と言いか、いくら調べても通天閣の近くでそれらしき工事をしていたって情報も見当りません」

だろうな、と神妙そうな声が応じる。

この疑問はシェルターを発見したという本人さえも口にしていないもので、居酒屋で面白半分陰謀論をぶちまけているのでもない限りは誰だって訝しがるに決まっている。

つまりはそれくらいの与太話なのだ。が、そんなものでも調べなければならぬ程に情報が無い。

いくら羽原くんがある側面においては信用に値する人物だとしても、いささか情けない話である。

『しかし、あり得ないという事はそれこそあり得ない。やや飛躍したものだとしても、わずかでも可能性があるのなら、それを検討してみる価値はあるだろう?』

「そうですね。ひとまず、通天閣に通じる地下通路を一通り調べてみようかと」

『いや、そっちは問題ない。それよりも、お前には羽原くんから積極的な協力を取り付けて欲しい』

一体何が問題ないのかは分からないが、この人がこう言う場合に

は必ず何かしらの手は打っている筈。ならば、その件についてはひとまず無視して良いだろう。

そんな事よりも……

「わざわざ彼を巻き込む理由がありませんか？」

『ない事はないだろう？ 彼の目、それに年齢不相応の頭の回転……』

…彼に協力を仰ぐ理由なんてものは幾らでもある』

「……なるほど、それが目的ですか」

要するに最初から羽原くんを利用する腹積もりだったのだ。

そして、その為にわざわざ彼と面識のある私を大阪に留まらせた。

あの兄妹の監視という名目で。

確かに最初からその意図を理解していたら私はここに留まる事を拒否したかも知れない。

「ついでにもう一つ。坂田つめの事、どこまで把握していたんですか？」

『せいぜい住所、氏名、家族構成。あと通っている高校程度だな』

「殆ど全部じゃないですか!？」

『いやいや、肝心のスリーサイズだけは入手出来なかったよ』

とりあえず、電話を切ってやった。すぐさま折り返しの電話がかかって来た。

『場を和やかにする為の冗談じゃないか』

「ただのおっぱい星人兼ロリコン親父の戯言にしか聞こえませんか。

そもそも、そんな和やかさなんて微塵も求めていませんから」

『で、本題だが、彼の目は単独ではちよつとした面白特技程度の機能しか果たさないんだろう？ で、先日は大須くんのアーリーの影響を受けたからそういふものが見えた、と』

「ええ、現在は関係者しか閲覧できない情報にはアクセスできない
そうです」

付け加えるならば、その際の情報の見え方が普段の法則性から外
れていたそうだけれど、この事についてはあまり益が無さそうなの
で報告していない。

それはさて置き、このタイミングでわざわざのこんな確認を取っ
て来たという事は。

「つまり、関係者用のアーリーを入手しろ、と？」

『そう簡単に見つかるとは思っていないがな。強引に奪い取った
ところでロックが解除出来ない、仮に羽原くんの目でその問題をク
リアしたとしても何かしらの方法を使用者を選別する技術があるか
も知れない。理想的なのはその区画の近辺を行動範囲にしている
関係者を見つけ出して、首尾良く抱きこむ展開だな』

「大阪市内にいる関係者、ねえ……」

新天寺社は支社を持たないため、関係者は表向きには東京にしか
いない事になっているが、現実にはアーリーの情報を管理・補完す
る為の設備や、どうしてもネットワークが貧弱になりそうな場所を
補うための基地が存在する以上、それらをメンテナンス出来る人材
は必ずどこかしらにいる。それが裏側の関係者であるという確証
はないが。

同様に地下に核シェルターがあるのだからそれを管理する人間が
居ても何ら不思議ではない。

もしも関係者の協力を得られればそれを発見する事で、事態が一
気に進展する可能性だってある。

「……でも、やっぱり羽原くんを巻き込む理由にはなりませんよ
ね、それ？」

『そう思うならそれでも良いがな。　せいぜい頑張れよ、正義の味方』

結局、私の疑問に明確な答えを示さないまま、皮肉交じりな捨て台詞を残して一方的に通話を切られた。

しばらくスマホとにらめっこ、それから八つ当たり気味にそれを放り投げる。

転がっていた枕がわりのクッションにめり込んで、ぼふつと間抜けな音を立てた後、フローリングの床に落っこちた。

「むー……」

寝姿にどこか哀愁を感じさせるスマホを眺めながら考える。

飯にも200万を超える大阪市の人口の中から、新天寺社の関係者を見つけ出す作業がいかに困難かを。

私の上司がわざわざ羽原くんを巻き込むように促す事の意味を。

そして、昼間に羽原くんが口にした新天寺社の関係者候補の一人の事を。

「あー、何だか体よく利用されてる感が強過ぎて気が進まない……」

そんな感じで、一人頭を抱えて延々と懊悩する羽目になった。

44話 JKギヤルのテンションに付いていけなくなった瞬間、青年はおっさ

明くる日の放課後。

「なるほど、やっぱりうめ先輩については調べがついていたか」

「やっぱりって、予想はついていた訳？」

「そりゃそうでしょう。あれだけ元気に暴れ回っていれば新天寺社とは関係のないカメラにだって映っているだろうし、アーリーじゃなくてスマホで撮影されている映像だってある。そんな状況で幾つもの科学捜査や膨大な個人情報をも有している組織が見逃しましたなんて言われても信じようがない。それにあの時、警察が表立って動かなかつたのも泳がせて尻尾を掴む為だったと考えればとりあえずは納得が行く」

昨日の電話の内容を協力要請の件だけは伏せて説明したところ、そんな回答が返って来た。

その上で更に言葉を重ねる。

「で、その上司のおっさんは俺に協力して貰え、とかそんな感じの事も言ってますでしたか？」

「いえ、そんな事は言っていないわ」

とつさの嘘。性格的に嘘をつくのは苦手なのだが、職業がらやっとならない事はない程度に表情を取り繕う事は出来る。逆に羽原くんはそれを見破るのが得意そうなだけに上手く誤魔化せているかは少々不安だ。

そんな私の顔を彼はしげしげと眺めている。年下の男の子ではあるが背はかなり高いので自然と見下ろされ、そして見上げる格好になる。

勿論、凝視されたからと言って視線を逸らすような事はしないが。

「一応の根拠があるんで言ってる前提で話させてもらいますけど、止めたって俺が勝手に首を突っ込んで来る可能性が無いとは限らないし、新天寺社が何かしら俺にちよっかいを掛けて来る事だっであるかも知れない。最悪、大金を積まれれば新天寺社に手を貸して本橋さんを後ろから刺すなんて展開も考えられなくはない」
「放っておいても火遊びする相手ならちゃんと目の行き届くところで、ってことね」

まあ、一理はある。もともと、彼が大金如きに釣られるとは到底思えないのだけれど。

たとえば「遊ぶのに困らない程度の金なら千里に貢がせるぜ！」とか、そんな理屈であっさり突っぱねそうなそんなイメージがある。そんな失礼な想像は頭の片隅に追いやりつつ、流石ねと彼の鋭さを讃えながら苦笑。

「だったら、仕方ないわね。手を貸してもらっても良いかしら？」
「断られたってそのつもりですよ」

にい、と口の端を不敵に吊り上げながらも目許は年相応というなれども器用な笑みを浮かべる羽原くん。

その表情は少し前によく義務教育を修了したばかりとは思えない程に頼もしい。

性格的には苦手な部類の子だけれど、それだけに味方としては心強い。

が、その性格的な問題故に、一つだけどうしても気になってしまっ事もある。

「……随分と乗り気ね？　こんな事に首を突っ込んで得する事なん

て何も無いでしょ？」

何のためにわざわざ厄介事に自ら関わるのか？

これが少年漫画の主人公のようなお人好しならまあ、善意の一言で説明出来る。私自身、見ず知らずの誰かに対するお節介を際限なく積み重ねて行った結果、今に至ったようなものだからこう言う人についてはとやかく言う筋合いも無い。

しかし、羽原くんは無条件に善意を振りかざして動くようなタイプではない。もちろん、3月21日の件には大した打算も無しに首を突っ込んでいたようだが、毎回毎回そんな動機で動けるほど熱血漢ってタイプには見えない。

とは言え、積極的に新天寺社の件に関与して、得をする事が彼にあるのかと問われれば、それに対する明確な答えは何も思いつかないが。

「まあ、普段なら君子危うきにして事で無視を決め込むところなんだけどな。ただ、脳筋ファイターに何もかも任せっきりってのは流石に不安つてのが一つ。それから、新天寺社をがつつりけん制出来ればうめ先輩と連中の関係を断てるかも可能かもしれないってのが二つ目。んで、最後に昔の夏芽の境遇にあいつらが関係してるんならちよっくら嫌がらせの一つくらいやって罰は当たらないだろ？」

こんな思考、私の頭の中からじゃあ逆立ちしたって出て来るわけがない。

いや、そんな事よりも

「誰が脳筋ファイターですってえ……？」

「うおわっ！？ 善良な一般市民の頭部めがけていきなり回し蹴りを放つなんての！？」

「大丈夫よ、運が悪くなければかわせる程度に加減はしてるから」

にっこりと最上級の笑顔を向ける私の真心を、羽原くんは引きつった笑みで受け止めつつ半歩退く。何気ない動きながらもしつかりと壁のある側のガードは放棄した上で、死角からの攻撃に対応しやすい位置に手を置き、内また気味に構える事で金的を守り、かかとを少しだけ浮かせて重心を後ろに置いている。

逃げに徹する体勢としてはかなり良く出来た構えだ。やろうと思えば反応するよりも早く腕ごとこめかみを蹴り飛ばす事も、ガードの隙間につま先をねじ込んで正中線のどこかしらををぶち抜く事も可能だがじゃれ合いでそこまでやる意味はない。

それならば、とわずかに浮かせていた足を床に下ろすと同時に素早く踏み込んで手を伸ばす。羽原くんはその手をとあかくが所詮は素人、右手一本で彼の左手を瞬時に払い除け、右手の手首を掴みつつ彼の後頭部に腕を回した。

所謂、ヘッドロックである。

「ぐおっ！ 中学生みたいなコミュニケーションしてんじゃねえ！？」

「ふっふっふ、こんな綺麗なお姉さんに締めてもらえる機会、早々ないわよ？」

「聞いてねえよ！？」

叫ぶ羽原くん。自由の利く左手で何度か私の手をタップしているが、動揺する彼の姿は珍しくも面白いので暫くは応じないでおこう。

「秋一、おっはー」

「ふう、教室の掃除は流石にまだしんどいわ」

「おーっす、羽原先生」

そんな事を考えている所にやって来たのは夏芽さんと千里ちゃんの1年女子コンビ。

と、実質幽霊部員の今宮 新くんが。彼が生徒会室にやってくるのは私が知る限りではサバゲーの時以来、2度目になるのだろうか？

「って、また教師と生徒で禁断の愛を深めてるし……」
「どっちかって言うと男子中学生同士のじゃれ合いじゃないか？」

いわゆるジト目で私と羽原くんを眺める夏芽さん。私に向けられた視線から曰く形容しがたい圧力を感じるの気のせいではないはず。

その隣で若干羨ましそうに私達を眺める今宮くんの言は冷静かつ的を射ている。

「つまり、生徒と教師の禁断のBLってことか」

千里ちゃんは概ねいつも通りで安心した。

が、その直後に私の抱いた安心をたやすく吹き飛ばすほどの暴風が吹いた。

「本橋さんと秋一だったらどっちが攻めなのかしら！？アタシとしては普段は不遜で強気で負け知らずの秋一がベッドの上でもやっぱり王様つてのが基本かなとは思っただけど、でも普段がそんな強気だからこそ守るに入ると弱いつてもありよね！本橋さんは女の人だけど格好良いからその辺はこっちで適当に補正しておくとして（以下略）」

怒涛の如き世迷言の機銃掃射が私の耳を八子の巢にした。

「……え？」

それらの言葉を発したのが千里ちゃんなら軽く受け流すところなのだけれど、夏芽さんがそんな事を口にするとは到底思えず、ぽかんと口を開けて間抜けな反応を示す事しか出来なかった。

それは今宮くんも同様らしく、啞然とした面持ちで目を輝かせる彼女を凝視している。

「なるほど、腐女子だったか……確かに片鱗はあったが、それにしても随分と記号的な」

羽原くんは比較的冷静にその事実を受け止めていた。彼の無駄に回る頭で既にその可能性を把握していた、というのがより正確なところだろう。

つい、腕の力を緩めてしまっていた私の拘束から抜け出した彼は恍惚としている夏芽さんのすぐ目の前へと歩み寄り、パチンとデコピンをお見舞いした。

「あいたっ！ な、何するのよ!？」

「人をダシにして変な妄想するんじゃないよ、バカ」

「まあ、秋一も秋一で私らをオカズにしてるだろうけどな、があ!？」

オカズくの辺りで大きく振り被った彼の平手が、言うべき事は言い終えた千里ちゃんのこめかみを鮮やかにぶち抜いた。

フルスイングの一撃は流石に効いたらしく、崩れ落ちた彼女は膝を床に付き両手で身体を支えるものの、起き上がる気配を一向に見せない。

少し心配になった私が身をかがめて覗き込むと、それはもう幸せ

な笑顔を浮かべていた。

……酷い倒錯加減だなあ。

「で、新。何か用か？」

「え、あ、はい。ちよつと先生、というかAR部に頼みごとがあつて来たんだけど、良いですか？」

「内容によるな。それと丁寧語は止めてくれって何度も言ってるだろ？」

「いやあ、やっぱりなんか畏れ多いんで……」

先生、と言うのは私の事ではなく、羽原くんのあだ名らしい。

思わず丁寧語になる所や畏れ多いという言葉も含めてその気持ちは何となく分からなくもない。

むーつと不機嫌そうに級友を眺める羽原くと、たじろく今宮くん。その横をすり抜けるように、見慣れない女の子が生徒会室へと飛び込んできた。

「ハジメマシテ、って言うのもちよつと変だけどハジメマシテ」

メールの文章であつたなら、文末に不等号を利用した顔文字がついていそうなテンションの女子生徒だ。スカートの丈はもう少しで見えそうなほど短く、シャツの第2ボタンまで外し、ブレザーは腰に巻いている。

校則の兼ね合いで申し訳程度の茶髪ながら、かなり派手な髪留めを用いて高めの位置でサイドテールに結わえた髪をカールさせたその頭髪はインパクト抜群。

比較的天チユラルではあるが間違いなくメイクの施された顔立ちは、良くも悪くも年齢不相応に華やか。

確か、彼女の名前は

「鶴橋 郁乃さん？」

「さっすがセンサー！ 覚えててくれたんだっ
」

と、生徒会室の一角にウインクと投げキッスを飛ばした。

4 5話 カードゲームに費やした時間と金は大人になってから振り返ると……

「頼み事やて？　だが断るっ！！」

突拍子もなく叫んだのは鶴橋　郁乃さんの挨拶が一通り済んだ後にやって来た会長。

何故だか妙に偉そうに両手を腰に当ててふんぞり返っていた。

場に居る全員が「なんでアンタに決定権があるんだよ」と言いたげな視線を向けているのだが、彼女はそれらを全て分かった上で受け流している。

彼女と一緒にやってきた坂田　うめはまるで何事もなかったかのように近くの椅子に腰を掛け、カバンからノートと筆記用具を取り出した。

「バ会長は放っておくとして、何の用なんだ？」

会長に対しては無視を決め込む方針を明言し、場を仕切り直したのは羽原くん。　依頼人？の鶴橋さんもそれに素早く便乗して「えっとね〜」とたどたどしく口を開いた。

傍らでは既に場外に追いやられた会長が目を吊り上げて何やら怒鳴っている。　が、誰一人として彼女の事など気にも留めておらず、坂田　うめですらも完全に無視を決め込んで静かに数学のノートを見返している。

「あのね、ちょっとお願いがあるんだけど……良いかな？」

「内容による。　で、具体的にどういうお願いなんだ？」

「えっとお、弟の誕生日のプレゼントについてなんだけど……」

「ふむ、弟さんが……で、誕生日はいつ？」

「あ、仁の好きそつな……」

「とりあえず質問に答えてくれ」
「えっと、ちょうど1週間後かな？」

問答無用といった風情の秋一くに気押されつつ答える鶴橋さん。部屋の隅では要点を夏芽さんがしっかりとホワイトボードに書き留めている。

「で、仁くんは何をプレゼントしたいんだ？」

「仁は結構年季の入ったカードゲーマーなんだけど……」

「ふむ……つまりスターターパックなんぞくれてやっても意味ないし、ブースターの大人買いもダブリを増やすだけ、レアカードをオークションで落とすのは紙切れ一枚に数千円なんて馬鹿げた話になる。それに持っていないカードを確認するのに本人にそれを尋ねるのは「プレゼントをあげますよ」と宣言しているようなものだから避けたい、と」

「え、エスパーさん……？」

「ああ、いつもの事だから気にしなくておk」

思わず引いてしまった鶴橋さんに向かってフォローにならないフォローをする千里ちゃん。そういう子だと分かっているても驚くやら呆れるやらの反応をせざるを得ないのだから、至って普通の女子高生では戦慄すら覚えるのも致し方ない次元の思考能力である。

「で、AR部ってのがどういうところかは聞いているのか？」

「あ、うん。新に教えてもらってるよ」

「って事は、カードゲームのARアプリの製作依頼ってところか」

カードゲームのAR。簡単に説明するならば、カードゲームのアニメや漫画のそれを想像してもらえれば話は早い。要するに、AR技術を利用してカードのモンスターが飛び出して実際に戦う姿

を再現してしまおうという代物だ。

ちなみに日本で人気の主だったカードゲームは殆どが既にARマーカーに対応している。

という事は……

「ちなみに聞くけど、何のカードゲームやってる？」

「ギャザだよー」

「弟、いくつ？」

「確かあ……まだ11歳」

「ませたガキだな、おい」

確かに。その年齢で米国产カードゲームとは恐れ入る。

「しっかし、そうなるとなかなか面倒くさいな」

「うむ、あつちには知財の扱いが物凄く厳しいからな」

顔を見合わせ、下あごに指を当てた格好で沈黙考する千里ちゃんと羽原くん。

どうやら千里ちゃんは前向きに検討したいというスタンスらしく、あつちの会社にメールでも送ってみる？とか、どうせバレやしないんじゃないかな？とか、思い付きでわりととんでもない事を口に出している。

一方の羽原くんは彼自身の考えはあまりはつきりとは示さないものの、千里ちゃんの意見・提案に対しては否定的な見解を示している。

「……まあ、お前がやってみたって言うんなら止めはしないけどな。俺ら以外の友達作るいい機会にもなりそうだし」

「えー、拙者ビッチの友人はちよつと……」

「バツカ。処女とか面倒くさいだけだぞ？」

依頼主を無視して明後日の方向へと暴走を始める二人の頭越しに、軽く涙目の鶴橋さんが私に助けを求めるいたいけな眼差しを送っている。

そりゃあ、本人の目の前で何の脈絡も無しに尻軽女扱いされた拳句に、男を知っている事を前提に話を進められたりしたら泣きたくもなるだろう。確かに経験豊富なのが格好良いとか勘違いしている子も居たりはするが、そうでない限りは唐突かつ理不尽なアクロバティック誹謗中傷以外の何者でもない。

しかし悲しいかな。私に助けを求められた所で千里ちゃんはずっと懲りないだろうし、羽原くんに至っては私が言いくるめられかねない。

そんな訳で、私は彼女に苦い笑みを送ってその場をやり過ぎすことにした。

「で、小粋なジョークはこんなものにしておくとして、どうする？」

「どこらへんが小粋!？」

「んー、別に構わんけど、ちょっと二次創作の規約とか調べてからじゃないと何とも」

「そうか。じゃあ、それは夏芽と千里に任せるわ」

「え？ アタシ達より秋一の方がそう言うの得意でしょ？」

「いや、確かに御託を並べるのは得意だが、法律関係は流石に面倒だからパス」

手をひらひらと振ってあっち行けと言わんばかりの仕草をしてみせる羽原くん。

そのついでに顔を背けつつ、私に目配せをした。

傍目には他の意味にしか受け取れない動作にそれを潜ませたということは、つまり他の子達にはその目配せを悟られたくない、という事であり、彼の性格的にあまり意味のない状況でそう言った事は

しないだろう。

彼の意図を考察する前に適当に上級生2人の方へと視線を移し、視界の隅に羽原くんを収める程度の位置に固定させた。

「受けてくれるの!? ありがとう」

「うおっ! ちょ、抱きつくなし!? それに受けるとは言つて入んっ!?!」

視野の外側から鶴橋さんと千里ちゃんのやり取りが聞こえてくる。抱きつかれて慌てふためく彼女というのは何か珍しいもののような気がしなくもない。

二人の微笑ましいやり取りに聞き耳を立てつつ羽原くんが目配せの意味についてアレコレと考え、合点が行った。

「それもそうね。羽原くんに任せると一緒に悪だくみしそうだから、中野さんがちゃんとブレーキ役になってくれた方が安心と言えば安心、かな?」

「確かに、言われてみればその通りかも……分かりました。どれだけの事が出来るかは分かりませんが、やれるだけやってみます」

と、夏芽さんは両手で握りこぶしを作りつつ応じた。

そんな彼女を眺めながら視界の隅の羽原くんに意識を向けると、わずかながら満足げな表情を浮かべている。

あの二人を関わらせないために何かしらの面倒事を押しつけて自分から遠ざける。 とうやら、これで正解だったようだ。

「うーんむ、生徒会関係の仕事もやっときたかってんけどなあ……」

「……今日は、無理だと思っ」

「せやな」

気がつけば完全に蚊帳の外に放り出されていた上級生二人が、熱いお茶を啜りながらそんな事を呟いていた。

4 6 話 メイドの教育の行き届いたメイド喫茶の中には女性客人気のある店も

「休日に先生とデートとか、凄く夢のあるシチュエーションに思えるな」

「もしも本当にデートだったら最悪の第一声だけだね、それ」

休日。 5月も末のそろそろ暖かさよりも暑さが勝る季節。

あの後、改めて羽原くんと話し合った私は彼と一緒に休日を利用して本業の方を進める事になった。 本当は一般人である彼を撒き込みたくはないのだけれど、勝手に首を突っ込まれるよりはマシだろう、と言う事で協力してもらった形になった。

そんな訳で、白のキャミソールの上に薄手の寒色系のカーディガンを羽織り、下は七分丈ジーンズというシンプルな出で立ちの私は愛千橋病院の前で羽原くんと合流。

彼は半袖のシャツに少しダボつとしたズボン、上からこれまた半袖のシャツジャケットを羽織った身軽な服装だ。

「なんか前と代わり映えない格好ね」

「男の服装はバリエーションに乏しいんでね。 アクセは趣味じゃないし」

心底どうでも良いといった調子で答えた彼はさっさと自動ドアへと向かう。

どうやら本当に新天寺社関係の事しか頭にないらしい。 履いている靴がスニーカータイプの安全靴である事からも、彼の意気込みが伺える。

「……まあ、安全靴は安全靴で履きなれていないと動きが鈍って面倒なだけ」

「100メートルも5キロも、運動靴と大して変わらないタイムで走れるから大丈夫」

一般人が何のためにそんな記録を取っていたのかちよつと問い詰めてやりたい。

「で、そういう先生は至つて普通のスニーカーですね、それ？」

「ええ、何かあつた時の備えはこつちで十分な筈だから」

と、答えつつカーディガンを揺らしてみせた。

一見すると薄手のカーディガンにしか見えないが、内部にポケットがいくつか存在し、そこに収めたものの重量を上手く散らすような構造になっている。

その仕草の意味をきつちり理解した彼は、少し興味深そうな様子で私の傍まで歩いて来ると、耳元に唇を近付けて囁くように尋ねた。

「要するに得物ですよな？ 何が入ってるんで？」

「ナイフ、トムキャット、ワイヤー、催涙スプレー、スタンバトン。それとバツクルナイフね。後はレコーダーとケータイと財布くらいかしら？」

「……そんなに隠し持つてるようには見えないな」
「そりゃそういうものだからね」

それに持ち歩いているものが軒並み小型だからこそ、と言うのも少なからずある。ナイフはコンバットナイフにしては短めの刃渡り12センチ。トムキャットはポケット・ピストルだし、スプレ―はかなり強力な薬品を使っているものの、サイズは私の小指ほども無かつたりする。

少なくとも、しつかり武装した輩と対峙するには色々辛い装備である。もちろん、小型と言えど拳銃がある以上、坂田 うめの

時のような生身相手に苦戦するようなへまはまずないだろうけれど。

「って、そんな事はどうでもいいのよ。早く行きましょっ？」

「あ、はい。ところで、話を聞くのはやっぱり例の医師？」

「ええ、そっよ」

「今まで事情聴取しなかったのかよ……」

つぶやきながら、あからさまに訝しげな視線を送ってくる。

もっともな指摘ではあるが、していなかったかと言われれば答えはNOなので彼の言葉自体は誤りなのだけれど。もちろん、羽原くんもそんな事は重々承知しているらしく、視線をずっと私の口許に向けたままだったりする。

とどのつまりが、何故今改めて彼の事情聴取するのかと尋ねているのだ。

そんな視線を受け流しつつ、3歩後ろをついて来る彼を連れだつて自動ドアをくぐり、エントランスを抜けて、廊下で患者や看護師達と会釈しながらエレベーターへと向かう。

その途中であの老医師とばったり鉢合わせた。

「おや、もうそんな時間か」

「ええ、よろしくお願いいたします」

少しばかり面倒くさそうな顔色の彼ににこやかな笑みで応じた。

やれやれ、とため息をつきながら近くにいた看護師の女性に「ちよっと出かけて来るよ」と声をかけ、白衣のまま病院の外へと歩きだした。若干小太りの初老の小男と言った風情に似合わず、妙に颯爽としている。

わざわざ外で話す、というのもいささか大仰な気はするが、確かにこの病院でするような話でもない。

「では、お食事でもしながら……」

「勿論、そのつもりだよ。場所は私が決めさせてもらって良いかな？」

「……何か愉快的誤解の視線が突き刺さってるぜぞ、先生？」

医師の後について行く私を追いつつ、周囲を見回す羽原くん。

言われてみれば、どうやら私は彼の愛人か何かではないかと勘繰られているらしく、好奇の眼差しと下世話な雑音が突き刺さる。

「どうでも良いわ、そんなもの」

「さいですか」

なら良いや、とばかりにギャラリィから視線を外した羽原くんは私を追い越して老医師と方を並べた。

「個人的に色々と聞きたい事があるんで、宜しくお願いしますよ」

「そうかい。私としても君に尋ねたい事があったのでね、こうして話を聞ける機会を設けて貰えたのは好都合だよ」

「んで、お食事はどちらに連れて行ってもらえるんで？」

羽原くんの態度は妙にとげとげしい。立ち回りの上手な子ではあるが、どちらかと言うと我を通すタイプ故、こう言うところで穏便にというタイプではない。

それに彼から、彼の持ち得る情報から推察できる情報越しに見れば、老医師は夏芽ちゃんの昏倒に関わっている可能性だってないとは限らないのだ。ああいう態度になるのも致し方ないところかも知れない。

とは言え、個人的にはそんな私情で相手の気分を害するような真似はして欲しくないのだけれど。

「そうだね、可愛い女の子の居る店だよ。高校生でも入れる健全な、ね」

「その店、P・maidつつたりしません？」

「正解だよ。私はあそこのメイド長がお気に入りだね」

「……元氣つすね、おじーさま」

「はっはっは、こつ見えてもまだ58なんでね。あっちの方は30くらいかな？」

前言撤回。何故か二人は4倍近い年齢差をもともせず打ち解けていた。

一体何がどうなればあの対応・態度から友情が育まれるのかさっぱり理解出来ない。否、男とはエロを一枚挟む事で年齢も、性的嗜好も、学歴も、出身も、人種も乗り越えて固いきずなで結ばれるものなのだとかつて上司から教わった事がある。

要するに、そう言う事なのだろう……孫と言っても差し支えない年齢の相手と、メイド喫茶の店員の話題で盛り上がる光景は傍目には酷く虚しいものだが。

「うーん、男の子はよう分からん……」

などとぼやいていると与太話に一区切りつけた羽原くんが少しずつ医師から距離を取り、私の傍までやって来て歩調を合わせる。

「で、どうします？」

「何が？」

「会長がバイトしてる店ですよ、P・maid」

「……そりゃ参ったわね」

「さて、じーさまはわざわざ会長の居る所を選んだのか、単にヒビジイなのか……」

羽原くんはがぶつぶつと呟いている話は P - m a i d を選んだ理由についてもので、どっちであったとしても話し合いの場所が変わる訳ではない。

が、老医師の動機一つで先日彼が言っていた会長が新天寺社と関わり合いがあるという可能性がわずかながらも確実に現実味を帯びて来る。勿論、単に彼の好色によるものだったとしてもそれとは無関係に会長が新天寺社と関与する可能性はないと言い切れないのだけれど。

それと同時に、わざわざ新天寺社の関係者が居る場所を選んだとすれば彼と新天寺社の関係を図る物差しにもなり得る。ひいては先日の夏芽さんの件が伝わっていないのか、それとも彼女の覚醒も大須 冬彦の裏切りもは取るに足らないという認識なのか。

一見するとただの場所選び。だが、判然としない幾つかの疑問を想像するに足るだけの情報のそのとっかかりになる可能性のあるものでもある。

「とりあえず、本橋さん適当に話をしといてください。俺はテールに会長を近づけないようにしておきますから」

「……まあ、そんな所よね。でも、あんまり変な事はしないでね？」

「言われなくても」

とは言いつつも、不気味に口元を歪めた彼の表情を眺めていると、不安以外の感情は湧き上がってくる余地すらもなかった。

47話 ドジっ子メイドって現実いたら後始末の手間がかかり過ぎて笑って泣

「おかえっ、おっ、おかえりなさいませ、ご主人様」

と、どもりがちに私達3人を出迎えてくれたのは眼鏡の金髪メイド。
下。

なるほど、確かに一瞬誰だか分からないが、よくよく見てみると間違いなく会長だった。

どうやら常連客らしい老医師には恭しくも人懐っこい笑みを向けていたが、私の姿を見るとその表情を微妙に引きつらせ、最後に羽原くんの方をねめつけた。

「ちよつと、なんでわざわざ先生連れてきてん?!」

「ここに連れて来たのは俺じゃねーよ」

「せやったらなんでアンタまでここにおんねん!?!」

「ああ、それは会長に会いたかったからかな?」

「はあ!?! 何をきしよいことっ……!?!」

「……おい、ファンの皆様の夢を潰すなよ、メイド会長」

がるるる、と唸り声さえ聞こえてきそうな表情の会長とあひやひやひや、といった感じの高笑いが聞こえてきそうな羽原くんの中に火花が飛び散る。と言っても妙な敵対心をむき出しにしているのは会長だけで、羽原くんの方は面白がっているだけなのだけれど。その始終を生温かく見守っているメイド仲間や客たちの存在を思い出した彼女はすぐに我に返り、少し顔を赤くしてお辞儀するとキツチンへと逃げ帰った。

もしかして、あれが彼女を私たちの傍に近づけない為の策なんだろうか?

「そんなところで立ってないで座ったらどうだね？」

私の疑問なんてお構いなしに老医師は店内の一角に腰をおろし、私達を手招き。

さっきの二人のやり取りにもこれと言った関心を示す様子も無く、本当にこの店のファンなのか非常に疑わしい態度だ。

「あ、俺は別の席で良いや」

彼の招きを断って、羽原くんは私たちの腰掛ける席から少し離れた場所に着席した。

そして、すぐさまベルを手にとってメイドさん呼び出す。

「あ、はい。本日のお食事は……」

「このの、全部」

「はい？」

「だから、ここに載ってるメニュー全部お願い出来るかな？」

「ぜ、全部……ですか？」

「ああ、全部だよ」

啞然茫然といった様子のメイドさんに向かってさも当然のように答える。

あまりにも真顔の彼に気押されたメイドさんは「かしこまりました。それではお食事が出来るまでごくつろぎ下さいませ」と微妙に上ずった声で述べると、これまた逃げるようにキッチンへと引っ込んでしまった。

そりゃ、20前後の女の子があんなふざけたオーダーに対処出来る訳が無いわよね……。

「さすがに若い子は良く食べるね」

「え、ええ、まあ、そうですね……ところで、以前にもお尋ねいたしましたが、あなたはあそことどういった接点をお持ちなんですか？」

的外れな感想にどう対応したものかと苦笑しつつ、無難に受け流す。そして、羽原くんの存在はなかったものとみなす事にして、さっさと本題に斬り込んだ。

慌てふためくメイドさんを実に厭らしい笑顔で見守る羽原くんに、やんちゃな孫でも見守るかのような視線を向けていた老医師はその微妙に締りのない表情のまま口を開く。

「君は超能力、というものを信じるかい？」

「超能力……と言うと、あの念力でものを動かすとか？」

「そう言うのもあるね。でも、私が言っているのは科学技術で再現して来たものの方を想像してくれた方が正しく理解出来ると思うよ。たとえば、遠隔地に自分の言葉を伝えるテレパシーという奴

これは電話、ファクシミリ、メールなんかを使えばある程度似たような現象を再現出来る」

「結果だけ見ればそうですね。ですが、それらは発した情報を何かしらの信号に置き換えただでケーブルや電波を介して伝わって行き、最後に信号を解読して元に戻すものですから、科学に裏打ちされたものであつて決して超能力ではありません」

そう答えたのはオカルトで煙に巻かれる可能性を潰すため。

しかし、私の異論を聞いた老医師はまるで模範解答を示した優等生を見るような、満足げな目を向け、続ける。

「そうだね。でもね、信号は共通の言語や文字の理解、インフラは空気や光に置き換えれば言語や文書というのは超能力の原点と言えるんじゃないかな？　そして、空気や光の正体は我々の理解が追

い付くよりも先に、と言うよりもどんなに知能の低い生き物でも利用しているものだ」

何やら意味ありげな口振りではあるが、やはり煙に撒かれているようにしか思えない。

「この話は何か関係があるんですか？」

「随分と結論を急ぐね。　気持ちは分からなくもないが、もう少し話を聞いてくれ」

「……分かりました。　でも、なるべく早めをお願いします」

不満げな表情と口調を隠さず、そう告げる。

「こういつたコミュニケーションに関わる要素の中で一番解明されていないのが何か分かるかい？」

「……もしかして、脳ですか？」

「正解だよ。　知識が無ければ言語は雑音、文字は記号でしかない。　たとえば、「おはよう」という言葉を発した時、音声の連続性をどうやって認識しているのか、音声と意味をどうやってつなげているのか……つまり我々の頭の中で何が起きているのか、これを解明して法則性や個人差のある要素と普遍性のある要素を選び分けて行けば、言葉を発する過程も文字を打つ作業も飛ばして意志疎通が出来るようになる……かも知れない」

「つまり、あなたは新天寺社の前進で脳に関する研究を行っていた」と

だから、夏芽さんに「意識を覚醒させる電気信号」を発するよう促すなんて真似が出来たのだろう。　夏芽さんが新天寺社の前進と何かしら関わりがあったのはその研究の過程であるの異能の存在が発見されたからで、大須　冬彦と老医師に接点があったのは何も訝

しがるほどの事ではない。

付け加えるならば坂田 うめと新天寺社の繋がりには脳の機能とされているリミッターの制御とか、その辺に関わる代物だろう。もともと、彼女の場合は限界を突きぬけた身体の活動に肉体が対応しようとした結果、一代で人間以上の何かに進化してしまっている節があるのだけれど。

しかし、その一方で腑に落ちない事も幾つか湧きあがってくる。

「どうして、ゲームメーカーがそんな研究を？」

「違うな。君も知っている通り、新天寺社の通信技術は独自規格

この規格の根っこにあるのが夏芽ちゃんあの異能なんだよ。

何故か彼女の脳の外側で彼女の脳波が観測出来た。その原理や波長を何とか解明して、その応用でアーリーの通信技術の基礎が誕生したんだよ。つまり、脳の研究をしていたら何故か通信技術が確立したからゲームメーカーを立ち上げた、が正解だよ。まあ、与太話にしか聞こえないだろうがね」

「……だから、ニユーロン」

思わずつぶやいた直後、店内にけたたましい音が響き渡る。音の発生源は羽原くんが座っていた席の近く。

何事かとそちらを振り向くと、顔面から床にダイブした会長が料理と水と調味料を引つ被った格好で突つ伏していた。

……いくらなんでもその邪魔の仕方は物理的過ぎると思うわ。

48話 慣れてしまえば手ごろな値段で上等なお肉を食べられる一人焼き肉は凄

「もう一度確認するけど、不可抗力で伸びをした際に引っかけてしまっただけで悪気はなかった、と？」

「はい、そうです。俺が敬愛する会長に足払いなんてかける訳がないじゃないですか」

「……よう言うわ」

ぼそつと呟いたピンク基調の私服姿の会長の言葉を適当に聞き流し、俺は店長さんににこやかな笑顔で事情の説明を続ける。

具体的にはついさつき会長が運悪く転んだ拳句にトレイに乗せていたオムライスを頭で受け止め、更には俺の席のテーブルの上にあった水と調味料でメイド服を汚したきっかけについて、だ。

当然ながらメイド喫茶は若い女性が多い。それゆえ、こう言ったアクシデントにとっさに対処出来る人と言うのは思いのほか少なく、彼女らが動き出す前に指示を出せば状況に対する主導権は自然と俺が握る形になる。

そうして得た主導権を十全に利用してメイド達に後片付けや会長の着替えなどの指示を出した俺はメイドの一人、なるべく気の弱そうな子に声をかけてこう切り出した。

『意図してやった訳じゃないんだが、結果的に彼女を転ばせてしまった件について、それとお店に迷惑を掛けた件についてちゃんと謝っておきたいから店長さんに合わせてくれないか？』と。

そりゃもう柄にもなく紳士的な態度を心がけた俺の立ち振る舞いは見事に彼女の心を掴んだらしく、少し顔を赤くした彼女は快く俺をバックヤードに案内してくれた。

よし、あとで彼女のメールアドレスを聞き出しておこう。

と、そんな思考は片隅に追いやりつつ、バックヤードで顔を合わせた店長の女性 寺田 蝶さん、31歳 の対面するなり頭を下げ、事情を説明した。

足を投げ出しつつ伸びをした瞬間にちょうど彼女が通りかかって俺の足に引つ掛かった上に体勢を立て直そうとした際に運悪く手でテーブルの上に合ったものをひっくり返してしまったのだ、と。

勿論、嘘八百以外の何者でもない。

が、汚れた髪を洗う為に更衣室に備え付けられたシャワー室へと会長が消えて行った隙に出来得る限り説明し、ついでに年齢相応程度に礼儀正しく振る舞い、ついでに実はコイツ会長が好きなんじゃねえのとか誤解されるような対応を心掛けて「そういう事する奴ではなさそうだし、仮にそうだとしてもまあ許してやるう」と思われるだけの状況を作り上げることに成功した。交渉の場にトイレ休憩など無いのだッ！！

「まあ、なんだ。こうしてちゃんと謝りに来たんだから許してやれ」

「うう……店長がそう仰るんならウチが言う事なんてなんもありませんけど」

「いや、本当に申し訳ない」

と、もう一度頭を下げる。もともと、会長は以前に俺が必要とあれば頭くらい平気で下げる性分である事を理解しているので、それに対して特別何かしらの反応を示す事はしないが。

しかし、そんな俺達を一步引いた所から眺めている寺田さんは勝手が違う。

憧れの先輩をアクセシデントで怒らせてしまった高校生の困りきった横顔を微笑ましそうに眺めている。おかげでうっかり口許を歪めたり出来ない。

「うーん、やっぱり怒ってる……まあ、当然ですよ」

「いや、怒ってへんから。っていうか、そのキャラやめんかい！？」

「……そうだ、お詫びに何か奢りますんで、それで気を取り直してください」

「食いもんで釣ろって発想はどうかと思うぞ？ それにまだ仕事がある……」

「よし、今日はもう上がっていいぞ。ケチャップ臭い頭で表に出られても困るからな」

ちなみに、現在の段階で既に30分相当の足止めに成功していたりする。 それに加えて一緒に食事どころか店長直々の退勤命令となれば、軽く数時間の足止めが見込めるだろう。 お蝶姐さんグツグツ

と、保護者からのデートのお許しが出たところで、渋る会長を引きずるようにしてP - m a i dを後にした。

「ちょ、秋一！ なんやつちゅーねん！？」

「さあて、会長……いや、西条先輩、どこに行きたいですか？」

「……はあ、アンタに任せるわ。 ウチがなに言っても無駄やろうし」

「んじゃ、シテイの鶴桃辺りで精をつけてホテルに直行だな」

「死に晒せ、この歩く猥褻物！」

とつさに平手で頭を叩こうとする会長の手を受け止め、そのまま彼女の手を引いて歩きだす。

お世辞にも上品とは言い難い言葉を並べて俺を罵倒する会長だが、所詮は普通の女の子の膂力しかないので半ば無理やりにも引つ張って行ける。 幸いにも「痴漢です」とかその手の台詞を吐く事はないので変な目で見られる事はあっても、通報されそうになる事は

ない。

「で、本当に鶴桃で良い？」

「へ、変なことせえへんねやったら何でもええよ」

その言葉を確認した俺は彼女の手を話し、進行方向を指差してそちらへと歩き出す。

会長はぶつくさ文句を言いながらも素直について来てくれている。はつきりとは分からないが、後輩としてそれなりに認めてくれてはいるのかもしれない。

「んで、予算はどれくらいなん？」

「会長の財布次第ですよ、勿論」

「なんでやねん！ アンタの奢りちゃうんかい?!」

「そりゃねえよ。ランチでも1000円はするつてのに」

ふんつと鼻を鳴らし、胸を張って言ってやった。

会長は「うわー……」と怒りを突き抜けて呆れ果て、若干同情すら混じった半眼でジトーツと俺を眺めている。

もつとも、ランチの価格程度なら会長の分も問題なく出せるくらい金は財布の中にしっかり収まっているのだが。

が、それを話してしまうと面白みが無くなってしまつのであえて話さない。

俺の傍でぎゃんぎゃんと吼える彼女を連れだって、のんびりと鶴桃へと歩き出した。

「なるほど、確かにこれで1000円はお得だね」

焼肉 鶴桃。 かにサラダを一口食んだ会長は朗らかな笑顔を浮かべた。

「でしよう？ 千里と一緒に食い歩いた新世界から難波のエリアの美味しい店ランキングトップ30には間違いなく入る店だからな」

「そりゃあ、30もあつたら入るやる……」

「いやいや、シテイだけでも50以上の飲食店があるんだぜ？ そのなかで30って言う結構なもんだぞ」

「確かになあ。 メイド喫茶だけでも何店舗もあるもんな」

と、かにサラダをもう一口。 その様子を眺めながら、俺もサラダに箸をつける。

そこに店員がメインディッシュのサイコロステーキとご飯を持ってきた。

「コーヒーは食後にお持ちいたします」

「あ、はい」

「……ところで、前に一緒に来てた女の子と別の子ですよね？」

「もてる男は大変なんだよ」

やるべき仕事を済ませた店員は急にフランクな態度で話しかけて来た。

どうやら常連と言うほどではないがそれなりに足を運んでいた俺の顔、と千里のことを覚えていたらしい。

興味津々といった風情で俺と会長を見比べている彼ににやりと不敵な笑みを向ける。

その笑顔にたじろいた店員は一步あとじさると、踵を返して席から離れた。

「で、羽原 秋一？」

「ん、なんすか？」

「何のためにウチを食事に誘ったんか教えてもらえるか？」

「……あー、バレバレでした？」

「うん。いくらなんでも分かりやす過ぎるわ」

まあ、特に隠すつもりもなかったんだけど。

んじゃ遠慮なく、と深呼吸をしてから本題を切り出した。

「単刀直入に聞かせてもらうけど、会長……いや、西条さんは反社会的な組織に関与していたりするか？」

「ホンマに単刀直入やね。それに、そう思うんやったらこんな誰もおらんところでそんな質問してええの？」

「否定はしない、と」

今、本橋さんがいないところを選んだのにはもちろん理由があったことだ。

もしも、先日の事件に俺が関わっていた事を会長がずっと前から知っていたのだとしたら、そして彼女が新天寺社に関係のある人物だとしたら。俺達にちょっかいを出す機会はいくらでもあったはず。

なのに今の今まで何もしていないという事は、それ相応の理由があるからだろう。

その理由とやらについては想像に委ねるしかないが、恐らくは俺達に 正確に言えば本橋さんに何かがあった場合、彼女の所属する組織が重い腰を上げてしまいかねない、と言うのが一番の要因だろう。従って、余計なちょっかいを出して手痛い反撃を貰うくらいなら、多少の情報の漏えいを覚悟してでも捨て置いた方が良く……と、まあ、そんなところだろうか。

それが正面切って質問をぶつけたおよそのワケなのだが、わざわざ答える必要はない。

「せえへんよ。それにお察しの通り、可愛い後輩に危害を加えるつもりもあらへん」

「それは西条さんの個人的な願望？ それともそれなりの立場の人間の判断？」

「願望が半分、上の連中の判断を推測してみた結果つてのが半分。

あの先生、諜報機関的な組織の一員なんやろ？ そういつのつて日本にもあつたんやね。まあ、とにかく、お上に目え付けられるんは間違いあらへんのに迂闊なことは出来へんやろ？」

久しぶりに伶俐な不敵さを漂わせる彼女の推論は、俺の想像と同じような内容だった。

そう、いくら新天寺社が国の経済に絶大な影響力を持つと言つても、公的機関や組織に直接的な害を及ぼすようであればもはや叩くしかない。が、国（と言うのも曖昧な表現だが）にしてみれば首尾良く正体不明の上層部とコンタクトが取れば、上手く主導権を握る事が出来れば、ノーダメージで新天寺社を無力化するどころか、海外にも伸びる巨大なネットワークの一つを掌握することが可能なのだ。

その皮算用を実現する為に、どのラインまでの攻撃なら許してくれるか。そのボーダーがはっきりしない内は新天寺社の裏側の構成員の顔が多少割れたところで俺達に危害が及ぶ事はない。仮にあったとしても、駅では背中に気をつけなければならぬ程度。

きっと今も俺達の知らないどこかで、顔も名前も知らないパワーエリートがアクロバティックな情報戦を繰り広げながら、妥協点の探り合いと、一発逆転の手の模索を昼夜も忘れて繰り広げていることだろう。

「……そのこと、うめ先輩は知ってるのか？」

「まさか、あの子はウチは一般人やと思っとるよ」

不敵な態度が揺らぎ、視線を逸らした。

「騙している事に罪悪感を感じるくらいなら辞めちまえは良い」

「……アンタにウチの何が分かるっちゅーねん」

考える。考える。ただひたすら考える。

そして思い知らされる。確かに俺は何も知らないことを。

何故、うめ先輩や会長が訳の分からない組織に関わっているのか？
どういった経緯でこの二人が親しくなったのか？

そもそも新天寺社は何を思ってこんな子どもを組織に加えているのか？

色んな疑問と仮説が、脳裏を駆け巡る。が

「確かに分からないな。　　と言うか、分かりたいとも思わない」

蠢く謎と想像の裏側で、一つだけ明確なものがあると気付いた。

気付くと同時に、身をわずかに乗り出して会長に向かってこう言
ってやった。

「それに、アンタ達があいつらと関係しているってのは問答無用に
気に入らない。だから、俺は新天寺社もおも空気を読んで勝手に
紳士協定を結んでいるこの状況も、アンタ達の後輩だって立場も、
何もかも利用出来るものは全部利用して……」

ここぞとばかりに立ち上がって、大きくはないが力強い声で宣言
した。

「嫌だと言ってもその足を洗わせてやる」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4930w/>

電脳世界ディストピア

2011年12月29日03時49分発行